魔法少女リリカルなのは転生少年と魔法少女

サイバスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは転生少年と魔法少女

【Ｎコード】
Ｎ７３８３Ｓ

【作者名】
サイバスター

【あらすじ】
この物語は、突然の出来事で死んでしまった少年が、リリカルなのはの世界で起きる出来事に、少女と共に立ち向かうお話

序章1

??「あれ確か、僕は学校に行く途中で、僕は急に現れたトラックに跳ねられて死んだ筈なのに、ここはどこだろ。」

と彼が、考えてると彼の前に、少女が現れたのだった。

少女「ねえあなたの名前を教えて?」と聞く少女

少年は答える

「僕は、橘伸也だよよろしくね」

「私は、愛の女神のウェンディというよろしくそして、すまない伸也お主が死んだのはこちらの手違いなんじゃすまない」

伸也「え、なら僕は無駄に死んだの?」

ウ「うむそういうことになるかの?でも安心せいお詫びといっては何じゃが、お主を転生させてやるからのさあどこの世界がいいかの?」

伸也「その世界てアニメとかの世界でもいいの?」

ウ「可能じゃよ」

伸也「ならリリカルなのはの世界でお願い」

ウ「時代は？どうするのじゃ？」

伸也「とりあえず無印の時代でお願い」

ウ「分かったそれと３つの能力付けてあげるから何がほしい？」

伸也「１つ目は、自分の魔力値をＥＸレベルまで上げて２つ目はレアスキルで、僕の知っている物を具現化して戦う能力３つ目がパートナーと決めた人に自分の能力を与える能力がいいなあ」

ウ「わかったのじゃただし転生したら今の名前は使えないから考えておけよそれでは転生開始じゃ」

こうして伸也の視界は、暗転していったのだった。

続く

序章2

そして、彼が目覚めると、そこには、赤ちゃん姿の自分の姿が、鏡に写っていたのだった。

そして彼は、周りを見ると、命名と書かれた物見ると彼の名前だった。

そう彼の名前は、獅童光と書かれていた。

伸也「なるほど俺は今日から獅童光て名前なんだ」

そんな光に愛の女神ウェンディから連絡が入った。

ウ「どうやら転生は上手く行ったようじゃなそこでお主にプレゼントじゃこの世界の魔法はデバイスと言うのを使って魔法を使うのじゃ」

「そこでデバイスあげるのじゃ名前とデバイスの形今決めてくれ」

そして、光の前に、女性が現れた

??「初めまして獅童光様これがあなたのデバイスです」と女性は、光に渡した。

「私の名前は、クリスといいますよろしくお願いしますね」といってクリスは帰っていきました

そして、光は、蒼い宝玉に君の名前は、アカシックハートと呼ぶこ

とにしたのだった。

獅童家は、お隣さんの高町家と、仲のいい家族付き合いをしていた。

光が、生まれた日3月15日は、高町家にも女の子が生まれ名前はなのはと名づけられたのだった

そんな両親が、光となのはが生まれた日に、二人を許婚にしようと遊び気分で決めてしまっていたのだった。

そして、物語はここから始まる光となのはが3才なったある日事件が起こったのだった。

最悪な1日前編

今日は3月15日光と、なのはの誕生日である。

この日は、光となのはが生まれてから、両家で、旅行をするというのが、恒例行事となっていた。今年は、温泉旅行だった。楽しい温泉旅行が、まさかあんなことになるとは、今は誰も知らない。
その事件が起きたのは、夕方温泉旅館の近くに、お祭りをしているということで、獅童家と高町家は、お祭りに出かけた。

その祭り会場でわいわい遊ぶ光となのはそんな二人を見つめる男たち。

そして、一人の男が、空に向けて発砲したのだった。
その発砲音を聞いたとき、士郎と、光の両親は光となのはがいないことに気づき二人を探す士郎たち

そして、士郎たちが、光となのはを見つけた時、既に、他の客はいなくなって、なのはたちに銃を構える犯人たちそして、2発の銃弾がなのはと光に向けて、発射されたのだった。

続く

最悪な1日後編

放たれた凶弾が光となのはに迫るそして、二人に弾が当たると思われた瞬間、二人には弾はあたらなかったのだった。

その訳は，光の両親が、光たちの代わりに凶弾に倒れたからだった。

男1「ち、殺す順番が変わったぜ」

男2「まあいいじゃないですかどうせあの二人も殺すリストに入っていたじゃないですか」

男1「まあな」

そういいながら、男たちは不敵に笑っていた。

そして、光の両親は、最後の力で父親は光の力の封印を解き、母親は、光となのはに、二人が今のところ、この世界の希望と言うことを伝えた。

母「いいかい、よくお聞き二人とも今この世界は、さまざまな世界から狙われているんだいいかい二人が大きくなったら、この次元すべての世界に平和を取り戻すんだよた　の　んだ　よ光となのはちゃん」

そして、光の両親は死んでしまったのだ。

そして、光は、父親から解いてもらった力を使い男たちに、恐怖を

与えたのだった。

男たちは余りの恐怖で逃げ出してしまった。

男たちが、逃げ出したのを光が確認すると光は、気絶をしてしまい後から来た、なのはの父親士郎によって、光となのはは、旅館に戻ったのだった。

そして、数日後

光の両親の葬式が行われ光は、まだ子供なので、高町家の人たちとの生活が始まった。

続く

新しい家族

あの、悪夢の温泉旅行から、2年の月日が、流れた、現在光は、高町家の人たちと生活をしていた。

「光ちゃんちょっときて」と、なのはの母親である桃子が光を、呼んでいた。

「はい、何ですか、桃子さん」そう言いながら、光は、なのはの父親である士郎と桃子がいるリビングにやって来た。

「やっと来たな」と言う士郎

「実はな、光お前を引き取ってから2年になるな、そしてお前も来年からは小学生だしな、どうだ、光お前うちの子に、ならないか？」と言う士郎

「え、どういうことですか?」と驚く、光

「どういうことて、言葉どうりよ光ちゃん。」と桃子が言った。

「光ちゃんがうちの子に、なってくれたら一番喜ぶのはなのはでしょうね、あなた」

「そうだな」と言う士郎

養子の話を聞いた光は、光答えた

「士郎さん桃子さん養子の話は大変嬉しいんですが、もう少し答え

を待ってもらえませんか？」
「ああいいとも」
「私も何時までも待つわ光ちゃんが、答えを見つけるまで」
二人はそう言ったのだった。
そして、光はリビングを後にした。

その夜

光は、いつもどうりなのはと寝ていた。
「なあなのは聞いていいかな？」
「何光ちゃん？」
「あのさ、なのはは、僕がなのはの家族になったら、嬉しい？」
「うん嬉しいよでも私の中では、光ちゃんはもう家族なんだよ。光ちゃん私は、光ちゃんのことが一番大好きです大きくなったら、私と、結婚してね」
「そうか、うんいいよ僕も、なのはの事が、一番好きだからね」
そして、夜は過ぎていった。

翌日

「士郎さん桃子さんお話があります」

「ああなんだい」

「何かしら」

二人は、光の前に座った

「実は、養子の件で自分の答えを伝えます。士郎さん桃子さんこれから二人のこと、お父さんお母さんと呼ばせてください。」

光の答えを聞いていた二人は、無邪気に喜んでいた。

そして、獅童光は、名前が、変わり、高町光となったのだった。

続く

キャラ設定（前書き）

オリキャラの設定ですまだ一人ですが

キャラ設定

橘伸也　　年齢１９歳不慮の事故により命をとした青年

獅童　光　（ひかる）
橘伸也が転生後の名前である

魔道師ランクはＥＸで、スキルは、自分の知識として、知っている物を具現させる能力とパートナーにも自分の能力を与えることができる。
魔力光は桜色と蒼色

デバイス　アカシックハート

そして、獅童光は、ある事件が、きっかけで高町家の養子となり、現在は、高町光となっている
これが今のところの光のプロフィールです能力については物語上追加するかもですが、よろしくお願いします。

学校生活始まる

光が、高町家の養子になって1年が過ぎ、光となのはは、明日私立清祥大付属小学校の入学式に出席する為その準備をしていた。

そんな時、なのはが光に言葉をかけた。

「ねえ光君学校テどんなとこなんだろうね楽しみだね」

光（なのは学校は、そんなに、楽しいとこじゃないぞ）

と、心で叫ぶ光であった。

そして、次の日なのはと光は、元気に私立清祥大付属小学校の入学式に向った。

光に、とっては2度目の小学生生活の、始まりだった。

そして、無事に入学式が、終わりなのはと、光は、自分たちの教室に向っていた。

「でもよかったよ光君と同じクラスで」

そうなのはと、光は同じクラスになっていた

「僕もなのはと同じクラスで嬉しいよなのは」

「光君」

なのはは、光にそんなことを言われ、顔を赤くしたのだった。

そして、二人は、教室の前に、ついた。
教室の中に入ると、新しい机があり、なのはと光は、自分たちの席へと向った。
二人の席は、同じ苗字なので、隣同士だった。
「やったー光君と、隣同士だ席が」
「なのは、僕たちは同じ苗字なんだから、隣同士なる確率高いんだよ」
「あ、それもそうか、光君」
二人が、教室で話していると、なのはたちの前に、眼鏡をかけた男の子がやって来て、なのはに声をかけて来たのだった。
「なのはさんお久しぶりです」
「あーもしかして君は、誰だっけ?」というなのはだった。
ずるとこける男の子
「なのはさん僕のこと覚えてないんですか?」
と男の子は、今にも、泣き出してしまうくらいの涙を目に、溜めていた
「あーごめんごめん直哉君泣かないでよ」

となのはが直哉君をなだめていると、光がなのはに聞いた。

「なのは直哉君のこと詳しく教えてよ」

「ああ、光君は直哉君のこと知らないんだったね、この人の名前は、斉藤直哉君だよ私の幼稚園時代からの友達だよ」

「そうなんだなのは、直哉君よろしくね僕は、高町光ていいます。」

二人は握手をし、その後、担任の先生が、教室に来たので、授業が始まった。

そして、昼休みの屋上にて

「私たちの学校には給食がないので、皆お弁当を持って屋上に行くと、私は、金髪の女の子が、紫の髪の女の子と、言い争っていたので、止めようとしました。

「おいなのは、今あの子たちのとこに、行こうとしたろ。僕は、なのはのすることを、止める権利はないけど、一応止めるけど、なのははそれじゃ納得できないよねいいよなのは行ってきてもね」

「ありがとう光君」

光（原作知ってるから行かせただけどね）と、光は心の中で、呟いたのだった。

そして、なのはは、言い争っている二人の元に行き、なんと金髪の女の子の頬を、叩いたのだった。

「どう?痛いでもね大事な物を取られた方はもっと痛いんだよ私や光君も大事な物を取られたことがあるから、その痛みわかるんだ」

頬を叩かれた少女は、立ち上がりいいたいことはそれだけと言って、なのはと喧嘩を始めたのだった。その後その喧嘩は、紫の髪の少女が止めてくれた

こうして、僕と、なのはの小学校生活の初日は、終わりを告げたのだった。

続く

事件発生（前書き）

今回から多少は読みやすくなったと思います

ではどうぞ

事件発生

光Ｓｉｄｅ

「無事入学式終えた僕となのはは、学校を出て家に帰ろうとすると、どこからか声が聞こえて来た。」

「そして僕たちの前に小さなフェレットがいたが僕は無視をして，街のほうに向った。」

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

「私は、学校の帰りに、光君と一緒に誰かの声を聞いて学校の近くにある雑木林に、光君が入っていったので、私も行くと光君は、一匹フェレットを見つけていましたが、光君は、無視をして、声のした街ののほうに向っていましたが、私はフェレットの首にかかってる赤い宝石が、気に入りフェレットから奪い私は光君を追いかけました。」

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

？？ｓｉｄｅ

「キューーーー（あ、僕のレイジングハート返してーーー）

キュウーー（仕方ないや一度里に戻ろう）

と言ってフェレットは、消えたのだった。

??ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして、光たちが街の中でまた声を聞いたその現場に行くと　、アリサとすずかが、男たちに、誘拐をされかけていた。

アリサ
すずかｓｉｄｅ

「私たちは学校が終わり迎えが来る前に、二人で遊んでいたら見知らぬ男の人たちに追いかけられ学校の近くの雑木林に、隠れたんだけど見つかってキャーーー助けて！と叫んだけど誰も来なくて結局捕まって、街の倉庫外の一角に連れられた時、光が来てくれたの」

アリサ
すずかｓｉｄｅ　ｅｎｄ

光ｓｉｄｅ

「おいお前達一体ここでしているんだ?早くそのこたちを開放しろよ」

そして光は、犯人たちと肉弾戦を開始した。
そして犯人は拳銃を抜き光に、向けたのだった。
「うるせえよこのガキが調子に乗るなよ」
そして、犯人は、拳銃の発射体制に入ったのだった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

「私は、光君に遅れて、現場に着いた時、私が見た光景は犯人が光君に拳銃を向けているところでした。」
「私は、見逃さなかった光君の体の変化を、光君は昔、拳銃せ光君の、両親が殺された時の記憶が蘇り体が動かなくなってしまうのです。」
なのはは、急いで光のもとへ行き光を落ち着かせたのだった。
「なんだ?そこのガキお前も死にたいのか?」
「大丈夫だよ光君光君は私が守るよどんなことになってもね」
「なのは、ありがとう落ち着いてきたよ」
「そうなんだ私的にすればもう少しこのままがいいなあ」

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ
犯人ｓｉｄｅ

「何だよあのガキ共俺らを無視して、自分の世界に入りやがって、よし撃つぞ」

「マジですか？兄貴」

「ああマジだ」

そして、犯人は引き金を引いたのだった。

犯人ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

犯人が撃った、銃弾は誰もが見ても確実に二人に、当たる軌道だったのだが、なのはと光に当たる直前二人の周りに、蒼色と桜色の壁ができ銃弾から二人を守ったのである。

犯人はその現象を見て、怖くなって逃げて行った。

アリサｓｉｄｅ
すずか

「なのは、光今日は助けてくれてありがと」
「なのはちゃん光君ありがとうね」

と二人は、感謝の言葉をいいそれぞれの車を呼び自宅に帰っていった。

アリサｓｉｄｅ　ｅｎｄ

すずか
そしてなのはと、光も家に帰る途中で、光が、なのはに聞いた

「なあなのは、その赤い宝石どうしたんだ？」

「ああ、これ？これはあのフェレットから奪いとったの」というなのは
光ｓｉｄｅ

「なあアカシックハートこれはまずくないか？」

「まずいですね」

「あれが、本当にレイジングハートで、あの雑木林にいたフェレットが、ユーノだったらやばいだろう」
「マスター大丈夫ですよまだ、レイジングハートは、完全に起動してないですから」

「そうなのか？アカシックハート」

「はいマスター」

それを聞いた光は安心し、なのはと共に家に帰った。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

当然夜遅く帰ったので、二人は両親から強く叱られたのだった。

続く

接触

この話は、前回のお話のフェレットがなのはたちと出会う前からの話です。

ここは、なのはたちの住んでいる地球とは、違う世界
異世界ミッドチルダである

ミッドチルダには、さまざまな部族が存在しているのである。

そして、彼と共に生活している部族は、考古学を主に仕事としている部族だった。

彼の名前は、ユーノ・スクライアである。

ユーノ自身考古学の勉強は、好きな方なので仲間の仕事の手伝いをしながら生活を、していたのだった。
そんなある日。

ユーノは、友達と共に、仕事の、手伝いする為に行った現場で、ユーノは、突如起きた地滑りで仲間たちとはぐれてしまった。

ユーノｓｉｄｅ

「イテテみんな大丈夫？」
と、ユーノが周りを見渡すが、誰もいなかった。

「あれ、みんなどこだおーいまさか、僕一人取り残されたのかな」

「これからどうしょう」とユーノは歩きながら考えていると、発掘現場の最深部に、光を放つ部屋をユーノが見つけたのだった。
そして、ユーノは光を放つ部屋に入ると、そこには豪華な装飾品が中央の転送装置を囲むように並べられていた。

「一体この装置は何なんだろう？」

ユーノは、警戒しながら装置に近づき、ユーノが装置の前に、描かれていた魔法陣の上に、立った時、突然装置が起動したのだった。

「うわーー！！一体何が起きたんだーー」

ユーノｓｉｄｅ　ｅｎｄ

こうして、ユーノは、地球にとばされたのだった。

そしてユーノは、気がついた。

ユーノｓｉｄｅ

「うーん　は、ここは何処だろう？」

「ア、誰かが来る早く逃げなきゃ、あれ、体が上手く動かないぞ」

「どうしたんだ、僕の体？」

この時のユーノには、自分が、フェレットになっているのを、気づいていなかった。

ユーノｓｉｄｅ　ｅｎｄ

光ｓｉｄｅ

僕は、この雑木林抜け誰かの悲鳴を聞いてあわてて、声のするほうに向ってると、僕の前に、一匹のフェレットが、いた。

「あ、あのフェレットもしかして、アカシックハートユーノかな？もしそうならここは、無視すべきだよな」

「そうですねマスター」

とういって、光は、ユーノを無視して、悲鳴の聞こえたほうに向っていった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ユーノｓｉｄｅ

「あれ、あの男の子、僕を見つけたのに無視してどこかに行ってしまったぞ、何でだろう？ア、今度は女の子がこちらに来るあの子に、助けてもらおうと」

ユーノは、そんな考えでいた。

ユーノｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

私は光君に遅れて、雑木林を走って、光君を追いかけてると、私の前に、一匹のフェレットが現れて、フェレットは私に何か訴えているようでしたが私は分からずフェレットの近くにある赤い宝石を見つけて

「わーこれかわいいなあ誰かのおとしものかな?誰もいないから私が、貰おうと」

と言ってなのはは、光を、追いかけて行った。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ユーノｓｉｄｅ

「おーいそこの君助けてよお願いだよ」

とユーノが、お願いしても少女は、少女には、言葉が通じないまま少女は、ユーノの近くにある赤い宝石レイジングハートに興味を持っていた。

「それは僕のものです返してください」とユーノが言うが、少女はよほど気に入ったのだろうレイジングハートを持っていってしまった。

「ああ、僕これからどうしようレイジングハートが取られるし、最悪だな

とりあえず管理局に、連絡して僕を保護してもらうかな」

等と言うユーノだった。

管理局に保護されたユーノは無事自分の世界に戻ったのだった。

ユーノｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして、２年後物語は動き出す新たな転生者と共に。

続く

新たな転生者

??ｓｉｄｅ

「あれ、ここはどこなんだろう?私確か、トラックに、轢かれてしまって、死んだはずなのになんで、私こんなとこにいるのよ誰か教えてよ」

??ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

と、彼女が騒いでいると

「五月蝿いのう一体何の騒ぎじゃ」と言いながらパジャマ姿の少女が出てきたのだった。

彼女に、少女が声をかけたのだった。

ウェンディｓｉｄｅ

「お主自分の名前を、覚えておるか?」

「覚えているわよ」

ならば申してみよ」

彼女は、少女の物の言い方に、少し嫌悪感を感じながら少女の質問に、答える彼女であった。

「私の名前は、橘アキよよろしく」

「ふむ橘ね・・!「何じゃと、お主もしかして兄はおらぬか?」

「ええ、いたわでも、兄は死んでしまったわ1年前にね」

「もしかしておぬしの兄の名前は、橘伸也と言うのではないかのう？」

「ええーなんであなたが兄さんの名前を、知ってるのよ？」

「わしは、愛の女神のウェンディと言うアキよろしく頼むぞよ」

ウェンディｓｉｄｅ　ｅｎｄ

アキｓｉｄｅ

「ねえ、ウェンディ何で、貴女が、私の兄さんのこと知ってるの？」

「わしが、お主の兄を、転生させたからじゃ」

「え、転生て、どうゆうことなの？」

「簡単に、言えばお主たちが、いた世界とは別の世界で伸也は、生きてるのじゃよ」

「お兄ちゃんが生きてるの？その世界で」

「何じゃ、お主兄に会いたいのか？」

「会いたい」

「ふむ、ならお主の転生先も兄と同じ世界じゃな」

「アキ後お主に転生する前にお主が欲しい能力３つまで付けること

ができるのじゃが、どうする？」

「私よく分からないので兄と一緒で」

「分かったのじゃのジャ、それでは転生開始じゃ」

こうして、私は、兄のいる世界に転生をしたのだった。

「待っててねお兄ちゃん」

そして私は目覚めるとそこには、金髪の少女と若い女性がいた。

アキｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

物語始動前編

??ｓｉｄｅ

「古の忌まわしき器ジュエルシード封印」
「ガアアアー」と化け物は、少年を襲う。

少年は化け物と戦っていた。

「ク、やはりレイジングハートがないから封印が上手くできないや早くレイジングハートを持ってる少女と合流しないと。」

少年は、化け物を逃がしてしまったが少年はレイジングハートを持つ少女を探し始めたのだった。

??ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはと光は、今年で、小学3年生になった。

光ｓｉｄｅ

「なのは、朝だよ早く起きないと、学校に遅刻しちゃうよ」

「光君後5分寝かせてよ」

「駄目だよなのはほら、さっさと起きる」
そう言って、光はなのはの布団を取り上げたのだった。
「ううー寒いよ光君」

「もう僕は下に降りるからね」といい光は、リビングに向った。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

「もう僕は下に、降りるからね」

「もう起きるから待ってよ光くん」

なのはは、慌てて飛び起きて制服に着替え、家族全員がいるリビングに向った。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはと光が、リビングに、行くと固化の家族は、既にリビングに集まっていた。

「なのは、光おはよう」と言うお父さん

「あら、おはよう」と言うお母さん

「なのはおはよう、光なのはは、絶対お前には渡さんぞ」と言う恭矢お兄ちゃん

「光、なのはおはよう」と言う美由紀お姉ちゃん

これで高町家全員です。

「はいこれなのはと光ちゃんのお弁当ね」

お母さんから、二人はお弁当を受け取り、二人は家を出て、バス停

に向った。

一方化け物と、戦っていた少年は魔力を使いすぎて、小動物モードになって彼もバス停の方に、移動していた。

少年ｓｉｄｅ

「はあ、結局あれからあの子達を探してるんだけど見つからないな」

「でもレイジングハートの魔力痕跡はこの町にあったからこの付近に、いるはず。」

と少年は考えていたそこへ少年は光となのはとすれ違った。

「いた、あの子達だ」

少年ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

光ｓｉｄｅ

「ほら、なのは急がないとバスに、間に合わないよ」

「待ってよ光くん」と息を切らしながら、光の後から来るなのは

光はバス停に行く途中で、アカシックハートに声をかけられた。

「マスターあれを見てください」

「何だ?アカシックハート」

光が、周りを見ると、あのフェレットがいた。

フェレットは光の心に話しかけた（すいません僕はユーノといいますどうしてもあなたに伝えたいことがあるのでついてきてください。）

（ああいいよ）

と光が、フェレットと話してるとなのはが追いついてきた。

「はあ、はあ、やっと追いついたの」戸疲れているなのはに、光が言った。

「悪いな、なのは先に学校に行ってくれないか？」

「光くんは、どうするの？

「僕も後から行くよ、だからお願いなのは」

光がそう答えると沈黙するなのはそして、沈黙していたなのはが言った

「分かったよ光くん早く来てよね」

「ああ」

と言って光は、人気のない森に向った。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

「私は光くんと、別れ一人で、バス停に行来ました」既にバス亭には、既にバスが来ておりなのはは、急いでバスに乗り込んだ。

なのはがバスに乗ると

「なのはこっちこっちよ」と呼ぶ声が聞こえて来た。

「アリサちゃんすずかちゃんおはよう」

「おはよなのは」

「おはようなのはちゃん」

この二人の名前は金髪の髪の少女がアリサ・バニングスと言う名前で、もう一人の紫色の髪の少女の名前は、月村すずかで、二人の家は資産家だった。

アリサとすずかとなのはの知り合ったきっかけは、2年前に起きた誘拐事件がきっかけで、その後から、4人で遊ぶようになった。

「あれまのは、光と一緒じゃないの?とアリサが聞く。

「光くん、途中まで一緒だったんだけど、用事ができたから先に行ってと言われたから」

「ふーんそうなんだ」というすずか

「光くん早く来てね私,

嫌な予感がするよ」と心の中で言うなのはだった。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

物語始動後編

光ｓｉｄｅ

光は、なのはと別れフェレットを連れ、人気の少ない場所を探していて、街のはずれにある森を利用した、森林公園で話を始めた。
「なあ、ユーノそろそろ魔法を解いて、元の姿で話しないか？」

「え、君何で、僕が人間て分かるんだ？」

「だって、こちらの動物は、人間の言葉を話さないからね」

「そうなんだ」

そう言って、ユーノは人間形態になり話を始めた。
「大体君は、何者なの？」

とユーノが光に聞く

「僕は人間だよただユーノと同じく魔法が使えるけどね。僕の名前は、高町光だよよろしく」

「で、ユーノが、この世界に来た理由を教えてよ」

「うん僕がこの世界に来た理由は。」ユーノが答えようとした時、光が答えた

「古の忌まわしき器ジュエルシードの捜索の為だろうユーノ」

「!何で、君がジェルシードのこと知ってるんだ?」

「おいおいユーノ僕も、魔道師なんだから?ジェルシードのことぐらい知ってるよそういうのをロストロギアていうんだろ」

「うんそうだよ光」

光は、ユーノに教えても支障がない程度に自分の正体を明かしたのだった。

「そうだ光僕と一緒にジュエルシード探し手伝ってよ」

と、ユーノが言った。

「僕はパスするよそれは大丈夫だよユーノ君のパートナーはもうすぐ見つかるよ」

「それじゃ僕はもう行くね」

そう言って、光はユーノと別れたのだった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

結局光くんは、午前中の授業は、来なかった。

「どうしたんだろ?光くん?」となのはが考えていると。

「なのは、お昼一緒に食べよ」と声をかける人物がいた。

なのははは声をかけられ振り向くとそこにはなのはの親友のアリサとすずかがいた。

そして三人は、屋上でお弁当食べていた。

三人の周りに1つだけ手付かずのお弁当を見て、アリサが言う。

「ほんと光ていつもなのはといるくせに、なんで今日は帰ってこないのよ」

「アリサちゃんも落ち着いて」

なのはちゃんも光くんから聞いてないの?理由」

「うん聞いてないよ」

そしてお昼休みが終わり午後の授業がはじまった

その日結局光は、学校に来なかった。

なのはたち3人は塾があるため学校の近くにある雑木林を抜けて近道をしょうと歩いていたらなのはが怪我をしている1匹のフェレットを見つけ動物病院に連れて行くことになった。そして3人が雑木林を抜けると黒い物体が3人を襲い3人は驚いていた

「きゃああなによアレー」

「よく分からないけど逃げよう」

「うんそうだね」

黒い物体が3人を追い詰めトドメをさそうとした時、3人の周りに蒼色の見えない壁があった黒い物体の物体の攻撃ははじかれた。

3人が、何が起きたのかわからず周りを見回すとそこには、光がいた。

「光君」

「光」

「光くん」

3人はそれぞれ光の名前を呼んだ。

「なのはアリサすずか大丈夫?こいつは僕が引き受けるから今は逃げて。

「わかったわ」

「気をつけて」

アリサとすずかは、避難したが・なのはは、僕の側にずっといたのだった

。

「なのは、あの赤い宝石持ってる?」

「うん持ってるよ光くん」

それをかざして、ユーノ君の言うとおりに言うんだいいねなのは」

「うん光君」

「行くよなのは」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「不屈の心は、この胸に」

「不屈の心は、この胸に」

「この手に、魔法を」

「レイジングハートセットアップ」

なのはがそう言うと．なのはの服装が、光と同じ、白と青を、基調としたバリアジャケットを着ていた。

「ええーこれどういうこと?となのはは混乱していた。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

なのはｓｉｄｅ

「何が起こったの。

」

「すごい魔力だよなのは」と、ユーノが言う。

「魔力て、何？ユーノ君。」

「魔法を使う為の力だよなのは。」

「そうなんださすがユーノ君。」

「いやーそれでもないよは、なのは早く光を助けに、行かないと」

「そうだった早く行かなきゃ」

なのはととユーノは、光を、助けるために光の元に急いだのだった。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

光ｓｉｄｅ

光は、なのはたちと離れた場所で、黒い物体と戦っていました。

「アカシックハートあいつはたしか、ジュエルシードの思念体でよ

かったんだよな」
「はいそうですマスター」
光は、アカシックハートと話しながら、黒い思念体の相手をしていた。
「アカシックハートあのさ僕が、こいつを倒すのは、不味いよねジュエルシードの思念体だから。」
「別に、マスターが原作介入したいのなら、倒せばいいのでは?」
と言うアカシックハート
「それはそうだけど」
光と、アカシックハートが会話している時も、思念体の攻撃は続いていた。
「ゴオオオガアアア」
しかし光は、思念体の攻撃を、余裕でかわすのだった。
そして、なのはとユーノが光と、合流し光がなのはに言った。
「なのは僕が、こいつにダメージ与えるからその隙になのはは、封印の準備をお願いね」
「うん分かったよ光君」

「じゃあ行くよアカシックハート」

「了解」

光は、アカシックハートに魔力を集中させ思念体に、標準をあわせ、魔法を放った。

「喰らえ!!アカシックバスター」

光が放った魔法は、青白い炎が鳥の形になって、思念体に襲う

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

光の魔法により、思念体の動きが鈍る。そのすきをなのはは、見逃さなかった。

「今だ!!リリカルマジカルジュエルシードシリアルナンバー２１封印」

なのはが、言うと思念体は消え、青く輝く宝石が現れその宝石は、レイジングハートの中にいれ今回の騒動は収まったかに見えたが光となのはは、周りを見回すとすごい状況になっているの見た時、バトカーのサイレンを聞いた二人は慌てて逃げたのだった。

続く

事件解決そして新たな出会い

なのはが、魔法少女として覚醒した次の日、光となのはは公園で、魔法の練習していた。
なのはｓｉｄｅ

「ううー私も光君みたいに早く、砲撃魔法を早く撃ちたいなあ」

「なのはそれはまだ無理だよ」

「何で？ユーノ君」

「だってなのはは、昨日から魔法を、使えるようになったばかりじゃないか、光が使ってるような魔法を、使うにはもう少し練習しないとね、なのは」

「うんそうだねユーノ君。そういえばごめんねユーノ君。

「え、何で謝るの？なのは」

「実は昨日ね．光君から聞いたんだけど私たちて、実は一度会ってるんだってね、ごめんねユーノ君。その時勝手に、レイジングハートを持っ行って。」

「ああ、そのこと僕もあの後、またこちらの世界に来たかったんだけどすぐね、元の世界に戻ったら、僕は時空管理局てとこで、２年間無償で働いてたしね反省の意味もあるんだけどね」

「だからなのはが、レイジングハートを、大事に持っていてくれて

ありがとう」

等と、二人が話していると、「すいません」と少女が、なのはに声をかけて来た、あのあなたお名前は、なんて言うの？」

「私は、ララテッサロッサよろしく」

「私は高町なのはよろしくねララちゃん」

（ふーんこの子がなのはちゃんか伸也兄さんと一緒に暮らしてる子なのか）

「よろしくねなのはちゃん私最近こっちに引越ししてきたばかりなんだ」

「そうなんだ。あ、ララちゃんよければ私と友達にならない？」

「え、いいのなのはちゃん？」

「うん」

こうしてなのはは、新しい友達が出来たのだった。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方光は、ウェンディの部下のクリスと、通信で話していた。

「何だって、俺の妹が、新たな転生者としてこちらの世界に来てるだと？」

「はい、そうです光様」と言うクリス

「あいつまでこちらの世界に、来てるのか厄介だなあいつの性格は、しつこいからな」

と不安な光だった。

続く

??ｓｉｄｅ

彼女は、今双子の妹を、迎えに行っていた。

「もうララはどこまで行ってるのかな?早くしないとアルフが全部朝ごはんを、食べてしまう早く見つけないと」

と彼女がララを探していると。

「そうなんだなのはちゃんて、光君のことが、大好きなんだね。」

「うん大好きだよララちゃん」

「え、今ララて、聞こえたあの公園からだ行ってみよう」

彼女は、早足で公園に向った。

??ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ララｓｉｄｅ

「そうなんだなのはちゃんてそんなに、光君のことが大好きなんだね」

「うん大好きだよララちゃん」

とララたちが話していると「ララ朝ごはんだよ」と声がした。

ララは、その声に気がつくと、「わかったよお姉ちゃんと言って、彼女のほうに、向いながらなのはに、向け「またねなのはちゃんと言った。

そして、二人が家に向ってると、二人に通信が入った。

その通信相手とは、二人の母親のプレシアテスタロッサからだった。

「フェイトララおはよう」

「おはようお母さん」と元気に言うララ

「お、おはようございます」と緊張しながら言うフェイトだった。

「早速用件を言うわララ今すぐ私のところに戻ってきて、フェイトは今のままアルフと共にジュエルシードを探しなさい、では、ララ待ってますよ」

「はーい」

「それじゃフェイト姉さん行ってくるね」

「行ってらっしゃいララ」

とフェイトが行った後ララが言ってきますといってララは、プレシアの元に向った。

ララｓｉｄｅ　ｅｎｄ

プレシアｓｉｄｅ

彼女プレシアテスタロッサは待っていた。
ララが帰ってくるのを。

「お母さんただいま」と言う言葉と共にララが、プレシアの前に現れたのだった。

「それで私に用事なんでしょ何？」

とララが聞くと、プレシアが答えた。

「ねえ私と二人のときは普通に、喋って転生者のアキさん」

アキさんあなたには、フェイトを守る為とはいえあなたにフェイトの双子の妹をしてもらって感謝してます。」

いえ私のほうこそ、感謝してますあの時プレシアさんの、部屋に落ちて、プレシアさんの娘アリシアを見た時私は、大切な肉親を失って間がなく、私は、プレシアさんの気持ちがわかるから協力してるだけですよ実際フェイトちゃんとは、同じ年なのでこの世界では、楽しんでますから気にしないでくださいねプレシアさん。

「ありがとう」とプレシアが言った。

「では私は、フェイトと合流する為海鳴市に行きますね」

「ええ、お願いねララ」

「はーいお母さん」

こうしてララは、フェイトの元に向った。

プレシアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方海鳴市では、もう一つの出会いが、起起用としてたのだった。

その出会いとは？

続く

もう一つの出会い

光ｓｉｄｅ

光は、魔法の練習に使ってる公園に急いでいた。
なのはが朝食の時間になっても、帰ってこないので、公園に行くとまだなのはがいた。

「こらなのは、もう朝ごはんだぞ早く戻るぞ」と言いながら光は、なのはの頭をコツンと叩いた。

「痛いよ光君」となのはが言う
「もう少し練習したいよ光君」

「駄目だよなのは、早く帰らないと学校に遅刻するよ」

「え、もうそんな時間、光君」

「うん、そうだよなのは。」
光となのはは、急いで家に帰り朝食を食べ、送迎バスが迎えに来るバス停に、急いで行ったのだった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして、バス停に着いた、光となのはは、そこで金色の髪の少女と出会うのだった。

「ねえ、光君あの子かわいいね光君」と聞くなのは

「うん、そうだね」と答える光だったが光は内心では、少女を見て、早すぎると思っていたのだった。

（アカシックハートあの子もしかして、フェイトなのか？）

（どうやらそのようですね、もしかしたらもう一人の転生者によって、主要人物たちの出会いが早まったのでは）と光は、アカシックハートと念話で話していた。

「なるほどな、そういう可能性もあるか」と納得する光

暫くすると、少女は、姿を消していた。

そして、送迎バスが来たので光となのはは、バスに乗ると、アリサとすずかが、手を振り二人を呼んでいた。

「なのは、光ここ、ここよ」とアリサが二人を呼ぶ

「なのはちゃん光君おはよう」とすずかが言う

４人は他愛のない会話しながら、学校に向った。

４人が学校に着くと、一斉に学校中の男子生徒たちに、殺気を当てられる原因は、男子生徒たちの嫉妬なのである。

この学校の中では、アリサすずかなのはは．３大天使と言われる存在で、高嶺の花なのだ。彼らにしてみれば、日宇の存在は、高嶺の花に群がる害虫と同じで、光も男子生徒たちから常にターゲットにされていたのだった。

そして、学校が終わり帰ろうとした時、光となのははは、ジュエルシードの発動した時に発生する魔力を感知し現場に向った。

現場についたなのはと光は、驚いたのだった。

今回のジュエルシードは、なんと、犬を取り込んで、凶暴な生物へ変化させていたのだった。

なのはと光は、協力して犬の化け物を相手にしていた。

「なのはジュエルシードは、レイジングハートしか封印できないから、昨日の作戦で行くよ」

「うん、わかったよ光君」

「行くよ、アカシックハートソ＝ドモードで行くよ」

「了解」

そう言って、アカシックハートは、一本の剣に変形したのだった。

「喰らえ！！ＧＮソード」と言って光は、高速で斬りかかったのだった。

そして、なのはとレイジングハートが、ジュエルシードを封印を完了した時、二人は、大きい魔力が近づいているのがわかった。

果たしてなのはたちの元に来ている者は一体何者なのだろうか？

続く

キャラ設定2（前書き）

二人目の転生者のプロフィールです

キャラ設定2

橘アキ

年齢　１６才

彼女も、兄と同じく不慮の事故に遭い死んでしまうが、愛の女神ウェンディに会い彼女も転生することになる。

ララテスタロッサ

アキが、転生したリリカルなのはの世界での名前である。

魔力光は　赤

ララが転生者のアキという事を、プレシアテスタロッサは知っていて、ララに、フェイトの双子の姉妹という役割を与え、ララとプレシアと協力している。

何故、プレシアが転生者の存在を知ってるのかと言うと、アキがこの世界に、来た時にアリシアと共に、プレシアもその現場にいたからだ

ララの能力は、光と、同じなので、キャラ設定をご覧ください。

デバイス　バルブラット　基本系は、鎌型

プレシアが、ララのために作り上げたデバイスである。

二人目の転生者のプロフィールは今のところこんな感じです。

再会前編

ララｓｉｄｅ

「ほら、フェイトあそこジュエルシードの、魔力反応があるよ、早く行こうよ。」

「うん行こう、ララ」

二人はジュエルシードの元に急いだのだった。

ララｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

光が、犬の化け物に高速で斬りかかり犬の化け物の隙を作り出したのだった。

「今だ！！忌まわしき器ジュエルシードシリアルナンバー１０封印」

「なのはが、二つ目のジュエルシードを封印した時、なのはと、光は自分たちの元にやって来る二つの魔力を感知していた。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして、二人の魔法少女は出会ったのだった。

「あ、ララちゃんどうしたの？こんなところで」

「なのはちゃんだったんだ私たちの、目的の邪魔になる魔道師は、

なのはちゃんとはいい友達になれると思ったのになあ残念だよ」

と言って、ララは．なのはに攻撃を仕掛けた

だが、光がなのはを庇った

「なのは大丈夫？」

「ありがとう光君」

ララは今初めて光と、出会った、自分と同じ存在である光と

「お姉ちゃんお願いあるんだけどいい？」

「どんなお願いなの？ララ」

「私あの男の子に、興味があるの、だからお姉ちゃん少しだけなのはちゃんの相手お願いね」

「いいよララ」

そして、ララは光の元に行き、こう言ったのだった。

「伸也お兄ちゃん会いたかったよ」

「！！お前まさかアキなのか？本当に？」

「そうだよ私、アキだよ」

こうして、二人の兄弟は再会したのだった。

一方なのはとフェイトも運命の出会いをしたのだった。

続く

再会後編

光ｓｉｄｅ

「本当に、アキなのか？」

「そうだよ伸也お兄ちゃん、ウェンディさんから聞いてないの？」

ウェンディの部下からもう一人転生者が来るのは聞いていたが、まさかアキお前とは、驚いたぞ」

「それでさお兄ちゃん私、この世界のこと、よく知らないからさ、教えてくれない？」

「ああ、いいよ」

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

転生者同士の話し合いが行われている時、なのはとフェイトは公園のベンチに座っていたのだった。

なのはｓｉｄｅ

なのはは、無口な少女フェイトに、話しかけるが、答えは返ってこないのだった。

「ねえ、私の名前は高町なのはだよよろしくね」

「・・・・・」

「あなたの名前を、教えてよ」

「・・・・・」

「どうしょう?友達になりたいのに、やっぱりララちゃんがいないと、この子も、緊張してるんのかな?初対面だから、光君ララちゃん早く帰ってきてよー」

と、心の中で叫ぶ、なのはだった。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「なるほどお兄ちゃん、わかったよこの世界のことが、つまり本来なら、もう少し後で出会うはずの二人がもう出会ったんだね」

「ああ、本当ならなのはが、ジュエルシードを後2個ぐらい集めた後に、出会うはずだったんだ。」

「そうだったんだごめんねお兄ちゃん」

「もうこうなってしまったんだからしかたないけど、アキ俺とユーノとなのはが、もうすこししたら友達の家に行くときが、あるからその時、連絡するからお前は、フェイトを連れてきてくれ」

「了解ですお兄ちゃん」

「さあなのはたちのところに、戻ろうアキ」

「はーい」

そして二人は、なのはたちのところに、戻っていった。

「ただいまなのは」

「あ、おかえりなの光君」

「ただいまお姉ちゃん」

「・・・おかえりララ」

「もう、お話おわったの？光君」

「ああ、おわったよなのは」

「そうなんだ」

「お姉ちゃん帰るよ」

「わかったよララ」

ララと、フェイトはその場から、移動を開始し、光達と別れたのだった。

「さあ、なのは僕たちも家に帰ろう」

「うん、光君。」

なのはたちも家に帰ったのだった。

続く

街には危険がいっぱい

前回のジュエルシード騒動から、数日がたち今日は、日曜である。

光ｓｉｄｅ

「なのは準備出来た？」

「あ、光君準備出来たよ」

それじゃあ玄関に来てね、なのは」

今日は、なのはたちの父親が、監督を務めるサッカーチームの試合の日で、なのはと光はユーノと共に試合会場に行ったのだった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

なのはたちが、試合会場に着くと、そこにはアリサとすずかが来ていた。

「おはよなのは、光。」

「おはようなのはちゃん光君」

「おはようなのアリサちゃん、すずかちゃん」

「おはようアリサ、すずか」

４人が挨拶した後４人は試合が始まるのを待っていた。

そして、試合が始まった。

前半戦両チームは互いにチャンス生かせないまま同点で、折り返したのだった。

そして、ハーフタイムに事故が起こったのだった。

その事故とは、なのはの父親のチームの選手が、負傷したのだが、交代要員がいなかったのだ。

そこで、士郎が考えた、打開策とは。

「光代わりに試合に出てくれないか？」

「え、父さんなんで、僕に言うの？無理だよ僕チーム練習したことないんだよ。確かに僕は練習の時は、一緒にしたことあるけど試合に出るなんて」

と光が出場することに躊躇していると、一人の選手が光の前に来た。

「大丈夫だよ光君は、僕たちの仲間だから」

「なあ、みんな」

と、言うとみんなは、首を縦に振ったのだった。

それを見た光は、決心したのだった。

「父さん僕試合に出るよ」

「そうか、頼んだぞ」

「うん」

こうして運命の後半戦が始まった。

そして時間は進んで、試合後翠屋で、光はなのはたちと試合のことを、話していた。

「しかし、惜しかったね光結果は負けかも知れないけどあんたの頑張りはちゃんとあたし達に、伝わったわよ自信を持ちなさいよ」

「そうだよ光君頑張ってたよ」

「そうだよ光君さすが私の未来の旦那さんだあ」

「はいはいなのはのお惚気は、その辺でね、じゃあ私とすずかは帰るわねじゃあね」

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

アリサとすずか二人と別れた光となのはは、家に帰る準備をしていた時、光は、ジュエルシードを持っている人を見つけていた。

「アカシックハートあの子を、追跡しといてくれ」

「了解ですマスター」

そして光となのははは、家に帰ったのだった。

そして、家でくつろいでいた光は、突然強い魔力反応を、感知し家で寝ていたなのはを置いて現場に来たのだった。

「何と言う大きさ何打今回の相手は？」

そう今回の相手は街を、覆い隠すことができるほどの巨大な木だった。

「原作で知ってるけどほんと大きいな」

等と喋ってると、アカシックハートから緊急の連絡が来たのだった。

「マスターこの近辺に生命反応がありますう」

「僕以外のか？」

「はいマスター」

「わかった調査に行く」

そして光は、調査に向った。

？？ｓｉｄｅ

「あ、しまった豆腐と味噌買い忘れたなあもうまた行かないとなあ」

少女は、買い物の為街に向った。

何や?これは、街がえらいことになってるやんか」

少女は、街の状況を見て、驚いていた。その時、少女に向けて、巨大な蔦が襲うのだった。

「アカンやられる」

と思った時誰かが少女を助けたのだった。

「ありがとうな」

「どういたしまして

これが少女と光の出会いだった。

続く

街には危険がいっぱい後編

ジュエルシードの発動で、街が混乱している中光は、ある少女に出会う。

そのころなのはは、異変に、気づき現場に向っていた。

なのはｓｉｄｅ

「は、何この魔力反応は?まさか、ジュエルシードが発動したの?」

「ほらユーノ君も、起きてジュエルシードが発動したんだよ」

「なのは、光はどこにいるの。」

「私が気づいた時に、はもういなかったから、多分もう現場に行ってると思うよ。」

「だから私たちも行こうユーノ君。」

なのはとユーノは、現場に向った。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そのころ光は、助けた少女を、安全な場所に連れて行っていた。

「ありがとな君助けてくれてな」

「君の名前教えてくれないかな」

と少女は、言っていた。
「僕の名前は、光だよ。光と書いて、ひかるだよよろしくね」
「うちは、はやてやよろしゅうな、光君」
と二人が自己紹介をし終わると、なのはとユーノが合流をしたのだった。

三人称ｓｉｄｅ

「ねえ、光君その子誰なの？まさか私の知らないところで別の女の子と遊んでたの？
となのはの表情が、だんだん怖い笑顔になっていくのだった。
「うちははやてて言うやよろしゅうなえーと名前なんていうんやそちらの女の子は？」
「私の名前は、なのはだよよろしくねはやてちゃん。」
と笑顔で答えるなのはだった。
「ところでなのは、ジュエルシードを発動させたのは、人だ。サッカーの選手がジュエルシードを持ってたんだ。」
「ええーそうだったの光君？」
「ああ、それにここまで大きいと封印は簡単にはできないしね。」

「じゃあどうするの？光君」

二人がジュエルシードの対策を考えていると、意外な人物が、案を出したのだった。

「なあ、光君うちにいい考えあるんやけど、聞いてくれる？」

「ああ、いいよ言ってみて。」

「わかったじゃあ言うで、なのはちゃんと光君は、魔法使いなんやろ？」

「そうだよはやてちゃん」

と言うなのは

「相手が大きくて近づけないなら、遠距離魔法で勝負したらどうやろか？光君？」

「なるほどなのはエリアサーチして最悪の根源探してその場で封印できる魔法あるか？」

と、光がナノハに聞いた。

「あるよ光君となのはがいった。

「よし今回はその作戦で行こう。」

と言ってなのははは、エリアサーチを開始したのだった。

「見つけた」

なのははは、そう言ってレイジングハートを中距離射撃モードに切り替えたのだった。

一方光は、アカシックハートと話しながらなのはの様子を見ていた。

「マスターさすがですねはやてさんは」

「ああ、さすが機動六課の部隊長になる人だよなあ。」

とはなしているとなのは封印を始めていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

「行くよレイジングハート」

「了解」

「古の忌まわしき器ジュエルシードシリアルナンバー１０封印いけーーディバインバスター！」

なのはの放った新魔法は、見事ジュエルシードを、封印をしたのだった。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして、光となのははははやてを家まで送り、自分たちの家に帰る途中なのはが言った。

「ねえ光くんユーノ君私これからもっとジュエルシード集め頑張る今日みたいなことをしないために。」

「そうか僕たちもなのはをサポート頑張るよな、ユーノ？」

「うん」

「ありがとう光くんユーノ君。」

こうしてなのはたちは、決意を新たにしたのだった。

後にＰＴ事件と呼ばれるようになるこの事件は、二人の転生者の介入で、どう変わるのだろうか。

続く

街には危険がいっぱい後編（後書き）

次回は二人の戦闘ですと言っても上手く描写ができるかわかりませんがそれが終ったら温泉の前にいくつかオリジナルを入れる予定です

初対決

今日は光となのはとユーノの三人は．すずかちゃんの家に遊びに行く約束の日だった。

三人称ｓｉｄｅ

「なのは準備できた？
と光が、なのはの部屋をノックをする。

「あ、光くん待ってもう行くから。」

「わかったよなのはじゃあ僕は、玄関で待ってるね」
と言って光は玄関に向いながらもう一人の転生者のララに、念話で連絡をしていた。
（おーいララ聞こえるか今日が、約束の日だからお前たちもこいよ）

（わかったよお兄ちゃん、場所はどこなの？）

（場所はジュエルシードの発動した時に出る魔力を結界を張るからその前に感知して来てくれ）

（わかったフェイトにも伝えとくね。）

（ああ、頼むぞララ）

光は、ララとの念話をやめた時、なのはが部屋から出てきた。

そして、なのはと光は付き添いの恭也とフェレット形態のユーノと共に、すずかちゃんの家に向ったのだった。

なのはたちが鈴鹿の家に着くと、二人のメイドさんがなのはたちを出迎えた。

「いらしゃいませ恭也様、光様、なのはお嬢様、k待ちしておりましたでは中にどうぞ」

三人は屋敷の中に入っていった。

なのはと光は、すずかのいる部屋に、とうされた

その部屋にはアリサとすずかそして、大量の猫がいたのだった。

「アリサちゃんすずかちゃんこんにちはなの」

「あら、なのはに光遅かったわねどうしたの?」

「ああ、それはね」

とう光が、遅くなった理由を言おうとしたらアリサに止められたのだった。

「いいわ光言わなくてなのはのことだから準備に時間かかったんでしょ」

「そのとうりだよアリサ」

「フフなのはちゃんらしいね。」

と言うすずか。

「なにげにそれは酷いよアリサちゃんすずかちゃん。」

と言うなのはだが

「事実でしょうが」

とアリサに言われて反論出来ないなのはだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ララｓｉｄｅ

ララとフェイトは海鳴市周辺を飛行していた。

「ねえララ、さっきから同じ所を飛んでるんみたいだけど、そんなことしてて、ジュエルシードが見つかるの？」

「大丈夫ですよフェイトお姉ちゃん、私を信じてください。」

「ララのことだから、信じるけどね、まだ信用できないんだ完全には。」

とその時大きいな屋敷に隣接す森から大きな魔力反応が出現したのだった。

「急ごうフェイトお姉ちゃん。」

「うん急ごうララ」

ララたちは現場に向った。

一方なのはたちもジュエルシードの発動を感知していた。

ララｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

「！！光くんこの感じはまさか、ジュエルシード？」

「ああ、そのようだね。」

「でもどうしょうこの状況じゃ。」

「僕にまかせて」

と言うユーノ

ユーノは屋敷から飛び出してなのはは、ユーノを追いかけて行った。

そしてなのはとユーノは屋敷を抜け出しジュエルシードの発動地点に向った。

現場に着いたなのはとユーノは、今回の相手を見て驚いていた。

その相手とは、ジュエルシードの効果で巨大化した猫だった。

二人が、巨大化した猫を見ていると、雷の魔法が猫に直撃をし猫は倒れたのだった。

一方そのころ光は、念話で、ララと会話をしていた。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

光ｓｉｄｅ

（ララフェイトに伝えてくれる？）

（何？お兄ちゃん今のなのははフェイトに、絶対勝てないから安心しろと伝えてね）（僕もそろそろそっちに行くから）

（わかったお兄ちゃん）

そして光が現場に着いた時、既になのはは、フェイトに敗れてジュエルシードはフェイトが回収していた。

「光今まで、どうしてたんだ？。」

と言うユーノ。

「この戦いは、なのはには必要な戦いだから僕は来なかったんだよ」

「何だよそれは？」

と不満を漏らすが、光はナノハの元に行き、頑張ったななのはと言いなのはの頭を優しく撫でたのだった。

そして光はなのはを抱え鈴鹿の家に向ってる最中に、なのはは気がつき

光の背中でフェイトに負けたことを思い出しないてしまった。

「ねえなのは、なのははは強くなりたいの？」

「うん強くなりたい光くん。」

「強くなってどうするの？なのは。」

「私は強くなって、あの子と話がしたいよ。」

「わかったなのは、これから二人で強くなろう。」

「うん光くん」

こうして、二人は強くなることを誓うのだった。

ユーノはこのことが切欠で光を疑い始めたのだった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

はやての家にお泊り

なのはと光は、先日の一件で友達になったはやての家に遊びに来ていた。

三人称ｓｉｄｅ

「こんにちははやてちゃん遊びに来たよ。」

「こんにちははやて。」

「いらっしゃいなのはちゃん光くん、さあ上がってよ。」

「お邪魔します」

二人ははやての家に、入っていった。

なのはと光は、はやての部屋に通された。

「ちょっと待ててな今からお茶菓子持ってくるからな。」

「ア、そういうことなら僕も手伝うよはやて。」

「じゃあ私も、手伝うよはやてちゃん。」

「おおきにな二人とも。」

光となのはは、はやての手伝いをして、三人で楽しく談笑していた。

その時なのはが、はやての机にある一冊の本に気づくのだった。
「はやてちゃんこの本とても綺麗だね。」
ありがとうななのはちゃんあの本な、うちが物心着いた時には、うちにあったんよ。」
「そうなんだ」
「はやてトイレはどこかな?」
「トイレやったらこの部屋出て左のほうにあるよ光くん。」
「ありがとうはやて。」
光は部屋を出てトイレに向った。
三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ
光ｓｉｄｅ
光は、トイレでアカシックハートと、話をしていた。
「アカシックハートはやてのとこにあった本は、夜天の書だよな。」
「はいマスターでも今は、夜天の書ではなく闇の書と言われてますが。」
「そういえばそうだったな夜天の書と呼ばれるのは、闇の書の闇を倒してからだったな。」

「でも大丈夫か、なのはに闇の書見られたが？」

大丈夫ですよなのはは、闇の書を、普通の本としてしか見てないはずですしね。」

とアカシックハートと話してると突然愛の女神ウェンディから連絡が入った。

「久しぶりじゃの伸也今日はお前に良くない知らせがある。」

「よくない知らせとはなんだい？」

「実はのわしのライバルの嫉妬の女神ルーシィが、お主たちのいる世界の未来に転生者を送り、お主とお主のパートナーを倒すつもりじゃすまぬな、女神たちの下らんことに巻き込んで。」

「別にいいよ気にしないで、僕たちの未来に転生者がきたとしても僕は負けないからさ。」

「そうかそれなら安心じゃな」

と言ってウェンディとの通信は終わり光はトイレを出て、はやての部屋に向った。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

はやてｓｉｄｅ

はやては、なのはと話をしていた。

なあなのはちゃんききたいことあるんやけど聞いてええかな?」

「いいよはやてちゃん。」

「じゃあ聞くで光くんとなのはちゃんは、どんな関係?」

「私と光くんの関係は、許婚同士だよはやてちゃん。」

「えーー!!それはホンマ?なのはちゃん。」

「うん本当だよ」

と女の子トークが、展開されていた。

「あ、もうこんな時間や二人とも家に帰らんんでええの?」

とはやてが時計を見ると夜の7時を回っていた。

「大丈夫だよはやてちゃん私たち今日はとまるからここに」

と言ってはやてにお泊りセットを見せた二人であった。

楽しい夜も時間が過ぎ、三人は一緒に寝たのだった。

そして翌日なのはたちは家に帰る時間になり、はやての家の玄関でなのはは、はやてと話していた。

「ねえはやてちゃん今度のGWさ私たちと旅行一緒に行かない?」

「旅行かいいなあ行きたいな」

「じゃあお父さんたちにお願いしてみるねはやてちゃんもいいかね」

「ほんま？アリガトウなのはちゃん。」

「じゃあ今日は帰るねバイバイはやてちゃん」

こうして光となのはは家に帰ったのだった。

「なのはちゃんたちとの旅行行けたらええなあ。」

と思うはやてだった。

はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

戦うべき相手

今日はＧＷの初日でこの時期になると高町家とアリサちゃんすずかちゃんたち３家族で、旅行に行くのが恒例行事だったが、今年ははやてちゃんも参加していた。

ユーノもあれからずっと光に対して距離を置いて生活をしていた。

ユーノｓｉｄｅ

ユーノとなのはは、念話で話をしていた。

「ねえなのは、なのははあの子に、負けてから僕は、君と光の特訓を見守ってきたけど光の特訓のすごさは異常だと僕は思うよ。」

「どうしてそう思うの？ユーノ君は？」

「だってそうじゃないか何十倍ものの重力下での特訓とか光の放つ魔法をすべて受け止める特訓なんてどう見ても只のいじめにしか見えないじゃないか！！　こんなので強くなれるわけないじゃないか。」

「ねえなのはこんなこともうやめてよこのままだとなのはが、死んでしまうよ」

「ありがとうユーノ君でもね、私はやめないよ。」

「！！どうして、どうしてなの？」

「君は光に弱みでも握られてるの？なのは。」

「ううんそういうことじゃないんだユーノ君。」

「立ったら何なんだいそこまでする理由は？。」

「それは」

なのはが言いかけた時光が、念話でストップをかけたたのだった。

「なのはそこまでだ」

「何で光話を止めるんだよ」

「ユーノ周りを見てごらん。」

と言う光であった。

ユーノが周りを見てみると

なのは大丈夫？と心配しているありさとすずかの姿があった。

「あ、そういうことかなのははまだ魔法の初心者だった誰かと話しながら念話するのは、無理だった。」

「アリサちゃんすずかちゃんありがとう私はもう大丈夫だから、心配しないで。」

「なのは」「ちゃん」

と言うアリサとすずかだった。

「ありさちゃんすずかちゃんこちらがはやてちゃんなのよろしくね。」

「よろしゅうなアリサちゃんすずかちゃん。」

「よろしくはやて」

「よろしくねはやてちゃん」

と子供たちが話していると車が、旅館に着いたのだった。

旅館に着くと士郎が恭也と美由紀にアリサちゃんたちを頼むぞと言った。

「光、なのは行きますよ。「はーい」

と４人はどこかへ行ったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

はやてｓｉｄｅ

「何や光くんとなのはちゃんどっかいくん?。」

「ああ、お墓参りよ。」

「お墓参り?誰か死んだの?」

とはやてが聞く。

「ええ、数年前に光くんの両親がね光くんとなのはちゃんを守って銃で射殺されたの今もその犯人は、捕まっていなくてあの二人はまだ狙われているかもなの。」

「そうやったんか」

「大丈夫よすずか今年の二人のガードには、私の友達が通っている武偵高校の凄腕の人を雇ってるのよ。」

「私にとってもあの二人はお金なんかより大切な友達だから」

「ほんまアリサちゃんはやさしいな。」

と言ってはやてはアリサの頭を撫でるのだった。

アリサは恥ずかしさの余り顔を赤くしていた。

一方フェレット形態のユーノはアリサたちの話を聞き光に対する気持ちが少しずつだが、解消していた。

はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

今なのはたちは光の両親のお墓の前に来ていた。

「あの事件からもう6年だね光くん。」

「そうだねなのは」

「私はこの時はっきりとわかりましたまだ光君の心の中ではあの事件は続いているのだと。」

「ねえ光君やっぱり私じゃ光君を支えること無理なのかな?」

「!!そんなことないよなのは」

光がなのはにそう言うとなのはは目に涙を溜めて今にも泣きそうな顔から笑顔に変わった。

お墓参りの帰り道に突然黒服の男が二人なのはたちの前に現れた。

「何だね君たちどきなさい」と士郎が言った。

「うるせえなこの親父殺すぞ」

と一人の黒服が士郎に拳銃を向けたのだった。

そして、光となのはは、士郎に向けられた拳銃を見てすべてを思い出していた。

「お前たちだったのか僕の父さんと母さんを殺したのは。」

光の発言に驚く士郎と桃子。

「坊主よく思い出したなほめてやる褒美にお前の両親の所に連れて

行ってやる。安心しろお前の彼女と一緒にな」

と言って男はなのはと光に拳銃を向けた。

「お前たちの存在は我々の組織にとって邪魔な存在なのさ、じゃあな」

と言って男はなのはと光に凶弾を放ったのだ。

果たしてなのはと光の運命は?

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

戦うべき相手（後書き）

次回はある作品のキャラががゲストで出ますよ

光となのはに向けて放たれた凶弾が二人に襲う
今の二人にとって銃弾の弾から身を守ることなど魔法を、使えば簡単なのだがなのはと光には、魔法が使えない理由があった。

その理由は、なのはと光は、魔法を使えることを秘密にしているからである。

放たれた2発の銃弾の一発が、咄嗟になのはを庇った士郎に当たり士郎はなのはにこう言った。

「なのはどこも怪我ないかい？」

「うん私は大丈夫だよおとうさんが庇ってくれたから。」

「そうかそれはよ　かっ　た」
と言って士郎は、気を失ったのだった。

「ちっ庇いやがったか、だがもう一発はどうする気だ。」

と黒服の男が、言い放った。

その時、違う角度から一発の弾が、光を狙っていた弾を弾き飛ばしたのだった。

「！！誰だそこにいるのは。」

と黒服の男たちの一人が叫んだのだった。

「そこまでよあんたたちこれ以上その子達に手を出させないわ。」

「君は一体誰なの？」

と聞く光。

「ち、武偵高校の連中か、厄介だなあの女は」

「兄貴どうしましょう。」

「しかたねえ一時退却だ」

と言って黒服の男たちは退却をしたのだった。

光ｓｉｄｅ

「私は、神埼・Ｈ・アリアよ君たち二人をこの旅行中ボディガードするのが、私の任務なの。」

とアリアが言った後、なのはがアリアに言った。

「アリアさん私たちを助けてくれてありがとうございます。」

「別にお礼はいいわよ私は任務を遂行しただけだから」

「でもアリアさんの声てほんとアリサの声にそっくえいだなあ」

と光が言う。

「光君ほんとアリアさんの声てアリサちゃんにそっくりだよね。」

となのはも光の意見に同意をしたのだった。

「早く君たちのお父さんを病院に連れて行かないと」

とアリアが言った。

そして、アリアたちは、士郎を病院に連れて行き検査の結果、銃弾を取り除ける位置にあり手術するのに、数日の入院が必要と言うことだった。

桃子は光となのはをアリアに任せ士郎の看病する為病院に戻っていった。

光となのはは、アリアと共にアリサたちのいる旅館に向っていた。

「ねえアリアさん聞いていいかな?」

「うん何を聞くのかな私に?」

「アリアさんは僕となのはを狙った組織のこと知ってるんでしょ。」

「知ってたらどうするの?」

「教えてくださいあいつらは、僕の両親の敵なんだからあいつらに復讐してやる」

と光が言った。

それを聞いていたなのはが。

「！！駄目ーー駄目だよ光君復讐なんてしちゃ駄目だよ。」

「でもなのは、それじゃこの僕のこの感情をどこにぶつけたらいいんだよ」

「そんなもの私が全部受け止めてあげるよだって私は光君の、お嫁さんになるんだからね。」

なのはの言葉を聞いた光は、感情を抑えきれず泣き出してしまっていた。

そんな光を見ながらなのははアリアに聞いた。

「アリアさん私たちを狙った組織の名前を教えてください。」

なのはの真剣な表情を見たアリアは、観念して組織のことを喋りだした。

「なのはちゃんたちを狙ってる組織の名は、超次元犯罪組織マクーよ。私は、そいつらを追ってるの」

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ついになのはたちを狙っている組織の名前が判明した。

超次元犯罪組織マクーとは、いかなる組織なのだろうか

そして別次元からマクーを追って地球に、近づく一隻の船。

「執務官あなたの任務わかりましたか？」

「はい艦長ジュエルシードの捜索とマクーに追われてる子供の保護ですね。」

彼らは一体何者なのか？

続く

ジュエルシード探しと温泉街

ララｓｉｄｅ

なのはたちがＧＷで、旅行に行っている時ララとフェイトは、時の庭園でプレシアと話をしていた。

「少し厄介なことが起こりましたフェイトララ大至急この温泉街に向いなさい。そこにジュエルシードがありますフェイトとアルフはそこに向いなさい。」

「それとララさんよくお聞いてあなたのお兄さんが、超次元犯罪マクーに狙われてますララさんお兄さんはこの温泉街にいますお兄さんを助けてあげてね」

「はい母さん」

「二人ともわかりましたね。」

「はい」

こうしてララたちは温泉街に向った。

「お兄ちゃん大丈夫かなあ？」

「どうしたの？ララ元気ないね。」

「フェイトお姉ちゃんなんでもないよ。」

「そうそれならいいけど、悩みがあるなら言ってね私が、お姉ちゃんなんだからララのね。」

「ありがとう」

ララｓｉｄｅ　ｅｎｄ

プレシアｓｉｄｅ

「さてどうしましょうか、何故マクーがあの子達を狙うのがわからないと、助けても対抗手段がないし今は、アキさんの言うとおりジュエルシードを集めたほうが、言いのかしらね。」

「暫くは、アキさんの計画どうりに動きましょう」

プレシアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

なのはと光は、アリアに連れられ旅館へ戻っていた。

高町兄弟の部屋では、アリアが恭也と美由紀に、事の事情を説明していた。

「馬鹿なまた光となのはが襲われただって」

「そんな」

驚く恭也と美由紀

「何故またあの二人が狙われるんだ。」

「それはわかりませんがあの二人は必ず私が守りますので安心してください。」

と言うアリアだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

場所が変わりここは次元犯罪組織マクーの戦艦の一室

その中で男が二人言い争っていた。

「おいお前いくらなんでも行動起こすの早くね？」

と言う男

「何だよ俺のやり方に文句があるのかアスベルＴハラウオン。」

「いや文句はないけど動き出すのが早くないのかと聞いてるんだ直哉。」

「いいかいアスベル僕たちの世界は滅亡する寸前なんだよデビルガンダムやソール１１遊星主やゼラバイアやナンバーズによってね

僕たちを信じてくれて送り出してくれたみんなの為にもこの世界の特異点の存在を強くして連れて行かなきゃ行けないんだよ。」

「それは、そうなんだが俺たちの介入によってこの世界に影響はないのか？直哉」

「それについてだけど無印編ではこれ以上の介入はしないよアスベルＳＴＳ編が終ったら本格的に動くよアスベル」

なんと次元犯罪組織の首領の正体は、別次元で主人公をしているはずの男
高町直哉だった。

続く

ジュエルシード探しと温泉街（後書き）

この話の最後に出てくるキャラがわからない人はもう一つの小説のキャラ設定を見てくださいね

悲しい思い出の地で

襲撃された日の夕方こうとなのはは友達が来てると言われ言ってみたらそこにいたのは、ララテスタロッサだった。

なのはｓｉｄｅ

「あ、ララちゃんどうしたの？。ララちゃんも旅行？」

「なのはちゃん光君いる？私光君に用事があるんだ。」

「光君いるけどショックなことがあって、誰にも会いたくないって。」

「でも光君いるんでしょじゃあ私会いに行くね。

「あ、待ってよララちゃん」

なのはは、ララの後を追いかけて行った。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

マクｌｓｉｄｅ

「直哉どうする気だ、俺たちの雇った連中が勝手に動いてるぞ。」

「アスベル慌てるなよあいつらの行動は、すべて俺の計画の中に入っているしな。」

「そうなのか？直哉。」

「ああ、それにどうやらこの世界の未来は、俺たちの世界と融合するかもな。

「何だと」

「まだ可能性の段階だが、俺の予想ではＳＴＳが終って暫くしてからこの世界に渦巻く闇が動き出すだろう。俺たちの目的は転生者の確保だがまだ転生者の力が弱すぎるのだ。」

「まず転生者に試練を与える為だけに、この超次元犯罪組織マクーを作ったのだ。」

「それじゃ試練を与え強くなってから転生者を捕獲するんだな」

「ああ、そうだアスベル」

と言う直哉だった。

マクーｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ララｓｉｄｅ

ララは急いで光のいる部屋に向った。そこでララ、見た光の姿は余りにも悲惨な姿だった。

「！！お兄ちゃんお兄ちゃんてばしっかりしてよ」

と呼びかけるララだったが、光は無反応だった。
そこになのはがやって来た。
「ララちゃんわかった？これが今の光君なんだよ」
今の光の姿は生ける屍のようだった。

「ねえなのはちゃん光君を元に戻せるの？。」
「上手く行くかわからないけど私たちで光君が受けたショックを超えたショックを与えたら元に戻るかも。」
「わかったなのはちゃんなのはちゃん私のお姉ちゃんと戦ってみて。」
「え、フェイトちゃんと。」
「うん光君となのはちゃんが愛し合ってるんなら光君が元に戻るかもだから。」
「わかったララちゃん私やってみるよ。」
となのはが決意をしたのだった。
「じゃあ私は、お姉ちゃんと連絡するからなのはちゃんは光君を連れて着てね。」
「わかったよララちゃん」

ララはフェイトと合流するため向った。

ララｓｉｄｅ　ｅｎｄ
フェイトｓｉｄｅ

「フェイトはジュエルシードをアルフと探していた。

「アルフそっちは見つかった？。」
「いやフェイトこっちに反応がないよ。」

「そうかアルフはそのまま探してね。」

「了解」

「私は、ララと合流するから。」

フェイトはララと合流する為移動を開始したのだった。

果たして光は復活するのか？

フェイトｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

少女達の戦い

少女達の戦いが、今始まろうとしていた。

「行くよフェイトちゃん。

「勝負だよなのは。」

この話は、時を少し遡った所から始まります。

フェイトｓｉｄｅ

「私は今ララと合流する為ララの元に向っていた。
するとララも、私と合流する為に、動いてらしく早くに合流できた。
」

「あ、フェイトお姉ちゃんだ。「おーい」

「どうしたの?ララそんなに慌てて?。」

「フェイトお姉ちゃん私の友達を助ける為に、なのはちゃんと戦って。」

「何でララの友達を助けるのに、私がなのはと、戦わないといけないの?」

「それはね、お姉ちゃん」

説明中

「なるほど光君の意識を覚醒させるために、私となのはが戦うのねいいわよララ私もなのはがどれくらい強くなったか見れ見たいし。」

「ありがとうお姉ちゃん。」

そして二人はなのはに連絡し、集合場所を決めてその場所に向ったのだった。

しかしその一部始終を見ていたものがいた事を彼女たちは知らない。

フェイトｓｉｄｅ　ｅｎｄ

マクーｓｉｄｅ

「なるほど彼女たちは彼の心の奥底に沈んだ意識覚醒させるために、彼女たちが戦うのか。」

「それはそれで面白いが、何かが足りないな？よしこちらの怪人を送ろう。」

と言う直哉だった。

「出でよスネークランサーお前の毒槍攻撃で彼女たちを殺せ。」

「了解だ」

「さあ行けスネークランサーよ。」

これで転生者の力の解放する切欠の1つになればいいがな。」

マクーside　end

三人称side

そして、時が戻り冒頭のなのは対フェイトのシーンである。

「行くよフェイトちゃん。」

「勝負だよなのは。」

二人はレイジングハートとバルディシュを構え臨戦態勢に入ったのだった。

先に動いたのは、なのはだった。

なのはは、アクセルシューターを7個作りフェイトに向けて撃ったのだった。だが、フェイトも得意のスピードを生かしなのはのアクセルシューターをすべてかわした。

しかしなのはのアクセルシューターは誘導弾だった。

油断していた攻撃をすべて受けてしまいフェイトは溜まらず声をあげる。

「!!キャアアー。」

「やったの?」となのはが隙を見せたとき無数の雷撃がなのはを襲うのだった。

なのはも無数の雷撃を受け、声をあげる。

「きゃあああああ。」

そして互いの攻撃を受けても二人は笑みを浮かべた。

もうこの二人はこの戦いの本来の目的を忘れていた。

そんな二人の戦いを邪魔をする者が現れたのだった。

その者とは、超次元犯罪組織マクーからの刺客スネークランサーだった。

スネークランサーは、姿を現わしたと同時になのはとフェイトに、毒液をかけていたのだった。

スネークランサーはなのはたちを無視し、光をなのはたちの前に放り投げたのだった。

そして、スネークランサーはこう言った。

「オラ貴様の力を俺に見せろよお前が俺たちの総帥が求める力を持ってるのなら見せてみろ見せないならこの女を殺す。」

「！！」

光の心の奥底に沈んでいる光の感情は、少しだがスネークランサー言葉によって外に出始めていた

スネークランサーは、光の変化に、気づかず執拗になのはを攻撃し

ていた。

「光君こんな奴の言うこと聞いちゃ駄目ーー」
と言うなのは。

「余計な子と言うな小娘が」

バキッとなのはの顔を殴るスネークランサー。

「カハッとなのはの口から鮮血が飛び散った。
一方ジュエルシードを見つけたアルフはフェイトの元に急いでいた。

「貴様よくもなのはを傷つけたなー」

スネークランサーがなのはにしたことが切欠で光は復活しスネークランサーを睨みつけていた。

「！！何だこのガキさっきまでと違うぞ」

と驚くスネークランサー。

そして一瞬でセットアップし光は、フェイトとなのはを助けたのだった。スネークランサーには光の行動が見えていなかったのだ。
スネークランサーが光の姿を確認出来たときは、それはスネークランサーに向け光となのはの合体魔法が放たれた後だった。

「いくよなのは」

これが私たちの全力全開スターライトフェニックスブレイカー！！」

桜色の不死鳥がスネークランサーを引き裂いたのだった。

「な、ば　馬鹿な俺が負けただとーーそんな馬鹿なーー

スネークランサーは絶命したのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

戦いの後（前書き）

短めです

戦いの後

三人称ｓｉｄｅ

超次元犯罪組織マクーの怪人スネークランサーを、何とか倒したなのはたちであったが、アルフがジュエルシードを持ってきた時４人ともジュエルシードの事をすっかり忘れていた。

４人はアルフの持ってきたジュエルシードを賭けて戦いをやるかを相談をしていた。

「どうする？なのはフェイト、このままジュエルシード争奪戦をするのか？しないのか？どうするのか。」

僕とララは、なのはたちの意見を、尊重するよ。」

「私もフェイトたちの意見を大事にしたいしね。」

「私は、今日は疲れたからまた今度でいい？光君」

「ああ、わかったよなのは。」

「フェイトお姉ちゃんは、どうするの？」

「私も今日は、疲れたからまた今度と言うことで」

「わかったよ、お姉ちゃん。」

４人はジュエルシード争奪戦をせずに帰ることにしたのだった。」

「じゃあこのジュエルシードはどうするんだい？」

「それは、アルフが見つけたんだろだったらフェイトにあげるよ」

と言う光だった

それを聞いたアルフは喜んでいた。

それから光たち5人はそれぞれの所に、帰って行ったのだった。

それから数日後、士郎の手術は、成功し、無事退院して、高町家には安堵の笑顔でこの旅行を終えたのであった。

一方なのはたちが戦っているころ

アリサたちは

「ほいでなアリサちゃんすずかちゃん誰もいない部屋から電話がかかりその電話に出たら電話に出たなと声がしたと思ったらその相手が自分の背後にいた

「きゃあああーー」

飛べたな怪談で、盛り上がっていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

ジュエルシードと次元震

いろんなことが起こった温泉旅行から一週間がたち、なのはと光は今日も昼は、学校、夜はフェイトたちとのジュエルシード争奪戦という生活をしていた。

そんなある日、事件が起こったのだった。

三人称ｓｉｄｅ

今日も、ジュエルシードを探していたなのはと光とユーノ。

「光君ジュエルシードなかなか見つからないね。」

「ああ、そうだねなのは、それに僕たちは昼間は学校行ってるしね、探索する時間も限られるし。」

「僕が自分で探せたらよかったんだけど。」

と申し訳ないように言うユーノだった。

「ユーノそろそろ人間に戻れる位に魔力が戻ってってきてるんじゃないか？」

と言う光だった

「え、光君それって、どういう意味？。」

「ああ、なのはは、知らなかったんだよね実はね。」

「わーーーそれは言わないで光」

と言うユーノを抑え込んで続きを聞きたがるなのはだった。

「実はなのはユーノは、本当は、人間の男の子なんだよ」

「えーーそれほんと光君？」

「本当だよなのは」

「じゃあ私男の子に私のあれ見られたんだーー私のあれを見ていいのは光君だけなのに。」

なのはは、温泉の時にアリサとすずかと共にユーノと温泉に入ったことを思い出していた。

「ユーノ君のエッチ」

と言いながらなのははユーノ背中を強く叩いたのだった。

「痛い痛いよなのは」と言うユーノだった。

その時、街中にあったジュエルシードが突然発動してしまったのだ。

それを見つけた光となのはは、現場に急行したのだった。

三人称ｓｄｅ　ｅｎｄ

ララｓｉｄｅ

ララとフェイトは昼間のうちに街中にあるジュエルシードを見つけていたが、人ごみが多く封印が出来なかったのだった。

「フェイトお姉ちゃんそろそろ行くよ」

「わかったよララ。」

そして二人は、昼間封印できずにいたジュエルシードの元に向った。

そして二人は現場に着き、フェイトが封印を章とした時、突如ジュエルシードが発動し、フェイトは急いで封印作業に取り掛かった。

ララｓｉｄｅ　ｅｎｄ

その時、なのはと光ががやって来た。

光ｓｉｄｅ

「光君あれ不味くない？」

「ああ、あのジュエルシードまさか暴走してるのか？なのは急いでフェイトとララと合流するぞ。」

「あれはなのはちゃんと光君二人とも来てくれたんだ。」

「ララこれはどうしたんだ？」

「あ、光君私にもわからないよフェイトお姉ちゃんが封印しようとしたら急に、発動したと思ったらジュエルシードが暴走を始めたのどうしょう光君？」

「とりあえずあのジュエルシードの暴走を止めるぞなのは、ララ早く止めないと、次元震が起きるぞ」

「光君次元震て何？。」

と光に聞くなのはだった。

「なのは次元震と言うのは、簡単に言えば、僕たちの世界と他の世界の干渉を防いでるものがあるんだ。

次元震はそれを破壊して僕たちの世界や他の世界を破壊してしまうことがあるんだなのは。」

「ニャーーーそれは大変なの急ごう光君。」

しかしなのはたち全員でジュエルシードの暴走が止められずついに次元震がついに起きてしまった

「まずいなのはひとまず個々から避難するんだ。

「光君はどうするの？」

「僕は、次元震の被害を押さえ込む為もう少しここで抑えるよ」

「ララ後は頼むよ。」

「光君まさか、光君自分を、犠牲にする気じゃ」

「え、それてどういう意味ララさん」

ララは、なのはの質問には答えずにいた。

ついにその時が来た、光の体が次元の穴に吸い込まれだしていた。

それを見たなのはは、慌てて光の元に行こうとするがララたちに止められるのだった。

「いやーー光君を助けるのララちゃんそこをどいて」

「駄目だよなのはちゃん」

「そうだよなのは」

「でもこのままじゃ光君がーー。」

「大丈夫だよ私たちのお母さんが光君を見つけてくれるから。」

なのはたちが話をしていると光は次元の穴に入ってしまったのだった。

周囲になのはの声が木霊したのだった。

「光君ーーーー」

そして、次元の穴に吸い込まれた光は、気がつくと見知らぬ世界に来ていた。

「う、僕は、どうしてこんなとこにいるんだ？

光が、そんなこと考えていると、光の目に付いたものは、バリアジャケットをくけたなのはだった。

光は、なのはの後についていくと、偉業の化け物と戦う一人の戦士がいた。

この戦士の正体とは？

光ｓｉｄｏ　ｅｎｄ

この光ｓｉｄｏの続きは、ｍａｄａｏさんの魔法少女ｗｉｔｈ仮面ライダーに掲載されますお楽しみに

続く

ジュエルシードと次元震（後書き）

この光サイドの続きは、
ｍａｄａｏさんの小説の番外編として、掲載れますので、ｍａｄａｏさん共々よろしくお願いします

彼のいない世界で

マクーｓｉｄｅ

「おいおい直哉どうする気だ？あの転生者次元の穴に、落ちたぞ。」

「これは不味いな彼がいなくなったら俺たちの計画にも、支障が出るな。」

「アスベルすまないが、俺彼の代わりに無印のストーリー進めてくるわ。もうすぐ時空管理局が来るだろうし、せめて彼が帰って来るまで彼女たちを守らないとね。」

「ああ、わかった直哉気をつけろよ。」

「ああ、それじゃあ行ってくるよ」

こうして、直哉は光の姿になり、なのはたちの元に、急いだのだった。

マクーｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

一方光を次元震の余波で出来た次元の穴に吸い込まれた光を見たなのはは、まだ混乱していたのだった。

「いやーー光君が光君がーーいなくなっちゃったよーー。」

「ねえなのはちゃん落ち着いてよ。」

「そうだよなのは落ち着いて。」

なのはを落ち着かせようとするララとフェイトだが、なのはは、まだ混乱しているのだった。

その時なのはの頬を、（パシーン）と叩いた者がいた。

「なのはいい加減にするんだもう光食もうこの世界には、いないんだから。」

なのはを叩いた者は、ユーノだった。

「何よ、ユーノ君ユーノ君はエッチで戦いもろくに出来ないくせに、いつも私と光君に、まかせてるくせにこんな時だけ、私のパートナー役しないでよ私のパートナーは、光君だけなんだから。」

そういってなのはは、飛び出しって行ったのだった。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

「何だなのはの奴僕のこと酷い言い方してさ。」

「でもあれはユーノ君が悪いよ。」

とララが言う。

「何でさ、ララちゃん?」

「うんこれは私も．光君

から聞いたんだけど、なのはちゃんねその昔ね光君のほんとの両親ねなのはちゃんと光君を守って死んだんだって拳銃で撃たれてなのはちゃんの目の前で。」

「そんなそんなこととがあったなんて」

ユーノは驚いていた。

「そして傷口が塞がったと思ったら今度は自分たちを殺そうとした犯人と偶然再会しまた襲われてしまってあのことを思い出していたところに、今回の光君との突然の別れ
今のなのはちゃんにはキツイト思うよ今回のは特にね。」

ララの話を聞いたフェイトとユーノは、それからは何も喋れなった。

そして、ユーノはなのはの後を追いかけて行った。

「さてお姉ちゃん私たちも帰って母さんに今回のこと相談しましょう。」

「うんそうだねララ」

こうしてララたちは時の庭園に戻ったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ
なのはｓｉｄｅ

「もう私光君に会えないのかな?嫌だそんなの嫌だ光君に会いたいよ。」

なのはは、ユーノたちと別れ一人で、街中を歩いていると、なのははは、人混みの中に、自分の知っている顔を見つけて追いかけて行った。

そしてなのはがきが付くと、なのはは、人影のない公園に来ていた。

そして、なのはに声を、かける一人の少年。

果たして少年の正体とは？

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

帰還　新たな友と共に（前書き）

この物語は前半は本編よりの話で、残りはｍａｄａｏさんの小説の魔法少女ｗｉｔｈ仮面ライダーとのコラボ話です

苦手な人は戻るを押してください

帰還　新たな友と共に

なのはｓｉｄｅ

なのはは、ユーノたちと別れ、一人で街中を歩いているとなのはは、一人の少年を見つけるとなのははその少年に声をかけたのだった

「ねえ君君の名前を、教えてくれる」

と聞くなのは。

「得、僕の名前ですか、僕の名前は佐谷尚也ですがどうしたの？」

と聞く尚也君。

「ごめんね尚也君が私の知り合いにそっくりだったんでお姉ちゃん間違えて、声をかけちゃったんだ。

「そうなんだじゃあねお姉ちゃん」

といって尚也はなのはと別れたのだった。

そしてそんななのはの後をつける一人の男がいた

その男は超次元犯罪組織マクーの首領高町直哉だった。

そして、しばらくすると、空に銀色のオーロラが現れたのだった。
なのはは、異変と感じて現場に向ったのだった。

一方ララもこの異変に気づき銀色のオーロラに向ったのだった。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

「ここが、光の世界なのか？エル。

「ええ、そのはずです。」

銀色のオーロラから降りてきた少年と、へんな生き物が言う（ううここでもへんな生き物扱いですか」↑エルの心の声です。

と少年とへんな生き物のエルが話していると、そこになのはとララが、到着したのだった。

直哉もなのはの後をついてきていた。

「あいつら一体何者なんだ？それにあの小さい物は何だ？新種の微生物が大きくなったのか。」

と直哉は、エルに対しては、そう思っていた。

そして、なのはが少年に聞いた。

「あなたたちは一体何者なんですか？」

「僕の名前は御門縁て言うんだよろしくななのは。」

「私はエルちゃんですよろしくです。」

「ご丁寧にありがとう虫さん。」

と言うララ。

「私は虫じゃないです。」

と怒りながら言うエルだった。」

縁の答えに驚くナノハだった。

「どうして縁君が、私の名前を知っているんですか?」

「ああ、それは光から聞いたんだよ、高町光からな。」

「え、縁くん光君を知ってるの?」

「ああ、知ってるよなのは。」

「今光君どこにいるの教えてよ、えー君。」

「えー君だと!!」

「だって縁君て呼びにくいからえー君ね。」

「もしかして、駄目?」

上目つかい＋涙目最強コンボ炸裂中

呼び方は好きなように呼んでいいからその表情は止めてくれーーなのは。」

「さすがなのはさんです。」

「ああ、あれが噂に聞いた最強コンボてやつか。

結局なのはたちは詳しい話を翠屋で、することにしたのだった。

「おいなのは、何で俺と手を繋いでいるのかな?」

「あ、ごめんえー君何時もの癖で手を繋いで。」

「へーそうなんですか何時もは光さんとしてるんです?」

とエルが聞く。

「いつもじゃないけどしてくれるよ光君はね」

等と話していると目的地の翠屋に着いたのだった。

当然直哉も後をつけていたが、途中で警官に見つかり交番へ連行されていったのだった。

「お母さんただいま。」

「なのはおかえりなさいあらララちゃんも一緒なんだ珍しいことも

あるものね。」

「こんにちはです」

そしてたまたま店の手伝いをしていた恭也が、縁に聞いた。

「お前なのはのなんだ？すまないがなのはは、お前にはやらんぞ。」

と言う恭也。

「別にいいですよあ、すいませんシュークリーム３つください。

「はーい少し待ってね。

それと写真撮らせてもらっていいですか？」

と聞く縁

「写真取っていいわよ」

と了解を得た縁はパシャパシャと写真を取り出していた。

そういえばこの世界でなのはに執着してるのあの兄貴だけだななあエル？」

「そういえばそうですね。」

「なのはに聞いてみるか？」

「そうですねそれがいいです。
なのはの部屋に向う途中縁が、なのはに聞いた。
「なのは少しいいか？」
「何？えー君。」
「なのはと光てどういう関係なんだ？」
縁の質問に、恥ずかしいなと言う素振りを見せながら答えるなのは。
「私と光君は許婚同士だよ」
「は、なのは今なんて言ったもう一度言ってくれなのは。」
「だからえー君私と、光君は許婚同士なんだってば。」
その言葉を聞いた縁とエルは、噴出したのだった。
「マジでかああよおお！！」
「俺はお前がうらやましいぞ光だって、あの士郎さんが、味方とはな。」
「エルもいろんな世界見てきましたけど、こういうパターンは初めてです。」

縁とエルが驚いてるとなのはと光の部屋に着いたのだった。

「なのはまた聞いていいか？」

「何？えー君」

なのはと光て同じ部屋なのか？寝るのも。」

「うんそうだよこの部屋に入る前に書いてあったでしょなのはと光の部屋て、えー君。」

「ああ、確かに書いてあったなすまんなのは。」

「そんなことより光さんの事を教えてください縁さん。」

と言うララ。

「ああ、そうだったなあいつはこっちの世界で、ジュエルシードの暴走でできた次元の穴に落ちたんだろ？」

「ええ、そうよ。」

と答えるララ。

「そしてその穴はどうやら俺たちの世界へとつながったみたいだなそして俺たちの世界で光はこちらの世界に帰る方法見つけ俺たちの

世界からこちらの世界に戻ったはずなのに、エルなんで光がいないんだよ。」

「縁さん向こうの世界でも話しましたが、もしかしたら光さんはこの世界の別の時間帯に落ちたかもです。」

「何だと！」

「確かに光さんの魔力ならここに帰ってこれるはずなんですが、何かがあったのかもしれませんね！！」

「どうしたエル？」

と縁がエルに聞く。

「いえ今ライダーの力を感じたので。」

「エルなに言ってるんだこの世界は俺たちの世界ではないぞ。」

それはそうなんですけど私気になるので言ってきますね。」

と言って、エルは部屋を出て行った。

「おい待てよ、俺も行くぞエル。」

と縁もエルの後追い部屋を出た。

なのはの家から出る時シュークリームの入った箱を持ちながら縁は、エルを追いかけたのだった。

縁がエルに追いついた時縁が見たものは銀色の仮面に黒マフラーを付けた戦士が赤い鉄火面着けた者と、戦っていた。

「おいおい本当に、いたよ仮面ライダーがあいつは確か、俺の生まれる前のライダーだよなエル？」

「はいそれらの仮面ライダーは、人体を改造されて生まれたんですよ。」

「それじゃ俺も行きますか」

と言った縁は、一枚のカードだし、バックルにいれ叫んだのだった。

「変身」
〜ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ」

そして、バックルを回した
［ＬＥＧＥＮＤ］

そして縁は、もう一つの姿「仮面ライダーレジェンドになったのだった。」

そして、銀色の仮面ライダーと赤い鉄火面を着けた男が聞く。

「お前は何者だ」

と縁に聞く二人

「俺か俺はただの通りすがりの仮面ライダーだ！

と言う縁。

「通りすがりの仮面ライダーだと、それが本当なら貴様はディケイドの仲間か、俺は大ショッカーの幹部のアポロガイストだー覚えておけ。」

そして、アポロガイストは、レジェンドに襲い掛かった。

一方縁を、追いかけて来たララとなのはも今の縁の姿に驚いていた。

「えーーあれがえー君なの？」

「信じられません。」となのはとララが言った。

「お二人このことは内密でお願いしますです。」

とエルが二人に言った。

アポロガイスト対レジェンドは、互いに決め手がなく拮抗していた。

「ち、こいつ強い仕方ねえここはカードで変身するか、」

そう言ってレジェンドは仮面ライダーブレイドになった。

それを見ていたアポロガイストは不敵に笑ったのだった。

「やはり貴様の能力は、ディケイドと同じか都合がいいわお前の能力貰うぞレジェンド。」

と言うアポロガイスト。

そして、アポロガイストから発射された光の粒子を浴びたレジェンドのフォームが元に戻っていた。

「何どういうことだこれは。」

動揺した縁だがもう一度クウガにフォームチェンジするが光の粒子によってフォームチェンジは出来ずに元に戻るのだった。

次第にアポロガイストに押されるレジェンド

その時、空が暗くなり空から一人の少年が降りてきてアポロガイストに攻撃をした。

「いっケーーアカシックバスターーー!!」

桜色と蒼色の砲撃は不死鳥の形となりアポロガイストに直撃したのだった。

少年はレジェンドに駆け寄ると大丈夫と声をかけたのだった。

「ったくお前くるのが遅いぞ光。」

「はは、ごめん縁まさか本当にもう遊びに来るとは思わなかったからさ。」

「さあおしゃべりはここまでだあいつには俺の力が通じないからな。」

そうなんだなら縁このバックルとこのメモリー使いなよ縁。」

そして光は縁に緑色のメモリーとバックルを渡し、二人は変身を始めた

「変身」

二人はメモリーをバックルに差込みメモリーから声が聞こえたのだった。

［ＣＹＣＬＯＮＥ］

［ＪＯＫＥＲ］

と声が聞こえ二人の体は、一つとなり、二人は仮面ライダーＷになっていた。

「うおマジかよ俺Ｗになったぞ。」

縁は少し興奮していた。

そしてアポロガイストとの戦いが、再開したが

Ｗとアポロガイストの力の差は、圧倒的な差があった。

「さあこれでトドメ行くよ縁」

「おういいぜ光」

「さあお前の罪を教えろ。」
「さあお前の罪を教えろ。」

Wはアポロガイストに向け必殺技を放ったのだった。
アポロガイストはその攻撃を受け爆死したのだった。

アポロガイストを倒したことによりレジェンドの力は元に戻り二人は変身を解き、二人は握手をしていた。

「やったな光。」
「やったね縁。」

エルたちもこちらに来ていた。

「おかえりなの光くん」
「お帰りなさい。」
「なのはララただいま。」
「縁さんもう帰る時間です。」
「もうそんな時間なのか。わりいな光」
「ううん気にしないで、あ、これ縁に上げるよ。」

光が縁に投げたのはWのバックルとメモリーだった。

これでなのはとWになれるよ。」

縁は絶対ならねえといいながら銀色のオーロラの中に消えていった

これが不思議な体験をした二人の少年の物語である。

帰還　新たな友と共に（後書き）

ｍａｄａｏさんこんな感じでいいですか駄目なら削除しますので言ってくださいね

時空管理局との接触（前書き）

短いです

時空管理局との接触

光が巻き込まれた事件の数日後

光となのははジェルシード探しをしていたそんな時空管理局と言う組織に所属する少年がなのはたち４人の前に現れた。

三人称ｓｉｄｅ

「そこまでだ４人とも僕の言うとおりみするんだいいな。」

（ララこの馬鹿は、僕となのはで相手するから原作どうりにね）

（わかったよお兄ちゃん）

「行くよフェイトお姉ちゃん。」

「え、光となのはをおいていくの?ララ。」

ララはフェイトを連れてその場所から逃げようとした時、少年がフェイトたちに攻撃をしようとしたのだった。

「だめーーやめてーー」

と叫ぶなのは。その時、光が少年の背後に回り少年を吹っ飛ばしたのだった。

光に吹っ飛ばされた少年は、光の元にやって来てこう言ったのだった。

「君なんてことしてくれたんだ、君を公務執行妨害で君を逮捕する」と少年が言った時なのはから膨大な魔力が出ていた。

（おいおいなのはさんここでＳＬＢを覚えますかまあ僕はこいつ嫌いだしいいけど）と光は心の中で、叫んだのだった。

「光くんを逮捕しちゃ駄目ー。」

となのはから放たれた桜色の砲撃は確実に少年を捉え、少年は暫く起きてくる事はなかった。

仕方なく少年の上司が、光と話をしとりあえずあって話を聞くことになったのだった。

「では明日公園で待ってたらいいんですね。」

「ええ、お願いするわね。」

と言って光と少年の上司との話し合いは終ったのだった。

果たして少年の言った時空管理局とはいかなる組織なのだろうか？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

アースラにて

「どうしてこうなったんだろう？。」

今日は時空管理局との話し合いの日である

当初は原作のメンバーで聞くつもりが何故か、アリサとすずかもこの場にいるのだ。

三人称ｓｉｄｅ

「ねえなのは聞いていいかな？」

「何、光くん」

「何でここにアリサとすずかがいるの？。」

「ごめん光くんアリサちゃんに昨日光くんが逮捕するとか言ってたの聞こえたみたいで、無理やり来たの。」

「なるほど昨日はユーノがいなかったからな。」

なのはと光が話してると時間になり、昨日の少年が迎えに来たのだった。

一方ここは天界の女神ウェンディの部屋である。

「最近わらわの出番がすないからわらわも光の世界に介入開始じゃ
これで完了じゃ」

はたして、ウエンディの介入とは一体何なのだろうか？

「ところで私の出番まだ？」

と言う声が聞こえましたがスルーして行きましょう

「おい迎えに来てやったぞさっさと行くぞ」

「何よアイツ嫌な奴ね。」

等とアリサが言った。

「まあまあアリサちゃん抑えてね。」

そして5人は時空管理局の時空船アースラに乗り込んだのだった。

そして、少年が言った。

「おいお前人間にもどれよ」

と、ユーノに言う少年。

ユーノは少年が怖く人間に戻ったのだ。

それを見たアリサとすずかは、驚いていた。

「うそーユーノて人間だったんだ」

「あんた乙女の大事なもの見たわねこの変態。

「そんなー僕が変態なんて嫌だーーー。」

ユーノは、ダメージが大きかった為にまたフェレット形態になっていた。

そして、艦長室に着いて中に入った時、女性の声が聞こえた。

「クロノ執務官私はそこの少年と隣にいる少女にだけに話があります。」

「クロノ執務官は他の方々の相手をお願いします。

そして、クロノたちは部屋を出て行った。

そして、女性は光に頭を下げこう言ったのだった。

「総帥息子の数々の無礼を許してください。時空管理局総帥の獅童光様と高町なのは様。」

「えーーーー。」

と二人は驚いたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

衝撃の事実

光ｓｉｄｅ

「え、僕が時空管理局の総帥何ですか？。」

「はいそうです光様私は、リンディと申します。」

リンディと名乗った女性は光となのはに挨拶をしたのだった。

「あのリンディさん光くんが、時空管理局の総帥てどういうことですか？」

「はい言葉どうりですが、獅童光様は前総帥の獅童刹那様の子供で、刹那様は、遺言で自分の身に何かがあれば総帥の座を光様となのは様にお渡しするようになっているので。

「何で光君だけでなく、私にも権限が使えるんですか？」

「それは私たちもわかりませんが光さんのお父様の意思なので、私はわかりません。」

「話はわかりましたリンディさんでも今の僕は、獅童光ではなく、高町光なので今までどうり三提督に総帥の代行お願いできますか？

僕となのはは、これから管理局に委託魔道師として入りますがこちらからは基本連絡は委託魔道師としての高町光として連絡くださいね。」

「わかりました」

「ほんとにそれでいいの？光くん。」

となのはが聞く。

「いいんだよなのは今はまだこのままで」

（この介入の仕方はあの女神のせいだろうし、あの女神のライバルの転生者との戦いに備えたつもりだろうしね）

「それではリンディさん失礼します。」

なのはと光は艦長室を出て、アリサたちを迎えにいったのだった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

一方そのころアリサとすずかはユーノとクロノを遊び道具にしていた。

「いやあああああもう止めてーーーー」

と言うユーノ。

「君たちもうやめろーー」

と言うクロノ。

「嫌よ特にあんたは光とナノハを虐めたそうじゃない私たちが代わ

りにいっぱい遊んであげるわ。」

「うわあああああいやあああああああたすけてえええええ」

となのはたちが来るまでの間この部屋には、謎の断末魔が響いていた。

そしてなのはたちはそれぞれの家に帰って行ったのだが、光は複雑な気持ちだった。

まさかこんなところで本当の両親のことがわかるとは思っていなかったからである。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

プレシアとの話し合い

なのはｓｉｄｅ

「あーあいまごろ光君ララちゃんの家で何してんだろう？私も行きたかったなあ。」

「なのはそれは無理だよまあ光のおかげで直接戦うことが、少ないけどララたちとは一応ジュエルシードを賭けて戦ってる仲だしね。」

「それはそうだけどユーノ君。」

なのははは、ユーノとそんな話をしながら家に向かいました。

ところが

この後なのはとユーノはその日、家に帰ってこなかったのだった。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方光は、ララから連絡を受けララの母親であるプレシア・テスタロッサが会いたいというので、光は時の庭園に向かったのだった

三人称ｓｉｄｅ

「ようララ僕に用事てなんだ？」

「あ、お兄ちゃん私の用事じゃなくてお母さんがお兄ちゃんに用事があるんだって。」

「プレシアさんが？わかったララ案内よろしくな。」

ララと光は、プレシアの部屋に向かった。
その移動中に光はアルフとであった。
「久しぶりだね光今日は、どうしたんだい。」
「あ、アルフ久しぶり今日はプレシアさんに呼ばれたんだよ。」
「ふーん珍しいこともあるもんだ。」
と言って光は、アルフと別れたのだった。
そして光とララは、プレシアの部屋に入った。
「こんにちはプレシアさん、今日は僕を呼んだのは転生者としてですか?それとも高町光としてですか?」
「そういうことなら前者のjほうね。」
と言うプレシア。
「ララから聞いたんだけどあなた死者を生き返らせることが、出来るらしいわねお願いよアリシアを生き返らせて欲しいの。」
「プレシアさんの要望は、わかりました。アリシアさんを生き返らせるのはやりますが、条件があります。」
「条件?」
「はい1つ、僕が時空管理局の総帥みたいなんですよねでよければ

プレシアさん家族が僕となのはたちに、協力してください。今後僕たちの前にいろんな相手が出てきますので、それと管理局とは敵対してジュエルシードを暴走事件を起こしてくれるとありがたいです。」

「わかったわ約束しましょう。」

そして光と、プレシアはアリシアのいる部屋に向かったのだった。そしてアリシアのいる部屋に着いた。

そこで光は、自分の鞄からあるカードを出したのだった。

「行くぜ!!魔法カード発動!!死者蘇生」

と光が、カードを使うとカードが、輝きその輝きが終るとアリシアの体が動き出していた。

「あれ、お母さん私死んだはずなのに、何故生きてるの?」

と聞くアリシア。

プレシアは、嬉しさの余りアリシアに抱きついていた。

「痛い痛いよおかあさん。」

「本当に良かった。」

光は親子の対面を見て、時の庭園から自分の世界に戻ったのだった。

その時、光の携帯に母親の桃子から連絡が入ったのだった。「どうしたの母さんそんなに慌てて。」

「光大変よ、なのはとユーノ君が、誘拐されたの。」

母親の言った言葉を理解した光は驚いていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはとユーノを誘拐した犯人の目的とは？

続く

光ｓｉｄｅ
光は、母親の連絡でなのはが誘拐されたの知ったのだった。

「母さん今から家に帰るから、詳しい話はその時でね。」

「わかったわ光。」

光は急いで、高町家に向かったのだった。光が家に着くと、なのは以外の家族全員が、リビングに集合していた。

「母さんただいま。」

「おう光おかえり」

と言う士郎。

「父さんなのはが誘拐されたてどういうこと?」

バキッ

と光が、士郎に事情を聞いた瞬間恭也が、光を殴ったのだった。

「恭也止めないか。」

「だけど父さんこいつがなのはの側を離れなければ、こんなことにはならなかったんだ。」

と言うと恭也は、リビングを出て行ったのだった。

そして美由紀が光の頬に水で冷やしたタオルを当てながら聞いたのだった。

「光大丈夫？」

「大丈夫だよ美由紀お姉ちゃん。それで父さん犯人の要求は、何かわかったの？」

と光が士郎に聞く。

「ああ、これが犯人の要求してきたものだ。」

光は士郎から紙を受け取ると光は、読み出していた。
その紙には光に対する犯人からの挑戦状だった。

光は挑戦状に書かれている場所に向かっていった。

「あなた光となのは無事に帰ってきますよね。」

と言う桃子。

「ああ、光を、いや俺たちの息子を信じようじゃないか母さん」

「ええ、そうですねお父さん。」

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

なのはは、夕方ユーノと残りのジュエルシードを探してていた時、背後から複数の男たちに囲まれ拉致されてしまった。

「あなたたち私を捕まえて、どうするんですか？」

となのはが聞く。

「別に穣ちゃんには何もしねえよ俺たちの標的は獅童光なのだからな。そういえば今は高町光だったな。」

「すまねえなあ穣ちゃんお穣ちゃんを使ったのは俺たちのターゲットとよくいるからな。

その時、別の男が言った。

「親分来ましたぜ。」

「来たか」

そして光が降りてきた。

「さあお前達約束どおり来てやったぞ早くその子を、開放しろ。」

「いやまだ駄目だお前は特殊な力を使うらしいなそうだその蒼ィ宝石を投げろ。「

「すまないアカシックハート。」

と言って光は、アカシックハートを投げたのだった。

「ほらこれでいいだろその子を開放しろ。」

「いいだろうほれ穣ちゃんいきな」

と言った瞬間光を囲んでいた４人の手下たちが光の両手両足にそれぞれ銃弾を放ったのだった。

油断していた光は４発の銃弾を受け倒れてしまった。

その光景を光景を見てしまったなのはは絶叫したのだった。

「いやーーー光君死んじゃいやーーーーー」

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

果たして光となのはの運命は

続く

高町なのは誘拐事件後編

なのはｓｉｄｅ

「私は今、光君の体に４発の銃弾が当たり光君は倒れてしまい、私はこの現実から逃げようとした時私の耳に光君の声が聞こえた

「なのは大丈夫？」

私は、急いで光君のもと駆け寄り光君私は大丈夫と言うと、光君が「よかったと言って気を失ってしまいました。

「そして、私を誘拐した誘拐グループのボスが、光君を確実にしとめるぞと言う声が聞こえたので私は光君を守る為に光君に近づきました。」

「光君にトドメを刺そうとする誘拐犯のボス。」

「私が、倒れた光君の前に立つと誘拐犯のボスこう言いました。」

「何だ？穣ちゃん穣ちゃんも死にたいのか。」

「と言って、誘拐犯のボスｈ私と光君に銃口向け銃弾を放ちました。」

「私も光君も絶対死なないよおじさん。」

「と言ってレイジングハートに言った。」

「レイジングハートお願い」

[了解です]

「そして私は、ＢＪ姿になり、銃弾を防御魔法で防ぎ誘拐犯に魔法で攻撃をしました。」

「何ー！穣ちゃんもあの小僧と同じ力を持っているのか？これはまずい逃げるが勝ちだなおいお前ら撤退するぞ、いつまで寝てんだ。」

「と誘拐犯のボスは手下を起こして撤退していきました。」

「そして私は、傷ついた光君を抱え、その場を離れました。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ララｓｉｄｅ

「私はアリシアが蘇ったのを確認すると、本当の家族水入らずで過ごして欲しくて、光君の後を追いかけていましたが、急に光君を見失いこれからどうしょうと思っていました。」

「光くんどうしたんだろ？あんなに急いで。」

「と私が思っていると私は光君を見つけたので、後をつけて見るとそこにはなのはちゃんが捕まっている場面でした。」

「私が驚いたのはその後でしたなんとなのはちゃんが捕まっていたので、光君は相手の指示通り自分のデバイスを投げた瞬間光君に銃弾が打ち込まれ私は絶句しました。」

「その時、私はなのはちゃんに殺意に似た感情が芽生えました。

そして現在私は、光君となのはちゃんと合流思考君の治療のために、時の庭園に向かってます。」

「ララちゃんありがとうね来てくれて。」

「たまたま見かけただけですよなのはちゃん。

「ははそう何だ、でもありがとう。」

果たして光の生死の行方は？

ララｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

フェイトとアリシア

三人称ｓｉｄｅ

プレシアは、生き返ったアリシアに生き返ったまでの説明をしていたのだった。

「なるほどわかったわ母さん死んだはずの私が生きてるのかが、それでその高町光君はどこにそこにいるの？母さん。」

「今は光君はここにはいないわ、アリシア。」

「ふーんそうなんだ。」

「さあアリシアフェイトの所にいきましょう。」

「はーい」

二人はフェイトのところへ移動を開始したのだった。

「私は今母さんに言われ母さんの部屋で待ってると母さんと私にそっくりな少女がいた。」

「フェイト紹介するわねこの子の名前はアリシアよ、この子はフェイトのお姉さんなのよ二人とも仲良くね。」

「私のお姉さんアリシア。」

フェイトが少し混乱していると、アリシアがフェイトに握手を求め二人は互いに握手をして二人は挨拶をしたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ
プレシアｓｉｄｅ

「そして私は、今後のことをフェイトとアリシアに伝えた。」

「フェイトアリシアよく聞いておくのよ。」

「はい」

と二人は返事をした。

「これから私たちは、高町兄妹と協力していきたいと私は思うのだけど、フェイトとアリシアはどう思ってる？」

「えーと、母さん私は協力していいよ」

と言うアリシア。

「フェイトはどうなの？」

「私は、あのなのはて子と本気の勝負が出来るなら協力するよ母さん。」

「わかったわじゃあフェイトとなのはて子との勝負が終り次第高町兄妹との協力を始めるわよいいわね二人とも。」

「はい」

「私たちの話し合いが終った時、ララが私の前に来て、助けてお母さんと言った私は最初は意味がわからなかったが、私がその意味を理解するのにはさほど時間はかからなかった。」

「私もこの光景を信じたくなかった、我が娘を助けてくれた恩人の瀕死状態を。」

「ララは必死に私に、助けてと言うが、私にはどうすることも出来ない状態だった。」

とりあえず私は光君の体を医療ポットに入れ傷を治すことにした。

プレシアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

夢

光ｓｉｄｅ

「今僕は夢を見ていたなのはが誘拐され、僕はなのは救出時に、油断をしてしまい僕は瀕死の重傷の傷を負ってしまった。」

「僕はそれからずっと夢を見ていた。その夢とは、僕の小さい時の夢から自分の生まれる前の両親の夢そして母さんのお腹にいるときに、聞いた父さんの声の夢．僕にとっては余り覚えてないが懐かしい夢だった。」

「父さん母さん僕ももうすぐそっちに行くからねと僕が言うと僕の周りの景色が、輝きだしたのだった。」

「おいおい光お前もう諦めるのか?俺はお前をそんな風に育てた覚えはないぞ。」

「と僕に声をかけてくる男の声。」

「あなたは誰ですかと僕が聞くと。」

「光ほんとに忘れたんだなそんなに高町家での生活が、楽しんだな、確かに俺は光お前と遊んだ記憶は余りないが、お前のこと愛してたからな。」

「え、それじゃあなたは僕の父さんなんですか?」

「ああ、そうだ俺の名前は、獅童刹那光お前の父親だ。」

「父さん」

「と言いながら僕は、父さんに魔法を打ち込んだ」

「光危ないじゃないかと言いながら僕の魔法を軽くかわしていた。」

「父さん何で僕が時空管理局の総帥なんだよ理由を教えてよ。」

「そのことかそのことを話す前に、光お前は守り続けたい人は出来たか？」

と刹那が聞く。

「ああ、僕にも守り続けたい物が出来たよ父さん僕はこの次元世界の中で僕は、高町なのはを愛しています。」

「と僕が答えると父さんが。」

「そうかお前も見つけたんだなようやく」

「光これから俺が言うこと良く覚えてるんだぞこれからお前たちの前に闇の書事件やＪＳ事件などが起きるだろうだがお前たちが真に倒さなければ存在が別にいるその昔私たちを殺した存在はその一部に過ぎないだから私は光お前に総帥なっていればその存在に見つかったとしても簡単に手を出させないようにする為だったんだ。」

「光これからお前の封印を完全に解く。」

「と父さんが僕の額に手を当て力を入れると僕の中から沸きあがる新たな力を感じていた。」

「よしこれで光お前の封印はすべて解けたぞこれでお前の能力をパ

ートナーとして選んだなのはにも使えるようになったぞ。

「と父さんは言った。

「それじゃあな光この世界を頼むぞ。」

と言った後父さんは消え僕も光に包まれ僕は、目覚めたのだった。」

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

本気の勝負

三人称ｓｉｄｅ

光が、意識を取り戻してから一週間が経っていた。光は時の庭園で意識を取り戻していたのだが、念のために海鳴市の病院に入院していた。光が不在でもの、残りのジェルシードはなのはとユーノが管理局と協力して動いていたこのなのはたちのうごきも光とプレシアの計画通りの流れだったのだ。
そしてついにすべてのジュエルシードを賭けたなのはＶＳフェイトの本気の勝負が明日に迫っていた。

なのはとフェイトは今までの動きを光に伝える為に病院煮に来ていた。

「そうかついにすべてのジュエルシードが、集まったんだな。」

光はなのはとフェイトに労いの言葉をかける。

「二人ともよく頑張ったね。」

二人は光の言葉を聞いて、笑顔になっていた。
そして、フェイトが光に話しかけようとした瞬間病室の扉が開き、アリサとすずかとはやてがやって来たのだった。

「光元気?」「光君大丈夫?」「光君いきてるか?」

「何だあんたもいたのなのは？」

と言うアリサ。

「何だとは酷いじゃないの？アリサちゃん？」

と言って剥れるなのは。

「あはは、冗談だってばなのは、あらなのはその子誰？」

と聞くアリサ。

「この子は私と光君の知り合いの子で、フェイト・テスタロッサちゃんテ言うの」

「よろしく。」

「ふーんまあいいわ私は、アリサ・バニングスよアリサでいいわフェイト。」

「私は月村すずかですよろしくねフェイトちゃんまる」

「うちは八神はやてやよろしゅうなフェイトちゃん。」

三人はそれぞれフェイトに挨拶をしたのだった。

「うんアリサすずかはやてこちらこそよろしく。」

とフェイトが言った。

こうして6人は時間を忘れ楽しく談笑していた。

そして、夕方になりなのはたち5人は家に帰る時間になり5人は光にまた来るねと言ってなのはたちは病院を後にしたのだった。

病室に残った光は、ついになのはVSフェイトの一戦が終れば光は本格的な介入することに対し光は原作を知っているからこそ原作を変える事に恐怖を感じていたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

本気の勝負（後書き）

次回はなのはＶＳフェイトです

本気の勝負後編

なのはｓｉｄｅ

「今の時間は朝の5時前です小学生の私にとってはまだ眠たい時間です。」

「今日はフェイトちゃんとすべてのジュエルシードを賭け本気の勝負する日なのです。私はユーノ君と共に決戦の場所に向かいました。

「光君私、頑張るからね。」

と、私は心の中で言いました。」

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

フェイトｓｉｄｅ

「今日は私が楽しみにしていたなのはとの本気の勝負の日です。」

「私は何時もより早く起きて準備をし、アルフと共に決戦の場所に向かいました。」

「私とアルフが着いた時は誰もいなかったので、私は少し早いかな？と思っているとあの子なのはが来た。

「私はなのは聞いた準備はいい、と聞くと、なのはがいいよと言ったので、私たちは互いにＢＪを纏って戦闘準備が整い、私は先制攻

撃をしなのはに向け無数の雷撃を放った。

フェイトｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

光はふいに目を覚ました光が時計を見るとまだ朝の5時前だった。

「そろそろ始まるかななのはとフェイトの勝負が。」

等と光が思っていると病室の扉が開いた、そして中に入ってきたのは、はやてだった。

「はやてどうしたのさ、こんな時間に、病院に侵入してまで僕に聞きたいことでもあるの？」

「堪忍な光君実はそうなんや。」

「しかたないなあアカシックハート人払いの結界お願い。」

（了解ですマスター）

アカシックハートは人払いの結界を発動したのだった。

「それではやて話て何？」

「実は、最近私、変何や、夢で誰かが呼びかけてくるんや。」

「はやてそれは何時ごろから聞こえ始めたの？。」

「ちょうど1週間ぐらい前ぐらいかな。」

（おかしい闇の書の覚醒しては早すぎるまさか僕とララの他に、この世界に介入できるやつがいると言うのか？女神のライバルの転生者はまだ現れてないしわからない何ではやての覚醒が早まったのかが。）

「とにかくはやてまた続くのならまた来てなのはの家に、僕もうすぐ退院するしね。」

「わかったで光君うち帰るわといって病室を出たが、はやては巡回中の看護師に見つかりお説教されたのだった。

一方そのころなのはＶＳフェイトはまだ決着はついていなかった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

「私がＢＪを纏った直後フェイトちゃんは攻撃をしてきました。無数の雷撃が私を襲う。」

「私は、すぐさまアクセルシューターを出し雷撃とシューターを相殺させてかわしました。」

「フェイトちゃん次は私の番だよ。」

「私はフェイトちゃんに向けてディバインバスターを放ち、ディバインバスターをに、フェイトちゃんの目が入っている隙に私は上昇し上空からフェイトちゃんを目指し急降下攻撃をしましたが、フェ

イトちゃんにかわされてしまいました。」

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

フェイトｓｉｄｅ

「私の先制攻撃ではなった雷撃をなのはは、魔力弾を出し、私の雷撃と相殺させていた。」

「そしてなのはの砲撃魔法が私に向けられて放たれたのだった。」

「私はなのはの砲撃魔法をプロテクションを展開して防いだのだが、私はなのはの姿を見失い、なのはを探していた。」

「そして私がなのはの姿を見つけたとき、なのはは私に急降下攻撃を、仕掛けて来たのだった。」

「さすがなのは最初にあったときはただの魔力だけの子だったのに、ここまで強くなっているなんて、私も全力出さなきゃ負ける。

「そして、私はなのはにバインドで動きを封じて、私の最強魔法フォトンランサーを大量に生成しなのはに向け発射体制に入った。」

「フォトンランサーシュートと言って私は放ったのだった。」

フェイトｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

「私は急降下攻撃をフェイトちゃんにかわされフェイトちゃんが私との距離を取り出したので、私はフェイトちゃんの反撃を中意して

いました。」

「そしてフェイトちゃんが詠唱し始めたので注意してたら急に、私の体の自由を奪われ私が、慌ててるとフェイトちゃんの魔法が、私に向かってきたのです。」

「フェイトちゃんの放った魔法が私に直撃したのですが私はそれに耐えてすぐにフェイトちゃんに反撃をしました。」

「行くよフェイトちゃんこれが私の全力全開スターライトブレイカーー」

「私の放った魔法が、フェイトちゃんを飲み込みフェイトちゃんが海に落ちるのを私が助けました。」

こうして私たちの勝負は終わりを告げたのでした。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

新たな物語へ

三人称ｓｉｄｅ

なのはＶＳフェイト戦が終わり、プレシア親子となのはとユーノは時空管理局の次元船アースラに来ていた。

プレシア親子は艦長室でリンディ提督と今までのことを話していたのだった。

「なるほどわかりましたプレシアさんあなたが何故ジュエルシードを集めていたのかが。」

「ジュエルシードを集めていたのはそこにいるアリシアさんを生き返らせる為だったんですね。」

「ええ、そうよだけど彼のおかげで、ジュエルシードを使わずに私の願いを叶えてくれたの彼は一体何者なの？リンディ提督。」

「ええ、彼は。」

一方なのはたちはクロノと共に、魔力測定室に来ていた。

「今から君の魔力を測定を始めるからななのは。」

魔力測定中

「魔力測定が終わりなのはの総合魔力はＳ＋と表示されたその結果を見たもの皆驚いていたのだった。

「すごいよなのはＳ＋なんて。」

とユーノが言う。

「ああ、僕も驚いた。」

と言うクロノ。

なのはは自分がそんなにすごいことをしたかなみたいな顔をしていた。

「ええ、彼は、時空管理局の総帥です。」

「ええ、彼が管理局の総帥ですって。」

プレシアも驚いていた。

「でもこれが現実ですプレシアさんそこで私は総帥からあなたたち親子の処遇について伝えます。

「総帥はプレシア親子となのはさんを時空管理局の特別部隊機動六課に協力を要請するということです。」

「なお機動六課は名目では管理局所属ですが、実際は管理局所属ではないとのことです。」

「わかったわその要請を受けるわ。」

プレシアはそう言ったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして、一ヶ月後

意外な形でジュエルシード事件が解決しなのはと光ははやての家に遊びに来ていた。

はやてｓｉｄｅ

「いらしゃいなのはちゃん光君。」

「お邪魔するよはやて（ちゃん）

「それではやて僕たちに用事て何？」

「私は光君たちに事情を話した。」

「なるほどでその人は今どこにいるの？」

「ちょっと待っててな今呼ぶからな。」

「私はそういってシンクを呼んだのだった。」

「シンクちょっと来て矢と私が呼ぶと。」

「はーいと返事が来てシンクが来てくれたのだった。」

はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

はやてｓｉｄｅ

「実はな光君うちが光君に相談してたやろ最近変な声が聞こえるて。」

「うん聞いてたけどそれとシンクさんのこと関係あるの？はやて。」

「実はな、変な声が最近強く聞こえてうちな思い切ってその声の元に言ったんよそしたらそこに、このシンクが倒れていたんようちはシンクを連れて帰って治療して事情聞いたら訳のわからんこと言い出したから校訓たちにきてもらったんや。」

はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

「さあシンク君光君たちに自己紹介をしてな。」

「はい僕の名前はシンク・イズミですよろしくお願いします。」

「はいよろしくなの私は、高町なのはですよろしくねシンク君。」

「僕は、高町光だよよろしくシンク。」

「はいよろしくあのーお二人は兄妹ですか？」

とシンクが聞く。

シンクの質問になのはがこう答えた。

「ううん私と光君は、許婚同士です。」

となのはが、はっきり言ってしまったのだった。

「へえーそうなんですね許婚かーいいですね僕自分の世界に、幼馴染ががいるんですよ今頃どうしてんだろう。」

そして、光がシンクに質問をした。

「シンクさんあなた元の世界に戻りたくはないんですか？なんだかこちらの世界に順応が早いと言うか、元々こちらの世界の住民みたいな感じがするんですが。」

「ああそれは僕の世界にここの世界が似てるんでいね。」

「そうなんですか？それじゃあこちらの世界に来る前はどこにいたんですか？。」

「えーとビスコッティ共和国と言う所だよ。聞いたことない？君たち。」

「残念ですが僕たちは、そんな国は知らないです。」

光の答えと同時に、なのはとはやても首を横に振る。

そして光は、話を続けた。

「ようするにシンクさんは自分の世界から召還されそのビスコッティ共和国に召還されてそこからまたこちらの世界に飛ばされたということでいいですか？。」

と言う光。

「うん間違いはないよ光。」

「そこで、シンク君に聞きたいんだけど、君はどちらの世界に帰りたいの？君の元々いた世界なのか？それともビスコッティ共和国がある世界なのか？どっちなの。」

僕たちは、シンクを帰らせたくてもシンクには大事な世界が２つあるみたいだから選んでシンク。」

「僕はビスコッティ共和国のある世界に帰りたい。」

と言うシンク。

「僕は約束したんだミルヒオーレと、立派な勇者になって、この世界を幸せいっぱいの世界にすると。」

「わかったよシンク僕たちは、シンクがビスコッティ共和国に帰れるように努力するから。」

「私も協力するからねシンク君。」

「勿論うちも協力するで。」

と言うなのはとはやて。

「皆ありがとう。」

それじゃあ暫くの間ははやてシンクのお世話頼んでいい？」

「いいでもとからそのつもりやったしな。」

「それじゃ僕たちは、アースラに行くねはやていくよなのは。」

「あ、待ってよ光君」

なのはは、光を追いかけて行った。

果たしてシンクは元の世界へ帰れるのか？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

来訪者は勇者様（後書き）

今回はゲストキャラがいますわかる人は感想で答えてね

ミルヒオーレとリコッタ

ここはなのはたちのいる世界とは違う次元世界にあるビスコッティ共和国である。

彼女の名前は、ミルヒオーレ・Ｆ・ビスコッティである。

彼女は悩んでいた。その理由とは。

「ミルヒｓｉｄｅ

「私は悩んでいましたその理由は、勇者様いえ、シンクが数日前にこのビスコッティ共和国から姿を消したのです。」

「私は友人であるリコッタ・エルマールと共にシンクが消えた謎を解明してるところです。

「リコッタシンクが消えた謎は解けそう？」

「あ、姫様残念ですが謎を解くにはまだ時間が掛かりそうであります。」

「そうですか。」

とリコッタに言われ私は、シンクに会いたいと言う気持ちが強くなりました。」

ミルヒｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方そのころシンクは

三人称ｓｉｄｅ

シンクは今なのはたちとボーリングで遊んでいた。

「いやーボーリング久しぶりだな。」

なのはたちの中でボーリング初体験なのは、フェイトとアリシアだった。

ララは転生前の時にジュニア大会の優勝経験者だったので上位に入っていた。

結局ボーリングは優勝はララになったのだった。

「ララちゃんボーリングうまいね。」

「家、それほどでもないですよ。

「でも、何でかしらないけど、僕アリシアさんとフェイトの声を聞くと、何故かリコッタを思い出すなあ。」

「リコッタって誰？」

となのはが聞く。

「リコッタは僕が、ビスコンディ共和国に来てからの友達なんだ、学者さんなんだよリコッタは。」

「そうなんだシンク君。」

「早く戻れたらいいね」

「うんでもこの世界も僕は好きだよなのは。」

本当？シンク君。」

「うん。」

場所は変わりアースラ

そのころ光は、シンクをビスコッティ協和国に、戻す手段を考えていた。

光はアースラのデーターベースにビスコッティ共和国のミルヒオーレからシンクに渡された神剣パラディオンを登録していた。

「よし今日はここまでにしよう。」

と光が部屋を出ようとするとパラディおんがひかり始めたのだった。

光が収まると二人の女の子の立体映像が現れた。

光が君たちは誰と聞いたら一人の女の子はリコッタ・エルマールですと名乗りもう一人は、ミルヒオーレ・Ｆ・ビスコッティと名乗ったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

勇者と姫

三人称ｓｉｄｅ

「やりました成功ですよ姫様やっと、勇者様がいる世界へ通信できるようになりましたよ。」

「え、それはほんとですか?リコッタ。」

「はいばっちりです姫様。」

そして、リコッタは、通信装置のスイッチを入れた。
そしてミルヒオーレは通信相手の名前を聞いた。

「あのあなたはどなたでしょうか私はビスコッティ共和国の姫をしていますミルヒオーレ・Ｆ・ビスコッティと申します。」

「よろしくお願いします。」

「あなたのお名前を教えてくれますか?」

「僕の名前は高町光ですよろしくお願いします姫様。」

「それで姫様こちらに連絡したのは、どういう用件でしょうか?」

と聞く光。

「あ、そうでしたそちらの世界に、シンクは行ってませんか？」

「シンクさんですか？」

「ええ、年齢は私と同じくらいの金髪の男の子です。」

「あ、姫様僕に心当たりがあるので、そのままで少しお待ちください。」

「はいわかりました。」

そして光はなのはに念話を送ったのだった。」

（なのは今どこにいる？）

（あ、光君今ねボウリングが終って今休憩中なんだよどうしたの？光君。」

「今ねビスコッティ共和国の姫様がシンクを探してて、こちらの世界にいることがわかってアースラに連絡があったんだなのは。」

「ええ、それほんと？光君。」

「ああ、ほんとだだからシンクをアースラにつれてきてくれないか、なのは。」

「うんわかったの光君。」

「シンク君急いで私と来て。」

なのははシンクの腕をつかみ魔法を使いアースラに転送装置のあるところを目指して飛んでいた。

フェイトとアリシアもなのはについてきていた。

「どうしたの？なのは？シンクを連れてそんなに急いで。」

とフェイトがなのはに聞く。

「シンク君喜んで今ね光君から連絡があって、ビスコッティ共和国のお姫様から連絡があったんだ。」

「え、それ本当？なのは。」

「うんだから急いでアースラに行くから。」

「了解」

そのころ光とミルヒオーレと、リコッタは他愛のない話をしながらシンクがくるのを待っていたのだった。

それからしばらくしてなのはたちが、シンクをつれて来たのだった。

「姫様」

「シンク会いたかった。」

「姫様僕もですよ。」

シンクとミルヒオーレは通信でいちゃついていたのだった。

「姫様僕がこの世界からそちらの世界に戻る方法は、あるんですか？。」

とシンクが聞く。

「ええ、ありますよシンクたった一つの方法が。」

「その方法とは」

「その方法とは？」

「その方法は、次回で発表しますねてへ。

と言うミルヒオーレだった。

果たして次元を越えるためのたった一つ方法とは？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

次元を超える方法

三人称ｓｉｄｅ

「シンクをこちらに帰還させれる方法はただ一つそれはそちらの世界で、愛し合ってる二人の協力が必要ですよ。」

と言うリコッタ。

「この世界で愛し合ってる二人か。」

フェイトは考えていると突然リンディさんが入ってきた。

「リコッタさんかしら私はこの時空船のアースラのリンディですよろしく。」

「はいこちらこそよろしくお願いするでありますリンディさん。」

「それでリコッタさん
そちらにシンク君を送るのを協力できるのは、こちらは光君となのはさんですが、二人はどういことをすればいいのですか?」

と聞くリンディ。

「光さんとなのはさんですねわかりました。」

「では、その二人の愛の力をシンクさんの神剣パラディオンに与えてくださいそしてシンクさんは、次元をたた切ってください。そしてその中に入ってください。」

「シンクさんは中に入ったら、こちらの方でシンクさんを誘導しますので安心してください。」

「ああわかったよ頼むよリコッタ。」

「それで、愛の力はどうやればシンクに渡せるの？」

と光が、聞いた。

「それはですね、、光さんとなのはさんがキスしてくれればいいだけのことですよ。」

「何だキスか・・・何ーーー僕となのはがキスしないといけないんだーー」

と言う光。

「光君私とキスするの嫌なの？

上目使い＋涙目最強コンボ発動中

「いや嫌な訳じゃないけどなのははいいの？」

「私はいいよ光君となら。」

「でもなのはこれが僕たちのファーストキスになるんだよそれでもいいの？」

「うんいいよ私は、私と光君が頑張ればシンク君を助けられるなら

私はやるよ光君。」

「あ、そうそうキスするなら互いの唇でお願いしますですその方がつごゲフンゲフンより大きいな力がでますので。」

とリコッタは言った

そして、なのはと光は互いの唇を合わせキスをした、その時なのはと光の魔力が混ざり合いシンクが持つ神剣パラディオンに、吸収された。

そしてリコッタが言った。

「今です勇者様。」

そしてシンクは神剣パラディオンを使い次元に穴を開け中に入っていった。

「光なのはありがとうはやてにもありがとうと伝えてね。」

と言ってシンクは次元の穴の置くに走って行き次元の穴は閉じたのだった。

そして、数日後

高町家に一通の映像ディスクが送られてきた。

その中身はなんと光となのはのキスシーンだった。

両親はここまで来たのかと言う感じだったが恭也は光に対し勝負を毎日仕掛けていた。

「光なのはとあんなことしたいんなら俺と勝負しろーー」

光は暫く恭也においかけられる羽目になったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

闇の書起動

シンクが元の世界に戻って一ヶ月が過ぎはやての家では、はやての一人暮らしが再開していた。

はやてｓｉｄｅ

「シンクは今頃何してんだろう。」

「私は突然現れた少年シンクのことを考えて言いました。でもシンクは自分の世界に帰ってしまいました。」

「私はベットに上がりシンクとの思い出を思い出していると、本棚に置いてある本が、光だしたのでした。」

「私は、光君に以前こう聞いていたのです。」

「はやてもうすぐ君の周りで不思議なことが起きるかもしれないだけど君は君らしく生活してね。」

「私はその時はわからなかったけど今ようやくわかったで光君と思いながら私は気絶してしまいました。」

はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ

光ｓｉｄｅ

「僕はなのはと一緒に寝ていると、新たな魔力を感じたのでこの世界に魔法少女はやてが誕生したんだと確信しています。」

「そういえばプレシア親子は、ジュエルシード事件後は、高町家の隣の家に住んでいますそして、フェイトとアリシアは僕たちと同じ学校に通い始めました。」

「そして僕は、ララとプレシアに僕が考えたシステムを組み込んで欲しいと頼みました。」

「そのシステムとは、トランザムシステムをと。」

「当然トランザムシステムはレイジングハートたちがパワーアップしないと使えないようにしています。」

「僕のアカシックハートもパワーアップしないと使えませんよ。」

こうして僕は冬に起きる闇の書事件の為の準備をしてました。」

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして時が経ち季節は冬

いよいよ新たな戦いへの幕が切られようとしていたのだった。

続く

戦い再び

三人称ｓｉｄｅ

「闇の書起動から４ヶ月が過ぎ、はやては守護騎士たちと楽しくそんなある日はやては健診のため病院に来ていた。

そして、シグナムとシャマルははやての主治医の石田先生から病状のことについて聞かされていたのだった。

一方はやては待合室でなのはと光にあっていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

はやてｓｉｄｅ

「私は診察が終わり先に病院の待合室に来ていた。

「しかし遅いなあシグナムとシャマル石田先生と何話してやろと考えていると私に声をかけテ来る友達がいた。

「何してるのはやてちゃん？」

「あ、なのはちゃんに光君珍しいとこで会うなうちは定期健診やなのはちゃんたちはどうしたん？」

「私は光君の付き添いなんだ。」

「光君どないしたん？風邪でもひいたんか？」
「うんそうなんだよはやてちゃん。」
「私がなのはちゃんたちと話しているとシグナムたちが来た。」
はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ
シグナムｓｉｄｅ
「私とシャマルは主はやての主治医石田先生から主の病状のことを聞かされていた。」
「以前説明したと思いますがはやてちゃんの病気は、原因不明の病気ですが私たちも病気解明に向けてそして治療が出来るように我々もベストを尽くしますので、ご家族の方々もはやてちゃんのサポートをお願いします。」
「わかりました先生よろしくお願いします。」
「そして私たちは主はやての元に向かった。」
「私たちが病院の待合室に行くと主はやてが同年代の子供と話をしていた。」
「私は二人の子供に恐怖を感じてしまっていた。
その原因は子供の魔力の強さが異常だったからだ特に男の子の魔力が。」
そして主はやてが、私たちに気づき私たちは主はやての元に行った。
」

シグナムｓｉｄｅ　ｅｎｄ

はやてｓｉｄｅ

「私たちはなのはちゃんたちと別れ、病院を後にしたときシグナムが私に聞いてきた。」

「主はやてあの二人は一体何者なんですか？」

「あの二人てなのはちゃんと光君の事？」

「はい。」

「あの二人はうちの大切な友達であり、あの二人は魔法使いなんやかっこええやろ。」

「なあシグナムとシャマルうちなうちの病気は、闇の書のせいなのしってんねんそしてシグナムたちが夜家を抜け出して魔力蒐集してるのは、知ってるんや。」

「今日の蒐集担当はヴィータやろ？」

「はい」

「ヴィータがなのはちゃんたちを襲うかも知れへンからシグナムその時はヴィータを止めてな。」

「わかりましたが何故あの二人を襲うの止められのですか？」

うちなあの二人が大好きやからな。」

はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

「私は光君の病院の付き添いで、病院に来ていました。」

「光君の病院受診が終わり光君と家に帰っていると、突然私たちの周辺に、結界が張られ赤い服を着て金槌を持った女の子が、私たちの前に現れ女の子は私に襲い掛かってきたのです。」

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

撃墜されし者

なのはｓｉｄｅ

「私と光君は、病院の帰り道で赤い服着て金槌みたいな物を持った女の子に教われいます。」

「私と光君は女の子の攻撃をかわしながらレイジングハートたちを起動させ戦闘準備をし、女の子と戦い始めました。」

「女の子と戦い始めてすぐ女の子は私ではなく光君を集中して攻撃していました。私は体調が悪い光君を庇いながらの戦いを強いられていました。」

「そして私が女の子の隙を突き、私はディバインバスターを放つと女の子は直撃は避けたのですが、かぶっていた帽子が、私のディバインバスターで損傷して地面へ落ちていきそれを見た女の子は、逆上し私と光君に襲い掛かってきたのです。」

「アイゼンカードリッチロードと言って女の子は私たちに向かって金槌型デバイスで私たちに攻撃をしてきたのです。」

「私と光君は、互いにプロテクションを使い防御しましたが、女の子の攻撃は私たちの魔法を壊し私と光君のレイジングハートとアカシックハートを損傷させ私と光君を吹き飛ばされました。」

「私はボロボロになりながらも戦う意思はありましたが、女の子は私ではなく光君に近づいていました。」

「私が光君のほうを見ると、光君は頭から血を出していました。私

は傷ついた体で光君に近づき女の子から守ろうとしました。」

「光君しっかりしてお願い返事してよ光君。女の子は私たちの見て、私たちにトドメを刺そうとした時私たちの前に謎の男が現れたのでした。」

「そして私は、その人が私たちを助けてくれたのを確認すると光君を庇いながら私は気を失ってしまいました。」

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

果たして光となのはを助けた謎の男の正体とは？

続く

フェイトたちと謎の男

なのはたちが襲撃され謎の男に助けられる前フェイトは、嫌な予感を感じていた。そしてなのはと光を探していた

フェイトｓｉｄｅ

「今日私が学校に行くとなのはと光がいなかった。アリサたちになのはたちのことを聞くと、光が風邪をひいたらしいので、なのはは看病するということで、休みらしい。」

「私は学校が終わり、光のお見舞いに行こうと考えていました。」

そして学校が終わりアリサたちと別れて家に向かっていると、どこかで結界魔法が発動したのがわかったので、その現場に向かいました。」

「私が現場に向かってるとアリシアと合流しました。」

「フェイト急ごうこの魔力襲われてるのなのはちゃんと光さんだよフェイト。」

「え、ほんとアリシア？」

「私はアリシアの言葉を信じていませんでした。」

「そうこのときは私はなのはと光が命を狙われているとは、知らなかったのです。」

「そして私たちが、現場に着いた時そこにはすでに、なのはたちを襲った相手は、いなくて気を失っているなのはたちと白い服を着た男の人がいた。」

フェイトｓｉｄｅ　ｅｎｄ
三人称ｓｉｄｅ

フェイトたちが着いた時、謎の男がフェイトたちに気づき、フェイトたちに声をかけた。

「君たちはこの子達の仲間かい？」

「仲間じゃなかったらどうするんですか？お兄さん。」

と言うアリシア。

「君たちが彼女たちの仲間じゃなければ俺は君たちを殺す。もう一度聞くよ君たちは彼女たちの仲間かい？」

フェイトは答えた。

「はいなのはたちは私たちの仲間です。」

「そうかならこの二人を君たちに返そう。」

謎の男は、フェイトたちになのはたちを引き渡し
男は、帰り際にこう言った。

「じゃあなフェイトアリシア。」
と言った。
そして男はどこかへ消えて言っていったのだった。
フェイトたちは謎の男の言葉を気にしながらなのはたちを連れて帰ったのだった。
三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ
続く

管理局動く

マクｌｓｉｄｅ

「ようアスベル任務お疲れさん。」

「ああ、しかし何故俺になのはたちの救出に行かせたんだ?直哉。」

「何、別に深い意味は無いよただ兄妹対面させたかっただけだ。」

「どうだった?久しぶりの兄妹対面は?アスベル・Ｔ・ハラウオンさん。」

「やれやれ直哉よ余り遊びすぎるなよ。」

「ああ、それは当然だなにやら俺たちの世界が不安定だからなもしかするとこちらの世界で闇の書事件が終わりＳＴＳに入る直前にこちらの世界に変化があるかもな。」

「大丈夫なのか直哉?」

「ああ、大丈夫だこちらの世界のなのはたちに迷惑はかけねえよ、ただ転生者に力は借りるがな転生者の力俺が手に入れるためになそして俺は自分たちの世界を救う為に。」

「ああ、そうだったな直哉俺たちはその為にこの世界に来たんだったな。」

マクｌｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ここは時空管理局グレアム提督の部屋

三人称ｓｉｄｅ

「クロノかどうしたのかね。」

「提督実は、提督の世界に闇の書らしき物が現れたみたいです。僕たちはその本が闇の書なのかを調べるために動きます。」

「そうか無理はするなよクロノ。」

「はい。」

と言ってクロノは部屋を出て行った。

「さて私の悲願が成就させる為には、まず総帥の動きを止めないといけないだろうどうやって総帥の動きを封じるかだな。」

グレアムの策略が動き出そうとしていた。

ここは八神家である

「何、ヴィータやはりお前あの子達を襲ったのか？」

「ああ、シグナムだけど蒐集は出来なかったぞへんな奴が出てきたからな。」

「そうかよかった手遅れにならずに。」

「何だシグナムあいつらに手をだしたらまずかったのか。」

「ああ、あの二人は主はやての大切な友達らしいのだ我等と同じくらいに。」

「そんな私は、はやての大切なものを傷つけてたのか。」

ヴィータはショックを受けていた。

「私は明日主と共に、主の友達の家に行く。」

「私も行くあいつらに直接謝りたいしな。」

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

なのはは、夢を見ていた。

「ねえ起きて起きてなのは。」

なのは呼ぶ声が聞こえていた。

「うーん誰私起こすのは。」

「私だよもう一人の私。」

「え、私なの？」

「あのね今日はお願いがって来たの。」

「お願い？。」

「あなたたちの世界に来ている私の愛する人がこのままだと死んでしまうの私に代わって守って欲しいの。」

「お願いねもう一人の私」

と言ってもう一人のなのはは消え、なのはも気が付いたのだった。

「へんな夢見ちゃったなあ。」

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

果たしてなのはの見た夢で聞いたことは本当に起きるのだろうか？

続く

シグナムVSフェイト

なのはたちがヴィータに襲撃された翌日フェイトは、高町家に来ていた。

三人称ｓｉｄｅ

「あらフェイトちゃんいらっしゃい。」

と桃子が言う。

「こんにちは」

「なのはと光なら部屋にいるわよフェイトちゃん。」

「はいわかりました。」

とフェイトが、部屋に行こうとした時、車椅子に乗った女の子と車椅子を押す少女とピンク色の髪の女性が店に入ってきたのだった。」

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

はやてｓｉｄｅ

今私は、シグナムとヴィータを連れてなのはちゃんのうちに向かっています。」

ええなヴィータなのはちゃんたちに、ちゃんと謝るんやで。」

「わかったよはやて。」

「私たちがなのはちゃんの家に着くとフェイトちゃんがいた。」

「フェイトちゃんもなのはちゃんちに来てたんやな。」

「そういうはやてちゃんこそどうしたの？」

「うちらもなのはちゃんちに、遊びに来たんや。」

「そうなんだ」

そして、私たち全員でなのはちゃんたちの部屋に向かったのでした。

」

はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

フェイトたちがなのはたちの部屋に入ろうとした時、部屋から声が漏れてきたのだった。

「あ、光くんそんなにしないでよ光くんあ、またそんなことしてしっかりしてよね私は光くんにな何をされてもいいけどｗ。」

と言う会話を聞いていたはやては鬼の形相のまま部屋に入っていった。

「あんたら二人は朝から何いちゃついてるやーー」

とはやてが中に入ると、中ではなのはが光の着替えを手伝っていただけであった。」

そして、6人で談笑していたが突然なのは提案でトランプをしようと言った。

皆はなのはの提案の受けトランプをすることになり、トランプ種目はババ抜きに決定したのだった。

そしてトランプ大会の結果は全5戦で光が2勝でなのははやてヴィータが1勝ずつで結果は光の優勝だがビリ争いが熾烈な戦いをしていた。」

そして最後のビリ争いを制したのは、シグナムだった。

負けたフェイトは落ち込んでいた。そしてトランプ大会が終わり、光が言った。

「ねえ今度闇の書の蒐集活動する時僕となのはも付いていっていい？」

「えええーーーー」

と光の言葉を聞いたはやてたちは、驚いていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

総帥の計画

光ｓｉｄｅ

「僕は驚いているはやてたちにこう言った。」

「実ははやて僕はね時空管理局の総帥なんだ。」

「えええーーーー」

はやてたちはまた驚いていた。

「嘘やろ光くん」

「はやてはまだ僕の言ったことが、灘信じられない様子だった。

「僕は正真正銘の時空管理局の総帥なんだ。」

「実ははやてたちにお願いがあるんだ聞いてくれる?」

「何や光くん?」

実ははやてたちに闇の書の完成させて欲しいんだ。」

「!!それ光くんどういうこと?うちはそんなことしとうないわ。」

「はやてよく聞いて、はやての持つ闇の書は、本当の名前は、夜天の書と言うんだ。僕は闇の書を夜天の書に戻すのが目的なんだ。」

そして、はやて君も僕たちと一緒なんだ命を狙われているんだ。」

光の言葉でシグナムとヴィータが驚き声をあげた。

「なんだと？」

と言うシグナム。

「それは本当か？」

と聞くヴィータ。

「ああ、それは本当だはやてを救うには闇の書の完成させなおかつ闇の書の闇を倒すしかないそして、僕たちがそう動けばはやての命を狙ってるやつらが出てくるはずなんだと僕は言い切った。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

この場にいる全員が光の言葉を聞いて唖然としていた。

その中で最初に口を開いたのはなのはだった。

「それで光くん私たちは何すればいいの？

「まずフェイトとシグナムの本気の勝負をしてもらうよ。僕となのはデバイスはパワーアップ中だからヴィータには異世界で蒐集活動していてくれはやてに負担が掛からない程度にね。」

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

皆は光の計画通りに動くことを約束しそれぞれの家に帰ったのだった

続く

２００００ＰＶ突破記念回

作「いつも転生少年と魔法少女を見ていただきありがとうございます。」

光「今回は２００００ＰＶ突破記念として、楽屋からお送りします。」

光「まずは作者への質問コーナーからです。」

光「最初の質問は、なのはさんからです。ではどうぞ。」

な「えっと作者さんに質問です。あの超長次元犯罪組織マクーの皆さんの目的がわからないので、教えてください。」

作「あの人たちの目的は、転生者である光の力が欲しいのです。」

「マクーに所属している者たちは、別世界の住人なので。」

光「次はフェイトさんの質問です。ではどうぞ」

フェ「作者さんどうして母さんとアリシアを助けたの？」

作「それは、今後のネタバレになりますが今のストーリーが進むと光たちにとってある意味最凶の相手と戦うので、そのため二人は生きのこらせました。」

光「それでは、今後の展開を教えてください。

作「とりあえずＳＴＳはしますそれ以降もする予定ですこれからも

よろしくお願いします。」

光「それでは今回は個々までです。」

全員「さようなら。」

アースラ地球へ

クロノｓｉｄｅ

「今僕たちは次元船アースラに乗って先の事件ジュエルシード事件のあった世界地球に向かっている。僕は、僕の母さんであるリンディ提督に呼ばれ艦長室に向かっていた。」

僕が艦長室に入ると、リンディ提督が、ある映像を僕に見せてくれた。」

「その映像とは、先のジュエルシード事件で僕が知り合った少女フェイトだった。」

「母さんこの映像は何?。」

「この映像は、リアルタイムの地球の映像ですよクロノ。」

と言うリンディ。

「そんなばかな地球にはなのはたちしかいないはずだ魔道師は、僕はフェイトが戦っている得体の知れない相手を見て恐怖していた。」

その理由は、相手が容赦なくフェイトのデバイスバルディシュに、大きな損傷与えていたのだったからだ。」

「母さん僕たちももうすぐ、地球に着くから僕先になのはたちと合流し隊と思いますそれでは。」

と僕は、部屋を出ようとしたら、母さんが僕を止めた。

「待ちなさいクロノ私たちはなのはさんたちとの合流は、総帥の命令で禁止されています。

「な、何で、総帥が僕たちに、そんな命令を出したんですか?。」

「実は総帥から私たちに特命が出されてるの。」

「僕は、驚いていた。僕は母さんの言葉を聞いたとき何故僕たちに命令が来るんだと考えてると母さんが僕に言った。」

「クロノ貴方には今までは伝えてませんでしたが、現時空管理局の総帥は、高町光さんなのよクロノ。」

「何ーーあいつが総帥だとー母さんそれは何かの間違いでしょう?」

「いえクロノこれが現実です。現総帥の正体は、極秘情報なので他言無用ですよクロノ。」

と言うリンディ。

「それで母さんその特命てなんですか?」

と僕は母さんに聞いた。

「そのことは後であなたの部屋に転送します。」

「わかりましたでは失礼します。こうして僕は部屋を出たのでした。」

クロノｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そのころ地球では、光の計画通りにことが進みなのはたちのデバイスライジングハートたちのパワーアップが終了する時空からロボットが降りてきたのだった。

その時空にスクリーンが現れ一人の男が宣言したのだった。

マクーｓｉｄｅ

「私の名はシャア・アズナブルである。」

我々は超次元犯罪組織マクーであるそこにあるロボットは我々の作り出したロボット名前は、ザクであるこれから我々はこの星を侵略を開始する。

「我々の行動を止められるなら止めてみろ高町光よ。」

「手始めにこの町をザクで破壊してやろう。」

シャアがそういうとザクは行動を開始した。

マクーｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ついに動き出した超次元犯罪組織マクー

果たして光たちはマクーの侵攻を止められるのか?。

そして、光の名前を呼ぶこの男シャアとの勝負の行方は?

そしてレイジングハートたちの強化は間に合うのだろうか？

続く

対決シャアＶＳ白い悪魔

突如超次元犯罪組織マクーの襲撃を受けたなのはたち。
果たしてなのはたちはこの危機を乗り越えられるのか？。

三人称ｓｉｄｅ

今なのはと光は、レイジングハートたちの強化のためプレシアの元にいた。
「何だ？この振動は、奴ら本当に街を破壊し始めやがったぞ。プレシアさん強化はまだ終らないですか？」
と聞く光。
「待ってレイジングハートは終ったわいいなのはちゃんこの子新しいの名前は、レイジングハートエクセリオンよ。」
そしてなのはは、シャアと戦う為現場に向かおうとしたその時光が、なのはに一枚のカードを預けたのだった。
「なにこのカード光君？」
「なのはそのカードは、常にレイジングハートの中に入れておいてくれ。そのカードは僕のレアスキルをなのはが使えるようにする為のカードなんだ。」
「ありがとう光君それじゃあ行って来ます。」

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｄｉｄｅ

「私は急いで街に急いで向かいました。」

「そして私が現場に着くと、あの男シャアが私に言いました。」

「お嬢さんまさかそんな格好で私と戦うのかね？」

と言ったシャア。

「行くよレイジングハートエクセリオンセットアップ。」

「私はＢＪを装着し臨戦態勢をとりましたが、シャアの様子がおかしいのを気づき私は様子を見ていました。」

「おおなんという可憐な子だこの子が私が探してた理想の女性だ。」

と言いながらシャアが乗ったザクはなのはに迫って、シャアがなのはに告白したのだった。

「お嬢さん私とお付き合いしてくれるのならもう破壊活動はしないと誓おう。どうするかね？」

「私はシャアの告白に対しこう言った。」

「私にはもう決めた人がいるのでいくら街の為だと言っても、私はその人を裏切るなんて出来ません。ごめんなさい。」

「私の答えを聞いたシャアは、ショックを受け私に攻撃をしてきました。」

「ならば君を気絶させ君をアクシズに連れて行くまでだ。」
と言ってシャアはなのはに、攻撃を開始したのだった。

「私はシャアの攻撃に対しデバインバスターやアクセルシューター等で、応戦していましたが、ザクのスピードが速くて、攻撃が当たりませんでした。」

「次第に私はザクに押され始めていました。」

「どうしょうこのままじゃあ。」

「そろそろお嬢さん終わりにしょうこれからはずっと私と一緒に暮らそう。」

そしてシャアは最後の攻撃を開始したその時。」

「レイジングハートが輝き始め私のＢＪも変化があり輝きが消えるとシャアが驚いていた。」

「まさかお嬢さんもＭＳを持っていたのか、それも我々の恐れるＭＳガンダムを。」

「そう今の私は光君のレアスキルを使い、シャアが恐れるものにＢＪを変化させました。」

「さあ続きをしましょう」

と私が言うと。

「いや今回はここまでだ。」

と言ってシャアは攻撃を止めたのだった。

「私は必ず君を嫁にしてやるからな。」

と言ってシャアは撤退したのだった。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

主役ＶＳもう一人の主役

なのはＶＳシャアの戦いが、行われているころ光のアカシックハートの強化も終わり光は、なのはの援護に向かおうとしたとき、光は誰かの助けを呼ぶ声を聞いたのだった。

直哉ｓｉｄｅ

「おい本当に行くのか直哉、お前はマクーの総指揮官なんだぞ。」

と言うアスベル。

「ああ、今感じた俺たちの世界のなのはがこちらの世界に来ている。」

「なのはと俺は自分たちの世界で互いの魔力をリンクしたことにより互いの居場所が分かる様になったんだ。ただ片方が死ねばリンクしてるほうも、死ぬがな。」

と言う直哉だった。」

「ではアスベル俺は、なのはを助けに行って来る。」

「ああ、気をつけろよ直哉。」

「ああ」

こうして直哉も、光が向かっている場所にいるなのはの元に、向か

ったのだった。」

直哉ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして、異世界に蒐集活動していたヴィータが帰還していたその時、ヴィータは光の姿を見つけたのだった。

ヴィータｓｉｄｅ

「私は光に言われた通り、異世界で蒐集活動していた。その帰り私は光を見かけたのだが、光は、私に気づかずに、行ってしまった。」
私は気になり、光の後を付いて行く事にした。
「そして私が光の後を付けて暫くすると、光が降りて行き、私は光の後を追いかけて行った。」

ヴィータｓｉｄｅ　ｅｎｄ

光ｓｉｄｅ

「僕は助けを呼ぶ声のほうに飛んでいると、途中でヴィータを見かけた。」

「だが僕は、急いでたので、ヴィータには気づかないふりをして、先を急いだ。」

「そして僕は、助けを呼んでいた女性を見つけ、その女性の元に降りて行った。」

「女性は僕の姿を見つけると女性は安心したのか気を失ってしまったのだった。」

「僕が女性を治療する為安全なところへ移動しょうとした時、突然なのはのスターライトブレイカー級の砲撃が僕を襲ったのだった。」

「僕は、咄嗟に砲撃魔法をかわし、誰だと叫んだ。そして煙の向こうに、人影が見えた。」

「良く俺のスターバニシングブレイカーをかわせたな。」

男がそう発言しながら僕の前に姿を現わしたのだった。」

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

番外編9年後の世界で

この物語は、本編の時間軸から、少し未来のお話です。

この物語の主人公である高町光は、機動六課設立のために、各地に出向いていた。

光ｓｉｄｅ

僕となのはは時空管理局の任務を遂行していた。

その任務とは、最近ミッドチルダで、発見されたロストロギア神の車と言うロストロギアの輸送任務だった。

「なのは大丈夫？もうすぐ目的地に、着くからもう少し我慢してね。」

なのはは、この日体調を崩していた。なのははそれを隠して、光と、任務に出ていたのだった。

「光君ごめんね私迷惑かけて。」「そんな迷惑じゃないよなのは、それに僕たちは、夫婦なんだから助け合うのが、当たり前じゃないかなのは。」

「ありがとう光君。あーあこのままどこかに、光君と生きたいなあとなのはが言った時、ロストロギア神の車が発動し、光となのはをどこかへと次元転移させたのだった。

ロストロギア神の車の能力で次元転移させられた光たち。

光となのははは、この世界が自分たちの世界とは違うと、分かっていた。

「光君大丈夫よね帰れるよね元の世界に。」

「大丈夫なのは」

その時光たちの前に現れたのは、フェイトと5才くらいの子供の魔道師だった。

果たして光たちが着いた世界とはそして、二人は元の世界に戻れるのか？

主役ＶＳもう一人の主役後編

三人称ｓｉｄｅ

「君は、一体何者なんだ?」

「俺か、俺は超次元犯罪組織マクーの総指揮官の高町直哉だ。」

「何故君は、僕を標的にしてるんだ。君が僕の両親を殺させたのか?。」

「俺は、君の両親を殺せなど命令などした覚えはないが、どうやら君はそれでは納得しないようだから勝負しょうではないか。」

そして、二人はデバイスを持ち、互いに臨戦態勢に入ったのだった。」

そして、二人の戦いは始まった。

先に動いたのは光のほうだった。

「行くぞ!!アクセルシューター。」

光は、合計４０個のシューターを直哉に向け、放つ。

一方直哉も光と、同数のシューターを作り、相殺したのだった。

「次はこちらから行くぞ!!。」

そして、直哉は自分のデバイスバニシングハートアクセリオンを地面に置き、両手を合わせ集中していた。
そして、直哉の掌から青白い気の塊が出てきたのだった。

「かーめーはーめー波ーー。」

直哉は光に向けかめはめ波を放った。

「何だ?この攻撃は!!。」

光は、直哉の攻撃に驚き反応が遅れたが何とか、かわす事に成功したのだった。

「あれは一体なんだったんだ?。」
光は、直哉の攻撃をかわしてそう呟いた。

「ならこの攻撃ではどうだ?」

光は、アカシックハートエクセリオンを砲撃モードに変え、魔力をチャージし始めたのだった。」

「いっけーーーアカシックバスター!!。」

光は、得意砲撃魔法アカシックバスターを放ったのだったが、直哉は一歩も動かずにいた。

そして、アカシックバスターは直哉に直撃したのだった。

「やった。」

光は喜んでいたが爆発が収まり視界が晴れるとそこには無傷の直哉が、いたのだった。

「何で、無傷なんだ確かに直撃したのに?。」

光が混乱していると、直哉が、瞬間移動を使い、一瞬で光の間合いに詰め寄り直哉は光に自身の必殺技を放った。

「これで、最後だ!!ブラックホールテンペスト

直哉が必殺技を使うと、光は小型のブラックホールに吸い込まれその中無数の衝撃波を、受け続けたのだった。

「うわあああああ。」

光は、気絶したのだった。

そして直哉は・気絶した光を抱きかかえ光の後をついてきていた、ヴィータに光を預けどこかに飛んでいったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

敗北後に訪れた闇の書の暴走

光は、直哉との戦いに敗れてヴィータに連れられて、はやての家に戻っていた。

そして、なのはたちは、はやてから連絡を受けはやての家に、来ていた。

三人称ｓｉｄｅ

「ねえはやてちゃん光君大丈夫だよね？。」

「大丈夫やなのはちゃん今シャマルが光君を治療中や、だから安心してや。」

「しかし、光をここまで、痛めつける人が、この世界にいるなんて考えられないよ。」

なのはたち3人が、そんな会話をしていると、一人だけ浮かない表情で、光のことを心配しているアリシアがいた。

「私は、あの時光さんが飛び出した訳を知っていた、何故なら私も光さんが聞いた助けを求める声を、何故私にも声が、聞こえたのかと言うと、私は光さんの特殊な力で、生き返ったので、少しですが私にも、光さんと同じ能力が備わったのです。」

そして４人が待つこと数時間シャマルの懸命な治療により、光の意

識が戻り４人は安堵したようだった。

そこにシグナムとザフィーラが、偵察から戻ってきた。

そして、ヴィータが光の戦いを皆に話し出したのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ヴィータｓｉｄｅ

「私は、光の戦いを見て感じたのは、光の相手は、化け物じみた力を持った奴だってことさ。」

「多分私ら全員で戦っても勝てるか正直わからねえ。」

「それくらい光を倒した奴は強い。」

「私が話し終わると、皆はショックを隠しきれない様子だった。」

ヴィータｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ヴィータの話が終ると、夜になっていた。

そしてここから物語は、大きく動き出すのだった。

それはまだ完成していない闇の書の暴走から、始まるのだった。

続く

敗北後に訪れた闇の書の暴走後編

その日の夜はやては光の看病をなのはと二人でしていた。
そして突然、はやてが苦しみだしたのだった。

三人称ｓｉｄｅ

「はやてちゃん大丈夫?」
なのはは、はやてに声をかけるが、はやてからの返事はなかった。
なのはは、シグナムと、シャマルを呼ぶ為に部屋を、出たのだった。
そしてなのはが、シグナムとシャマルを連れて来た。

「これは」
シグナムが部屋に入りはやての異変の、原因が闇の書にあると言うことに気づいた。」

「まさか、もう闇の書が覚醒すると言うのか。」

「シグナム違うわこれは、暴走よ危険よシグナム。」
シャマルがシグナムに伝えたのだった。」
シグナムと、シャマルは寝ている光と、はやてを避難させようとし

た時に、闇の書が輝き始め闇の書から、見知らぬ3人が出てきたのだった。

「初めまして私は、星光の殲滅者ですよろしくお願いしますね高町なのはさん。」

「僕は雷刃の襲撃者だよよろしくね。」

「わらわは闇統べる王である。」

「それでは、我々はこの二人を連れて行きます皆さんそれでは。」

星光の殲滅者たちは、はやてと、光とを連れ去り闇の書も持ち去ってしまった。

「いやーー光君ーー。」

なのはは、星光の殲滅者たちに、光を連れ去られショックを受けた。

そのころ光の依頼で動いてアースラも今回の事態のことを知り予定を変え、なのはたちと合流するようにと、リンディは、命令したのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

果たして、星光の殲滅者たちの目的は一体なんあのであろうか？

続く

闇の書が、突如暴走してしまいその闇の書から3人の少女が出てきて、その少女達の手により、光とはやてが、連れらされてしまったのだった。

三人称ｓｉｄｅ

突如自分の愛する光を、連れ去られショックを受けて唖然としていた。

「光君」

なのはは、小声で光の名前を呼び続けていた。」

なのは以外のメンバーは光とはやてを救出売るかを相談していた。

その時フェイトと、アリシアが来た。

「なのは、大丈夫?」

フェイトはなのはに駆け寄りなのはに、声をかけた。

「あ、フェイトちゃん。」

なのはは、フェイトの顔を見たとき、なのははフェイトに駆け寄りフェイトの前で、なのはは今ままで我慢していた悲しみを抑えられずにいた。

「うわあああんフェイトちゃん光君とはやてちゃんがーーうわあああん。」

なのははは、泣き出してしまった。

「う、うう」

なのははまだ泣いていた。

フェイトは黙ってなのはに、胸を貸していた。

「高町なのはいい加減にしなさい。」

パシーンと乾いた音が響いたのだった。

なのはを叱ったのは、アリシアだった。

一方連れ去られた光とはやては、ｄｐこかの山奥の小屋に、幽閉されていたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

光ｓｉｄｅ

「僕はここに、連れてこられてからしか記憶がない。そんな僕に、３人の少女は僕に自己紹介をした。」

「初めまして私は、星光の殲滅者と言いますよろしくお願いしますね高町光さん。」

「「僕は、雷刃の襲撃者だよよろしく。」

「わらわは、闇統べる王だ。

三人は、僕にそれぞれ自己紹介をしてくれた。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

「痛いよアリシアちゃん。」

アリシアちゃんが私の頬を叩いた。

「そりゃあいたい筈だよ私本気で叩いたし。」

アリシアちゃんの答えがが返ってくる。

「何でそんなことするの？」

私は、アリシアちゃんに強い口調で聞いた。

「それはねなのはちゃんが、泣いてばかりだからよ。」

「何よ私の気持ちも知らないで勝手なこと言わないでよ。もういいよ私が、光君とはやてちゃんを助けるから。」

「あ、待ってよなのは。」

私は、フェイトちゃんの静止を振り切りはやてちゃんの家を、飛び出しました。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

なのはｓｉｄｅ

私は今、アリシアちゃんと口論してしまい私は今飛び出してきてしまいました。

「まだちょっと痛いな。」

私は、右手でアリシアちゃんに、叩かれた頬を触っています。

「アリシアちゃん何で私を叩いたんだろう?」

私はその理由を考えているとレイジングハートが、私に声をかけて来た。

（マスター）

「何?　レイジングハート。」

（ＡＩの私には、人の感情については分かりませんが、先ほどのアリシアさんの行動のおかげで、マスターを闇の中から救ってくれたことは事実なので、私はアリシアさんに、感謝の言葉を言いたいです。）

「そうか、なら私と一緒だねレイジングハートも。」

「なら早くはやてちゃんと、光君助けて二人でアリシアちゃんに、お礼言いに行こうレイジングハート。」

（了解）

私は、光君とはやてちゃんの捜索を開始しました。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

光ｓｉｄｅ

「それで、君たちの目的は何だ?僕たちをこんなところまで、連れてきて、どうする気なんだ?」

僕が、３人に聞くと、星光が、代表して答えてくれたのだった。

「私たちの真の目的は貴方と同じですよ高町光様。私たちの目的は脂の書を夜天の書に戻すことです。」

「でも我々は、闇の書の闇の力で作られた存在なので、どうすることも出来なかったんですが、今までは、でもこの世界に着てから何故か、闇の書の闇の活動が弱まり、私たちは、闇のの書の管制人格の力を借りこちらの世界に来たのです。」

「でもおかしいじゃないか?　君の言ったことが、本当のことだとしても、君たちは闇の書の闇が、君たちを作ったんだろ?」

僕はそう質問を星光にぶつけ、星光はこう答えた。

「はい、どの通りです。」

「そしたら闇を僕たちが倒したら君たちも消えるんじゃないのか？」

「ああ、そのことですか、私たちは消滅はしませんよ貴方と契約を済ませましたから。」

「ええーーーー。」

僕は驚きで大声をあげてしまった。

「契約て、何？」

僕はおそるおそる聞いた。

「私たちは、外に出る時誰かの魔力を媒体にして存在ができるんです。光様は私たちを存在させるに十分すぎる魔力が終わりでしたので勝手に変え契約しました。」

「光との契約は楽しかったなーー。」

雷刃は感想を僕の前で、言った。

「ちょ！！　君たち僕と契約のやり方をしたんだい。」

僕は、星光に聞いた。

僕は、その答えを、聞いた時僕は、呆然とした。

「光様私たちにそんなこと言わせるんですか。あんな恥ずかしい言葉を。」

星光はそう答え雷刃が言葉を足したのだった。

「大丈夫だよ光様の愛してる人のところはとってるからね。」

「ふーん貴方たち私の光君に、一体何をしたのかな？　教えてくれない？」

僕が、気づくとなのはが、来てくれていた。

「ええ、いいですよ貴方が、私たちに勝てたら教えますよなのはさん。」

「約束したからね。」

こうして女たちによる壮絶な戦いは、始まった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方アースラでは、ユーノとクロノが、なのはたちと合流する為海鳴市に向かったのだった。

続く

なのはへの告白

光は、３人のマテリアル少女たちから衝撃的な言葉を聞かされたのだった。

光がその言葉を聞いた直後、光たちを救出しに来たなのはにも聞かれてしまい、光を賭けて３人のマテリアルＶＳなのはの戦いが始まろうとしていた。

クロノｓｉｄｅ

僕とユーノは光とはやてが、誘拐されたと言うので、二人の救出に向かった。

「クロノあちらのほうに強い魔力を感じるよ。」

「よし行って見ようユーノしっかり捕まってろよ。」

「うん」

僕たちは強い魔力を感じた方角に向かって飛んでいった。

クロノｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方なのはとマテリアルたちは、何時戦闘が起こっても、おかしくない状態だった。

光ｓｉｄｅ

「ねえなのは、こんなことで戦うのは良くないよちゃんと話聞こうよ。」

僕は、なのはたちの戦いの原因が、僕関係だということが僕は嫌だったので戦いを止めようとした。

でもなのはは、違っていた。

「光くん私はこの戦いは何故か分からないけど、女として避けれない気がするんだ。だからお願いやらせて。」

「不思議ですね私もそう思っていたところです。マスター私からもお願いします。」

僕は二人からお願いされてしまい、しぶしぶ了承したのだった。

あ、なのは戦う前にちょっとこっちに来て。」

僕は、なのはを呼びなのはに2つの物をなのはに手渡した。」

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

私が戦うことを、光君は許してくれた。

私は戦闘準備していると、私は光君に呼ばれた。

「何？　光くん。」

私が行くと、光君は2つの箱を私にくれた。

「なのは、開けてみて。」

私は、光君に言われ片方の箱を開けると中から出てきたのは、指輪だった。」

「光くんこれまさか。」

「うんそうだよなのは、それ結婚指輪なんだ受け取ってくれるよね。」

「ねえ僕たちて親同士が決めた許婚だったでしょ。」

「うん」

「で僕ね、ジュエルシード事件で別次元に飛ばされたことあったよね。」

「うん私悲しくて泣いたんだよ光くん。

「本当にあの時は、ごめんねなのは。その時僕に必要なのはなのはなんだと確信したんだ。

「僕は、高町なのはを愛しています僕と、結婚してください。」

私は、いきなりのプロポーズに戸惑ったが私の答えは決まっていた。

「はい喜んでお受けします。」

「やったーーありがとうなのは。」

私が答える光君は、無邪気に喜んではしゃいでいた。

私は2つ目の箱を開けると中から2つのりん不が出てきた。

「なのはレイジングハート出して。」

私は光君に言われたとおり、レイジングハートを出すと光くんが、レイジングハートにリングを付けていた。光くんのアカシックハートにも同じのが付いていた。

「よしこれで準備ＯＫだなのは、モードチェンジて言ってみて。

「レイジングハートモードチェンジ。「

私がそう言うと、レイジングハートとアカシックハートが、融合し始めたのだった。

私は驚いた。まさかレイジングハートたちが融合すなんて思わなかったからだ。

「ねえ光くんこれは一体?」

「これはレイジングハートと、アカシックハートの新しい姿さなのは。ちなみにこの形態は、レイジグハートがメイン形態だからなのはが使ってね。

「そうそう子の形態のときの名前は、ガッテスハートね。」

私が、ガッテスハートを持つと魔法の言葉が出てきた。私は空に向けその魔法を放った。

「行くよガッテスハート
コスモライトブレイカー
ガッテスハートから放たれた魔力砲撃はハート型の蒼色と桜色の美しい物だった。

「ありがとう光君チュ」

私は、光君に駆け寄ってキスをした。光君は恥ずかしいのか、顔を赤くしていた。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

結局マテリアルＶＳなのはは、実現することはなかった。

これは、どうでもでもいいことだが、なのはが放ったコスモライトブレイカーは、見事に、クロノとユーノに直撃したしたそうです。

続く

恭也の心配事（前書き）

今回の話は本編には直接は関係ありませんがどうぞ

恭也の心配事

3人のマテリアルは高町家に入り光たちと一緒に暮らしていた。
そんなある日、3人のマテリアルの為に、なのはの兄である恭也が、付いて散歩に来ていた。

三人称ｓｉｄｅ

「お兄さんこれからどこに行くんですか？」
星光は恭也に聞いた。
「ああ、今日は！！」
その時恭也は見た、なのはが見知らぬ男解いたのを見たのだった。
「なのはと一緒にいる奴は一体誰なんだ？」
「行くぞ三人とも、もしやばい男なら俺が守らないと。」
恭也は一人で熱くなっていた。
「これがシスコンと言う物ですか。
「僕たちはこうはなりたくないね。」
「まったくじゃ。」

三人はそれぞれ恭也をそういう人なんだと思っていた。

こうして恭也によるなのはストーカー作戦が開始された。

作戦が始まってしばらくして、マテリアルズは飽きていた。

「わらわはもう飽きたのじゃ帰るのじゃ。」

闇統べる王はそう言って、帰ってしまった。

星光と雷刃も帰ってしまった。

そして、なのはと謎の男のデートは、クライマックスを迎えていた。

そして、なのはは、男とキスをしょうとしていた。それを見た恭也は二人の間に入ったのだった。

「おい、貴様俺がいる限り貴様になのははやらんぞ。」

男は恭也の迫力に、負けて逃げてしまった。

恭也は勝ち誇った顔をしてなのはに近づいたするとなのはの一言で終わりを告げたのだった。

「お兄ちゃんのばかーーー」

恭也はショックの余り数日寝込んだのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

グレアムの野望と闇の書の闇の覚醒

ここは、アースラの艦長室である。

リンディｓｉｄｅ

リンディは、時空管理局総帥の高町光の依頼で時空管理局内に邪な考えを実行しようとしてる者を探せと言う命令を受けて調査をしていた。そして犯人を特定できたと言うのでリンディは、報告書を読んでいたのだった。

リンディは報告書の首謀者リストを見た。ソコニハ、リンディには信じられない名前が載っていたのだった。

「そんな馬鹿な、今回の首謀者はグレアム提督と、私の息子のクロノ・ハラウオンですって。」

私は、信じたくなかった。自分の息子がこんな大きい事件の首謀者になっているなんて。」

私は、結果報告を、総帥に伝えた。

リンディｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そのころ地球では、クロノがグレアムと連絡を取っていた。

三人称ｓｉｄｅ

「グレアム提督まもなく八神はやては、闇の書の管制人格とどうかします。」

「そうか、ついにかそうだ我々の最大の邪魔者である高町光はどうしている?」

「ああ、奴なら管制人格が出るまで、動かないようですよ馬鹿な男ですよ管制人格まで手に入れよとしているようですよ。」

「では、そろそろ私は闇の書を回収してきます。」

クロノは飛び去っていったのだった。クロノは知らなかったのだ既に管制人格は覚醒前に光たちと手を組んでいたのだった。マテリアルズのおかげで。

クロノは現場に着いたとき驚いていた。

「何故だ貴様ら潰しあっていないんだ。」

「それはなクロノ俺たちは、既にお前たちの野望を止める為に仲間になったのさ。

「行くぞみんな」「クロノ君受けてみてこれが私の全力全開のスターライトブレイカー」

「雷光一閃プラズマザンバー」「響け終焉の笛ラグナロクブレイカー」

なのはたちのトリプルブレイカーがクロノに直撃をした。」

「うあああああああ」

クロノは悲鳴をあげていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

中編に続く

なのはたちのトリプルブレイカーの直撃を受けたクロノだった。
だがクロノは、トリプルブレイカーを、耐えていたそのクロノを、動かしている原動力は、クロノが抱いている高町光への嫉妬や恨みの負の感情だったのだ。

三人称ｓｉｄｅ

「何故なんだ、なのはやフェイトやアリシアは、何故奴を慕うんだ。奴は、単に親から貰った力を欲しかったんじゃないのか？」

「そして、本当は両親を、殺したのは、貴様じゃないのか？」

クロノの発した言葉に、なのはが反応した。

「！！　クロノ君何で、そんな言い方するの？」

なのはが、続けて喋りだそうとした時、光が喋りだした。
「クロノ確かに僕は、両親を、殺したのかもしれない。」

「光君そんな事ないよ光君は、光君のお父さんやお母さんを殺してないよそれは、私がそう言って上げれるよはっきりと。」

なのはが光に伝えた。

「でも両親の死ぬ切欠は、僕が作ったんだからクロノが言うように僕の両親を殺したのは、僕なのさ。」

「光君」

なのはが、悲しい目で光を見つめていた。

「それでクロノ君は、僕をどうしたいんだ？」

「僕を殺せたら満足なのか？」

光がクロノに質問をする。

「そうだな、貴様をボロボロに出来るんなら許してやってもいいぞ。」

「わかった」

「！！　やめて光君。光君だけのせいじゃないから私もっ。」

なのはの言葉を聞いた光は、なのはに言った。

「なのはいいんだここは僕を信じて。さあやれよクロノ。」

「行くぞ高町光！！」

クロノは、光に攻撃を開始した。

バキッ　ベキッ　ボキッ

クロノの攻撃で、無防備の光の両手両足は、折られていき最後の一撃を入れようとした時、クロノの体に異変が起きたのだった。

光と、クロノを見守るなのはたち。

「ねえ、なのは早く光を助けないと、死んじゃうよ。」

フェイトは、一方的にクロノにやられている光を見て、なのはに言った。

「私は行かないよフェイトちゃん。私は、光君を信じてるから。」

「なのは」

クロノの最後の一撃が、光に、入る寸前にクロノが苦しみだしたのだった。

「この感じはまさか、奴もこの世界に着たのか?」

その時、光を守るように現われたのは高町直哉と、」アスベル・T・ハラウオンだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

後編に続く

グレアムの野望と闇の書の闇の覚醒後編

高町光ＶＳクロノ・ハラウオンの戦いは一方的に攻撃され続けていた光その時、アスベル・Ｔ・ハラウオンと、高町直哉が現れ、光を救出したのだった。

直哉ｓｉｄｅ

「まさか別世界でまた貴方に会うなんて思いませんでしたよ。

「我もだよ、我が弟直哉よ。」

今度こそ完全に倒しますよダークプリンスいや、佐谷飛鳥勝負だ兄さん。」

こうしてダークプリンスＶＳ高町直哉の戦いが、始まったのだった。」

直哉ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

私は、光君を助けてくれた、人のところに行き話を聞いた。

「光君を助けていただきありがとうございます。ところで貴方たちは、何者なんですか？」

なのはの質問に、アスベルは答えたのだった。

「君になら、もう話していいだろういいかいよく聞くんだよ。」

「はい」

「まず俺たちはこの世界の人間ではないんだ。」

「え、ええーそれはどういうことですか?」

アスベルの答えを聞いて驚くなのはだった。

その時、光が気が付き目を覚ました。

「光君よかったよ。」

「痛いよなのは。」

なのはは、嬉しさの余り光に思いっきり抱きついていた。

「あ、光君ごめん私たら・・・ポ・・」

「ごめんね人が見てるのに。」

私は、アスベルさんの存在を忘れていました。

「なのはあの敵を倒せるのは君と直哉さんだけだガッテスハートなら直哉さんを助けること出来るはずだ。なのは頼んだよ。」

私にそう言って、光君はまた気を失いました。

「アスベルさん光君を、お願いします。」

「ああ、任しておけ。」

私は、光君のアカシックハートを預かりレイジングハートと融合させ、ガッテスハートにし、直哉さんのところに向かいました。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方ダークプリンスＶＳ高町直哉の戦いは、一進一退の攻防が続いていた。

三人称ｓｉｄｅ

「さすがだな直哉一人で我をここまでダメージを与えるとはな。だがこれまで以前は、お前たちの愛の力で我を倒したが、ここは別世界だお前の愛する者はいない。」

「クッ、どうする確かにここは自分の世界じゃないけど、お前は必ずお前を倒すダークプリンス。

その時、蒼色と桜色の不死鳥の形をした砲撃がダークプリンスに直撃したのだった。

「ぐおおお何だこの攻撃は、何故だ我がこんなちっぽけな砲撃での一撃でこれほどのダメージを与えるとは、誰だそこにいるのは？」

「私だよ」

なのははダークプリンスの前に姿を見せた。

「また貴様か、高町なのは貴様はやはりあのときに、殺すべきだったな。あの時の祭りのときにな。」

「！！　あの時の祭りの時ですって、まさかあの時光くんの両親を殺された時のことですか貴方が言っているのは。」

なのはがダークプリンスに問いかける。

「ああ、その通りだ」

ダークプリンスはそうなのはの問に答えたのだった。

なのはは、答えを聞いたとき無我夢中にダークプリンスに攻撃を仕掛けたのだった。

「貴方のせいで光君の家族がバラバラになったなんてわたしは許せない。

なのはがダークプリンスに攻撃していると、突如なのはに向け攻撃が飛んできたのだった。

そしてダークプリンスの周りに数人の男たちが、現れた。

「ダークプリンス様お迎えにあがりました。さあ帰りますよ。」

「えーまだ遊びたいよ。」

「駄目ですグレアム様の言いつけなので。」

「分かったよ。」

ダークプリンスと男たちはどこかへと消えていったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

その後（前書き）

今回は説明と言うことで会話はなしですのですみません

その後

闇の書事件はグレアムによる反乱により事件は、長期化していた。

あれから半年後
なのはと光は時空管理局で最重要保護指定を受け、ミッドチルダで.
生活していた。

一方グレアム元提督は、地球圏で、シャアと結託シャアグレアム連
合軍対時空管理局の構図になっいた。

グレアムは闇の王子で、あるダークプリンスに自分の弟子であるク
ロノ・ハラウオンのを体を与え、グレアムは、闇の書の力を得てい
たのだった。

はやての魔道書はダークプリンスの影響を受けなくなっていたので、
夜天の書に戻っていた。

そして、管制人格にはリィンフォースと言う名がつけられていたの
だった。

果たして時空管理局は、グレアムの野望を阻止できるのか?

そして、ダークプリンスに、囚われたクロノの運命は?

続く

シャアの宣言

ここは、時空船アースラの中である。

今アースラは、極秘任務のために、ミッドチルダに向かっていた。

その任務とは、高町光と、高町なのはの護送任務だった。

三人称ｓｉｄｅ

「ごめんなさいねなのはさん光さん。」

「いえ、リンディさんたちのせいではないですので、気にしないでください。」

「こうなったのは」、僕が、あのリングをなのはに使わせたせいですし、ごめんねなのはこんなことになって。」

そうあの時光がなのはに渡したリングこそロストロギア指定される物だったのだ。

そのリングの名前は、エクシードリングと言う。

「光くん謝らないで私は気にしないから。」

そのころ地球圏では、シャア・アズナブルとグレアムの密談が行われていた。

「なるほど分かりましたグレアムさん我々は、あなたたちに協力しましょう。」

「ではすぐ協力してくれ。」

「それは出来ませんこちらの条件を、受けていただけるのならいいですがね。」

「何だねその条件とは?」

「それは」

こうしてシャアと密談は終わりそれぞれ動き始めたのだった。

そしてなのはと光は、時空管理局地上本部に護送されたそこで二人は、総帥代行の三提督に会う予定だった。

そして、二人の地上本部での護衛は、レジアス中将がしていた。

「何故わしがこんな小僧たちの護衛をせねばならんのだ。」

レジアスは不満を漏らしていた。

そんなレジアスを見ていたなのははレジアスに対し怖い人と思っていた。

二人が提督室に入った時、アラームがなった。

その時レジアスは、部下から地球で大きな動きがあったという報告を受けたていた。

そのころ地球では、シャア・アズナブルが地球全体に宣戦布告を宣言したのだった。

「私は、ネオ・ジオン総帥のシャア・アズナブルである。我々は地球人全員に罰を与える者である。我々は手始めに地球にアクシズを落とす予定である.」
時空管理局よ私を止められるな止めて見たまえ。」

そして、シャアの宣戦布告は終った。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

地球寒冷化作戦

最重要保護対象となったなのはと光は、ミッドチルダの時空管理局地上本部に来ていた。

そこで、二人は総帥代行をしている三提督の一人と会う直前に事件が起こったのだった。
その事件とはシャア・アズナブルによる地球寒冷化作戦を決行するという宣言だった。

三人称ｓｉｄｅ

「何が、隕石落としをするだと、笑わせおって人間ごときがそんなことはできるものか、まして未開次元の世界の人間に。」

レジアスはそう言って部屋を出て行った。
そして、レジアスが出て行った後、部屋に一人の女性が入ってきた。

「初めまして、私は、時空管理局総帥代行を務めている三提督の一人のミゼット・クローベルです。」

「よろしくお願いしますね。別次元からの来たお二人。」

「！！」

そして、光となのはの体が、変化をし始め、その中から、出てきたのは、高町直哉と、アスベル・Ｔ・ハラウオンだった。

「何時から気づいていたんですか？ミゼット提督？」

「いえ、ただあの子リンディにしては、こちらの言うことを聞きすぎでしたので、あなたたちに、言ってみたんですよ。こちらでもあなたたちのことを知っていたので。」

「なるほど恐ろしいお方だあいかわらず。」

直哉とミゼットが話し合っているころ地球では。

地球では、誰もシャアの言葉を信じていなかっただ数人を除いて。

「光君私たちで隕石を止めよう。」

「でも、なのは、僕たちじゃ宇宙にいけないよ。」

なのはと光は、自分たちの無力さを痛感していた。

その時、なのはたちの元に、通信が来たのだった。

「君たちが高町なのはちゃんと、高町光君か？。」

「はいそうですがあなたは？。」

「ああ、すまない僕は、アムロ・レイと言うものだ。今から、君たち二人を、迎えに行く一緒にシャアの野望を止めてくれないか。」

なのはと光は、少し考えてこう言った。

「わかりましたアムロさん僕たち協力します。」

「ありがとう」

なのはたちがそう言ったときフェイトとアリシアがなのはたちに喋った。」

「なのは、危ないよこれはもう私たちに対応できる事件じゃないよ。」

「光さん止めてくださいもしも貴方になにかあったら、私。」

フェイトとアリシアは、必死に二人を説得していたが、その時ララがこう言った。

「フェイトお姉ちゃんアリシアお姉ちゃんもう無理だよ。もうこの二人を止めるのは。だから、二人とも約束してください必ず帰ってくると。」

「ああ、約束するよララ。」

「私もするよララちゃん。」

そして、白い戦艦が、やって来てなのはと光を乗せ白い戦艦は、シャアの待つ宇宙に向け出発したのだった。

果たしてなのはたちはシャアを止められるのか？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

なのはと光の代わりに、ミッドチルダに来ている直哉とアスベルは、ミゼット提督と話をしていた。

「それで、別次元出身のあなたたちが、どうしてここに来たのですか？」

「決まっているここに、俺が倒さないといけない奴が来るからだ。」

直哉は、ミゼットの質問に答えた。

「それは、グレアム元提督に力を与えているダークプリンスたちですか？」

ミゼットは、直哉に質問をした。

「ああ、アイツとは、俺が倒さなきゃいけない敵なんだ。」

その時、地上本部にてきが、現れたのだった。

直哉とアスベルは敵が現れた場所へ向かった。

直哉たちが向かった場所に現れた敵とは？。

「！！　何故だ何故貴様がこちらの世界にいるんだお前は確かに僕たちが倒したんだ。何故貴様がいるんだーーバスダーー。」

直哉たちの前に現れた敵とは、かつて直哉たちの世界を襲った機械生命体ゾンダーのボスバスダーだった。

「それはな直哉俺がそいつを復活させたんだよ。」

どこからか声が聞こえて来た。

そして、超えの主が姿を現わしたのだった。

声の主は、ダークプリンスだった。

「お前が、バスダーを蘇らせたのか？」

「ああ、そうだ俺の魔力で蘇らせたんだ。

ダークプリンスは、自慢げにげに言う。

「なるほど．そういうことかお前を倒したらこのバスダーも消えるんだな行くぞ！　アスベル。」

「ああ」

こうして、二度目の悲しい兄妹対決の幕は切って落とされたのだった。

一方シャアの野望を阻止す為に地球連邦軍の戦艦ラーカイラムに乗ったなのはと光は。

二人はラーカイラムの中を、アムロの案内で歩いていた。

「アムロさんアムロさんと、シャアアズナブルの関係は、やはりライバルですか？」

光がアムロに聞いた。

「ああ、俺と奴の関係は、一時は味方だった時もあるが、基本は敵同士だったな。光が言ったように、俺と奴は永遠のライバルなのかも知れないな。」

そんな会話をしていると、艦長室に着いた。

なのはと光が中に入ると、艦長がなのはたちに気づき、挨拶をした。

「ようこそ私は、ブライト・ノアだ。

私は、高町なのはですよろしくお願いします。」

「僕は・高町光ですよろしくお願いします。」

「うむ君たちには期待している。」

二人は、艦長室を出ようとするとアムロが言った。

「後で、ブリッチに来てくれ。」

「はい」

二人は艦長室を後にした。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

宿命の戦い

直哉ｓｉｄｅ

俺はダークプリンスに向け、攻撃魔法を放った。

「おいおいお前、俺ばかり相手していいのか？」

ダークプリンスが直哉に、問いかけたのだった。

「ああ、バスダーの相手はアスベルが相手しているからな。俺はお前の相手を存分にしてやるよダークプリンス。」

「そうか、残念だが直哉よ私が、相手するのはお前ではない。」

「何！」

「そういうことだからお前は、こいつらと遊んでな。」

ダークプリンスは自分の分身を作り出し、分身を直哉と戦わせて、ダークプリンスは、地球に向かったのだった。

「くそー早くアイツを追いかけないと。」

俺は、焦っていた。

直哉ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方宇宙では、シャアの部下の二人が、ＭＳヤクトドーガとＭＡα

アジールに乗って、ラーカイラムを強襲していた。
アムロはνガンダムでその2機を相手していた。

三人称ｓｉｄｅ

「チッやるなこいつ。」

「そら落ちろよガンダム！」

「このままじゃ、アムロさんが落とされちゃうよ光君。何とかして、助けること出来ないの？」

なのはは光に聞いた。

「なのは助ける手段あるんだけど危険だよ？」

「それでも私はやるよ光くん。」

「分かった今から僕がなのはの機体を、出すからね。」

「うんわかったよ光くん。」

「これ以上は不利か。」

その時、アムロは見た謎のＭＳが自分の援護に来たのを。

「なのは今だ、スターライトブレイカーを撃つんだ。」

「わかったの光くんこれが私の、全力全開のスターライトブレイカ

ーー。」

なのはの放ったスターライトブレイカーは、なのはの乗っている機体の最強武装のドラグーンフルバーストになりギラドーガとαアジールを撃墜したのだった。

「君たちまさかなのはちゃんに光くんなのか？」

「はいアムロさん。」

アムロの問に光が答えた。

そして、三人は、ラーカイラムに戻りなのはたちのＭＳのことを話していた。

「アムロさんなのはと僕が乗っていたＭＳはストライクフリーダムと言います。」

「ストライクフリーダムか、いい機体だ。」

アムロは、そう言った。

ラーカイラム決戦の地に着いたのだった。

そして、今アムロｖｓシャアの戦いが、始まろうとしていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

宿命の戦い後編

ついに、アムロｖｓシャアの宿命の戦いが今始まった。

三人称ｓｉｄｅ

「何故だシャア、一時は俺たちと共に戦った男が何故、地球潰しをする？」

「もう地球が持たんのだこの業は誰かが背負わなければいかんのだよアムロ。」

「それはエゴだよ。」

「そういうならアムロ今すぐ人類に、英知を与えてみろ。」

アムロとシャアが戦っているとついに、アクシズは地球落下コースに入ってしまったのだった。

そのアクシズ落下を止めるためにラーカイラムから発射されたのは、核ミサイルだった。

だが、アクシズは核ミサイルを耐え、地球に迫るそして光となのははそれぞれのＭＳに乗りアクシズを止める為に出撃したのだった。

「行くよなのは」

「うん行こう光くん」

なのははストライクフリーダムに乗り光は、ダブルオーライザーに乗り込みそれぞれ出撃をした。

「アムロどうやら核ミサイルでのアクシズの破壊は失敗したようだぞ。」

「いやまだわからないぞシャアあれを見てみろシャア。」

「何？　何だあのＭＳは」

アムロが指を指す方向を見ると、ストフリとダブルオーライザーが移動していた。

シャアは、驚きを隠せないでいた。

「アムロあの機体は何だ？」

「あなたでも驚くことがあるんですね、あの機体は僕たちの本当の切り札にして、最強のガンダムたちだ。」

「！！　あれがガンダムだと。」

シャアは、アムロの言葉を聞いて、驚いていた。

「よし行くよなのはトランザム起動。」

「スターライトー

ブレイカー」
「トランザムライザーー」

その時運悪くダークプリンスが二人の砲撃の斜線上に現れダークプリンスは消滅した。

「こんな終り方嫌だーーーー。」

と言いながら消滅した。ダークプリンスが消滅したことにより、ミッドチルダの脅威も消えていった。
そして、二人の砲撃は、見事アクシズを、破壊に成功しこの戦いに終止符を打ち。

その後・ネオジオンと地球は見事平和条約を、結び平和が訪れた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

二人の結婚式

あれから数年後なのはと光は小学5年生になっていた。

そんなある日なのはたちは、光が福引で当てた賞品の取り合いをしていた。その賞品とは二人で結婚式の経験が出来る券だった。

その券を使えば、1日とはいえ、光のお嫁さんにでいられるので、女の子たちは、燃えていたのだった。

その女性の中で燃えていたのは、なのはとアリシアとアリサだった。

三人称ｓｉｄｅ

「駄目なの、これはいくらアリサちゃんやアリシアちゃんでもゆずれないの。」

「別に、いいじゃないなのはは光と一緒に住んでんだし、一日ぐらい光を貸しなさいよ。」

「そうだねなのはちゃん少しはお姉ちゃんのいうこと聞きなさい。」

三人は言いたい放題言っていた。」

その三人のやり取りを見ていたはやては、光にちゃちゃを入れてい

た。

「光くんもなかなかもててるやんか。」

と言いながら光に、ちゃちゃを入れるはやて。

マテリアルズの三人も、光が、もてることに、少し苛立ちを覚えていた。

「この感情は一体？　マスターが人気なのは、私たちにとっても、嬉しい事なはずなのに、何故こんなに胸が苦しいのか？

「マテリアルズも少しずつだが、感情が芽生えてきていた。

そしてなのはとアリサとアリシアの勝負の結果、見事勝利を掴んだのは、なのはだった。三人の体からちらほら血が出ていた。

その血を見てすずかは襲い来る衝動を押さえつけていたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして、次の日結婚式場に行くと光となのはの前には、本当の結婚式と間違えるほどの人たちがいたのだ。

式が始まる前光はタキシードに着替えなのはが来るのを待っていた。

「うあああああ俺のなのはがーーーーーー結婚なんて。」

恭也は、正常ではなかったが、家族全員これは病気と割り切って、無視していた。

そして、なのはがウェディングドレスを着て現れた。

光ｓｉｄｅ

僕は、なのはのウェディングドレス姿を見たとき僕は、もう一度なのはに惚れました。

「ねえ光くんどう、私綺麗？」

「うんとても綺麗だよ丸で女神様みたいだ。」

僕が感想を言うと。

「きゃはありがとう光くん。」

そう言ってなのはは光に抱きついたのだった。

そして、式が始まり、僕たちは神父さんの前まで行き、神父さんの問に答えた。

「汝高町なのはは獅童光を生涯愛すると誓いますか？」

「はい誓います。」

「汝獅童光は、高町なのはを生涯愛すると誓いますか？」

「はい誓います。」

「それでは愛の口付けをお願いします。

「そして、僕となのはは永遠の愛を誓う口づけをした。」

口付けをした時雄たけびが聞こえた。

そして無事結婚式が終わり僕となのはは幸せだった。あんなことが起きるまでは。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

星光ｓｉｄｅ

今日は、私と雷刃はマスターに頼まれて、今はやてさんの家に向かっています。

「ねえ、星光私たち何しに、はやての家に行くんだったけ。」

「雷刃私たちはマスターの依頼ではやてさんの家に行くんです。」

「だからその依頼って何なの？星光は聞いてるんでしょ？マスターからさ。」

「それは・・私は、マスターからは行けばわかるとしか聞いていないのです。」

「ふーんそれじゃ早く行こう星光。」

「わかりました行きましょう雷刃。」

こうして私たちははやてさんの家に向かいました。

星光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方マテリアルの中でお留守番の統べる王はなのはたちと、ゲームセンターで遊んでいた。

三人称ｓｉｄｅ

「しかしマスターなんでわらわだけ、はやての家に行ってはいけないのじゃ？」

「それは、マテリアルののなかで、一番強い統べるがいてくれたほうが心強いしね。ねえなのは。」

「そうだよ統べるちゃん。」

（本当は統べるがいると本気を出せなくなるからなんだよ守護騎士が）

光は、本当のことを、心の中で、叫んだのだった。

そして、3人が、街を散策していると光は青い髪の少女に声をかけられたのだった。

「久しぶりじゃの伸也。元気じゃったか？」

「うんこの声は、まさか、ウェンディなのか？どうしてここに？それと今の僕は、伸也じゃない、光だ。」

「すまんすまんそうじゃったな。」

「ねえ光くん、この子は誰？」

「わらわも気になるぞ教えよマスター。」

なのはと統べる王は目の前の女の子のことを光に問い詰めていた。

「わらわはウェンディじゃよろしくなのじゃ二人とも。」

「私はなのはだよ高町なのはだよよろしくね。」

「わらわは、統べる王じゃよろしくなのじゃ人外のものよ。」

「ほうこやつはわらわが人間でないことを知っておるのか。」

そのころ星光達は、はやての家で談笑していた。

「へえーそうなんですねはやてさんとマスターてそれが初めての出会いだったんですね。」

「そうやあの時の光くんかっこよかったわー。」

その時星光の胸に痛みを感じていたのだった。

「またこの痛みですか、まさか私、マスターを好きになってしまったの？いけない私は、そんな感情は入らないのだから。」

何故か乙女になる星光だった。

シグナムとヴィータが部屋に入り星光と、雷刃に勝負してくれとたのんだのだった。

「うんいいよ相手してあげるよ。」

雷刃は、勝負を受けた。

こうして、雷刃ＶＳシグナムの模擬戦が開始されたのだった。

そのころミッドチルダの医療機関では、クロノの事情聴取が行われていた。尋問者はクロノの母親リンディが務めていた。

「ではなたに聞きます。あなたはグレアム提督と共に、今回の件に関わりましたね。」

「え、母さん一体どういうことなの？何で？僕が犯罪者扱いされてるの？」

「あくまで、喋らないんですねいいでしょうこの件が片付けるまで、あなたとは親子の縁を切ります。それでは。」

リンディは、病室を出て行った。

「母さん待ってよ母さんてばー。」

クロノの叫びは病院に響きクロノは看護師に、怒られていた。

雷刃とシグナムの模擬戦は、一撃だった互いに、最強の技の撃ち合いで、決めようと言うことになり、互いに準備をしていた。

「いくぞ！！　紫電一閃」

シグナムは、レヴァンティンを使い、得意の紫電一閃で、勝負に出たのだった。

対する雷刃は、自分のデバイスサンダーフォースを砲撃モードにし、砲撃魔法を放った。

「行けーーーアカシックバスターーー」

ヴィータが雷刃の使った魔法を見て驚きの声をあげていた。

「おいなんでお前たちが、光の魔法使えるんだよ。」

「ああ、私たちは契約者といる時は、ある程度のことならマスターの考えとか、マスターの魔法とかも使えるのですよ。」

星光はそう言ってヴィータに教えていた。

「お前ら何でもありだなだけど心強いよお前らは。」

「ありがとうございます私たちは、マスターが、あなたたちといる限り、仲間です。」

星光とヴィータがはないていると、雷刃とシグナムの模擬戦は終わり、結果は、雷刃の勝利だった。

「やったー勝ったぞ。」

雷刃は無邪気に喜んでいた。

「私の完敗だ。」

シグナムは、少し落ち込んでいた。

こうしてマテリアルｖｓ守護騎士の模擬戦は終わりを告げたのだった。

「おいウェンディあんたほんと何しに来たんだよ

「まあ慌てるではないそれは次回で、語るのじゃそれまで待て。」

そして、光の前に、現れた女神ウェンディの目的とは何なのであろうか

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

女神降臨の訳（前書き）

今回は前回より短いです
すいません

女神降臨の訳

光はなのはと統べる王と街に、遊びに来ていた。
そして、光は声をかけられ、声のしたほうに顔を向けるとそこには、光をこの世界に転生させた女神ウェンディがそこにいたのだった。

三人称ｓｉｄｅ

「わらわが、ここにきたわけは、もうすぐこの時代に光となのはの娘が来るからじゃ。」

「何だ僕となのはの娘が来るのか・・・娘？えーーーー。」

光となのはは衝撃を受け絶叫したのだった。

「その娘の名前は、高町ヴィヴィオと言う子じゃ。」

わらわの能力でもうすぐお主達の元に来るからのヴィヴィオをよろしく頼むのじゃ。」

ウェンディどこかへ消えて行ったのだった。

ねえ光くん、あの人の言った事ほんとに、私たちの娘が来るて本当なのかな？」

「まだわからないけど、何かあるて思ったほうがいいと思うよなのは。」

「うんわかったよ光くん。

そして、三人は家に帰っていったのだった。
そして、その夜なのはと光は突如現れた巨大な魔力を感じて、その場所に向かった。
そこでなのはたちが、見たものは卵型の機械に教わられている少女がいた。
「なのはあの子を助けるよ。」
「うん光くん」
「アカシックバスター」
「ディバインバスター
三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ
？？ｓｉｄｅ
「私は今、ママと一緒に、ロストロギアを輸送中にガジェットに襲われてしまい、ロストロギア時を駆ける翼の起動により私と私の周りに、いたガジェットと共に、時間移動をしてしまったのです。」
「ヴィヴィオーー。」
ヴィヴィオと一緒にいたなのはが叫んでいた。

「私は、ロストロギアの光が、消えて目を開けるとそこは、昔パパとママが話してくれたままの場所に私はいた、私と一緒に飛ばされてきたがガジェットが起動し始め私を、襲ってきました。その時、ガジェットに向け蒼色と桜色の砲撃が飛んできました。」
「私が、砲撃が飛んできたほうに顔を向けるとそこには、私のパパとママがいました。

？？ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

娘

三人称ｓｉｄｅ

光となのはが謎の少女を助けた後少女は光たちに近づきこう言った。

「パパママ、助けに来てくれてありがとう。セイッグリットハートモードリリース。」

少女が言うと少女の体が、光達と同じくらいになっていた。

そのころ未来世界では、なのはが、自分の夫である光に連絡を取っていた。

「光君どうしょうヴィヴィオがーー。」

「落ち着くんだなのはヴィヴィオが消えたということは、こちらでもわかっているしロストロギアの痕跡を調べればどこに飛ばされたかはわかるから一度六課に戻ってきて。」

「うんわかったよ功勲」

なのはは六課に帰還したのだった。

「そういえば何で、ヴィヴィオと同じくらいなの？あ、わかったパパとママ若返りの魔法使ったんでしょ使わなくてもいいのに。」

「ところで君の名前はヴィヴィオでいいのかな？」

「そうだよどうしたの？パパ」

「ヴィヴィオ・・・あ、まさか。」

なのはは思い出していた昨日会った少女ウェンディの言葉を。

「もうすぐお主たちの娘ヴィヴィオが来るヴィヴィオを頼むぞ。」

「ヴィヴィオよく聞いて僕たちは確かに僕たちの娘で間違いないかもしれないけど君はどうやら時間移動してきたみたいだね。」

え、それどういうこと？パパ。」

ヴィヴィオは光に、尋ねた。

「ヴィヴィオ君は今過去の時代に来てるんだよ。」

「えーーー」

ヴィヴィオは自分の立場を理解した時、驚きの声をあげていた。

「じゃあ私はどうやったら元の時代に、戻れるのパパ？」

ヴィヴィオは不安そうに光に聞く。

「大丈夫だよ僕たちがついてるからね、ねえなのは。」

「そうだよヴィヴィオ。」

ヴィヴィオは二人に抱きついて来た。

「苦しいよヴィヴィオ。」

二人がそういうと。

「亜、ごめんパパママ」

と言ってヴィヴィオは謝っていた。

そして、三人は家に帰っていった。

そして、光は家に帰って、士郎と桃子に光となのはが魔法を使えることを打ち明けたのだった。

「父さん母さんちょっといい？話があるんだ。」

「どうした？光。

「何かしら？」

士郎たちはリビングを出てなのはたちの部屋に行った。そこで士郎たちが見たのはヴィヴィオの姿だった。

「光この子は？」

「父さん母さんこのことを話す前に、僕となのはの事を聞いてくれない？実は。」

と光が魔法のことを打ち明けようとしたら、士郎がこう言った。

「お前たちが、私たちに隠して足るのは、魔法のことだろう。」

「！！」

士郎がそういうと光と、なのはが驚いていた。

「父さんどうして魔法のこと知ってるの？」

「それはな、光となのはが産まれた時光の本当のお父さんの刹那から私たちは聞いていたんだ。」

「そうだったんだ本当のお父さんが。」

「それで光その子は？」

「ヴィヴィオ挨拶して。」

「はーいパパ私は高町ヴィヴィオです。初めましてお爺ちゃんお婆ちゃん。」

ヴィヴィオが挨拶すると士郎と桃子は、気を失っていた。

「なるほどヴィヴィオちゃんは、未来の光となのはの娘なんだな。」

士郎は気がつくとこの事態に落ち着いて話を聞いていた。

それで光なのは二人は、ヴィヴィオちゃんを元の時代に戻してあげたいんだろう。」

二人は、士郎の言葉に頷くとヴィヴィオが、二人に抱きついた。

「ありがとうパパママ。」

「ヴィヴィオちゃんも帰る日が来るまで家で暮らしなさい私たちは家族なのだから。」

士郎はそういって桃子と一緒に部屋を出て行った。」

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そのころ未来世界からヴィヴィオを追いかける一人の女性が大量のガジェット共にこちらの時代に来ていた。

果たしてこの女の正体とは

続く

家族でのお出かけ

ヴィヴィオがこちらの時間軸に来てから一週間が経ち、ヴィヴィオを返すには、ヴィヴィオが持っていたロストロギアの調査が必要だった。

調査にはプレシアさんに、お願いしていた。

今日は、ヴィヴィオは、ヴィヴィオの本来の家族光となのはとフェイトとヴィヴィオの４人で、お出かけをしていた。影でマテリアルズに、ヴィヴィオと光の護衛の任務が来ていたのだった。

三人称ｓｉｄｅ

「ねえヴィヴィオ今日は、どこに行きたいの？」

フェイトがヴィヴィオに質問をした。」

「うーんとそうだなヴィヴィオ街に行って、お買い物したいな。」

「じゃあヴィヴィオ行こうかお買い物に。」

なのはがそう言うと。

「やったーー」

無邪気に喜ぶヴィヴィオ。

光は、こういう家族もいいなあと思い始めていた。

そして、ヴィヴィオたちは街に着き、買い物を始めていた。
その家族を背後から見つめる3つの影その正体は、マテリアルズの3人だった。
「いいなあ僕もマスターたちとお買い物したいよーー。」
「不満をこぼす雷刃だった。
「静かにしろ雷刃わらわだってマスターとの買い物を我慢してるんじゃお主も我慢せい。」
珍しく統べる王がまともな事を言ったなあと思っていた星光だった。
そして買い物が、終りかけたその時、光達はアリサとすずかに出会うのだった。
「あら光になのはとフェイトじゃないあんたたちも買い物に来たの？」
アリサがなのはたちに聞く。
「うんそうだよアリサちゃん。」じゃあ私たち行くねまだ買い物の途中なんだ。」
「あら、そうなの?せっかく一緒にお茶しようと思ったのに。」
その時すずかがヴィヴィオの存在に気づいてしまったのだった。
「あらあなたお名前は?私は、月村すずかよろしくね。」
「私は高町ヴィヴィオです。」

「ヴィヴィオちゃんて言うんだねそれでお父さんとお母さんはどこにいるの？」

「パパとママならここにいるよ。」

ヴィヴィオは光となのはを指を指した瞬間世界は凍ったのだった。
その静寂を壊したのはアリサの怒りに満ちた声だった。

「光ーーーーーーーーあんたなのはに何したのよあんたでも許せないわーー。」

「待ってアリサこれには深い訳があるんだーー。」

「問答無用。」

「ぎゃあああーー」

街中に光の悲鳴が木霊したのだった。

光を叩いていたアリサを見て雷刃と統べる王は、アリサと一緒に光を叩いていた。

なのはとフェイトはこの状況を見て苦笑いしていた。
そしてヴィヴィオは、何でこうなったかが、わからず唖然としていた。

そしてやっと誤解が解け、なのはたちは家に帰っていたその時、光にプレシアさんから調査が終ったという知らせを受け光たちは、プ

レシアさんの元に向かったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

プレシアｓｉｄｅ

私は、ヴィヴィオちゃんから借りて翼型のロストロギアを調べている最中に私はあることに気がついた。

「おかしいわねいくら調べてもわからないなんてそうだわダメもとで、聖王のデータをこの翼に入れてみましょう。」

そして私が、翼にデータを入れると、翼が急に光をだしはじめロストロギアが起動したのだった。

私は急いで光君に連絡をしたのだった。

プレシアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

最悪の敵現る

なのはたちは、プレシアから連絡を受け、プレシアの元に向かっていたその時、大量のガジェットと一人の女性が出てきた。

三人称ｓｉｄｅ

「あらー聖王様こんなところにいましたかっずいぶんと探しましたわー。」

「！！　どうしてあなたがここにいるの？」

ヴィヴィオが聞くと。

「さあ何故でしょう。」

と女性は答えた。

「ヴィヴィオ下がって。」

なのはが言った。

「あなたは必ず私たちが守るから。」

なのはとフェイトは、ＢＪを展開させ戦闘態勢に入ったのだった。

「なのはママフェイトママ。」

二人を心配そうに見つめるヴィヴィオ。

そして光は、（おいおいあいつナンバーズの眼鏡の嫌な女じゃないか、たしかクワットロだったかな？何であいつがここに来るんだよ）。

「まあどちらにしろあのクワットロが、将来俺たちの前に現れるのは確実だからここではデバイス融合は使えないぞ。どうする？なのはフェイト。」

と考えていた光そしてマテリアルズに、任務を伝えていた。その任務とは、マテリアルズに、プレシアさんからあのロストロギアを預かりそれを持ってくる事だった。

そして、なのはとフェイトは大量のガジェトを倒していきました。

「ディバインバスター」

「プラズマランサー」

二人は、あっという間にクワットロだけを残し後は全滅させました。」

「さすがですね、ですがあなた達の力では私は絶対勝てませんわよ。」

強気の発言をするクワットロ。

「「やってみなきゃわからないでしょ。」」

なのははそう言ってクワットロにスターライトブレイカーを放った。

「行けー！！　スターライトブレイカー。」

そのころマテリアルズは、プレシアの家に着いた。

「あら？貴方たちだけ光君たちは？」

マスターたちはヴィヴィオを狙ってる敵と交戦していてヴィヴィオを元の時代に戻す為それを私たちに！！」

その時星光は意識を失ってしまった。」

「どうしたんだ星光？」

雷刃たちは倒れた星光を見て驚いた。

「まずいわ光君に何かあったんだわ。」

「でもマスターに何かあれば僕たちにも起きるはずなのに、同じことが。」

「それは多分あなた達の中で、星光が光君と強いリンクだったからよ。」

「とにか貴方たちは、早くこれを持って光君と合流しなさい。」

「はい」

雷刃立ちは光の元に急いだのだった。

そして、時間は戻り

なのはは、クワットロにに、ＳＬＢを放ったが、ＳＬＢはクワットロの能力で跳ね返らされたのだった。

なのはに直撃する直前光がなのはに代わりＳＬＢの直撃を受けたのだった。

「うあああああああああ。」

光は気絶してしまった。

「いやああ光君しっかりして光君。「パパーーー」

なのはとヴィヴィオがそれぞれ叫びを上げていた。」

その様子を見ていたクワットロがこう言った。

「哀れなお方ですわね自分の仲間の魔法でやられるなんてフフ」

その言葉を聞いたなのはは現実に起きた事再確認をさせていた。

「そんな私の魔法が私の愛する人を傷つけてしまうなんて、光君ごめんね私もう魔法使えないよ。

なのはは戦う気力が、無くなっていた。

ヴィヴィオは光がやられたのを見て、セイグリットハートを起動させ戦闘態勢に入っていた。

「あらー聖王様もしかして私と戦う気ですか？聖王様いくらあなたでも今の私には勝てませんよ。」

不敵に笑うクワットロ。

その時、雷刃たちが戻ってきて現場を見て、唖然としていた。統べる王が我を取り戻し、ヴィヴィオに時を渡る翼を渡して、ヴィヴィオの中にある聖王の血が翼を起動させヴィヴィオはその翼を、クワットロに着けクワットロをどこかの時間にほうり投げたのだった。

翼を使ったことによりヴィヴィオは、自分の時代へは、返れなくなってしまった果たしてヴィヴィオ親子の運命は？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

傷跡

あの悪夢の事件から2ヶ月が過ぎ季節は春になっていた。
実は、なのはは光はあの事件が起きる前に時空管理局員になっていたのだった。
なのはと光は休暇中なのはと光は遭遇してしまい大怪我をしてしまったのだったその大怪我とはなんとなのはが魔法を使えなくなっていたのだった。
その原因は、自分の魔法が、自分の愛する者を傷つけたことによる精神的なショックからだった。
そして、なのはと光は、休暇を終え、ミッドチルダに向かった。
なのはｓｉｄｅ
私は今時空管理局員の武藤遊技さんと模擬戦しています。
「アクセルシューターシュート。」
「そんな弱い攻撃で俺のモンスターは倒せないぜ。行くぜ俺のターン。
「俺は俺の場にいるクィンーズナイトとキングスナイトとジャックスナイトを生贄にして、オシリスの天空竜を召還行くぜオシリスの

天空竜の攻撃サンダーフォース。」

私は回避行動を取るのを遅れてしまいオシリスの天空竜の攻撃を受けてしまった。

「きゃあああああ」

「よしなのは今日はここまでにしょう。」

「はいわかりましたありがとうございました。」

私は光君のいる病院に急いで行った。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

私が病室に行くと、フェイトちゃんとはやてちゃんとヴィヴィオがいた。

「あ、なのはお疲れ。」

「なのはちゃん魔法のリハビリどうや？」

「うんまだまだだねはやてちゃん。」

「そうかなのはちゃんうちの話し聞いてくれへんか？」

「実はうちな前々から光君にお願いしとったことがあったよそれはなうちらが部隊長になって動く独立部隊その名を、ＺＥＵＴＨて言うねん別名は機動六課やけど、ＺＥＵＴＨのほうがかっこいいやろ

なのはちゃん。」

「そうだねはやてちゃん。」

「それでなうちは部隊長は光君にしてもらいたかったんだけどうちがすることになったんやそれでななのはちゃん光君はこんなことも言ってたで。

（僕に何かあればもしかしたらなのはは魔法を使えなくなるかも知れないからその時は、頼むよフェイトはやて）

「そうだったんだありがとう光君。」

私は、改めて光君がいかに大事に思ってくれていたのかがわかり私は早く以前のような魔法が使えるようにしないといけないと決意をしました。

「それでななのはちゃんと光君には同じ部隊でしてもらうな仕事を。

「わかったよはやてちゃん」

まだ部隊設立は先の話や。」

「まずはなのはちゃんは魔法のリハビリに集中や。」

「うん」

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

日常から非日常の世界へ

この話は、この一言から始まります。

「ねえ私たちを連れて行ってよお願い。」

三人称ｓｉｄｅ

「ねえいいでしょフェイトの偽者さん。」

「アリサお願いだからフェイトの偽者て言うの、やめてよね。僕には、雷刃の襲撃者て名前あるんだから。」

「そうだよアリサちゃん。」

マテリアルズとアリサたちが仲良くなったきっかけは、マテリアルズが光となのはの代わりに学校に行きだしてからである。

「別にいいでしょう?ほんとにフェイトに、似ているんだから。」

「それでアリサ、わらわたちにお願いとは、どういうことじゃ?」

統べるが聞いた。

「あ、そうそうあんたたち私とすずかをなのはたちのところに連れて行きなさいよ。」

「それは、無理じゃな。」

「何でよ理由を言いなさいよ理由を。」

「お主たち、受け入れる覚悟があるのかマスターたちが、関わりを持つ2つの世界の真実を受け入れる覚悟を」

「お主たちは魔法が使えたら楽しいと思っていたりしてるのではないか？」

「ええ、そうよ。」

「私も少しうらやましいかな。」

「やはりお主たちは、向こうの世界には連れてはいけないのじゃ。」

統べるは、そう言い放った。

「だから何でよ？」

統べるは、光となのはの
現在の姿をアリサたちに見せたのだった。

アリサたちは統べるが見せた映像を見て、絶句していた。

「なにこの映像は、何で光が病院にいるのよ？」

「何でなのはちゃんがあんな危険なことしてるの？」

「マスターはなのはを守る為そしてなのはは、マスターを傷つけて

しまったことに絶望し一度は魔法を失ったが、不屈の心で、魔法を取り戻し始めたばかりのなのはたちに、お主たちは会って何を言うつもりじゃ？」

「二人はそれぞれ懸命に自分ができることとしてるのじゃ。

「そんなところに何も知らないお主たちがなのはのしてることを危ないからやめてなどと言うのじゃろう。それにマスターとなのはが、お主たちに、、魔法のこと伝えなかったのはマスターたちの優しさだったようじゃな。」

「何が優しさよ親友の私たちにこんな大事なことを、内緒にするなんてみずくさいじゃないなのはも光もさ。」

「そうだよ」

アリサとすずかは、自分の気持ちを統べるにぶつけるのだった。

「そうかならお主たちには、マスターたちに直接言ってもらうしかないな。」

「！　いいの統べる王？」

雷刃が統べる王に聞く。

「責任はわらわが持つ。では行くぞアリサすずか。」

「やったーー」

二人は喜んでいた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

こうして４人はなのはたちに、会うためミッドチルダに向かったのだった。

続く

日常から非日常の世界へ後編

アリサたちはマテリアルズと共に、ミッドチルダに来ていた。

三人称ｓｉｄｅ

「ここが、ミッドチルダなのはと光が、関わってるもう一つの世界ね。」

「私たちの世界に、似ているねアリサちゃん。」

「そうね」

「ところで先に、どちらに会うのじゃ？」

統べるは、アリサに聞いた。

「そうね光は、病院だしまずはなのはに会うわ。」

そしてアリサたちは、なのはの元に向かったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

私は、今日は一人で魔法のリハビリをしていると、雷刃ちゃんと、統べるちゃんがが来ました。

「あれー二人がきっ地に来るなんて珍しいねえ光君に、言われてきたの？」

光とマテリアルズは、光君が喋れない状態でも意思疎通は出来るのです。」

「今日はマスターに呼ばれたわけではないのじゃなのは。」

統べるがそう言った。

「そうなんだ。」

私はこの二人が来た訳はわからなかった。」

「じゃあ今日はどうしたの？」

私が聴くと統べるがこう答えた。

「今日はなのはにお客さんを連れてきたのじゃ。」

「私にお客さん？」

私は誰だろうと考えていると。「なのは」　なのはちゃん」

と声がした。私は、声のした歩に振り向くとそこには、私と、光君の親友のアリサちゃんと、すずかちゃんがいた。

「どうしてここにアリサちゃんとすずかちゃんがいるの？」

私は、アリサちゃんとすずかちゃんに聞いた。すると二人は答えた。

「当たり前じゃない。私たちは、なのはと光の親友だもの。」

「ありがとうアリサちゃんすずかちゃん。」

「お礼言うのは私たちのほうだよなのはちゃん。」

すずかちゃんがそう言った意味が、私はわからなかった。

「なのはちゃんと、光君が時々姿を消してた理由が聞けたからね。」

「なのはありがとうあんた今まで私たちを誰も知らないところで守ってくれてたんでしょう。」

私は二人の言葉を聞いたとき、嬉しかったもう魔法のことを隠さないでいいと思ったら私は目に涙を溜めていた。

「うわーんありさちゃんすずかちゃんありがとう。」

私たちは3人でしばらく泣いていました。

そして、私たちが光君の病室に行くと、光君は、意識を取り戻していました。

お医者さんの話では奇跡とと言われてました。

そしてなんと私自身驚いたんですが、魔力測定をしたら私の魔力ランクがＳ＋からＳＳＳ＋にあがっていました。

どうやら光君が意識を取り戻した時に、私のトラウマは封印された

みたいです。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

結婚本番

今日は3月15日である光となのはの18回目の誕生日である。
そして、今日高町なのはと、獅童光↑（光の旧姓です）　の結婚式当日である。

光ｓｉｄｅ

二人の娘であるヴィヴィオは、父親の光の控え室に来ていた。

「パパヴィヴィオだけど中入っていい？」

「いいよ入ってきて。」

「お邪魔します。うわあパパかっこいいよ。

ヴィヴィオは、光のタキシード姿を見た時の感想を言葉にだしたのだった。

「ありがとうねヴィヴィオ。そういえばヴィヴィオなのはママのところには、行ったの？」

「うん行ったよパパなのはママもとても綺麗だったよパパ。」

「そうかパパも、早くなのはママを見たいなあ」

と親子の会話をしている光とヴィヴィオだった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そのころ花嫁のなのはの控え室ではアリサすずかアリシアが、なのはと話していた。

なのはｓｉｄｅ

「まさかなのはに2回も光を取れるとは思わなかったわ。」

「一回目は光君の当てた景品の時だね。アリサちゃん。」

「そうよなのは」

「私も光さんとしたかったなあ結婚を。」

と言うアリシア。

「なのはちゃん幸せにね。」

「ありがとうすずかちゃん」

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「うわあああ俺のなのはが結婚するなんてーーー。」

会場に来てる全員がなんかこの光景前にも見たような感覚を感じていた。」

三人称ｓｉｄｅ

会場では恭也があばれてるいるころ
会場の外では光が、なのはを待っていた。
そして、なのはがウェディングドレスを着て現れた。
「光君どう私綺麗かな？」
「うんとても綺麗だよなのは。」
「僕が感想を言うと」。
「きゃはありがとう光くん。」
そう言ってなのはは光に抱きついたのだった。

そして、式が始まり、僕たちは神父さんの前まで行き、神父さんの問に答えた。

「汝高町なのはは獅童光を生涯愛すると誓いますか？」
「はい誓います。」
「汝獅童光は、高町なのはを生涯愛すると誓いますか？」

「はい誓います。」

「それでは誓いの口づけお願いします。」

「いいなのは？じゃあするよ。」

「うんいいよ光君」

そして、光となのははは永遠の愛を誓い合ったのだった。

そして、恭也は、式の途中から気絶していて静かだった。

式が終わり、なのはと光はそのまま新婚旅行に出発していったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

航空火災

この話は光となのはが結婚する前の話である。

そして３つ目の物語の最初の話である。

光となのはとフェイトとヴィヴィオは、休暇を利用しはやてが、部隊研修の為１０８部隊にいるので、４人は１０８部隊の隊舎に向かっていると突如緊急連絡が入ったのだった。

なのはｓｉｄｅ

私たちは、航空火災が発生した地点に急行し、二手にに別れていきました。

「私と光君が左から行くからヴィヴィオとフェイトちゃんは右から行って。」

「了解なのは。」

「わかったよママ」

こうして私と光君は、左のルートーを通って要救助者を探していました。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

？？ｓｉｄｅ

私は、お姉ちゃんとお父さんが働いている場所にいく途中にこの航空火災に遭い、お姉ちゃんとも逸れてしまいました。
「うぇーんおねちゃーんどこにいるのーー？」

私は、お姉ちゃんを探していると、広いエリアに出てしまい、そこで火災で脆くなった大きなオブジェが私に向かって落ちてきました。

「あ、あーー」

私はもう駄目だと思った時。

「ディバインバスター」

「バインド」

二つの魔法が私を守ってくれました。

桃色の砲撃は、天井を打ち抜き脱出経路を作って蒼い魔法は倒れてくるオブジェから私を守ってくれました。

「早くあの子を。」

「うん光君。」

私はこうして、救われました二人の魔道師によって、後でわかったことですが、私を助けてくれた二人はの内一人は不屈のエースオブエースと呼ばれている人でもう一人は、奇跡のエースオブエースと

呼ばれているそうです。

??ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そんな二人を見ている二つの影があった。

「あれが高町光と高町なのはか。」

「あいつら二人が、私らの倒すべき相手なのね。」

「そうだ俺たちを転生させてくれたルーシィ様の為にも、俺たち二人で倒さなければいけない。」

「まだ俺たちはこの世界のことを知らないから、しばらくは情報収集だな。」

「はーい」

二人は消えていった。

一方フェイトとヴィヴィオは、なのはたちが少女を助けた時に、フェイトたちも一人の少女を救出していた。

フェイトｓｉｄｅ

「君の名前を教えてくれるかな?」

「あ、はい自分の名前は、ギンガ・ナカジマ１３才陸士候補生です。

「私は、高町ヴィヴィオスバルちゃんよろしくね。」

「え、あなたがあの二人の娘さん何ですか?不屈のエースオブエースと奇跡のエースオブエースの?」

「そうだよ。」

ヴィヴィオは、満面の笑顔をギンガに見せていた。

ギンガはヴィヴィオの笑顔を見て、顔を少し赤くしていた。

「それでギンガはどうして、あんなとこにいたの?」

ヴィヴィオが聞いた。

「そうでした私の妹がまだ中に、いるんです。早く助けないと。」

「あなたの妹さんの名前は?」

フェイトが聞いた。

「妹の名前は、スバル・ナカジマ１０才で、私と同じ陸士候補生です。

「陸士候補生か君たち二人は、未来の同僚だ。」

「恐縮です」

その時、ヴィヴィオが、スバル・ナカジマの安否を確認すると。

「ギンガちゃん、フェイトさんスバルちゃんは、パパとママが救出したそうだよ。」

「光となのはが。」

「よかった。」

そう言ってギンガは、安心をし意識を手放して行ったのだった。

ヴィヴィオとフェイトは、ギンガを連れて脱出をした。

フェイトｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方航空火災のほうは、１０８部隊や付近をパトロールをしていた、部隊が消火活動などをしてくれたので、無事鎮火をしたのだった。

はやてｓｉｄｅ

「なのはちゃんたち昨日はお疲れ様。うちなやはり自分の部隊がほしんよ。」

「自分の部隊なら後手にならなくて対処できるからな。もし私が部隊作ったらみんな協力してくれるか？」

私が聞くと。

４人とも同じ答えだった。

「当たり前でしょ私たち友達でしょう。」

「ありがとうなみんな。」

こうして私たちは新部隊設立のために動き始めたのだった。

はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

高町ヴィヴィオ１０歳になりました

あの航空火災から４年がたちなのはと光は時空管理局の武装教導隊に所属し、階級は二人とも一等空尉になっていた。

相変わらず光は総帥と言うことは黙っていた。

ＺＥＵＴＨ（管理局名機動六課）が始動２ヶ月前ヴィヴィオにはやてからある依頼が来たのだった。

三人称ｓｉｄｅ

「なあヴぃヴィオお願いがあるんやけど聞いてくれるかな。」

「何？はやてさん。

「今度のなランクアップ試験を受ける子が４人いるやけど、その試験官をヴィヴィオにお願いしたいんや駄目かな？」

「えーーーーー」

高町一家全員で驚きの声をあげた。

「ねえはやてちゃんたしかその日の試験官てリィンさんじゃなかった？」

なのはがはやてに聞いた。

「実はな。」

はやてが真剣な顔つきにになって答えた。

「リィンフォースはオメデタデ産休なんや。

「ぶーーーーー」

その時、高町一家は、はやての答えを聞いた時、食べていたおやつをはやての顔にかけていた。

はやては顔を吹きながら説明を続けた。

ツヴァィの誕生するからな」

「はやてさんどうして、私がリィンさんの代わりに選ばれたんですか？」

ヴィヴィオが、はやてに聞く。

「今年でヴィヴィオも１０才やろ。今にしかでけへん事もあるんやなんせ今回の試験はヴィヴィオの仲間になる人の試験やし、ヴィヴィオも直接見たいやろ自分の仲間になる人の力を。」

「それは見たいですけどほんとにいいんですか？」

「かまへんて。それにその試験には、光君やなのはちゃんも来るしな。」

「え、ママパパそれ本当？」

「ああ、ほんとだよ。」

「あ、ごめんヴィヴィオにはまだ伝えてなかった。」

なのはが、ヴィヴィオに謝っていた。

「どうやヴィヴィオパパとママと一緒に仕事してみいひんか？」

はやてがヴィヴィオに聞く。

「わかりましたはやてさん、私でリィンさんの代わりが務まるのなら私は、チャレンジしてみたいです自分のために。」

ヴィヴィオははやてにそう答えたのだった。

「ホンマか、ありがとうヴィヴィオそれじゃあうちは他の仕事もあるさかいこれで失礼するわ。」

「ほんならななのはちゃん光君。」

「またねはやてちゃん。」

はやてはなのはたちの家を出て行った。

突然決まったヴィヴィオの試験官デビュー果たしてヴィヴィオは、無事クリアーできるのか？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

Bランク試験前編

今日は、ヴィヴィオが、リィンフォースに代わりBランク試験の試験官をする日です。
ヴィヴィオｓｉｄｅ

「はやてさんには、あんなこと言ったけどやっぱり怖いよ。」

私が不安そうな顔をしていると、なのはママが、私に声をかけてくれた。

「ヴィヴィオどうしたの？　そんな顔して？」

「ママ実は。」

私が、話そうとした時ママが、私を抱きしめてくれていた。

「ヴィヴィオあなたが不安なのはわかるよだけどね失敗を恐れてばかりだとヴィヴィオが強くなれないんだよ。強さじゃなく一人に人間として。」

「ねえヴィヴィオ覚えてる？　私たちと始めてあったときの事を。」

「うん覚えてるよママ。」

「実はねママねヴィヴィオに会うまで不安だったんだ。」

「それはどうしてなの？ママ。」

「あのころのママは、まだ子供だったし、それにいきなり自分の子が来るなんて、思わなかったしね。」

「それに悪い子だったら嫌だしね。」

「！！　ヴィヴィオはいい子だもん。」

私はママの行った言葉に対し反論しました。

「うんヴィヴィオはいい子だよだからね私はヴィヴィオの気持ちわかるんだ自分もそうだったから。」

「ママ」

「だからヴィヴィオも頑張って試験官の仕事を。」

「うんありがとうママヴィヴィオ頑張るね。」

こうして、私はママと別れて、パパの待つ車に向かいました。

「パパは車の中で私に頑張れとい言ってくれて、私は嬉しかったです。」

そして、車は試験会場に着き、いよいよ私の試験官の一日が始まったのでした。

ヴィヴィオｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

番外編太陽との再会（前書き）

今回は番外編で
？粉／／＼＼ナナ？　さん
の魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　術式を潰す少年
とのコラボです

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　術式を潰す少年
もよろしくお願いします

番外編太陽との再会

この話は番外編である

この話は、以前光となのはがロストロギアの神の車の起動により、並行世界に飛ばされた光となのはその後の物語である。「ねえ光君今頃何してるんだろうね。」

「あの子？」

「サン君だよ光君覚えてないの？」

その時なのはたちの部屋にヴィヴィオが入ってきた。

「パパママ遊んで。」

「そういえばサン君もヴィヴィオと同じくらいの年だったな。」

「パパサン君て誰？」

ああ、パパとママの友達でヴィヴィオと同じくらいの男の子だよ。」

「パパその子て強いの？」

「ああ強いよ。」

「パパたちよりも？」

「そこはわからないけど、ヴィヴィオ戦ってみたいのかい？」

「うん」
ヴィヴィオは元気よく返事をした
その時次元震反応が起こったと連絡を受け高町一家で捜索するようになった。
現場に行くと、光は懐かしい顔を見つけ、声をかける「サン君久しぶり」「光元気だったかと言うことはここはお前の世界か」
「今度は君が迷子かい？」
「どうやらそうみたいだな俺はこれの影響でここに来たみたいだ。」
そしてサンは光に一本の杖を取り出して見せた。
サンが光にロストロギアの杖を渡した瞬間、なんとその杖は自我を持つ杖だった。
「フフフようやく我にふさわしい肉体に出会うことが出来たぞ。」
なんと光の体が杖の自我によって操られてしまったのだった。
そしてその直後ヴィヴィオが来てしまった。
「な、ヴィヴィオなんでお前がもうここにいるんだ？」
サンが驚いていた。

光の世界ではまだ機動六課は設立していないのだった。それなのにヴィヴィオが存在しているからなのだ。

そしてヴィヴィオが光の異変に気づいたのだった。

「パパどうしたの？」

「フフちょうどよいわサンよ、我に体を提供している者を助けたければそこにいる娘を殺せ。

「なんだって！！」

サンはこの状況を打開できるのか？」

「俺にはできないいくら平行世界の、ヴィヴィオと戦うなんて。

「どうしたサン早くあの小娘を殺せさもなくば体の提供者の魂を我が喰らうぞ。」

「クッ俺は、俺は」

その時サンに声が聞こえたのだった。

（サン・・君僕のことはいいから君の魔法を使うんだあの魔法を）

（永劫の氷河（えいごうのひょうが）を僕に向け放つんだサン君」

「！！なるほどそれがベストみたいだな。」

サンは光の意図に気づき、サンは魔法を放ったのだった。

「永劫の氷河」

サンの魔法が光に、当たり光の体を中心にあたりが凍り漬いていた。

それを見ていた、ヴィヴィオはセイグリットハートを構えサンにこう言ったのだった。

「あなたは一体誰なの？何でパパにあんなことするの？」

ヴィヴィオはサンに得意の肉弾戦を仕掛けたのだった。

「うわあやめろヴィヴィオ俺はお前とは戦いたくないんだーーー俺はお前が好きだから。」

サンは、ヴィヴィオの攻撃をかわしながら告白をしたのだった。

「な、あなた一体何言ってるのあなたなんてヴィヴィオは知らないし、ヴィヴィオが好きなのはパパとママなの。」

「勝手なこと言わないでよ」

その時、光の体に乗り移っていたロストロギアの杖が、新たな体を作り出していた。

「もうあの体使い物にならんなおのれサンめ」

「アカシックバスターー」

ロストロギアの杖に向け蒼い砲撃が飛んできた。」

「何でサンの魔法を受けたお前が、生きているんだーー」

とロストロギアの杖が叫ぶ。

「そりゃあそうだろうなおい杖光の魔道師ランクを教えてやるよ。」

サンが、ロストロギアの杖に、光の魔道師ランクを伝えると。

ロストロギアの口調が変わったのだった。

「今までのご無礼お許しください光様。」

「？　どうしたのそんなに改まって。」

光が聞くと杖はおそるおそる答えたのだった。

「ええ、実は私は死神の杖と言うしがないロストロギアで、私を、製作した魔道師のランクが、光様と同じＥＸランクでしたので、その主と同じ、ランクの光様に手をかけたということは、主に攻撃したことと同じなので。」

死神の杖はそう言って光に謝罪をしたのだった。」

「そうだったんだねだけど一つ聞いていいかな？」

「はいなんでしょうか？」

「何で君は、サン君をこの次元に連れてきたの？」

「ああ、それは、サンの記憶の中に、光様がいたので、私の能力で私の生みの親である魔道師を探す為に備わってるんです。」

「それじゃあサン君を元の世界に戻すことも可能なんだよね。」

光が聞くと、死神の杖が答えた。

「それは可能なのですがね」

「何か問題があるの？」

「ええ、実は。」

死神の杖は光に帰還のする仕方を伝えた。

それを聞いた光も、困っていた。」

「それは、困ったね。」

その時遅れてなのはが来た。

「光君ヴィヴィオ大丈夫？」

「そうだ」

その時光がひらめいた。

「確かサン君て隠れマザコンだったよね。」

「！！　光なんで知ってるんだよーー。」

「ねえなのは、お願いがあるんだけどいいかな？」

「何かなお願いて、光君。」

「今からなのはとサン君がキスをしてくれないか？」

「えーーーーーーーー」

光の発言に驚く二人。

「何で私が光君以外の男の人としなきゃいけないの？」

サンも光に言った。

「光なんで俺が母さいやなのはさんとキスしなきゃいけないんだ。」

「それは、その方法が、ゆういつの帰還方法なのですよサン君。」

光はサンに伝えた。

それを聞いたサンは顔を赤くしていた。

そして、サンが元の世界に戻るためのなのはとサンのキスが始まった。

それを見ていたヴィヴィオは、サンとなのはキスする直前ヴィヴィ

オが、二人の間に入り、ヴィヴィオとサンはお互いの口を合わせた。

「な、ヴィヴィオどうして。」

なのはがヴィヴィオに聞いた。

「私も、ママがパパ以外の人とするところなんて見たくないもん。

「ヴィヴィオ」

「よし成功だサン君君が本当に好きな相手はヴィヴィオだろう本当の好きな相手にキスをすれば君の世界にいるヴィヴィオの場所まで転移が出来るらしいんだ。」

「そうだったんだなありがとう光」

そしてサンは死神の杖と共に消えていった。

そして、残った高町家は光にお仕置きをしていた。

元の世界に戻ったサンは帰って来た時ヴィヴィオを押し倒した形のなり、ヴィヴィオに泣かれてしまい、ヴィヴィオにはしばらく頭の上がらないサンだった。

番外編太陽との再会（後書き）

：　粉／　＼，，ナナ

賛同ですか駄目でしたら削除しますので言ってくださいね

Bランク試験中編

ついにBランク試験が始まろうとしていた。

三人称ｓｉｄｅ

ここはBランク試験会場である。今回Bランク試験を受けるのは、４人の若者たちである。

そして今回の試験官はこの人です。

「皆さんおはようございます。今日試験官を務める高町ヴィヴィオ１０才です。よろしくお願いしますね。」

ヴィヴィオは、満面な笑顔からすぐに凛々しい顔つきになり、受講者の名前を聞いていった。

そして４人は自己紹介をしていった。

「私はスバル・ナカジマですよろしくお願いがいします。」」

「私はティアナ・ランスターですよろしく。」

ここまでは普通の挨拶だった。

残りの二人の挨拶を聞いた時になのはフェイト光はやてには戦慄が走ったのだった。

「私の名前を、忘れるなんていい度胸ねヴィヴィオ。」

「ほんとは覚えてるんだけど、規則だから答えてアリサお姉ちゃん。」

（ママパパヴィヴィオを助けてアリサお姉ちゃん怖いよーー）

と心の中で叫ぶヴィヴィオだった。

「まあまあアリサちゃん余りヴィヴィオちゃんをいじめちゃだめだよ。」

「別にいじめてるわけじゃないんだけど、まあいいわ自己紹介するわよ。私の名前は、アリサ・バニングスよ。」

「私の名前は、月村すずかです。」

それぞれの名前を聞いたヴィヴィオは４人に確認をしたのだった。

「今日皆さんが受ける試験は魔道師ランクＢランクにアップする試験で間違いありませんか？」

「間違いありません。」

「それでは試験内容を発表します。」

今回は２チームに別れ、この廃ビルエリアに設置されてるターゲッ

トの撃破です。時間は15分で、今回はこちらでチーム訳をしましたしたがって試験中はそのパートナーと協力してくださいね。」
「それではチームをは1t票します。まずスバル・すずかチームです残りは、ティアナ・アリサチームです。」
「それではスタート!!」
「皆さんゴールで会いましょう。」
4人の試験は始まった。
「ねえ、はやて今回の試験内容ははやてが考えたの?」
フェイトがはやてに聞いた。
「いやうちはなんもしてないよフェイトちゃん。」
「とするとヴィヴィオが考えたんだすごいよヴィヴィオは。」
「せやね少なくともこの内容だと、スバルとティアナには、きついかもしれんな。さすがはヴィヴィオやな。」
はやてたちが話している時なのはと光もヴィヴィオの試験内容に驚いていた。」
「ねえなのは。ヴィヴィオに試験内容考えたの教えた?」
「いや教えてないけどスバルとティアナの写真を見せただけだよ光君。」

「と言うことは、ヴィヴィオはスバルとティアナの弱点を見つけこの試験内容にしたのか？」

「すごいなあヴィヴィオ」

「そうだね光君」

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

Bランク試験後編

ついに始まった試験果たして４人は見事合格できるのか?。

三人称ｓｉｄｅ

４人は即席チームで試験に向かうことになり、苦戦していたのだった。

「この試験以外と難しいわね。まったくヴィヴィオも成長してるのね。」

アリサはそう思いながら試験を受けていた。
一方スバルとすずかチームは、何故かすずかがスバルに謝っていた。

「ごめんなさいスバルさん私がノロマで、スバルさんに迷惑ばかりかけて。」

「そんなことはないですよすずかさん一緒に頑張りましょう。」

（ティア助けてすずかさんとのチームやりにくいよーー）

スバルは念話でティアナと話していた。
（うっさい馬鹿スバル私は今スバル以上の突進をするアリサさんのサポートで手一杯だから、話はあとで聞くわ）

「しかしあのヴィヴィオて言ったかしらあの子どう見てもただの子供にしか見えないのに、今回の試験官してるのかしら？」
とティアナは考えていた。
そして、ゴール地点では、ヴィヴィオとなのは光の三人が、話をしていた。

「ねえヴィヴィオ聞いていい？」
なのはがヴィヴィオに聞いた。
「何ママ？」
「どうして今回の試験即席チームに分けたの？」

「それは、私ねママに、写真を見せてもらった時ね、スバルさんとティアナさんの二人が、アリサさんとすずかさんに似てるなあと思って、それにママ私たちの敵は強大なんだから出来る限りできることしておかないとね。」

「そうだねヴィヴィオ」
なのはは、ヴィヴィオの頭を撫でた。
「やめてよママこんなとこでしないでーー。」

ヴィヴィオは、少し恥ずかしそうに言ったのだった。」

「パパ」

「なんだいヴィヴィオ」

「私ね、過去に来た時嬉しかったの私の時代の現在だったら私はなのはママと戦わなきゃいけなかったの私はそれが嫌だったの。」

「ヴィヴィオ。」

「こっちに来られてヴィヴィオは幸せです。パパママこれからもよろしくお願いします。」

そして親子三人は抱き合っていた。試験中と言うことを忘れて。

「あのーゴールしましたけどーなのはさーん。」スバルが言うがヴィヴィオたちは気づかないでいた。

まったく気づかない三人についにアリサの雷が落ちてしまった。

「コラーーーあんたたちいつまで私たちを無視するんじゃい。」

なのはと光にアリサの鉄拳が下されなのはと光はアリサたちに気づいて、なのはと光はアリサたちに謝っていた

スバルはアリサさんすごいなあ等と思っていた。

ミッドチルダでなのはさんと光さんを怒る人なんてまずいないんでスバルは、驚いていた。

こうして試験は終ったのでした。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

試験終了後

ヴィヴィオが始めて試験官を担当した、試験終了後にハプニングがあったが無事終了したのだった。
試験後スバルたち４人は結果が出るまではやてとフェイトの話をしていた。

三人称ｓｉｄｅ

「スバルティアナ少し話があんやけどいいかな？」

「え、私たちを機動六課にですか？」

「そうや機動六課とと言う名前は管理局に協力する時の名前さかいなうちらは言わば独立部隊なんよ名前が、ＺＥＵＴＨて言うやねん。」

はやては二人にＺＥＵＴＨのことを伝えた。」

「それにこれは二人にとってはチャンスだよ。」

フェイトが言い出した。

スバルはなのはや光から直接学べるチャンスだし、ティアナは執務官志望だから私も協力できるしね。」

「どうやろ。」

はやてが聞いた時、スバルが、はやてに質問をした。

「あのはやてさん2つ聞きたいことあるんですがいいですか？」

「なんやスバル」

「噂で聞いたんですが、光さんて時空管理局の総帥てほんとうですか？」

「あ、私も聞いた事あるわその噂。」

はやてその質問をされた時、はやての時は止まったその噂の元凶ははやて自身なのだ。

「本当のところはどうなんですか。」

二人がはやてを問い詰めていると、光がやって来た。

「スバルティアナ少しいいかな？その前にはやてまた余計なこと言ったでしょう。はやての給料来月から５０％ダウン決定ね。

はやてはその言葉を聞いて復活したのだった。

「そんなあ殺生やで許してーな光君。」

はやては光にしがみつき懇願していた。」

その光景を見たスバルたちは、唖然としていた。

「話を戻すけどスバルティアナ結果から言えば合格ていいたいけど

不合格だ理由は不慣れなパートナーでももう少し、やれたはずなんだ相手の特徴や癖でね。」

二人は結果を聞いてがっかりしていた。

「そこで、君たちには特別任務として僕となのはとヴィヴィオが行くところに着いて来てもらうよ。」

「あの光さんそれで行き場所はどこですか？」

ティアナが聞いた。

「行く場所は地球だよ二人とも僕たち高町家全員で行かないと行けない任務なんだけど手伝ってくれ二人とも。」

「はいわかりました。」

二人はついて行く事にした。

「それじゃあ二人ともまた明日ね。」

光はそう言って二人と別れたのだった。

スバルとティアナに突如決まった地球への旅一体どんな旅になるのやら。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

地球へ

スバルたちの試験の翌日スバルとティアナは、光に言われたとおりの場所で待っていた。

三人称ｓｉｄｅ

「ねえティア何で光さんは一週間も私たちを地球に連れて行くのかな？」

「私がそんな事、わかるわけないじゃない、あれなら光さんに直接聞きなさいよ。」

「そうだね。」

スバルたちが話していると高町一家が来たのだった。

「スバルティアナおはよう。」

「スバルさんティアナさんこれから一週間よろしくお願いします。」

なのはとヴィヴィオが挨拶をした。

「あのなのはさん光さんはどこにいるんですか？

ティアナが、なのはに聞いた。

「光君？光君なら先に地球に行ってるよ。」

「えーーーそうなんですか？」

二人はそう言って納得し４人は次元船に乗り込み地球に向け出発したのだった。

船内で４人は楽しく談笑していたその時スバルがなのはに質問をして来たのだった。

「あのなのはさん質問していいですか？」

「何かな？スバル。」

「光さんて管理局の総帥てほんとですか？」

「スバルティアナこれから私が言うこと機密事項だから、秘密にしてね。

「はい」

二人は、なのはに言われたことを守りますという返事をしたのだった。

なのはは二人に光のことを話したのだった。

その話を聞いた二人は、驚きを隠せないでいた。

それもそのはずスバルとティアナにしてみれば、まさか自分たちの周りに管理局の総帥が現れるとは、思っても見なかったからである。

そんな二人を乗せていた次元船は無事地球に到着したのだった。

これからの地球滞在でスバルとティアナに起きる出来事とは？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

地球滞在1

三人称ｓｉｄｅ

地球についたなのはたち４人は、ひとまずなのはと光の家に向かっていた。

「ヴィヴィオ久しぶりの地球だね。」

「うんママ」

「あれヴィヴィオて地球に住んでたの？」

スバルとティアナが聞く。

「うん４年くらい住んでたよね、ママ。」

「そうだねヴィヴィオ」

「ママ家に帰る前に、おじいちゃんとおばあちゃんのお店に行こうよ。」

「お爺ちゃん？お婆ちゃん？」

スバルたちは、ヴィヴィオの言葉の意味がわからなかった。

そこで、ティアナがなのはに聞いた。

「なのはさんヴィヴィオて、なのはさんと光さんが、引き取った子ですよね？」

「えーー違うよヴィヴィオは、れっきとした光君と私の間に生まれた子供なんだけどなあ。」

なのはがそう言うとスバルとティアナは衝撃を受けていた。

「えーーーなのはさんと光さんて、結婚してたんですかーーー。」

「うんそうだよほら。」

なのははつけていた結婚指輪を外し、スバルたちに、見せたのだった。

「本当なんですね。」

二人は結婚指輪を見て、納得をしたのだった。

そして、なのはたちは喫茶翠屋に着いたのだった。

「お父さんお母さんただいま。」

「お爺ちゃんお婆ちゃんただいま。」

「おお、なのはにヴィヴィオお帰りなのは、すまんな急にお前たちを呼んで。」

士郎はなのはに、謝っていた。

「お父さん気にしないでよところで光君は、どこにいるの?先に来てる筈なんだけど。」

「ああ、光なら明日の準備をする為に街に行って貰ってるよ。」

「そうなんだ」

なのはが士郎と、話していた時ヴィヴィオとスバルたちは、桃子特製手作りシュークリームを食べていたのだった。
士郎との話が、終わったなのはは、母の桃子が作った特製シュークリームを食べてるヴィヴィオの笑顔を見て、自分も幸せな気分になっていた。

しばらくすると光が帰ってきたララとアリシアと共に。

「母さん父さんただいま」

「ああ、お帰り光。」

「お帰り。」

光が帰ってくるとヴィヴィオが、光に抱きついてきた。

「パパお帰りなさい」

「ああ、ヴィヴィオなのはただいま。」

「スバルとティアナも来てくれてありがとうな。」

ララとアリシアが光にこの子達誰と聞いていた。

「ああ、この子達は青い髪の子が、名前はスバル・ナカジマで、オレンジ色の子が、ティアナ・ランスターと言うんだよわかったララ？」

「うん光兄ちゃん。」

「あの光さんこちらの方々はフェイトさんに似てるんですが、姉妹なんですか？」

スバルが光に聞いた。

「ああ、そうだよ僕の隣にいるのが、フェイトのお姉さんのアリシアで、僕の膝に座ってるのが、フェイトの妹のララだよ。」

「よろしく」

「よろしくねスバルお姉ちゃんたち。

この時ヴィヴィオにかすかな苛立ちを感じていた。

「何いつもいつも地球に帰ると何でララて子がパパを独占するんだろう？」

「パパは、ヴィヴィオとママの大事な人なのに。」

そしてララはヴィヴィオを挑発していたが、ヴィヴィオは我慢していた。

そして夕方になりお店も閉店時間を向かえ、夕飯は久しぶりに高町家とテスタロッサ家と合同の夕食となった。

スバルとティアナも楽しく食事をしていた。

そして光となのはも久しぶりの我が家の自分たちの部屋で過ごしていた。

「ねえ光君あれから１０年以上たったんだよね。光君の両親が死んで、光君が家に養子に来て。」

「そうだねなのは」

「光君これからもヴィヴィオと共によろしくお願いします。」

「こちらこそよろしくねなのは。」

そして、二人は眠りについたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

５００００ＰＶ突破記念（前書き）

これからよろしくお願いします

５００００ＰＶ突破記念

作「皆様のおかげでこの小説転生少年と魔法少女は見事に５万ＰＶを突破しました。」

光「ほんとこんな駄文中の駄文を読んでいただきありがとうございます。」

なのは「物語は今ＳＴＳ編ですがこれからしばらくはオリジナルをしばらくして、機動六課始動するという感じにしたいと思ってます。

はやて「ちなみにこの作品では機動六課は正式名ではありませんので注意してくださいね。」

アリシア「「正式名は本編で言っているＺＥＵＴＨで行きますのでよろしくお願いします。」

全員「これからも転生少年と魔法少女をよろしくお願いします。

地球滞在2

なのはたちが地球に帰ってきた翌日スバルとティアナは早朝ランニングも兼ねて、外に出ていた。

そこでティアナは、意外な人物と出会うのであった。

その人物とは？

一方光は、なのはとヴィヴィオを起こしていた。

光ｓｉｄｅ

「ほらなのは早く起きてよ。」

「うーん・・後五分むにゃむにゃ。」

「ほらヴィヴィオも起きて。」

「パパ後五分寝かせて。」

ふーんなら僕は一人でプレシアさんのとこに行って来るよ。そしてララアリシアを誘って遊びに行こうとじゃあねなのはヴィヴィオ。」

光がそう言うと二人は飛び起きてきた。

「それだけは駄目ーーー」

二人は光の体にしがみついた。

「二人とも話してくれない？

「いやだよ話したらパパララさんのところに行くんでしょ。」

ヴィヴィオが僕に聞く。

「確かにプレシアさんに呼ばれてるから行くのは行くけど。」

「なら私たちも行くよ。」

（これ以上パパをララさんの魔の手から守らなきゃ。）

（これ以上アリシアさん放置したら光君がアリシアさんに取られるかもしれないから私がしっかりしないと）

なのはとヴィヴィオは、燃えていた。

こうして僕たち3人はプレシアさんの元に向かった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

そして3人はプレシアさんの家に着いた。

「いらっしゃいあら、今日は親子で来たのね。」

プレシアが言った。

「ええ、まあ。」

光が、照れくさそうに答えた。

「プレシアさん彼はどうしてます？」

「ああ彼は、今散歩に出てるわ日課のね」

「そうですか。」

「ねえ光君誰のこと言ってるの？

「なのはは、覚えてる？ティアナのお兄さんティーダ・ランスターのことを。」

「うん覚えてるよあの人違法魔道師と交戦して命を落とした人でしょ。」

「確か数年前に。」

「記録上ではそうなってるけど彼は生きてるんだこの地球で。」

「えーーーー」

なのはは驚いていた。

「僕もこのことを知ったのは最近なんだ。」

「彼も、ヴィヴィオと同じように時間を越えてきたみたいなんだ。」

光はナノハに説明をしていた。

そのころティアナたちは。

「兄さん？兄さんなの。

「君はいったい誰なんだい？何故僕を兄さんと呼ぶんだい。」

ティアナは運命的な再会をしていたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

ティアナｓｉｄｅ

「私は、スバルと朝のジョギングをしていると、
私は死んだお兄さんに、そっくりな人を見つけ兄さんと呼んでしまった。

「はい君は誰？え、僕が君のおにいさんだって？」

「はいそっくりなんですすべてが、喋り方も、顔も。」

「君いいかげんにあきらめてくれないかな？僕は君の兄さんじゃないんだから。」

そう言って男はティアナの側を抜けて走り去っていったのだった。
そして私は、スバルが追いつくまで、その場にいました。」

（何故兄さんがこの星で生きてるんだろう？と思いながら）

スバルに連れて行かれながらなのはさんの家に帰りました。

ティアナｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして、プレシアと話しているなのはたちはプレシアから驚きの事実を聞かされていた。

三人称ｓｉｄｅ

「なのはさん光さん実は、ティーダサンは記憶喪失で、死んだとされているティーダさんは、私が、ティーダさんの細胞から、作り出したクローンなのよ。」

「ええーーそれは本当デスカ?プレシアさん。」

プレシアの衝撃の告白に驚く二人。

「何故プレシアさんはティーダさんのクローンを作ったんですか?」

光が、プレシアに聞く。

「それはね彼が自分のことは、何も覚えてないのに妹さんのことは覚えていたのそれで自分の時代に戻りたいと言い出して、私は若いころに、タイムマシンの試作品を使って彼を帰したのそしたらまた彼が現れたのまた私は彼を返したの元の時代に。そして最悪なことになったの。」

「どうやら彼は、元の時代には戻れなくなっていたみたいで、彼が、何度も時間移動を行ったせいで、彼のいた世界に彼そのものの存在を消したみたいで、彼は、時の放流者になってしまい私は特別なやり方で彼のクローンを彼の世界に送り込んでいたのだけど彼の妹さんへの思いは、クローンにも引き継がれてティーダ・ランスターとしての一生を全うしたというわけよ。」

「と言うことは、ティーダさんは、どうして歳を取ってないんですか?」

なのはが、質問をした。

「それは私の魔法で彼の時を止めてるからよんおはさん。」

「どうしてそんなことしたんですか？」

「彼の為なのよ今魔法を解いたら彼は即死ぬわよそれでもいいの？」

「そんな」

なのはは何も言えなくなっていた。

そして光となのはとヴィヴィオはプレシアの家を後にしたのだった。

「光君このことティアナにはなすべきかな？」

なのはは光に聞いた。

「いずれは話ないとだね今はまだいいと思うよ。

「そうか」

そしてなのはたちは気持ちを切り替え今日の目的の場所へと向かったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

地球滞在3

今日は、スバルとティアナは、喫茶翠屋の手伝いをしていた。

三人称ｓｉｄｅ

「すいませーんオーダー入ります。チョコレートケーキにコーヒー2つです。」

ティアナが士郎に伝え店の奥ではスバルと士郎が注文のあったチョコレートケーキとコーヒーを準備し、スバルがティアナに手渡して、ティアナが注文のあったお客さんの元に持っていっていた。
一方ミッドに残ったフェイトとはやては、アリサとすずかにもうすぐ新設されるＺＥＵＴＨ（機動六課）のことについて話していた。

「ありがとなありさちゃんすずかちゃん本会の試験手伝ってくれて。」

「ヴィヴィオのお願いだしね。」

「私たちも楽しかったしでもあの二人にはきつかったかもね。」

と言うアリサとすずか。
「ところでアリサとすずかはどうする?ＺＥＵＴＨには入るの?それとも地球に帰るの?」

フェイトがアリサとすずかに聞いた。

「そうねまだどうするかは決めてないわ私たち。」

「アリサが答える。」

「そうなんだ」

「でもいいわねなのはたち今地球でしょ。」

「そうなんやけどな今朝な光君から連絡あったんやけどな。」

はやては一息つき喋りだした。

「実はな、ティアナのお兄さんが生きて地球にいる見たいなんや。」

「ええ、それほんと?はやて。」

フェイトが、はやてに聞いた。

「ああ光君からの情報屋から間違いないと思う。」

はやてはそう言った。

そして、なのはたちは、へんな情報を得ていた。

地球でプレシアが作ったタイムマシンは一機のはずがプレシアの友達がこう言った。

「ねえプレシアさんあなたのタイムマシンが壊れて海鳴市の浜辺にあるわよ」

真実を確かめる為なのはたちは、現場に向かったのだった。

そしてなのはたちは、現場で、異様な卵の殻を見つけたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

地球滞在４

三人称ｓｉｄｅ

なのはたちはもう一つのタイムマシンの中から異様な卵が割れて何かが、ふ化した後を見つけたのだった。

「うわあ何、この気持ち悪い卵は。」

なのはが気持ち悪そうに言った。

（おいおいこの卵はまさか、俺とアキが転生前に二人でよく見てた番組の中に出てくるセルの卵じゃないか）

これには光も、驚いていた。

そして、光達に、マテリアルズから、連絡が入った。

「マスター大変です今マスターたちの近くの街に異形の怪物が現れ人々を襲ってます。」

「なんだって！！　わかった星光と統べるは怪物を、追撃していてくれ。手は出すなよ。」

「雷刃は、こちらと合流してくれ。

「わかりました。」

「了解です。」

「わかったのじゃ。」

そして光たちは、雷刃と合流する為、行動を開始したのだった。

「ふふ、ついにこの時代に私が完全体になる為の存在がいるのか。」

「私は、私を作り上げたスカリエッティが作り上げた人造人間セル私ハ、スカリエッティ様の望む野望を実現させる為に、生まれたのだから。私は、ここで、完全体になる必要があるのだ。」

セルは完全体となるべく行動を開始したのだった。

果たして、なのはたちは、セルの野望を止められるのか？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

マテリアルＶＳセル

星光と統べるは光達より先にセルを追っていた。
そしてセルはある人物を探していた。

セルｓｉｄｅ

「私は、ある男を、捜していた。その男の名は。」

「ティーダ・ランスターと言う男を。ドクターが言うには、私が、完全体になるには、その男の、血肉が必要らしいのだ。」

セルは、マテリアルが追ってきているのを知りつつも放置して、ティーダを探していた。

セルｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ティアナｓｉｄｅ

「私はスバルと共に、今日も喫茶翠屋で、仕事をしていた。この仕事が私の役に立つのかはわからないけどたまにはこういう仕事もいいなあと思うようになっていた。」
「ほらスバルちゃんと掃除しなさいよ。」

「ティア少し休もうよ。」

「なに言ってるのよスバル。」

その時、私は士郎さんから常連のお宅への配達を頼まれたのだった。

「ティアナちゃん悪いけどここのお宅まで配達してくれないかい？」

「はいいいですよ士郎さん。」

そして、私は店を出て配達先の家に向かった。」

ティアナｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

一方雷刃と合流した高町親子は、星光達と連絡を取っていた。

「マスターこのままじゃ埒があかんのじゃ攻撃していいじゃろ。」

続べる王が光に聞いた。

「確かにこのままだとセルに目的を果たさせる可能性もあるな。」

「よし二人とも攻撃を許可する。僕たちが着くまでセルを足止めをしてくれ。」

「了解」

二人は、砲撃魔法を放った。

「アカシックバスター」

星光が放った。

「プロミネンスバスター」

続べる王が放ったが二人の魔法はセルにかわされたのだった。

「貴様らは何者だ。」

セルが聞くが、マテリアルズはこたなのだった。

「ほう貴様らなかなかいい生体エキスを持っているなちょうどいい貴様らの生体エキスを奪い、私の目的達成の糧になるがいい。」

そしてセルはマテリアルズに襲い掛かったのだった。

マテリアルズはセルに勝てるのか？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

マテリアルＶＳセル後編

マテリアルズが、セルと戦闘しているころスバルは、翠屋の休憩時間に魔力反応の感じて、現場に向かっていた。

スバルｓｉｄｅ

「私は、翠屋の仕事していると、強い魔力反応感じて、休憩中にティアと合流して、魔力反応のあった場所に、向かいました。

「ティア大丈夫？」

「馬鹿スバルあんたも感じたの？」

「ねえティアこの３つの魔力反応のうち、２つはなのはさんとはやてさんに似てない？」

「馬鹿なのはさんはともかくはやてさんはこっちに来てないでしょう。」

「あ、そうかじゃあはやてさんに似てる魔力反応は一体？」

「その謎を今から解き明かしに行くわよスバル。」

こうして私と、ティアは、現場に向かいました。

スバルｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

「ほうなかなかやるではないか。

「どうもです」

星光は答えた。

「ではそろそろ貴様らの生体エネルギーをいただこう。」

「行くぞ！！太陽拳」

セルが技を出すと、セルの体が、太陽のように、輝きだしたのだった。」

「何が起きたのじゃ。」

統べる王が、驚いてると。

「キャアアアアアアア。」

星光が悲鳴をあげていた。

なんと、星光はセルに捕まり生体エネルギーを奪われていた。

「あああああ、抜けていく私の力が、このままではマスターとのリンク強制解除しなければマスターまで私の影響を受けてしまう。」

その時、セルに向け、砲撃魔法が放たれたのだった。

「誰だ」

セルは、何者かの砲撃を受け星光を手放したのだった

果たして星光を助けたのは一体誰なのか。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

星光を、セルから救い出した砲撃を放ったのは。
ティアナの兄で、セルの目的の人物の、ティーダ・ランスターだったのだ。

三人称ｓｉｄｅ

「君大丈夫？」

ティーダが、星光の側へ駆け寄る。

「あ、あなたは？」

「僕のことは後で話すから今は君を助けるのが先だ。」

ティーダがそう言うと、セルに向け攻撃魔法を放つティーダだった。
ティーダの放った砲撃はセルによりかわされてしまった。

「やい化け物今度は俺が相手をしてやる。

「いいだろうお前の強さを教えてもらうぞ。」

こうして、ティーダＶＳセルの戦いが始まろうとしていた。

その時スバルとティアナは現場に着いたのだった。

その時、二人はそれぞれが驚いていた。

ティアナは、死んでいたはずの兄を見つけたことに。

そして、スバルは、スバルとギンガの母親を、スバルたちの前で殺した犯人がスバルの目の前にいるからだ。

「うあああああよくも母さんを殺したなーー」

「何!!ぐふ!!

スバルの渾身の一撃が、セルに入ったのだった。そして、セルに隙を作ったのだった。」

「よし今だ!!ブラストブレイカーーー」

ティーダの砲撃魔法がセルをとらえたかに見えたが、セルは瞬間移動に近い高速移動で攻撃をかわしたのだった。

「今のは、私にも効いたぞ小娘ーー。」

セルは、怒りに任せスバルに攻撃を仕掛けたのだった。

「うわああぶなー。」

必死にセルの攻撃をかわすスバル。

その時セルの背後か桜色と黄色の砲撃がセルに力直撃したのだった。

「があああああ。」

セルの雄叫びが響く。

「グッこんなもので俺様を倒せると思うな高町なのはとヴィヴィオよセルは、自分に放った砲撃で誰が来たのかすぐにわかっていた。

「まさかお前たち親子に、こんなところで出会えるとはな。」

セルがなのはに言う。

なのはもセルに問いかける。

「あなたはどうして、私やヴィヴィオのことを知ってるの？」

「さあな」

と言うセルだった。

「今日はここで退散するか、今の状態でお前達全員と戦うのは厳しいからな。」

そう言ってセルは逃げていきました。

こうして襲撃戦は終わりを告げたのだった

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

兄と妹

セルとの戦闘終了後なのははは、星光を助けた青年ティーダと話していた。
三人称ｓｉｄｅ

「ありがとうね君この子を助けてくれて。」

「いえ当然のことをし弾ですので。」

「当然のことか。」

その時スバルがなのはに聞いた。

「あのなのはさん光さんはどこにいるんですか？」

「え、光君なら先に翠屋に戻って行ったよ私のお父さんに呼ばれてね。」

「そうなんですか。」

なのはにそう言われて納得したスバルだった。

「あの、もう一つ質問いいですかなのはさん。」

「あそこにいる二人なんだか、なのはさんとはやてさんに似てるんですがあの二人は、誰なんですか？」

「えっとそれはね。」

（まずいなあまだスバルたちに、星光ちゃんや統べるちゃんのことは言えないし。）

その時、ヴィヴィオが言った。

「ごめんね遅れて待ったでしょ星ちゃん統ちゃん」

「いやそんなことないのじゃヴィヴィオ。」

統べるがヴィヴィオに言う。

「あの子達はヴィヴィオの友達なんだよあはは。」

なのはは慌てながらスバルに答えたのだった。

「なるほどヴィヴィオの友達なんですね。」

スバルはなのはの答えに納得していた。

一方ティアナは、なのはに代わり、ティーダと話していた。

「あなたは、本当に、私のお兄さんですか？」

「僕の名前は、最近思い出したんだけどティーダ・ランスターて言うんだ。」

ティアナはその言葉を聞くと今まで我慢していた思いが、爆発し、

ティーダの胸で、泣き出してしまったのだった。

「うあああああんお兄ちゃん会いたかったよ。」

しばらくしてティアナが落ち着き、全員で、翠屋に行く事になり、なのはたちは向かっていた。

一方星光が、ダメージを受けそのダメージを光も受けていた。

「マスター大丈夫？」

「ああ、今回は肉体的のダメージではないからな。」

「困ったな明後日ミッドチルダに帰らないといけないのに、まさか地球に、新たな敵が、いたなんて。」

光は、今回の事態は予想をしていなかった。

「ただいま父さん母さん。」

なのはたちが帰ってきたのだった。

（なのは、ヴィヴィオ僕のところに来てくれないか？）

（今回の二人の聞いた情報が聞きたいから）

光はなのはとヴィヴィオに念話を送り自分の部屋に来てくれといったのだった。

（わかったよ光くん）

（わかったパパ）

なのはとヴィヴィオはパーティを抜け出し、光の元に向かったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

闇の息吹

ここは、ミッドチルダから遠く離れた世界。

俗に言う管理外世界の一つダークハザードの地下深くにある研究所の中である。

そこには、黒の上下を着た一人の青年と、白衣を着た男と背の高い女性がいた。

三人称ｓｉｄｅ

「しかし君も、哀れな男だよね、仮にも君は、管理局の執務官だった男だったんだろう？」

白衣を着た男が、質問した。

「ああ、俺は、管理局で執務官をしていた。」

「だが、俺たちの野望は数人の魔道師によって打ち砕かれただが俺は、お前達とは別に協力して管理局を攻撃する用意もあるが今回は、お前たちと協力してやる。」

と青年が言った。

「ほうそれは光栄だねクロノ・ハラウオン。」

「こちらこそなジェイル・スカリエッティ。」

「ウーノすまないがクロノさんに部屋まで案内してやってくれ。」

「はいドクターでは、クロノ様こちらにどうぞ。「ああ、今行く。」

ウーノとクロノは部屋を出て行ったのだった。

クロノたちが、部屋を出て行った後、スカリエッティは不気味な笑みを浮かべて高笑いをしていた。

果たしてスカリエッティの野望とは、一体何なのであろうか

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方地球では、セルの襲撃にあった星光たちは、みんなの協力でセルを退却させ危機を逃れていた。

そしてなのはとヴィヴィオは、３人で話をしていた。

なのはｓｉｄｅ

私は、ティアナのお兄さんから事情を聞きそれを光君に伝えた。

「なるほど星光がやられた後そんなことが、あったんだね。」

「光君これからどうする?テーダさんをミッドに連れて行って、保護する?」

「でもなのは、そんなことしたら、セルて怪物はティーダさんを探しながら全世界の人間を殺してしまうかもだよ。」

「そんな」

私は光君の言葉に、軽く衝撃を受けました。

私たちがセルへの対処法を考えていると、突如フェイトちゃんからの連絡が入りました。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

番外編恭也の（前書き）

今回のお話はほんぺんとはかんけいありませんがどうぞ

番外編恭也の

ある日ミッドチルダにすんでいるなのはたちの元に一通の手紙が届いていた。

三人称ｓｉｄｅ

「おーいなのは。」

「何ー光君？」

「地球からなのは宛てに手紙が来てるよ。

「うん今行くよ光君。」

そして、光は、なのはに手紙を渡した。

なのはが、光から渡された手紙の内容を読み出した。

「ねえ光君、今度おにいちゃんが結婚するんだって。」

「本当ついに、恭也さんが忍さんと結婚するのかーよかったねなのは。」

「うん光君これでおにいちゃんのストーカー行為も無くなるねよかったー。」

だが、二人は肝心なことに気づいてなかった。

その結婚の新郎と新婦の苗字が同名と言うことに、
そして、結婚式当日なのはと、光は会場で式が始まるのを待っていた。
「もうすぐ始まるぞ光なのはこの結婚式は、この世界では始めての結婚式だぞ。」
士郎はそう言うと新郎新婦が出てきた。
光となのはが新婦の顔を見た瞬間固まってしまった。
恭也の結婚相手がなんと別次元のなのはだったのだ。
二人は驚いて士郎に聞いていた。
「父さんこれはどういうこと?」
「何二人とも、慌ててるんだ?普通の結婚式じゃないか兄妹同士の。」
士郎はそう言った。」
そして、なのはがＢＪに着替え、レイジングハートを出しＳＬＢを放つ前に、恭也になのはが言った。
「お兄ちゃんなんていなくなれーーーー」
そしてなのはＳＬＢを放ったのだった。
ヴィヴィオが魔法学校から帰ってきた。

「ママパパただいまー」

ヴィヴィオが部屋に入ると、光となのははうなされて寝ていた。」

「ねえパパママ大丈夫?」

光となのはは、起きると

ヴィヴィオに抱きついていた。

「ヴィヴィオ怖かったよーー」

なのはは泣き出してしまったのだった。

ヴィヴィオは訳がわからないままのはが泣き止むまで、優しくなのはを抱きつくヴィヴィオだった

宣戦布告

高町親子が、セルに対する対抗策を考えていると、フェイトから緊急通信が来た。

三人称ｓｉｄｅ

「なのは光大変だよこれを見て。」

と言ってフェイトは、映像を再生させた。

なのはと光は、映像に写っている人物を見て、驚いていた。

「まさかお前が本当に俺たちの敵になったのかよ」

と光は、呟いていた。

そして画面の男は、宣言をしたのだった。

「我々は時空管理局の存在によって人生を狂わされた人間たちだ。」

「我々は、時空管理局に宣戦布告を宣言する。」

「クロノ・ハラウオンが作り上げた最強部隊ラストパタリオンでな。」

そして、映像は切れたのだった。

「クロノ君本当に私たちの敵になったのかな?光君。」

「少なくともクロノを、狂わせたのは僕の所為だろうなあ。

「!!何でクロノ君を狂わせたのが何で光君の所為なの?」

なのはは光に、感情を出しながら質問をした。

「だってクロノは、僕と会うまでは、それなりに活躍してたんだろうけど、僕たちが出てきたからKY的な存在になったけど、それをグレアム元提督がクロノをダークサイドに引きずり込んでしまい、そして今になってクロノの心が闇に染まったんならやはり原因は僕にあるんだよなのは。」

光はそう答えた。

だが光の話を聞いていた3人は、こう言ったのだった。

「そんな事絶対ないよ光「君」

「パパ」

「私たちはいつでも光君を信じてるから光君もパパもクロノ君のことで迷わないで、光君はクロノ君を助けたいんでしょう。」

三人は光に、聞いた。」

「ああ」

光が答えると。

「なら私たちは光君を信じて一緒にクロノ君を助けよう。」
と言って４人はクロノとの戦いに備えるのだった。
三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ
一方クロノの宣言を聞いていたスカリエッティは。
「ジェイルｓｉｄｅ
「あの青年本当にやるとはねえ。」
私は、あの青年クロノ・ハラウオンの宣言を聞いて、私は彼に協力することにした。
「ウーノクロノに貸してあげれる妹たちはいるかい？」
私は、ウーノに聞いた。
「そうですねまだ妹たちは大半が起動前なので、現時点で彼に貸せる戦力は、クワットロとセルだけですね。」
「そうかあの二人なら十分だろう早速手配してくれたまえ。」
私が、そう言うとウーノは下がったのだった。
「さてクロノ・ハラウオンよせいぜい私たちのために時間を稼いでくれたまえよ。」

「私の真の目的である覇王のゆりかご発見と覇王の生まれ変わりを見つけるまでのな」

スカリエッティはそう言いながら笑っていたのだった。

「まあそれでも私の探し物が見つかるまでは私も管理局潰しも楽しむとしょう。

ｊｄｅ　ｅｎｄ

ジェイルｓ

そしてクロノの宣言から2週間後ついに、ＺＥＵＴＨ（管理局名機動六課の始動する日が来たのだった。

果たしてなのはたちはクロノの暴走をとめることとが出来るのか？

そしてスカリエッティが探している覇王のゆりかごとは一体？そして、覇王の生まれ変わりは存在するのか？

続く

キャラ設定３（前書き）

少し遅くなりましたがＳＴＳ編に入ったのでキャラ設定の変化したところを追加しました。

キャラ設定3

少し遅れましたが、ここでＳＴＳ編のオリキャラ説明をしたいと思います。

名前　高町光

年齢　１９歳

魔力光桜色と蒼色

デバイスアカシックハートエクセリオン

アカシックハートエクセリオンは、なのはのレイジングハートエクセリオンと同じ時期にプレシアの力により、アカシックハートが強化されたのである。

スキル　スキルは、自分の知識として、知っている物を具現させる能力とパートナーにも自分の能力を与えることができる。
デバイス融合　これは、光がアカシックハートとレイジングハートを強化する時に、自分のスキルを使い、レイジングハートとアカシックハートにエクシードリングが、装備できるようにしていた。
ちなみにこのデバイス融合は、光とエクシードリングがあれば別世界のレイジングハートと、デバイス融合は可能である。

ガッテスハート

これはアカシックハートとレイジングハートが、デバイス融合した時の名前である。

ガッテスハート時は
レイジングハートが、メインオペレーターをし、
魔法の名前も微妙に変わります。

例・スターライトブレイカーがガッテスハート時は、コスモライトブレイカーになります。

備考

高町光君は、時空管理局の総帥です。

その事実を知るのは管理局の中でも限られた人だけである。

ちなみに、なのはとは1年前に結婚をした。

続いては、ララ・テスタロッサについてです。

名前　ララ・テスタロッサ

年齢　１９歳

魔力光　赤

デバイス　バルブラット　基本系は、鎌型

プレシアが、ララのために作り上げたデバイスである。

備考　ララはフェイトとの双子の妹である。

最近はプレシアと共に、地球でプレシアの研究の手伝いをしている。

ヴィヴィオとは、光争奪戦を繰り返している。

ララは光と一緒で転生者です。

以上です

ＺＥＵＴＨ（機動六課）始動（前書き）

修正しました

ＺＥＵＴＨ（機動六課）始動

いよいよＺＥＵＴＨ始動日である。

はやてｓｉｄｅ

「ついにこの日が来たなリィンフォース　ツヴァイ。」

私が言うと二人が言った。

「そうですねついに主の夢への一歩ですね。」

「はやてちゃんこれからが本番ですよ頑張りましょう。」

「せやな二人とも頑張ろう。」

私が二人と話していると部隊長室に数人の隊員が挨拶に来たのだった。

「失礼します本日ただいまＺＥＵＴＨに、出向してきました高町光一等空尉です。よろしくお願いします。」

「同じく高町なのは一等空尉です。よろしくお願いします。」

「同じく高町ヴィヴィオ二等空尉です。よろしくねはやてお姉ちゃん。」

「コラヴィヴィオちゃんと挨拶しないとダメでしょ。」
なのはがヴィヴィオを叱っていた。
「まあまあ今は、それくらいにしときなのはちゃん」
「でもはやてちゃんこういうことはちゃんとさせないと。」
なのはは言ったが。
私はスルーして、フェイトちゃんたちに挨拶をお願いをした。
「それじゃ私からねフェイト・テスタロッサ執務官ですよろしくお願いします。」
「同じくアリシア・テスタロッサ執務官ですよろしく。」
「最後は、私たちの番ね。」
私は、時空管理局特別局員のアリサ・バニングスよ。」
「同じく時空管理局特別局員の月村すずかですよろしくお願いいます。」
「以上7名が今日からＺＥＵＴＨに出向ととなります。」
「はいみんなよろしゅうな。」

私たちは挨拶を終えると
部屋割りについてとヴィヴィオとアリサとすずかの配置について、
話し合った。」

「みんなの部屋割りなんだけどどうしょうか?」

「まあなのはちゃんと光君は、夫婦やから一緒でいいとして、問題
はうちとアリサちゃんとすずかちゃんや誰かが、個室行きなんやけ
ど、誰が行く?。」

私が聞くと。

「そんなの決まってるじゃない行くのは、はやてあんたよ丸

アリサはそう言い切った。

「何で?うちなんアリサちゃん。」

私が聞くと、アリサちゃんは答えた。

「はやては、守護騎士がいるから、個室がいいでしょ。」

アリサが言った。

私はアリサちゃんに言われ、少し納得できないところあったが、こ
れ以上時間をかけるわけにはいかないので、納得して次の話題の話
をした。

「それでな光君と、なのはちゃんの意見をききたいんやけどいいか

な？」

「何かな？はやてちゃん。」

「ヴィヴィオとアリサちゃんとすずかちゃんの配置先なんやけどどないしょうか？」

私が二人に聞くと光君がが答えた。

「ねえはやてみんなも僕が配置のこと決めていいかな？」

「うん私もいいよ。」

「私もいいよ」

なのはちゃんとフェイトちゃんも光君の意見に賛成した。

そして、光君は配置のことを喋りだした。

「僕の考えとしては、アリサとすずかをライトニングに入れて、ヴィヴィオは、スターズに、入ってもらったらどうかな？はやて。」

光君が私に、質問をしてきた。私は、光君を信頼してるのでこう答えた。

「配置のことは、光君の意見採用や。。

こうして話し合いが、おわった時、リィンフォースが言った。

「主そろそろ時間ですよ。」

「おっともうそんな時間かいな皆部隊のみんなに挨拶する時間よ行こうや。」

私はみんなを連れて集合場所に向かった。

はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そしてはやてによる部隊長挨拶がありました。

「うちがこの部隊長を務める八神はやてです。皆さんこれから一緒に、この次元の世界の秩序を守って行きましょう。」

「以上八神はやてでした。　次に部隊長たちの紹介するで。」

「まずは、スターズからや、隊長は、高町なのは一等空尉で、副隊長は高町光一等空尉です。

なのはと光は、壇上にあがり、挨拶をした。

「よろしくお願いします」

二人が挨拶を終えると拍手が鳴り出していた。

「次はライトニングのほうを紹介するで皆準備はええか?」

とはやてが悪のリしていると聞いている隊員たちもおおーーーとはやてに付き合っていたのだった。

「それじゃライトニングの部隊長は、フェイト・テスタロッサ執務官で、副隊長は、アリシア・テスタロッサ執務官です。」

フェイトとアリシアも壇上に上がり挨拶をした。

「皆さんよろしくお願いします。」

挨拶が終わると隊員たちか拍手を受けていた。

その隊員たちの中にいるスバルとティアナは、ライトニングのエリオとキャロと挨拶していた。

そして、式が終わりスバルたちは隊舎を回っていると、声をかけられたのだった。

スバルたちが、振り返るとそこには、ヴィヴィオがいた。

エリオとキャロは、スバルとティアナが、自分たちは知らない女の子と親しそうに話していたので、二人はスバルに聞いたのだった。

「あのスバルさんこの方は誰ですか?」

「あ、私は高町ヴィヴィオですよろしくね。」

「え、高町てなのはさんや光さんに関係してるんですか?」

とエリオが、ティアナに聞いた。

「ええ、そうよ子の子は、なのはさんと光さんの正真正銘の娘なのよ。

ティアナの答えに驚く二人。

「えええーーーー」

エリオとキャロの叫び声が隊舎内に響いていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

なのはとヴィヴィオ

エリオとキャロはヴィヴィオのことを聞いて、驚いていた。

三人称ｓｉｄｅ

「そういえばどうしてヴィヴィオがここにいるの？」

スバルが聞いた。

「スバルあんたここになのはさんと光さんがいるのよ、ヴィヴィオがついて来ててもおかしくないじゃない。」

ティアナが答える。

「あ、そうか。」

ティアナの答えに納得するスバルその時、なのはがやって来たのだった。

「ヴィヴィオここにいたんだね光君がヴィヴィオを、探してたよ今部隊長室にいるから、行って見て。」

「はーいママ」

そしてヴィヴィオが部隊著室に行こうとした時、なのはが、ヴィヴィオに耳打ちをしたのだった。

（ヴィヴィオ実はね、今ね部隊長室にねヴィヴィオと同じ時間から二人の少女が、来てるんだ早くあっておいで。）

（え、本当ママ？）

（うん）

ヴィヴィオは部隊長室に向かった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

「それじゃ私たちは、訓練場に行って見ようか？

私がそう言うと４人は今から訓練ですか？と言ってきた。

「うんそうだよと答えると、スバルたちは喜んで４人は私より先に行ってしまった。

「ちょ、ちょっと皆わたしをおいていかないでよ。」

私は、急いで訓練場に向かいました。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ヴィヴィオｓｉｄｅ

私は、ママに言われて、パパがいる部隊長室に行く途中、私はヴィータさんに出会った。

「おーヴィヴィオじゃねーかどうしたんだＦＷ陣と訓練しなくていいのか？」

「私は、今ママに言われて、部隊長室に行く途中です。」

「そうなのか？ヴィヴィオはＦＷ陣としても本気を出せねえもんな。」

「あはは。」

「そうだヴィヴィオ用事が終わったら私と模擬戦しようぜ。」

私は少し間をおいて答えた。

「いいですよヴィータさん。」

と私が、答えるとヴィータさんは喜んでいた。

「ホントかヴィヴィオじゃあ後で、室内練習場で待ってるからな早く来いよヴィヴィオ。」

私は、ヴィータさんと別れ、部隊長室に向かいました。

そして、部隊長室に着いた私は、中に入った時、懐かしい声を聞いた。

「失礼します。はやてさんパパ、私に用事て何？」

私が話してると、女の子二人から声をかけられたのだった。

「久しぶりヴィヴィオちゃん。」

「私たちヴィヴィオちゃんがいなくなって、心配したんだよ。」

果たしてヴィヴィオを知るこの二人の正体は？

ヴィヴィオside　end

続く

ヴィヴィオの親友

私は、部隊長室の中に入ると、声をかけられ、声のしたほうに、顔を向けるとそこには、私の親友がいました。

三人称ｓｉｄｅ

「ヴィヴィオ久しぶり、元気だった？」

二人の女の子の一人が、ヴィヴィオに声をかけたのだった。

ヴィヴィオは自分に、声をかけてきた子の事が、思いだせないでいたのだった。

その様子を見ていた、もう一人の女の子が、喋りだした。

「もしかしてヴィヴィオ、私たちの事忘れたの？」

女の子は、そう言うと、ヴィヴィオに最初に声をかけた女の子が、驚いていた。

「えーヴィヴィオ私たちのこと覚えてないの？」

ヴィヴィオが、女の子たちにおそるおそる思いだした名前を女の子たちに言った。

「もしかして、リオ・ウェズリーと。コロナ・ディミルなの。？」

「そうだよヴィヴィオやっと思い出したの？」

コロナたちが言うと、ヴィヴィオは、二人に、謝りながら言ったのだった。

「ごめん本当にごめんね。リオ　コロナ。」

三人は、仲直りをして、互いの今までのことをはやてと光も交え、情報交換をしたのだった。

「私たちは、ヴィヴィオが消えてからずっと探していたの。　そしたらしばらくして、私たちの前に、ウェンディと名乗る女性が現れたの」

「な！！ウェンディだとー」

光の、驚き方に、驚いていたヴィヴィオたち。

「ああ、話を続けてくれ」

「そして、ウェンディさんが、これを貸してくれたの。これを使えば、ヴィヴィオの所に行けるよと言って、私たちをここまで連れて来てくれたの」

コロナが、ヴィヴィオに見せたものを見て、ヴィヴィオは驚いてしまった。

「！！こ、これは」

そこには、ヴィヴィオがこの時代に来た切欠を、作ったロストロギア時を駆ける翼を、コロナたちが持っていたのだった。

「ねえヴぃヴィオ私たちと元の時代に、戻ろうよ。元の時代のヴィヴィオのパパや、ママも心配してるよ」

リオはヴィヴィオを説得していた。

「でも、私は」

ヴィヴィオは、言葉に詰まる。

その時光が、ヴィヴィオに助け舟を出したのだった。

「ねえヴィヴィオ」

「何？パパ」

「ヴィヴィオは元の時代に戻りたくないなら戻らなくてもいいんだよ。
戻りたいならコロナちゃんたちと戻ってもいいんだよ。」

「僕たちのことは気にしなくていいからね」

「そうや、うちたちのことは、気にしたらあかんで、うちたちもヴィヴィオが、いなくなるのは、寂しいけどな。ヴィヴィオ人間素直が一番や」

はやてと光はそういって、ヴィヴィオに答えを選ばせたのだった。

果たしてヴィヴィオの出した答えは？

「コロナ。リオ。私は、能登の時代には、戻らないよ。二人には、悪いけど私は、ここのパパと、ママが私は大好きになったから」

「そうか、なら私たちもここに残るしかないな。なあコロナ」

リオがそう言うと、コロナも同意をしたのだった。

「そうだねリオ」

「そういうことではやてさん私たちもここにいさせてください」

コロナとリオが、はやてにお願いをしていた。「うちらは別にかまへんよ」

「ありがとうございますはやてさん」

こうしてコロナと、リオはＺＥＵＴＨで、生活する事になったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

ヴィヴィオが、コロナたちと、あっている時ヴィータは、ヴィヴィオとの模擬戦が楽しみようで室内練習場に向かっていた。

ヴィータｓｉｄｅ

私は、久しぶりにヴィヴィオと模擬戦ができることが嬉しかった。お互いの全力は出せないが、それでも楽しみだった。

何故お互いが、全力で、模擬戦が出来ないのかと言う訳は、ＦＷ陣に見せるのは、今の段階では見せられない。

それにもう一つ、ヴィヴィオの持つデバイス、セイグリットハートとヴィヴィオの能力で、ヴィヴィオは大人モードになれるのだだった。

私は、一度だけヴィヴィオと本気でしたのだったが、私の完敗だった。

それ以来の再戦だったから私は、燃えていた。

そんなことを考えていると、私に不幸が歩いてきた。　その不幸とは、バトルマニアのシグナムに出会ったことだった。

シグナムは、どこで聞いたのか、私とヴィヴィオが、模擬戦をすることを知っていた。

「ヴィータ頼みがある聞いてくれるか？」

「なんだシグナム」

「ヴィータお前ヴィヴィオと模擬戦するんだろう」

「ああ」

私が、そう言うと。

シグナムが私にお願いがあるから聞いてくれといったのだった。

「何だ、シグナムそのお願いて」

「ああ、実はなヴィヴィオとの模擬戦の相手私と、代わってくれないか？」

「何だとシグナムヴィヴィオと約束したのは、私なんだよ」

「それを代わってくれってどういうことだよ」

「私も、ヴィヴィオと戦いたくなっただけだ。どうしても駄目と言うならヴィータここで勝負しょうではないか」

「いいぜシグナム勝負してやらー行くぞ！！」

私たちは、互いにデバイスを起動し戦闘を始めたのだった。

ヴィータｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方ヴィヴィオは、リオたちと共にヴィータとの待ち合わせの場所の、室内練習場に着いていた。

三人称ｓｉｄｅ

「ねえヴィヴィオ場所ここで合ってるの？模擬戦したいいて日とまだ来てないよ」

「場所は、ここで合ってるよリオ」

「でもヴィヴィオあれからもう3時間だよいい加減にしないと夕飯の時間だよもう」

「そうだね。リオ。コロナ早く食堂に行ったら、パパとママと一緒に食べられるかもだね」

「そうだよヴィヴィオ。行こうよ食堂に」

3人は食堂に向かったのだった。

一方シグナムとヴィータは夜になっても部屋に戻ってこないので、はやてが探しに行き、二人を見つけはやては二人に雷を落として、二人を連れて帰りました。

こうして、ＺＥＵＴＨの初日は、終わりを告げたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

二人の時間

いろいろなことがあった一日が終わるころ、なのはと光の部屋では、二人は話していた。

なのはｓｉｄｅ

「ねえ光君、コロナちゃんたちどうするの？」

私は、光君にコロナちゃんたちの今後が気になったので、質問をしてみた」

「どうするて、どう意味？なのは」

光君は、私に質問をした

あの二人のも私たちの家族として迎えるの？」

「あの二人は、高町家では、預からないよ」

「え、じゃああの二人は、どうするの？光君」

私は、光君の答えに驚き、大声で光君に、聞いてしまった。

「なのは落ち着いてよ、何も、預からないわけじゃないんだからさ」

「どういう意味？」

「あの二人は、高町光としては、預からないけど、獅童光として預

かるんだ総帥の子供としてね、実は三提督には、もう伝えてるんだ」

「三提督は、僕の提案を、受け入れてくれたよ。明日リオちゃんとコロナちゃんに、明日説明を僕がするからさ、なのはお願いがあるんだ」

「何？光君」

「明日さ、ヴィヴィオたち三人を連れて、魔法学校に、見学に行ってくれる？　さすがに学校に行かせないとね特にコロナちゃんとリオちゃんは」

「ヴィヴィオだけならある程度学校行ってなくてもね、怪しまれないけど」

「うんわかったよ光君。たしかに、リオちゃんとコロナちゃんをＺＥＵＴＨに、入れる気がないならあの二人には、魔法学校に行っていたほうが二人の為になるかな」

私は、そう考えて、光君のお願いを引き受けた。

「ごめんねなのは。明日のＦＷ陣の教導あどうするの？」

「明日の教導はフェイトちゃんとアリシアさんに、頼んでみるから、心配しないで光君」

「ありがとう。なのは」

こうして私たちは、話おわると、眠りにつきました。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

番外編親子ボウリング大会（前書き）

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　術式を潰す少年の粉／＼〃〃ナナとの二回目のコラボ回です

番外編親子ボウリング大会

この物語は、番外編である。

この物語は、高町光の別次元の友人である、高町サンの世界から物語は始まる。

サンは、あのデビルとの戦いから数ヶ月たち、サンは、平和な時をすごしていた。

そんなある日サンたちの元に一通の手紙が来たのだった。

「ああ？　光から手紙？　並行世界だろ？　あいつらも何でもありだよな」

「それでママ、何て書いてあるの？」

その内容とは、今度僕たちの世界で、親子対抗ボウリング大会があるんだけどサン君参加しないかい？

追伸、ちなみに優勝商品はどんな願いでも、叶うドラゴンボールだよと大きく書かれていた。

サンはその古い宣伝モドキの様な内容に思わず笑ってしまう

「なんでも願い事ね～、胡散臭「行こう！」

サンの言葉を遮り、フェイとはソファーから立ちあがる。その表情は非常に不気味で、何を考えているのかが良く分からない

「ねえお兄ちゃん、光さんって誰？」

「あ～、まあ俺の友達だな。年は結構離れてけどな」

不思議そうな顔をして首を傾げるヴィヴィオにサンは少し気まずそうに言った。光の様な優しく強い人物、を昔殺しかけたというのを知られたくないのだ

「え～とフェイトちゃん？　何で行きたいのかな？」

一方なのははやけに気合いが入っているフェイトに聞く。

「なんでも願い事だよ！　気合いが入らない方がおかしいよ！」

それを聞いたフェイトはやる気になり、結局参加することになってしまったのだった。

こうしてサン達は光の世界に向かったのだった。

一方こちらは光の世界の、海鳴市のボウリング場の中である。

三人称ｓｉｄｅ

「光君、特別招待チームの人たちは、何時こちらに着くのか聞いてる？」

はやては、光に聞いてみた。

「ああ、サン君たちならもうすぐこっちに着くて先ほど連絡があったよ。はやて」

「うちは楽しみやで噂のフェイトさんのタラシモードを見られると思うとなあ」

「そうなんだはやて、でも、僕も話を聞いただけだけど向こうのフェイトちゃん、かなり人気みたいだよ。はやても堕とされない様に、注意してね」

光ははやてに注意するように伝えた。はやては覚悟している相手に堕ちる程、やわでは無いと、胸をドーンと叩く。

「大丈夫や光君、うちは向こうのフェイトちゃんのタラシモードには負けへんよ」

はやては、光の忠告に対し、そう答えるのだった。

そして、迎えに行っているなのはとこちらの世界のフェイトとプレシアさんから連絡が入った。

「光君、今なのはさんたち着いたみたいだよ、これからキャ」

突然なのはからの通信が途絶えたのだった。

「まさか」

光は、嫌な予感がしたのでなのはたちのいる場所に向かった。

光が、その場所に着くと、サン君の世界のフェイトが、二人のなのは相手に少し暴走していた。

「ちょっと父さん、来る前に俺と約束しただろうが。なのはさんに色目使わないって！」

サンは必死にフェイトをこちらの世界のなのはから遠ざけ様と引っ張るが、フェイトは一向に止まらない。「だってなのはが二人居るんだよ！？　これで色目使わなくていつ使うの！」

「なのはママ、フェイトパパいつもと違う……」

「「にゃはははは……」」

二人のなのははもはや苦笑いすることしか出来ず、こちらのフェイトと、プレシアは余りの出来事にショックを受け気絶していたのだった。

未だにサンは暴走しているフェイトを必死に止めていた。

「やめろって父さん。昨日母さんと愛し合ったばっかりだろ！」

さりげなく六歳児が絶対に使わない言葉と、向こうのなのはの爆弾発言を言ったサン。当然向こうのなのはは赤面し、こちらのなのはまで恥ずかしいのか顔を赤らめている。

「ちょっとサン！？　何言って「甘いよサン！　そもそも同じ恋人が二人居るというのは一般的には気持ち悪く思われがちだが、それは違うよ。もし本当に思っているならそれは本当に愛してるんじゃ

ない。それになのはの可愛さはーー」」

あっさりと言葉を遮り、次々と早口でなのはの可愛い点をしゃべるフェイト。

「やあサン君久しぶり」

「おお、久しぶり光」

二人は、軽く挨拶をし、サンが、フェイトを止める協力を光に求めた。

「頼む、光父さんを止めるの手伝ってくれ」

「うん、了解したよサン君」

「フェイトさんこれ以上暴走すると、大会に出れなくなりますよ、それでもいいんですね？フェイトさん」

光が、暴走中のフェイトに、話しかけるとフェイトの動きが止まりフェイトは、光に近づいて不満を言っていたのだった。

「えー光君それはないよせっかくここまで来たのに」

「だったら自重しろ。ＴＰＯというのを弁えんか、暴走父」

「フェイトさんよく見てください、こちらのフェイトとプレシアさんには、刺激が強すぎてショックを受けて、気絶してますしね」

「あ、ほんとだ気づかなかったよ。あれ?プレシアさん?……
えええええ!?プレシア母さんが居るの!?」

光の、話を聞いている内に、冷静さを取り戻していたが、

死んだはずのプレシアが存在していたことに驚きの叫びを上げる。

「え~とフェイトさん。こちらとフェイトさんたちの世界は並行世界ですから。この様なことがあっても不思議じゃないんですよ……
……現に二人は恋人でサン君も存在するし……」

軽く説明した光だが、こちらからすれば、向こうの世界の方が非常に信じられない世界なのだ。

そして、光とサンはそれぞれ気絶してしまった、こちら側のフェイトとプレシアを抱きかかえ、ボウリング大会開催場所へみんなで向かった。

大会場所に向かう途中、光とサンは話していた。

「助かったよ光、お前が来てくれて、あのままだったらなのはさんは、間違いなく父さんに、やられていたと思うからな」

「いや僕のほうのが甘かったよ、不用意になのはに君たちの迎えを頼んだ僕の責任だよサン君」

「僕は、向こうのフェイトさんの行動パターンを、サン君たちの世

界で、体験してたのにね」

光は、苦笑いしながら答えた。

一方二人のなのはも、
話をしていた。

「ねえなのはちゃん」

「はい、なのはさんなんですか？」

こちら側のなのはが、向こう側のなのはさんに返事をした。

「あれから光君との仲は、どうなったの？」

「えっと私たち実は、昨年式を挙げちゃいました」

なのははそう行って、左手の薬指にはめている結婚指輪を、なのはさんに見せていた。

「い～な～、私も早くフェイトちゃんと結婚したい」

フェイトを愛する方のなのはは、光を愛する方のなのはの指輪を見て口を尖らせる。

「え～と、やっぱりさっきの姿を見ても……」

「うん、私のことを愛してくれてる証拠だし。……でも昨日、あんなに奉仕してあげたのに……やっぱりまだ溜

「ストップですなのはさん！　これ以上子供たちの前ではＮＧです！」

「え？　そうかな？」

「ヴィヴィオちゃんが居るんですからそのくらいに……ハァ」

高町家というのは並行世界によって、かなり違うみたいだ……。こちらのなのはは並行世界の娘、ヴィヴィオの教育の心配をしながらも、前方で歩いている光とサンに付いて行った。

二人のなのはは、以前光とこちら側のなのはが、サン君達の世界に行った時からの、自分たちの判別手段として、こちら側のなのはをなのはちゃんと呼び、向こう側のなのはのことは、なのはさんと呼び合っていた。

二人のなのはと、光達が話していると、ボウリング大会の会場に到着した。

光たちが、会場の中に入るとはやてが出迎えてくれていた。

「お帰り光君、そちらが特別参加チームの方々やな」

「あ、はやてただいま。
そうだよこの人たちが僕となのはが、招待したかった人たちなんだよはやて」

「初めまして皆さん私は、ＺＥＵＴＨの部隊長しています八神はやてですよろしくお願いします」

「あ、こちらこそありがとうございます。八神部隊長今日は、楽しませてもらいますよ」

サンが答えた。

はやてへの挨拶が終わると、サンが光に質問をしてきた。

「あのさ光」

「何？サン君」

「お前のとこの部隊名、機動六課じゃあないんだな」

「ああ、そのことね、ＺＥＵＴＨは、独立部隊の名前なんだ」

「独立部隊？」

サンが考えていると、光が話を続けていた。

「サン君レジアス中将知ってるよね」

「ああ」

「実はねサン君。僕は、時空管理局の総帥なんだ」

「何だって、光お前が管理局の総帥なのか」

サンが、光に質問をする。

「実は、そうなんだ。まだ公には、公表はしてないけどね」

「ＺＥＵＴＨは、これからさまざまな相手と戦わなきゃいけないし、その相手が、外敵とは限らないしね」

「なるほどな、光わかったぜお前たちの、世界ではもしかしたらお前達自身が、管理局を裏切る可能性もあるんだなその相手と戦う為に」

サンは、光に答えた。

「だから僕は、総帥として、この部隊を独立部隊として、設立できるようにしたんだ」

「いかなる権限に使われないようにするのと、迅速に動けるようにね」

光が、サンに答えた。

そして、光達は、ボウリング大会に参加する為それぞれの控え室に向かった。

ついに、ボウリング大会の開始時間になり、大会が始まった。

この大会に出場してるのは、高町家を除けば２チームが出場していた。

「一つ目のチームは優勝賞品のドラゴンボールを、提供していただいた。
ベジータ親子チームです」

「二つ目のチームは、ナカジマ親子です」

「次は、2チーム同時に紹介します。W高町家です」

そして光たちは、競技会場に登場した。

向こうのフェイトは、すでにタラシモードだった。会場に来ていた観客そして、こちらのシグナムが、フェイトの餌食となり、墜ちてしまっていた。

そして、観客席からは、フェイト様コールが響いていた。

観客席は静まりはやてが、ルール説明する為に登場した。

「それじゃあうちがルールー説明するで。ルールは、通常のボウリングと同じルールと同じやけど、大1フレから第5フレまでは、子供たちが投げてな。第6フレから最終フレは、親が投げてな」

「ルール説明は以上や皆頑張ってな」
はやてが、そう言って、退場すると、大会の開始する合図が鳴り、大会が始まった。

「サン君私は、君には絶対負けないよ」

こちらのヴィヴィオは、サンに言い放った。

「おう、俺も負けないぜヴィヴィオ」

ヴィヴィオとサンは、互いの目に強い意思のある目をしていた。

こうして子供たちによる熱い戦いが始まった。

子供たちの戦いは、４チームとも得点には、差が余り付かず勝負は、親たちの勝負に、委ねられたのだった。

「やるなヴィヴィオ」

「サン君こそ」

ヴィヴィオと、サンは互いの健闘を称え握手をしていた。

そして、親たちの戦いは、パートナー同士で交互に投げる試合方式に、急遽なっていた。

そのためナカジマ親子は、親が一人しかいなので、リタイアするしかなかった。

親たちの戦いは進み、実質W高町家の、一騎討ちになっていた。

そして、最終フレ最初の投球は、両方なのはが務めていた。

得点は1ピン差で光のいる高町家が、リードしていた。

「光君頑張って」

「フェイトちゃん頑張れ」

「パパ優勝だーー」

「父さん決めろーーー」

「フェイトパパ頑張れーー」

光とフェイトは、互いの家族の応援を受け運命の1球を、互いに投げた。

勝負の結果は、サン君のいる高町家が、逆転優勝を果たしたのだった。

「やったよなのは、サン、ヴィヴィオ私やったよーーーー」

「やったぜ父さん」

「おめでとうフェイトちゃん」

「フェイトパパすごい」

勝利を、喜んでいるサンたちとは、対照的に落ち込んでいる光たちは、フェイトたちに挨拶をしていた。

「優勝おめでとうフェイトさん、なのはさん継ぎする時は、負けませんよ」

「いつでも相手してあげるよ光君」

「サン君おめでとう」

ヴィヴィオの目には、負けて悔しいのか、大量の涙が、溜まっていた。

「ああ、ヴィヴィオありがとう」

サンは、ヴィヴィオの涙を見て、少し困惑していた。

そして大会がすべて終わり、優勝商品のドラゴンボールはサンたちの世界に旅立って行った。

こうして、ボウリング大会は終わりを告げた。

そして、ドラゴンボールと、フェイトが墜としたシグナムの物語は、向こうの世界で、いつか語られるだろう。

番外編親子ボウリング大会（後書き）

粉／＼＇＇ナナさんどうですか？

駄目でしたら消しますね

魔法学校

様々な出来事が、あった日の翌日の朝。ヴィヴィオとリオコロナの三人は、なのはに連れられて、魔法学校へ、出かけたのだった。

三人称ｓｉｄｅ

「ママこれから私たちを、どこに連れて行くの？」

ヴィヴィオが、なのはに聞いていた。

「ヴィヴィオと、コロナちゃんと、リオちゃんには、これから魔法学校に．通ってもらうからね」

「今日は、転入手続きに、行くんだよ３人のね」

なのはは３人に、歩きながら説明をしていた。

「えーー私たちもなんですか？なのはさんと光さんの娘のヴィヴィオが、学校行くのはわかりますが、リオちゃんや私までが学校に行けるんですか、こちらの世界で？」

「うん行けるよ３人でね」

なのはは、そう答えた」

コロナが、なのはに質問をしていた。

「あ、そうかコロナちゃんたちは、まだ光君から、話を聞いてないんだったね」

「実は、こちらでのコロナちゃんたちの、身の回りをお世話と、お金などの管理などをしてくれる人が、決まったの」

「え、そうなんですか？」

コロナたちは、驚いていた。こんなに早くこちらの世界で、コロナたちを受け入れられるとは、思ってもみなかったからである。

なのはは話を、続けていた。

「コロナちゃんたちの身元引受人の名前は、師童光さんて言う人なんだよ。ちなみにその人は管理局の総帥をしてる人なんだよ」

なのはが、コロナたちは驚いていたが、ヴィヴィオは、なのはに嬉しそうに笑顔で笑っていた。

そして、ヴィヴィオたちは、学校に着いた。ヴィヴィオが、学校の名前を、見るとそこには、Ｓｔ．ヒルデ魔法学院と、書かれていた。

そのころＦＷ陣はと言うと、早朝練習を終え、新人４人は朝食を取る為、食堂に来ていた。

「ねえ、ティアきょうなのはさん早朝訓練の時、来なかったねどうしたんだろうね」

「そんなの私が、分かるわけないじゃない。もしかしたら光さんと、ヴィヴィオのことで、話をしてるんじゃないの？ほら、ヴィヴィオ

はＦＷ陣じゃないし、学校行っててもおかしくない年齢だしね」

ティアナが、そう答えるとスバルたちは、納得していた。

そこにアリシアと、フェイトがやって来た。

「みんなお疲れ様」

アリシアとフェイトは、ＦＷ陣の近くの席に、座った。

「あ、フェイトさん、アリシアさんお疲れ様です」

「はーいみんなお疲れ様でした」

アリシアが返事をした。

「あのーフェイトさん質問いいですか？」

「いいよ、スバル質問しても」

「ありがとうございますフェイトさん。なのはさんは、どこに行ったのですか？」

スバルはなのはの事を、フェイトに質問をした。

「なのはなら今日は、ヴィヴィオを連れて学校見学に、行ってるよ多分夕方には、帰ってくると思うよ」

フェイトがスバルに、答えると。スバルは少し、興奮気味で、ティ

アナに話していた。

「すごいねーティア、ティアの言うとおりだったね」

「ああもうスバル、落ち着きなさいよ。まったくもう」

楽しい一時を、過ごすＦＷ陣だった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そのころ光は、自分たちの部屋で、くつろいでいた。

光に、特別回線で連絡が、入ってきた。そのの相手とは、クロノ・ハラウオンだった。

光ｓｉｄｅ

「光、久しぶりだな」

「クロノお前、どうしてこんなばかげたこととしたんだよ」

光が感情的になって、クロノに聞いた。

「俺がこういう運命を辿る事に、なったのは貴様のせいなんだよ光」

「まあいい、そんなことを言う為に、貴様に、連絡したわけではないのだ」

「今から言う、ポイントに、光一人で来い、俺たちで、決着つけようぜ」

「ああ、わかった」

「では待っているぞ」

そして、クロノからの通信は切れた。光は、誰にも見つからないように、隊舎を出て、クロノの指定したポイントに向かった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

魔法学校後編

ヴィヴィオたちは、Ｓｔ．ヒルデ魔法学院に到着すると、学園の中に入り、学園長室に向かった。

ヴィヴィオたちが、学園長室に着き、中に入ると。Ｓｔ．ヒルデ魔法学院の学園長がヴィヴィオたちを出迎えたのだった。

三人称ｓｉｄｅ

「ようこそＳｔ．ヒルデ魔法学院へ」

「私は、この学院の学園長をしているビアン・ソルダークといいます。よろしく」

「それではヴィヴィオさん、コロナさん、リオさんの３人は、別室にて編入試験を受けて貰いますので、移動をおねがいします。あ、お母様には、まだお話があるので、ここでお待ちくださいね」

ビアンは、そう言うとヴィヴィオたちを、編入試験を行う教室に連れて行ったのだった。

そして、学園長室にのこったなのはは、暫く待っていたのだが、いくら待っても戻ってこないので、なのはは学園長室を出ようとした時、外から鍵がかけられていたのだった。

「閉じ込められたの？」

なのはは、考えていた。

「どうして学園長が私を、閉じ込める必要があるの？」

なのはは、部屋から出る為に、扉を破壊して、脱出しようとしていた。

「行くよ、レイジングハート」

（了解ですマスター）

そして、なのははＢＪを、装着して魔法を使おうとした時、どこからか、ヴィヴィオたちの、悲鳴が聞こえて来た。

「いやあああやめてよーー」

「誰かーー助けてー」

なのはは子供たちを守る為に、扉を破壊してヴィヴィオたちの元に、向かった。

一方、ヴィヴィオたちは、豹変したビアンに襲われていた。

「パパ、ママごめんなさいヴィヴィオは、今から約束を破ります。そうしないと友達を、守れないから

ヴィヴィオが、セイグリットハートの聖王モードを起動しようとした時、なのはが、ヴィヴィオたちの元にたどり着いたのだった。

「ヴィヴィオ、コロナちゃん、リオちゃん大丈夫？

「ママ」

「なのはさん」

「もう大丈夫だよ私が、助けるから」

なのはは、そう言いながら、ビアンを睨んでいた。

「さすがだな、不屈のエースオブ・エースだなここに来るまで大量の下シュペンストを配置していたのだがな。それらを破壊してここまで来るとはな。」

「あなたは、一体何者ですか？」

なのはが聞くと、ビアンは答えた。

「私の本当の名は、ビアン・ゾルダーク。かつてＤＣを創り世界制服を成し得ようとしたものよ」

「まあ今は、とある組織に属しているがな」

ビアンはそう言いながらヴィヴィオたちを、解放していた。

そして、ビアンは、ヴィヴィオたちに、謝っていた。

「怖い目に、あわせてすまなかった。穣ちゃんたち」

「まあここまで時間を稼げばあの方も、満足するだろう、それでは不屈のエースオブ・エースまたどこで、出会えることを、祈っているぞ、ではさらばだ」

ビアンは転移装置を、使いどこかへと消えていった。

そして、ヴィヴィオたちは、なのはと共に急いで隊舎に戻ったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方クロノに指定されているポイントに向かった光は、クロノと共に現れた人を見て驚いていた。

光ｓｉｄｅ

「なんで父さんと恭也さんが、ここにいるんだーー」

光は、叫んでいた。

「さあ光、俺と戦う前にこいつらで、準備運動をしろよ」

クロノは、そう言い放った。

果たして、光は、この危機を、乗り越えることが出来るのか？

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

仕組まれた戦い

光がクロノに指定された場所に行くと、そこにいたのは、クロノと、何者かに操られて正気を失っている高町士郎と、恭也の姿だった。

「クロノ貴様父さんたちに、何をしたーーーー」

光は、士郎たちの様子がおかしいので、クロノに聞いていた光にしては、珍しく。

「ああ、この二人が、気になるのか？この二人は、俺が地球に行ってお前を倒す為に、連れて来たのさ」

「嬉しいだろう、光お前はお前の家族によって、死ぬのだからなー」

高らかに笑い続けるクロノ。

そんな彼らをモニター越しに見ている一人の男がいた。

ジェイルｓｉｄｅ

「ふふ、彼は私でも恐れてることを平気でする男なんだねー」

スカリエッティが言うと。

「あらドクターでも恐れてることありますの？」

と質問が来た。

「それは私でも、あるぞクワットロ」

スカリエッティが答えた。

「それではこの映像をＺＥＵＴＨに送ってくれたまえウーノ」

「はいかしこまりましたドクター」

「さて私は、この勝負を楽しみながら、見るとしよう」

ジェイルｓｉｄｅ　ｅｎｄ

はやてｓｉｄｅ

私はこれからの部隊運営のことで、光君に相談をするため光君を探していた。

「光君おらんなあ、どこにおるんやろ」

私は、暫く隊舎内を、探していたが、光君を見つけることは出来なかった。

仕方なく私は、部屋に帰ると、通信映像が送られてきていた。

私はそれを開いてみると、私は、唖然としたのだった。

その映像の中身は、高町親子が、クロノ君と共に光君と戦っている映像だったのだ。

「ただいまはやてちゃん」

「お帰りなのはちゃん早かったな」

「うん、あれはやてちゃんなに見てるの?!!」

私のミスで、なのはちゃんに見られてしまい、なのはちゃんは、飛び出して言ってしまった。

はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

仕組まれた戦い後編

三人称ｓｉｄｅ

「もう一度聞くぞ、クロノ父さんたちに何をした？」

「何、俺の仲間に特殊な力で、人を操れる者がいるんだよ」
（人を操れる力だと、まさか俺が転生前に見ていたアニメにもあったな。よし、クロノに揺さぶりをかけて見るか）

「なあクロノ、お前の仲間に、ゼロと言う男がいるだろう」

「な！！何故貴様が、ゼロのことを知っている」

クロノは、動揺していた。

（やはり、ゼロかと言うことは、父さんたちにかけられたのはギアスだな）

光が、考えていると、クロノが士郎たちに光を攻撃するように、命令を下したのだった。

士郎と恭也は、クロノが命令を下した瞬間光に攻撃を始めたのだった。

「ち、さすが父さんたち操られてもここまで、強くて厄介な相手とはある意味、最強かもな父さんたちは」

「仕方がないアカシックハートソードモード」

「了解」

光は、アカシックハートをソードモードにして、士郎と恭也を相手にしていた。

「あかんな、光君。士郎さんたちに押され始めてる」

はやては、通信映像を見ながら呟いていた。

光と、士郎たちは互角の戦いをしていたが、次第に光は士郎たちに徐々に追い詰められていた。

「はあ、はあ、グッまさか父さん今までは僕が相手しても、無意識で加減をしていたのかな？」

二人の猛攻を、ふらつきながらもなんとか回避している光。だが士郎の攻撃を回避した際に、バランスを崩し倒れる光だった。

恭也は、倒れた光に追撃をかけていた。

光は、転がりながら恭也の攻撃を回避していた。

そのころはやての部屋で、光の危機を知ったなのはは、光を救出する為に隊舎を飛び出していた。

「光君、死なないで」

なのははそう思いながら愛する夫の元に、向かっていた。

この時、なのはは気づいていなかった。なのはの後ろからヴィヴィ

オたちが、ついて来ている事に。
「ねえヴィヴィオ黙って、ヴィヴィオのお母さんの後をついて行くのは、まずいんじゃない？」

「私も、そう思うよヴィヴィオ」

リオとコロナが、ヴィヴィオに話していた。

「あんな不安そうな顔をママがする時は、パパに何かがあった時だけなんだ」

「私は、パパとママの二人の子供として、出来る事をしたいんだ」

その時コロナが、ヴィヴィオに聞いた。

「ヴィヴィオ私は、あなたがどういう経過でなのはさんたちの娘になったかを聞いたことあるけど、このままだったら、ヴィヴィオにとって苦しむことになっちゃうんだよ、それでもいいの？」

「おいコロナ。それはどういうこと？」

リオが、コロナに聞いていた。

「実は、本来ならヴィヴィオとなのはさんたちの出会いは、本来ならもう少し後なんだ」

コロナがリオに説明していた。

「どうして、コロナがそれを知ってるの？」

ヴィヴィオがコロナに聞いた。

「私は、ヴィヴィオのパパに聞いたんだよ。それでこちらの時間で、ヴィヴィオが、苦しむ前に私たちが、迎えに来たんだよ」

「ねえもう一度聞くけど、ヴィヴィオ本当に元の世界に戻る気はないんだね？」

コロナが、ヴィヴィオに確認していた。

「うん私は、帰らないよコロナ」

ヴィヴィオがコロナに、そう言うとコロナは元の時代で光から、預かっていたロストロギア時を駆ける翼を取り出し、コロナはゴーレムを創成起動させ、ゴーレムに時を駆ける翼を破壊させたのだった。

一方光とクロノは。

光にクロノがトドメの一撃を放とうとしていた。

「これで貴様も、終わりだな。高町光」

クロノは、収束魔法を使い、光に向けて放ったその斜線上に士郎たちがいるのむししていた。

「もうだめだ」

光があきらめかけていた時、光たちのまえに桜色の防御壁が現れたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

なのはの想い

光に、トドメをを刺そうと砲撃魔法を放ったクロノだったが、光たち3人に当たる直前。桜色の防御壁が、3人の前に現れ、光たちを救ったのだった。

「あれは、なのは魔法だ。どうしてここにいるのか?今日はヴィヴィオたちの学校に、行っているはずなのに」

光が、そう考えてると、なのはが、光に近づいてきた。

「光君大丈夫?」

「どうしてなのはが、ここにいるんだ」

「それはヴィヴィオの学校で、私たちは事件に巻き込まれたの、それをはやてちゃんの部屋に報告に行ったら、はやてちゃんが通信映像でここのことを見てたの」

「だから私は、光君を助ける為にここに来たの」

なのはが、光に、なのはがここまで来ることになった経緯を、説明したのだった。

「そうだったのか、ありがとう助かったよなのは」

なのはと光が話しているとクロノが割り込んで来たのだった。

「僕を無視するなよーお前らーー」

クロノが言うと、なのはが、クロノに対して言ってはいけない言葉を行ってしまった。

「ああ、ごめんねクロノ君てば敵役になっても影が薄いね。さすがＫＹだね」

なのはがそう言うと、激怒し、なのはに砲撃魔法を放った。

「僕のことをＫＹと呼ぶなーーーなのは」

「ふーんそれが、クロノ君の全力なんだね。それじゃ私には、届かないよクロノ君」

そう言いながらなのははＳＬＢを放つ準備をしていたのだった。

「クロノ君聞いて、私は、クロノ君の事大好きだったよ。」

なのははクロノに、自分の気持ちを伝えようとしていた。

「え」

クロノは突然の告白に戸惑っていた。

「私は、光君とクロノ君が、昔みたいに仲良くして欲しいの。だからこの一撃で、クロノ君を悪夢から開放してあげるよ」

「いっけー！！スターライトブレイカーー」

なのはの放ったＳＬＢは、クロノの放った砲撃魔法を飲み込みクロノに襲い掛かる。

その時、突如黒い機動兵器が現れ、クロノをなのはのＳＬＢから守ったのだった。」

そして、その機動兵器は
クロノと士郎恭也を回収しいずこかへ飛び去ったのだった。

そして現場に、残った光となのはは光がなのはに謝っていた。

「なのはごめん僕の力不足で、父さんたちを救えなくて」

「光君これから二人で、お父さんたちを助けよう」

となのはが言った時、声がした。

「パパとママずるいよ私たちもおじいちゃん達助けるもん。ねえコロナ、リオ」

「私たちも手伝いたいです」

「正直に言えば私たちは、あなた達を信じてませんが私たちは、これからあなた達と行動を共にして、あなた達が本当に信用できる人たちなのかを見極めさせて貰います」

コロナがそう言うと、光はわかったと言い頷いたのだった。

そして、なのはたちは傷ついた光を抱えその場を後にしたのだった。

一方同じ通信映像を見ていた変態と子ダヌキは。

「これからが実に楽しみだ」

「これからが楽しみやな」

二人は同じ感想を呟いていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

新チーム結成

あの事件から一週間が過ぎ、ＺＥＵＴＨＦＷ陣はなのはの教導のもと少しずつであるが、成長の兆しが見えていた。

そんなある日、はやてがＦＷ陣を集合させていた。

「みんなごめんな、急に集まってもろうて」

はやてが言うと、ＦＷ陣を代表してティアナが、答える。

「いえ、気にしないでください」

「それで八神部隊長私たちに、伝えたい事とはなんですか？」

スバルがはやてに聞いた。

「今からＦＷ陣の新メンバー及び、新チーム発表するでーー」

「えええーーー」

ＦＷ陣は、はやての発表に驚いていた。

「まずは、スターズからや。スターズの新メンバーはこの人や」

はやての紹介で一人の男性が出てきた。

男性は、前に出てきて自己紹介を始めたのだった。

「今日からスターズ部隊に配属となった、ティーダ・ランスターです妹共々よろしくお願いします」

ティーダは挨拶終えると、妹ティアナの元に、向かった。

「次は、ライトニングの新メンバーを紹介するでー」

はやてがそう言うと、二人の女性が、登場してきた。

二人は前に出て、自己紹介を始めた。

「私の名前は、アリサ・バニングスよよろしく」

「私は月村すずかですよろしくお願いします」

アリサと、すずかは挨拶を終えるとエリオたちの元に向かった。

「それでは新チームの紹介です。チームフレアの皆さんですどうぞ」

はやての紹介で出てきたのは、ヴィヴィオたちだった。

そして、ヴィヴィオたちは、自己紹介を始めた。

「私は、チームフレアの高町ヴィヴィオですよろしくお願いします」

「同じくチームフレアのコロナ・ティミルですよろしくです」

「同じくチームフレアの

リオ・ウェズリーですよろしく」

「これが新チームフレアのメンバーや」

はやてがそう言うと、その直後フェイトからＦＷ陣に初任務が下されたその内容とは？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

フェイトの友達

ＦＷ陣の初任務が今始まる。

三人称ｓｉｄｅ

「ＦＷ陣の皆いいかな、任務を伝えるよ」

「はい」

フェイトは、今回の任務について、説明を始めたのだった。

「今から君たちには、地球に行って貰います。そこで、私の友人である花咲つぼみという少女と合流し、つぼみの友人たちの周りにガジェット及び私たちと敵対行為をした者います。その者を捕まえるのが、今回の任務です」

「今回の任務の同行者は、私とアリシア執務官とヴィータさんが同行します。それに現地での協力者もいますので、初任務頑張りましょう」

そして、任務内容を聞いたＦＷ陣は、それぞれの部屋に戻り、地球に行く準備を始めていた。

そのころ、なのはと光は。

今回の任務先である地球のある人物と、連絡を取っていた。

「それではスバルたちの新デバイスをそちらに転送しますね、そちらも砂漠の使途や、いろんな組織と戦っていて大変でしょうが、あの子達のことよろしくね花咲つぼみさん」

「はいわかりました伸也さん」

「つぼみちゃん今の僕の名前は光だよ」

「あ、ごめんなさい光さんでしたね」

「ついついいままでの癖で」

「あ、つぼみちゃんあの子達が来たら極力プリキュアに、変身しないでくれると助かるな。特にエリカちゃんには、強く言ってね」

「はーいわかりました光君も今度なのはさんと一緒に、遊びに来てくださいね」

「ああ、必ず行くよ」

そして、通信は切れたのだった。

「久しぶりにつぼみちゃんの顔を見たな」

何故つぼみたちが光の転生前の名前を知っているかと言うと、ウェンディが、伸也を転生させる前に、伸也の記憶を覗くと、華麗に戦う少女達の記憶が美しく見えたみたいなので、女神の力で実体化させていたのだった。

光は、その事実を知らないのだった。

「あ、光君つぼみちゃんとの通信おわったんだね」

「ああ、なのは。なのはもみんなと地球に、いきたかったんじゃないの？」

「ううん私は、光君がいてくれればどこでもいいんだ。それに私たちには、例の物を完成させなきゃいけないし」

「そうだねなのは」

なのはと光は、誰もいない通信室で、互いの唇を重ねあっていた。

そして、地球へと向かった新生ＦＷ陣と、フェイトたち彼女たちは任務達成できるのか？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

つぼみｓｉｄｅ

私は、光君との通信を終えると私の目の前に、スバルさんたちの新デバイスが届きました。

「久しぶりに光さんとお話しました。　シプレエリカのところに行って来ます」

「はーい」

こうして私は、エリカの家に向かいました。

私は、久しぶりに友達と、会えるので嬉しいです特にフェイトと合えるのが。

つぼみｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

番外編とある人物の恋物語前編（前書き）

今回はハヤテ主役の番外編作りましたが続きが見たい人は感想で教えてください

番外編とある人物の恋物語前編

この物語は本編とはまた違う世界での端である。

今ここに一人の少女が居る少女の名は、ハヤテと言うこの少女ハヤテには将来を誓い合った彼がいた。

その彼は、今無実の罪で投獄されていた。

この物語は、ハヤテが仲間の力を借りて、彼に会いに行き自分たちの愛を貫く話である。

ハヤテの彼氏の名は、ジェイルと言う名だった。

ジェイルはいわゆる天才科学者と言われていた。

ハヤテとジェイルは誰もが認める仲のいいカップルだった。

「ねえ、ジェイル」

「なんだい、ハヤテ」

「今日は天気がいいから研究は、お休みにしない？」

「うんそうだね、そうしょうかハヤテ」

こうして二人は、町に出かけたのだった。

二人はまだ知らなかった街に出かけたことによって、二人の運命が、大きく変わることになるとは。

ハヤテｓｉｄｅ

私とジェイルは、ジェイルの研究所から近い、ラングランと言う街にやって来た。

そこで、私たちは買い物済ませ帰ろうとした時、私たちに声をかけて来た。

「あのーすいません。あなたの隣を歩いてる男の人の職業を、教えてくれませんか？」

と一人の警官が、私に聞いてきたのだった。

私は、馬鹿だったあの時素直に言わなければ、ジェイルが、あんなことにならずに済んだかもしれないのに。

「えーと彼は科学者ですよ警官さん」

「そうですか科学者なんですね。」

対象者発見と警官が応援を呼んで私とジェイルを引き離したのだった。

「あんたたちうちらに何するんやーー」

私はジェイルを捕えようとする警官たちに、叫んだ。

「何だ穣ちゃんどうしてやつが捕まったか教えてやるよ」

とい言って、警官は、語りだしたのだった。

「いいかよく聞けよこの世界には、科学者抹殺法というもんがあるんだよそしてその法律に基づき対象者は、アルカンシェル刑務所に連行され、3日後には処刑されるんだよお穣ちゃん。どうやら穣ちゃんの彼氏がこの世界で最後の対象者みたいだな」

「穣ちゃんに良いこと教えてやるよ彼氏を死なせたくなければ、3日以内に、彼を脱獄させるんだな」

警官はそう言って、ジェイルを連行していきました。

そして私は、余りの出来事にショックを受けていました。

ハヤテｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ジェイルが、アルカンシェル刑務所に連行され2日がたちジェイルの処刑が、明日に迫っていた。

三人称ｓｉｄｅ

ハヤテは、泣き崩れていた。

「ジェイルジェイルもう私は、あなたに会えないの？」

ハヤテは泣きつかれて、眠ってしまっていた。

ハヤテは夢の中である二人と出会っていた。

「ねえ君大好きな人を、君が助けたいと思ってるなら君に力を私たちが貸してあげるよどうする」

一人の少女がハヤテに聞く。

「私は、私は彼をジェイルを、私の大事な人を、救いたい」

ハヤテが答えると二人の少女は、ハヤテに、ある力を与えたのだった。

少女たちがハヤテに与えた力は、魔法の力だった。

こうしてハヤテは、魔法少女として生まれ変わった。果たしてハヤテは、ジェイルをすくことが出来るのか？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

後編に・・・続かないかも

フェイトとつぼみ

ＺＥＵＴＨＦＷ陣とフェイトとアリシアヴィータの３人を乗せた次元船は、地球に向け出発していた。

船内では、フェイトへ今回の任務の質問や、談笑をして船内で皆ゆったりしていた。

その仲でも、エリオとキャロは、任務で、別世界に行くのは二人とも初めてだったので、緊張していたそれを見たフェイトは、二人に近づき、話しかけたのだった。

「エリオ、キャロ少しいいかな？」

「はいフェイトさん」

二人が、返事するとフェイトは二人に言った。

フェイトｓｉｄｅ

「このお話は、私がなのはや光たちと出会って１年ぐらい過ぎたころかな私たちは、遠足で希望ヶ花市に行った時わたしは、道に迷った時一人の女の子に出会ったの」

「その時一人の女の子と出会ったの。その女の子と出会うまでは友達は、なのはたちだけでいいと思ってたの」

「お姉ちゃんどうしたの？一人なのお姉ちゃん」

「つぼみーどこいるのー」

「あ、お婆ちゃんここだよー」

つぼみは、自分探している祖母に手を振っていた。
あら、つぼみその子は誰？

つぼみの祖母が、つぼみに聞く。

「あ、そういえばまだ自己紹介が、まだだったね」
「私の名前は、花咲　つぼみだよあなたの名前は？」

「私の名前は、フェイト・テスタロッサだよよろしくつぼみちゃん」

こうして、私はなのはたち以外で、友達が出来た瞬間だった。

「だから二人に言いたいことはね、今回地球でいろんな経験をすると思うけど地球で友達を作って欲しいんだ私みたいにね」

「はい、わかりましたフェイトさん」

フェイトｓｉｄｅ　ｅｎｄ

エリオとキャロは、フェイトの話を聞いている内に、緊張は解れていた。

そして次元船は、地球の希望ヶ花市に着いたのだった。

続く

二人の妖精とＦＷ陣

地球に着いたＺＥＵＴＨメンバーは、飛行場から電車に乗り換え今回の目的地である希望ヶ花市に到着した。

三人称ｓｄｅ

「へえーここが地球なんですか？」

ＦＷ陣のなかで、地球に来た事のないエリオとキャロとコロナとリオが感想を言っていた。

そして、全員で出ようとするとフェイトはある人から声をかけられたのだった。

「フェイトちゃん久しぶりね」

フェイトは、ふいに名前を呼ばれ声のしたほうに、顔を向けるとそこには一人の女性がいた。

「あ、薫子さんおひさしぶりです」

薫子と呼ばれた女性は、フェイトたちににこやかな笑顔を見せていた。

フェイトは、ふいに名前を呼ばれ声のしたほうに、顔を向けるとそこには一人の女性がいた。

「あ、薫子さんおひさしぶりです」

薫子と呼ばれた女性は、フェイトたちににこやかな笑顔を見せていた。
そして、フェイトはＦＷ陣を呼び、薫子のことを説明し始めた。
「皆この人は、花咲薫子さんと言って、私たちがこの地での駐屯地して、薫子さんのお宅を借りることになってますので挨拶をしましょう」
「よろしくお願いします薫子さん」
「はいこちらこそよろしくです」
「よろしくです」
「えーーなんで人形が、生きているのよーー」
と取り乱すティアナだったが、驚いているのはティアナだけだった。
「ごめんなさいねみなさんこの子達は妖精なんですよ実は」
「妖精かー私始めてみたよ」
ヴィヴィオは目を輝かせていた。
そして、ヴぃヴィオが妖精に質問したのだった。
「シプレと私は言いますよろしくお願いします」
「僕はコフレですよろしくです」

妖精とＦＷ陣は互いに談笑しながら自己紹介をしていた。

そしてＺＥＵＴＨメンバーは今回の任務の協力者である花咲薫子の家に、向かったのだった。

薫子の家に着いたフェイトは、内心楽しみだったつぼみに会えるのがそして、その時がやって来た。

「お婆ちゃんただいま」

「おかえりつぼみ」

「あれ、お婆ちゃんお客さん来てるの？」

「ああ、そうだよ来てごらんつぼみ」

「はーい」

つぼみはおばあちゃんに言われ、家の中に入るとつぼみは、フェイトと再会を果たしたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

ヴィヴィオとプリキュア

ＦＷ陣は明日からの任務の確認と、誰がつぼみちゃんたちの学校に通うのかを決めていた。

三人称ｓｉｄｅ

「とりあえず明日からのつぼみさんの護衛もかねて、誰が学校に通うのかきめましょうか？」

「そうねそれがいいわね」

「だね」

アリサとすずかもティアナの意見に賛成した。

「それでティア誰が、学校に通うの」

スバルが、ティアナに聞いた。

「そこなのよね問題は、私やスバルは無理だし、エリオとキャロだったら小学生に見えるしね」

ティアナたちは、誰をつぼみちゃんの護衛を付けるかで悩んでいた。

一方フェイトとつぼみは別室で、話をしていた。

「久しぶりだねつぼみ」

「久しぶりフェイト」

「ねえ、フェイト新人の４人てあの子達でいいんだよね、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエ
その４人で？」

つぼみがフェイトに聞いた。

「その通りだよつぼみ何で、つぼみが４人のことを、知ってるの？」

フェイトはつぼみに質問をした。

「実はねフェイトたちが、こちらに来る途中に光君から連絡があって、もうすぐそちらに着くからてね」

「そうだったんだ」

「それとね光君が私と学校に行かせるのは、ヴィヴィオに出来ればしてほしいて」

「なんでヴィヴィオ？」

フェイトは光の考えを、理解するのに少し時間が、必要だった。

そのころここ砂漠の使徒の基地では、サバーク博士と、ナンバーズのクワットロが、密談をしていた。

「なるほど地球に、あなた達と戦っている連中が来たのですか？」

「ええ、その通りですわサバーク博士」

「それはまずいですね。ただでさえプリキュアにてこずってる状況なのに」

サバークは、悩んでいた。これからの作戦についてそこでクワットロが提案したのだった。」

「博士よろしければ私たちと手を組みませんか？」

「何？君たちとだと」

「ええ、そうするのが、
お互いの為ですわよ」

サバークは少し考えて、答えた。

「よろしいその条件受けようではないか、クモジャキーいるか」

「はいここに」
サバークが名前を呼ぶと、赤髪の男性が現れた。

「彼はクモジャキー彼なら君の役に立つだろう」

こうしてクワットロとサバークの、密談は終わった。
次の日結局学校にいかようのは、ヴィヴィオに決まったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

ヴィヴィオとプリキュア後編

そして次の朝、ヴィヴィオはつぼみ共に、今日から通う私立明堂学園に出発したのだった。

「それじゃあ皆行ってきます」

ヴィヴィオはそう言いながら見送りをしているみんなに向け、手を振っていた。

三人称ｓｉｄｅ

つぼみとヴィヴィオは学校に向かう途中二人は、光の話をしていた。

「ねえ、ヴィヴィオちゃん、光さんから私たちの秘密のこと知ってるんだよね？」

「うん、パパから聞いてるよつぼみお姉ちゃんはプリキュアで、変身後の名前がキュアブロッサムなんだよね？」

「そうなんだけどそれは、他の人には秘密だよヴィヴィオちゃん」

「うん、わかったよつぼみお姉ちゃん」

二人が話しながら学校に向かっていると、後ろからつぼみを呼ぶ声が、聞こえて来たのだった。

「つぼみおはよう」

「あ、おはようございますえりか」

「おはようございますえりかお姉ちゃん」

ヴィヴィオがえりかに挨拶すると、えりかがつぼみに質問していた。

「ねえ、つぼみこの子誰？」

「あ、この子は私の親戚の子で、今度こっちに暫く住むようになったんですよ」

「えりかお姉ちゃん私は、高町ヴィヴィオですよろしくね」

「私は、来海　えりかよよろしくねヴィヴィオ」

エリカとヴィヴィオは、互いに自己紹介をし、３人で学校に向かった。

３人が、学校に着くとヴィヴィオは、つぼみたちと別れ職員室に向かっていた。

「ここが地球の学校か、私初めてだから楽しみだなあ」

ヴィヴィオが考えていると職員室について、ヴィヴィオは担任の先生から説明を受けていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方つぼみたちは、ヴィヴィオと別れ教室に向かったのだった。

つぼみｓｉｄｅ

私とエリカは、教室に入るとクラスの子達がざわめいていた。

「何々、みんなどういたの？そわそわしちゃってさ」

えりかがクラスメイトに、理由を聞くとどうやらヴィヴィオちゃんのことは、みんな知っているようでした。そしてヴィヴィちゃんが、担任の先生と共に来ました。

「えー今日はみんなに新しい友達を紹介するぞ高町さん入ってきて」

「はーい」

先生がそう言うとヴィヴィオは返事をして教室の中に入って来た。

そして、ヴィヴィオは自己紹介を始めたのだった。

「私の名前は、高町ヴィヴィオですよろしくお願いします」

ヴィヴィオが挨拶を終えると拍手が起こったのだった。

私の前にヴィヴィオちゃんの席は決まり、午前中ずっとっヴィオちゃんは、質問攻めに遭っていた。

つぼみｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして、昼休みになり事件が、起こりました。なんと私たちの敵砂漠の使徒の大幹部クモジャキーが、私たちの知らない卵型の機械を使って町を破壊していたのだった。

そして、つぼみとエリカはクモジャキを止めるため現場に向かった。

一方ヴィヴィオはＦＷ陣に、がジェットが現れたのを報告し、つぼみたちの後を追いかけていたのだった。

続く

ヴィヴィオを除くＦＷ陣は、薫子さんの花屋の手伝いをしていた。
三人称ｓｉｄｅ

「すいません薫子さんこのお花は、どこに陳列したらいいですか？」

スバルが薫子に、聞いていた。

「それは、お店の中央に陳列してね」

「はーいわかりました」

ティアナ以外のＦＷ陣はお店の手伝いをしていた。

一方ティアナは、焦っていた。突然のＦＷ陣の増員そして、死んだと割り切っていた兄が生きて戻ってきたことによりティアナは戸惑っていた。

「私は、本当にこの部隊に必要な人間なのかな？今までは、スバルとエリオとキャロの４人だったころは自分がしっかりしないといけないと思っていたからだ」

「だけど今は違う兄さんや、ヴィヴィオコロナにリオ。みんな私よりランクは上だ、特にヴィヴィオはなのはさんと光さんの娘だし、私が頑張っても超えられないかもだしね」

ティアナが一人で考えていると、フェイトがやって来たのだった。

「ティアナこんなところでどうしたの？」

「あ、フェイトさん」

その時、ヴィヴィオからの緊急連絡が入り、大量のガジェットが現れたということだった。」

FW陣はヴィヴィオと合流する為現場に向かっていた。

一方先行して現場に着いたヴィヴィオたちは。

「プリキュアの種いくでーす」

シプレとコフレが、そう言うとシプレとコフレからそれぞれのプリキュアの種を出し、つぼみとえりかに渡し二人はその種を、ココロパフューム二セットし二人はプリキュアに変身を始めたのだった。

「プリキュアオープンマイハート」

二人がそう叫ぶと二人のプリキュアへの変身が開始されたのだった。

ヴィヴィオは、二人の変身に見とれていた。

「ヴィヴィオちゃん行きますよ」

変身を終えたブロッサムがヴィヴィオに声をかけていた。

そして3人が現場に到着すると大量のガジェットとクワットロと砂漠の使徒の、大幹部クモジャキーが待ち構えていた。

「あらー聖王様また会いましたねお元気でしたか？」

「久しぶりじゃのお二人さんあれから少しは、強くなったかのう？」

「あなたは！！どなたでしたっけ？」

「ほらブロッサムアイツの名前はクマジャッキーよたしか？」

キュアマリンがそう言うと、クモジャキーが怒り出したのだった。

「誰がクマじゃいわしの名前はクモジャキーじゃい」

ヴィヴィオたちは、相手の隙を突きガジェットを破壊しながら互いの敵に攻撃を開始したのだった。

果たしてヴィヴィオたちは勝てるのだろうか？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

狙われた心の花

地球では、ヴィヴィオとブロッサムたちは、クワットロとクモジャキーとの戦いを続けていた。

そのころミッドチルダのＺＥＵＴＨ部隊長室に新たな次元震反応が発生したと報告を受けているはやてだった。

三人称ｓｉｄｅ

「なんやてまた次元震が起こったんか？それで場所はどこで起こったんか？」

はやてが報告しに来た隊員に聞くと、その次元震は、高町光を飲み込んで消えたと言う答えだった。

「なんやてーー光君が次元震に飲み込まれたやて」

光は次元震に飲み込まれる前に光は、なのはとヴィヴィオのためにあるものを買いに行ってる時だっだった。

果たして光の運命は？

場所と時間は戻りここは地球

「やりますね３人共だけど私どもの新たな能力を見せてあげますわ

そう言ってクワットロは懐からビンを出し、それを飲み干して、すぐにクワットロの体が巨大化していくのだった。

それを見ていたヴィヴィオたちは驚いていた。

「えーーーこんなのありなのーーー」

そして、3人は巨大化したクワットロの攻撃をかわす3人その時マリンが言ってはいけない言葉を言った。

「なにこのおばさん大きくなるなんて卑怯よ」

「誰がおばさんですってー」

その時残りのFW陣が、ヴィヴィオと合流したのだった。

現場に着いたFW陣も巨大化しているクワットロに驚いていた。

キャロは、気絶してしまいコロナも余りの大きさに現実逃避をしていた。

次の瞬間悪夢が訪れたのだった。

「きゃあああ」

FW陣はクワットロに攻撃をするのだが、クワットロの反撃に遭いティアナは、クワットロに捕まってしまうのだった。

「これは」

この時クモジャキーは見た。ティアナの心の花が、萎れているのを。

それを見たクモジャキーは、不敵な笑みを浮かべていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

クワットロたちに捕まってしまったティアナ。その時クモジャキーの手により、ティアナの心の花が奪われ、ティアナは水晶の中に閉じ込められてしまった。

そして、クモジャキーはティアナから抜き取った心の花とティアナのデバイスを使いデザトリアンを作り出してしまったのだった。

その光景を見たクワットロはクモジャキーにあるものを渡し撤退して行ったのだった。

そして、デザトリアン化ティアナは、圧倒的な力を見せつけブロッサムたちを追い詰めていた。

「イクワヨクライナサイアカシックバスター&スターライトブレイカー」

ティアナはなんと光となのはの魔法を使ったのだった。

FW陣は驚いて反応が遅れてしまった。

「きゃあああ」

2種類の砲撃魔法を完全にかわせたのはヴィヴィオとスバルだけだった。

「ティアもうやめてよこんなことするの。私はティアと戦いたくないんだ」

スバルが懸命にティアに語りかけるがティアは、聞き入れなかった。

「ウルサイスバルアンタニワタシノキモチナンカワカラナイワヨ」

ティアは、スバルに向けクロスファイアーを放ったのだった。

スバルはその攻撃に対し、一歩も動こうとはしなかった。

ティアナが敵側に回ったころミッドチルダでは、
光が謎の次元震でミッドチルダから姿を消した同時刻なのはも姿を消していたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

私はパトロール中に突然発生した次元震に巻き込まれ異世界に到着したのでした。

「うーんここはどこだろう」

私は次元震によってどこかの世界に飛ばされたのかと思って街中を歩いていると、街中にあるお店屋さんのモニターから私が登場したので驚いてしまいました。

「あれは・・闇の書事件のときの話だ」

私は、疑問だった何故私の過去の思い出が、この世界で流されてい

るのかを。

そして私はこの世界で、光君とララちゃんに似た人を見つけました。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ティアナがスバルに攻撃魔法を放った直後ヴィヴィオがその魔法を受け止めていた。その隙を突きプリキュアたちは、ティアナを元に戻す為動いていたが、クモジャキーによって妨害されるのだった。

「させるかぜよ」

「きゃあああ」

プリキュアたちはクモジャキーの攻撃を受けて吹き飛ばされてしまったのだった。

「ふんこいつはいい物を拾ったぜよ。今日のところはこのくらいにするぜよ」

クモジャキーととティアナは消えてしまった。

そしてスバルの叫びが木霊したのだった。

「ティアアアアアアアアアア」

続く

敗北と現実世界

なのはは次元震に飲み込まれた結果なのはは、なんと現実世界の過去へ来ていたのだった。
なのはｓｉｄｅ

私は、この世界の街中を離れて住宅地に入って暫くすると、私は知ってる人に似てる人たちを見つけた。

「あれは光君にララちゃん？」

私が、二人に駆け寄ると二人は私に気づき、声をかけて来た。

「お姉ちゃん誰ですか？」

「ねえ光君どうしちゃったの？光君私のこと忘れたの？」

私は光君にお姉ちゃん誰？と言われて光君の体を握っていた。

「お姉ちゃん痛いよ」

「あ、ごめんね」

私は光君に言われ光君の体から手を離した。

そして家のほうから白髪の男性が出てきた。光君はその男性に向けこう言った。

「あ、お爺ちゃん」

光は、お爺ちゃんと言いながら男性に抱きついたのだった。

「どうした伸也」

「あのね変なお姉ちゃんがいるのお爺ちゃん」

「わかった伸也お前はアキと一緒に、家に入ってなさい」

「はいほらアキ行くぞ」

光とアキは家の中に入って行った。

「さて、良くぞこの世界に来てくださったな高町なのはさん」

！！私は自分の名前を教えていないのにお爺さんが知っていたことに驚いてしまった。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そのころ戦いに敗れたＦＷ陣は、仲間を救うことが出来ずに落ち込んでいた。

三人称ｓｉｄｅ

ＦＷ陣の中でダメージが大きいのはスターズだった。

ヴィヴィオは、一人で散歩していた。

そしてフェイトとはやての通信を偶然聞いてしまった。

「そんななのはと光が次元震に飲み込まれたなんて」

「残念だけど事実やうちは、二人が飛ばされた世界を見つけるさかいフェイトちゃんはアリシアちゃんと一緒にティアナ救出の作戦考えてくれへんか？」

「了解はやて」

フェイトははやてとの通信を終え、ＦＷ陣の元に戻っていった。

「そんなパパとママが」

ヴィヴィオは、ショックを受けていた。

「なのはさんこの世界は、橘伸也と言う少年があなたたちの世界に行く前の世界での記憶を元に作られた世界なのですロストギア思い出箱と言う名の」

「そしてあなたと、伸也いやあなたたちの世界での名前で、高町光がこの世界を抜け出すには、光がこの世界での思い出より大切な物を思い出せれば脱出できます。なのはさん頑張ってください」

そういうと白髪の男性は消えていった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

１０万ＰＶ突破記念

皆さんいつも転生少年と魔法少女を見ていただきありがとうございます。

ヴィ「作者さんこれからの展開はどうなるの？」

作「今後の予定としては、現在オリジナルのプリキュア編をしてますがそれが終ったらＳＴＳのファーストアラートからホテルのとこまで書く予定です。その後は番外編とオリジナルをするかも」

な「それはいいけど最近クロノ君のあつかいあれでいいの？」

作「実は自分も迷ったけど、クロノ一度敵対したよねならずっと敵として出そうと思って」

フェ「それでいいと思うよ私もクロノは正真正銘のＫＹだし」

全員「それもそうだね」

これからも転生少年と魔法少女よろしくお願いします。

ク「僕の存在感薄すぎるだろー作者ーーーー

作「だってクロノお前ＳＴＳでは出番余りないじゃん」

ク「・・・」

１０万ＰＶ突破記念話（前書き）

今回の話は記念回ですが本編用の伏線らしきものもあります

１０万ＰＶ突破記念話

この話はなのはと光が新婚旅行先で、体験をしたお話です。

光ｓｉｄｅ

僕となのはは今新婚旅行中で小さな村にいます。

事の始まりはなのはがチラシで見つけたある広告だった。

「ねえ、なのは今日はどこに行こうか？」

「あ、それなら私ここに行ってみたい」

なのはが一枚の広告を、光に見せた。

「そこに行きたいの？なのは」

「うんその村は、ブローチとか、ロケットとかの商品を作ってくれるんだよ光君」

「そうなんだじゃあその村に行こうなのは」

「ありがとう光君」

そして僕たちは、目的の村にたどり着いたのだった。

そこで僕たちはある人と出会うのだった。

そして僕たちは、目的のお店を見つけ中に入ると、赤や緑オレンジ等の、綺麗なブローチやロケットが陳列されていた。

「いらっしゃいませ」

「何にいたしましょうか？お客様」

店員が、僕たちに気づき声をかけて来た。

なのはは、店員に聞いていた。

「あの店員さんこういう形でこの色を使って、ロケット作れますか？」

「ええ、出来ますよただ出来上がるのは明日の夕方くらいになりますが構いませんか？」

「あ、はい」

なのはは返事をした。

「それではまた明日の夕方にまた来てください」

僕たちは店を出て、この村の名所である龍の湖に向かった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはたちが、龍の湖に向かう途中一人の占い師になのはたちは呼

び止められていたのだった。

三人称ｓｉｄｅ

「これそこの二人ちょっと来なさい」

「え、私たちですか？」

「そうじゃ」

占い師はそう言ってなのはたちを呼び止めたのだった。

「お主たち名前は高町光となのはじゃろ」

「！！」

二人は驚いていた。占い師に、自分たちの名前を教えてないのに占い師が知っていたからだ。

「わしは、マカロフと言う占い師じゃ」

「お主達は将来この世界に潜む闇の一族との戦いに巻き込まれるだろう」

「その戦いに勝つには、仲間を集めなさい近い将来、お主達の仲間になる物たちを、最初に出会う物たちは伝説の戦士プリキュアと３人のドラゴン刷れいやーと呼ばれる者たちが現れると占いで出ているのじゃ」

なのはと光は、マカロフが言った占いは一種の予言だと思いながら真面目に聞いていた。

「マカロフさんありがとうございました」

そして、二人はマカロフと別れ龍の湖に向かったのだった。

「闇の一族を倒してもその後に現れる者たちに、光となのはだけでは、勝てぬだろうな。急げ光、ナツとウェンディとガジルを早く見つけるのじゃぞ」

マカロフは、そう言いながら光となのはを見送っていた。
そしてその夜光となのはは村にある宿泊施設で、部屋を借りて過ごしていた。

「ねえ光君私たち結婚したんだとね」

「そうだよなのは」

「私光君と繋がりたいな」

なのはは恥ずかしそうに顔を赤くしながら言った。

「え、でも今繋がったらなのは仕事はどうするの？」

「いいの私は、光君との幸せな家族をもっと作りたいのそれにヴィヴィオの為でもあるんだよ光君」

なのはは光にそう言ったのだった。

そして二人は、その夜始めての経験を体験したのだった。
次の日二人は、宿泊施設で夜の初体験の余韻に浸っていると、昨日二人が注文したお店の店員が来た。
「予想より早く出来上がりましたので、お持ちしましたよ」
店員は、そう言いながらなのはと光に完成品を見せていた。
「うわあー綺麗だなあ」
「ねえ光君もそう思うよね」
「うん本当に綺麗なロケットだね」
「そちらの赤色のはお嬢さんので、蒼色のはお兄さんのですよ」
店員が説明するとなのはが聞いた。」
「代金はいくらですか？」
「今回うちの店長が久しぶりに良い仕事をさせてくれたといってこれを二人にプレゼントするそうなので、お代はいりません」
店員はそうなのはたちに伝えたのだった。
そしてなのはたちと店員に夜譲り合い合戦が、起きたが店員の勝利に終った。
そして、なのはたちはこの村を後にしたのだった。

二人は、占い師マカロフの占いを気にしながらも、新婚旅行を続ける二人だった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

本編に続く

ＦＷ陣は、デザトリアン化したティアナを救う為の作戦会議をしていた。

一方なのはもロストロギア思い出箱の中の世界で光を救うべく行動を開始したのだった。

三人称ｓｉｄｅ

私は今ティアナさん救出作戦の、話し合いに、参加していますが、私はパパとママのことが気になっていました。

「それではティアナ救出作戦は、ＺＥＵＴＨメンバー全員でプリキュアの援護をして貰います。そして、ティアナ救出をした後は、速やかに撤退して下さい」

「以上です」

アリシアとフェイトは、砂漠の使徒に囚われたティアナ救出作戦のせつめいをしたのだった。

「みんなごめんね私たちもこういう事態初めてなんだ人間の中に花があることと、その花を使って、あんな化け物を作れる敵が、いるなんて思わなかったんだ。」

「だから今回はみんなに危険な任務をして貰うことに、なってしま

ったのでスバル、エリオ、キャロの三人には、新デバイスで、任務に出てもらいます」
フェイトは3人に新デバイスを、手渡したのだった。
そのころ砂漠の使徒に囚われたティアナは、デザトリアンとして、クモジャキーの手下として、使われていた最強のデザトリアンとして。

（ああ、私このままじゃあ元に戻れなくなくなるかも人間に）

ティアナのデザトリアン化は、予想より早く進んでいた。
一方ロストロギア思い出箱の世界に、入っている光となのはは。
なのはが光を救出作戦を開始したのを知った思い出箱は、なんと光のコピーを大量に作りなのはをかく乱作戦で、対抗していた。

「クッここも偽者なの」

「光君、どこにいるの？」

なのはが光を探していると、なのはの背後から巨大な蔦がなのはに取り付き、なのはの動きを封じていた。

「キャアアこれは何なの？クッ、動けない」

そして、なのはを捕えた蔦はＢＪを破り始めなのはに、精神的ダメージを与え始めたのだった。

「いやあああああこれ以上はだめえええええ」

なのはの悲痛の叫びが響いた時、囚われた光を思い出箱が作り上げた管制人格が光を連れてなのはの前に現れたのだった。

なのはは、この危機を乗り越えることが出来るのか？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

真実

なのはは、ロストロギア思い出箱の管制人格に襲撃されピンチになっていた。

三人称ｓｉｄｅ

「さあこれで、伸也は永遠に、私の物よ」

高らかに、笑う思い出箱の管制人格。それを聞いているなのはには、一つの疑問が、出来たのだった。

その疑問とは、管制人格が、光と呼ばず光の事を伸也と呼ぶのか？という疑問だった。

「ねえ、管制人格さん聞かせてくれない？」

「いいわよどうせあなたはここで終わるのだから。それで、聞きたいことて何かしら？なのはさん。

管制人格が、なのはに聞いた。

「どうしてあなたは、光君のことを、別の名前で呼ぶの？」

「何だそのことこの人はあなたの知る高町光であって、私たちの仲間である」

「もうそれ以上ーーなのはに言わないでくれーーーーー頼む」

光は大声を出し、管制人格の言葉を途中で、遮ったのだった。

「あら珍しいこともあるものね伸也さんが、ここまで慌てるなんてそんなにこの女に自分の正体を知られるのが怖いの？」

「まあいいわこの人は元々私たちの仲間になるはずだったのよ、闇の一族のね」

管制人格はそう言い放った。

そして、話は伸也が転生する前の時間まで遡る

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ここは天界と呼ばれる場所である。

ここでは不慮の事故や、本来は死なないはずが、死んでしまった人を対象に、転生させる部署があるのだが、ここで事件が起きたのだった。

その事件とは、本来は、転生者が自分の行きたい場所に転生するのだが、

ルーシィと言う女神は自分の欲望を満たす為7人の若者をある世界に送り込んで、その世界を破壊しようと企んでいたのだった。

その7人の若者の中に、橘伸也もいた。のちの高町光が。

そして物語は過去の時代へと進んでいく

続く

真実後編

「さあ、もうすぐリリカルなのはの世界を破壊する7人の転生者を送ることが出来るわね」

ルーシィは、転生者が揃うのを待っていた。

転生をする者は、天界での記憶を与えない為に担当の女神が、記憶と感情を封印させ転送ボックスに入れた後本人の記憶と感情の封印を解き、転送するのが一般的なのだが、今回のルーシィのやり方は違法と、されている手段だった。

そのやり方は、あまりに転生者の体を改造し自分の操り人形にしていたのだった。

ウェンディは、ルーシィの野望を止めるべく改造前の、橘伸也を助けたのだが。

「遅かったか」

伸也にはすでに、ルーシィの刻印が刻まれていたのだった。

その刻印は、同じ刻印を持つものが現れない限り、発動はしないものだった。

ウェンディは、最悪な事態を避ける為伸也を、なのはの世界送ることに決めたのだった。

つまり伸也が転生先を決めたように、見えるがすでに、女神たちに

よって決められた転生だったのだ。

時間は現代に戻り、思い出箱の管制人格が、なのはに言った。

三人称ｓｉｄｅ

「さあ、なのはを倒して、私はルーシィ様の元に連れて行くんだからなのはやられて紅？そろそろ」

管制人格はなのはに、最後の攻撃を仕掛けたのだった。

「ごめんね光君助けれなくて」

なのはが諦めた時、空を飛ぶ海賊船が現れ、管制人格のなのはへの攻撃を防いだのだった。

「何？あの船どうして私の空間に入ってこれるのよーー」

管制人格は、混乱していた。

そして、空を飛ぶ海賊船から降りてきたのは６人の若者だった。

果たして、６人の若者の正体とは一体？。なのはたちの敵なのか、見方なのだろうか？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

なのはの危機を救ったのは、六人の若者だった。

果たして彼らの正体とは？

三人称ｓｉｄｅ

「おいなのは何でこんな面白いことしてるのに、俺たちを呼ばないんだよ」

「！！あなたはマーベラスさんどうしてここにいるんですか？」

なのはが聞いた。

「それは、どうやらなのはたちの世界にも、宇宙最大のお宝の一部が、あるらしい」

「え、それはほんとですか？」

「ああその上ザンギャック帝国が、この世界を狙っているらしいという情報を得たので、ハカセに次元跳躍装置を作ってもらいこちらの世界に来たんだ」

その時管制人格が、切れたのだった。

「いつまで私を、無視するんですかーーーーだいたいあなたたちは、何者なんですか？」

管制人格が聞くと、6人の若者たちは答えた。

「俺たちは宇宙海賊だ」

「宇宙海賊？大体なんで宇宙海賊が、こんな小娘を、たすけるんですか？」

「俺たちにとって、この二人は、大事な仲間だからに決まってるだろ」

「行くぜ、ゴーカイチェンジ」

「派手に行くぜ！」

6人の若者たちは、変身をし管制人格と、戦いを始めたのだった。

「君たちは一体なんで僕たちを助けてくれるんだ？」

光は一人の戦士に聞いた。

「さっきマーベラスさんが言ったじゃないですか、あなたもなのはさんも、俺たちの仲間なんですよ。仲間を助けるのは、当たり前ですよ」

「仲間か」

光は、顔を沈めながらその言葉を、つぶやいたのだった。

そして、管制人格に囚われていた光は、助け出され光は、なのはの元に連れられていた。

そのころ地球と、ミッドチルダでは、砂漠の使徒による攻撃が、再開されようとしていた。

ミッドチルダでは、スカリエッティとクロノが次の計画を始動させようとしていた。

「どうだねクワットロ砂漠の使徒は、我々の計画に使えそうかね？」

「ええ、ドクター聖王の器のデーター収集は、彼らに任せても良いと思いますよ」

「そうか、なら我々は、予定どうり覇王の器を探すことにするよ」

「あ、そうそうそちらに、セルを送ったのでよろしく」

「はーいわかりましたドクター」

スカリエッティたちも動き始めていた。

一方思い出箱の管制人格は、海賊戦隊に押されていた。

「何こいつら強すぎるわ姿を変えるなんて卑怯よ」

「しかたがないわここは一時撤退するしか、ないわね」

そう言って、思い出箱の管制人格は、なのはたちを通常空間に、出して思い出箱は、撤退したのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

二人の答え

なのはたちは、意外な救援者たちのおかげで、ロストロギア思い出箱の空間から脱出できたのだった。

ここは、空飛ぶ海賊船の一室

光ｓｉｄｅ

「なのは、ごめんね今まで君たちを騙して」

僕はなのはに謝っていました僕が転生者であることを黙っていたことを」

「ねえ、光君何で、今までそのことを黙ってたのそれだけ教えて」

僕は、なのはに、そう質問されたので、素直に答えた。

「実は僕は怖かったんだなのはたちに真実を知られるのが、そして君たちとの関係が壊れるのが怖かったんだ」

「そうだったんだね、それで光君は、これからどうするの?私たちの敵になるの?」

「僕は、このままなのはたちと共に一緒にいたいと思ってるんだ。なのはたちが許してくれるなら」

「・・・わかった光君私は、光君の言葉を信じるよ」

なのはは、少し沈黙後そう答えたのだった。

僕は、なのはの答えを聞いて、涙が出そうになっていた。

その時、僕たち二人は、この船の船長であるキャプテンマーベラスに呼ばれたので、部屋を出て行った。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

光となのはが、呼ばれた部屋に行くと、そこにはキャプテンマーベラス以下、五人の若者がいた。

「ようやく来たな二人とも」

部屋に入ると、光がマーベラスに質問した。

「助けていただいことには、感謝してます。それで僕たちを呼んだ、理由を、教えてください。マーベラスさん」

「何簡単なことだ俺たちが、この世界を、調べた結果お前が管理局と言う組織のトップと言うのが、わかったんだ、だから」

「なるほど、この世界での海賊行為を黙認しろと言うわけですか？」

「はあ、誰がそんなことしろといったよ」

マーベラスは少し呆れた表情で答えた。

「だってあなたたちは、海賊なんでしょう？」

光は、そう答えた。

「あーーもういいはっきり言うぞ」

「俺たち全員これからお前たちに協力させてくれないか？」

「えーーーー」

マーベラスの言葉に、驚きを隠せない光となのはだった。

「それは一体どういう意味ですか？」

光が、その言葉の意味を聞こうとしたら、アラームがなり、光となのは以外の全員が部屋を飛び出して言ったのだった。

一方地球では、クモジャキーと、ティアナによる、地球砂漠化作戦が、始まろうとしていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

運命

ＺＥＵＴＨ、ＦＷ陣とつぼみとえりかは、クモジャキーとデザトリアン化したティアナが、現れたとういう情報を得て、現場に向かっていたのだった。

「プリキュアオープンマイハート」

つぼみとエリカは、シプレと、コフレからそれぞれプリキュアの実を、受け取り二人は、キュアブロッサムとキュアマリンに、変身しヴィヴィオたちと行動をしていた。

ＦＷ陣の中で、スターズの二人は、ティアナ救出に燃えていた。

この時は誰も、知らなかったこの事件の後に起きる運命の出来事を。

三人称ｓｉｄｅ

「いいぜよデザトリアンこの調子で、この星を、砂漠化にしてみせるんぜよ」

「ウアアアワタシハモウコンナコトシタクナイヨ。オニイチャンタスケテ」

ティアナが、そう叫んだ時、どこからか、声が聞こえたのだった。

「ティアナさん大丈夫ですあなたを私たちが助け出して見せます」

その声の主は、ブロッサムだった。

「来たかプリキュアとその仲間たち」

クモジャキーは、そう言って、懐か何かを取り出したのだった。

「いいことを教えてやろうこれは、ダークブレスレットといいこう使うんぜよ」

クモジャキーがダークブレスレットを、使うとクモジャキーは、デザトリアンと一体化しヴィヴィオたちに、襲い掛かってきたのだった。

「行くぜよプリキュア覚悟するぜよ」

デザトリアンと一体化したクモジャキーの攻撃の前に、ヴィヴィオたちは押されていた。

「ブロッサムこのままじゃまずいよどうするの？」

マリンがブロッサムに聞く。

「たしかにこのままじゃティアナさんの心の花が、枯れてしまう」

ブロッサムが考えていると、二つの雷光がデザトリアンに直撃したのだった。

その雷光の正体はアリシアとフェイトの砲撃魔法だった。

「みんなこいつは私たちが抑えるから、みんなはプリキュアにみんなの力を与えて。そしたら必ずティアナに届くよみんなの気持ちが」

「でも、フェイトたちだけじゃ」

ブロッサムがそう言うと、アリシアが答えた。

「こいつを抑えるのは私だけじゃないよ」

アリシアが、そう言うと、そらを飛ぶ海賊船が現れ、海賊船から出てきた人たちは、デザトリアンを、押さえ込んでいた。

リオは、ヴィヴィオに言った。

「ねえ、ヴィヴィオあそこにいるの光さんとなのはさんじゃない？」

「え」

ヴィヴィオは、リオにそういわれ驚いてしまったのだった。

「ア、ほんとだパパとママだ、よかった」

ヴィヴィオは安堵していた。

そして、ブロッサムがＦＷ陣に協力を要請をした。

「皆さんの力を私たちに貸してください。」

そして、ヴィヴィオたちは、ブロッサムたちと協力し、合体魔法を、

デザトリアンに放った。

その合体攻撃が、デザトリアンに直撃する直前、クモジャキーは撤退し、デザトリアン化したティアナは元に戻ったが、その直後、ティーダの体を、何かが貫いたのだった。

ソシテ、ティーダを攻撃したものが現れたその正体は、人造人間セルだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

セル襲撃

ティアナを、砂漠の使徒から救出に、成功した矢先、人造人間をセルの襲撃を受けたＦＷ陣最初の犠牲者に選ばれたのは、ティアナの兄のティーダだった。

三人称ｓｉｄｅ

「ふふ、私はこの時を待っていたぞ」

セルの尻尾が、ティーダの体を、貫きそして尻尾が、人一人入るくらいに大きくなり、ティーダを吸収しはじめたのだった。
ＦＷ陣は一瞬の出来事で、分からなかったが、ヴィヴィオはセルの動きは、見えていたが、なのはたちから、他のＦＷ陣と同じくらいの強さで、戦ってねと言われていた。

「ようやくだ私は、完全体へ近づいたのだ」

「やめろーーティーダさんを返せー」

スバルが、セルに突撃したが、セルの気弾で、スバルは吹き飛ばされしまった。

「邪魔をするな小娘がーー」

セルは、スバルに言い放った。

そして、ティーダを完全に吸収したセルは、姿が変化していた。

「おおこれは、まだ完全体ではないのにこれほどのパワーが溢れる
て来るとは、信じられん」

セルは自分の体の変化に驚いていた。

「あらーセルさんようやくパワーアップしたんですね」

「何だ、クワットロかどうしたのか？」

「いえいえ、私は、ドクターに言われあなたを迎えに来ただけです
わ」

「そうか、ご苦労」

セルはＦＷ陣には、興味を持たず、飛び去って行こうとした時、ク
ワットロが言った。

「あいつら無視していいんですか？」

「かまわんさ今の奴らでは、私は倒せないからな」（ただ一人を除
いてな）

そう言いながら、セルとクワットロは、スカリエッティの元に、む
かったのだった。

戦いが終わり、ＦＷ陣は、薫子の家に帰還していた。

そこで、フェイトは、薫子から、お願いを聞かされていた。

「フェイトさんつぼみとえりかをそちらで使ってくれませんか？」

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

キャラ設定４

今回は、オリジナル敵集団の闇の一族について、説明します。

闇の一族は、女神ルーシィにより、選ばれた７人の転生者のことである。

闇の一族の目的は、リリカルなのはの世界を消滅させることである。

７人の転生者の容姿は、転生者の心の奥にあるこれになりたいと言う欲望に反応して決まるのです。

ここで、主人公たちと、出会うのが、早い転生者の紹介します。

一人目は、ゼルダ好きの転生者だったので、容姿は大魔王ガノンドルフの姿をしている。

二人目は、ガンダム００が好きと言うことでリボンズ・アルマークの姿をしている。

備考

７人の転生者の名前は、姿になっているキャラの名前で、統一します。

以上です

キャラ設定４（後書き）

残りの５人の転生者の姿はまだ決まってないので、出して欲しいと希望するキャラがいるひとは、メッセージください

帰還（前書き）

短くてすいません

次回からＳＴＳの原作の話です

帰還

様々なことのがあった初任務から数日後、ミッドチルダに戻ったなのはたち隊長陣は、部隊長室で、それぞれはやてに報告をしていた。

三人称ｓｉｄｅ

「なるほどフェイトちゃん地球での報告は、終わりかな？」

「うん、はやて」

「さてなのはちゃん次は、なのはちゃんの番なんだけど、いいかな？報告してもらっても」

「ふえ、何？はやてちゃん」

なのはは、はやてにスカリエッティより厄介な、敵の存在がいることを報告したのだった。

「なんやとそんな奴らが、おるんかいな」

はやてはなのはの話を聞き、驚いていた。

その時、はやての元に、緊急連絡が入ったのだった。

その内容とは、大量のガジェットが、レリックが積まれているリニアレールを襲っているという連絡だった。

なのはたちは、急いで現場に急行するためＦＷ陣に、召集をかけたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そのころ光は、一人で部屋にいた。

「何でこうなったんだ？」

「僕を転生させてくれたのは、ウェンディなのに、何で思い出箱の管制人格は、何故ああ言っただろう？」

光が、悩んでいると、隊舎内にアラームがなり光と、ＦＷ陣は出撃するため集合場所へと急いだのだった。

スターズライトニングフレアー部隊のＦＷ陣は、がジェットに襲われているリニアレール上空に着きリニアレール内部に突入するのは、スターズとライトニングに決まったのだった。

ヘリ内部では、なのはと光は、ティアナになのはは、キャロにそれぞれ声をかけていた。

三人称ｓｉｄｅ

「ティアナちょっといいか？」

「何ですか？光さん」

「これなティアナの新デバイスなんだ」

光はそう言って、ティアナに、クロスミラージュを手渡したのだった。

「ねえ、キャロ私もね最初魔法使うの怖かったけどね」

「え、なのはさんがですか？」

「そうだよだけど私には、光君がいてくれたから、大丈夫だったよ」

「キャロには私より多くの仲間がいるんだから怖がらないでね」

「はい」

そして、隊長陣とフレアー部隊の三人は、先にヘリの外へ出て行き、上空にいるガジェットを破壊しながら、スターズとライトニング乗りリニアレールへの降下を援護していた。

そして、ヘリは降下ポイントに着いたのだった。

ヘリから降りてきたのは、スターズのスバル・ナカジマと、ティアナ・ランスターだった。

「スターズ３スバル・ナカジマ行きます」

「スターズ４ティアナ・ランスター行きます」

「それじゃあ私たちも行くわよ」

「うんアリサちゃん」

そして、ライトニングの番が来た。

「ライトニング３エリオ・モンディオルと、ライトニング４キャロ・ル・ルシエとフリードリッヒ行きます」

「ライトニング５アリサ・バニングス出るわよ」

「ライトニング６月村すずか行きます」

降下したＦＷ陣は、それぞれのＢＪを展開し、戦闘準備をしていた

が、スバルとエリオはＢＪが気になるようだった。
そしてスターズの二人が、リニアレール内部のガジェットの破壊と、レリックの確保をする予定だったが、なんとこのリニアレールは無人と聞いていた、スバルたちは驚いていた。

「ネエ、ティアこのリニアレールて無人なんだよね」

「そのはずよ」

「じゃあ、あの子はいったいどこから来たのかな」

スバルたちの前に、現れたのは無数のガジェットに、囲まれているヴィヴィオたちより年上に見える女の子がいた。

スバルとティアナは女の子を助ける為に行動を起こしたのだった。
一方リニアレールの外でガジェトと戦っているライトニングは、大型のガジェットがＡＭＦを起動したので、厳しい戦いを強いられていた。

「ううあああ」

その時、大型のガジェットの一撃を喰らったエリオは、気絶してしまい、リニアレールから投げられてしまった。

それを見たキャロは、叫んでいた。

「エリオ君ーーーー」

その時ヴィヴィオはエリオの危機を見て援護に向かっていた。

「お願い間に合って」

果たしてエリオの運命は?そしてヴィヴィオはエリオを救出できるのか?。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

レリックと少女後編

スバルたちが見つけた少女の正体とは？

ヴィヴィオは、エリオを救出できるのか？

ジェイルｓｉｄｅ

スカリエッティは笑っていた。

「ふふ、あーはっはー」

「実にいいぞ私が探していた物を、代わりに見つけてくれるとはな」

「ドクターでは早速追加戦力を送って奪還しましょう。」

ウーノが進言するが、スカリエッティは、とんでもないことを、言ったのだった。

「ＺＥＵＴＨと手を組もう」

スカリエッティはモニターを見ながらウーノに語った。」

「！！ドクター正気ですか？彼女らは私たちの敵ですよ？」

ウーノはそう言った。

「でも、ウーノ今我らも闇の一族と言うやつらのせいで、覇王のゆりかごを探せない今、ＺＥＵＴＨには覇王のゆりかごに必要な人物が、いるんだよウーノ」

「それに、クロノと一緒に戦っても、闇の一族には、勝てないだろうし」

「それもそうですねあの方は、ＫＹ的存在ですしね」

ウーノも、クロノがＫＹと言うことは、認めていた。

「それではＺＥＵＴＨの部隊長と連絡とってくれたまえウーノそれとがジェットには帰還命令を出しておいてくれたまえ」

「了解しましたドクター」

スカルエッティは、八神はやてと連絡を取る為通信を準備していた。

ジェイルｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方、リニアレール上のＦＷ陣は、ヴィヴィオが、エリオを無事救出に、成功していた。

スターズの二人は、ガジェットの包囲網を突破して、少女の安全を確認して反撃に、しようとした瞬間リニアレール上にいた、ガジェットは突如消えてしまったのだった。

三人称ｓｉｄｅ

「ねえ光君これはどういうことなのかな？」

「ガジェットが消えるなんて」

「わからないよ」

光たち隊長陣が話していると、スバルたちから連絡が入った。」

そして光となのははその報告を受け、驚愕していた。

「スバルその少女をＺＥＵＴＨに連れて行くようにお願いできるかな？」

光が、スバルと話している時に、はやてから緊急通信がきたのだった。

その内容とは、緊急帰還の指令だった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

はやてとスカリエッティ

光たちは、はやての緊急通信を受け、隊舎に戻ってきた。
隊長陣は、急ぎ部隊長室に向かったなのはたちがそこで、見たものとは。

三人称ｓｉｄｅ

なんとはやてと、スカリエッティと楽しく通信をしている姿だった。
なのはと、フェイトはやてに近づき、理由を聞いていた。
「はやてちゃんこれどういうこと？」

「はやてなんで、スカリエッティと楽しく通信してるの？」
なのはとフェイトは、はやてに、問いかける。
「実はうちら結婚することに、したんや」
「そうなんだよねそれに僕としてもはやてとの結婚は、この世界の危機を防ぐ手段としてなのだからね」
「それはうちとて同じやジェイル」
はやてとスカリエッティはだがいに不敵な笑いを浮かべていた。

なのはとフェイトは、思考が追いつかずにいた。

「えええええーーーはやてちゃんが結婚ーーーーーーそれもスカリエッティトーーーーー」キューバタン。あまりのことになのはとフェイトは、気絶してしまった。

「やっぱりなのはちゃんとフェイトちゃんには、Ｓとっくやったか」

「まあいいじゃないか、はやてこれで僕たちを協力させようとしてる二人が、いるし、理由を聞こうじゃないか？」

「それもそうやねいろいろ聞かせてもらうよ光君とアリシア」

「分かったよはやて話すよ」

そして、光は自分と闇の一族との関係を打ち明けたのだった。

「なるほどそう言う訳やったんかみずくさいよ、光君なんでもっと早く言ってくれへんやったん？」

はやてが光に聞くが、光は答えなかった」

「なるほど僕たちを、結婚させる理由は、分かったよ僕をそちらの中に入れるのが、目的で、僕の役目は、ＦＷ陣の相手をしながら、闇の一族に、僕たちが争ってるという印象植え付けて、こちらに攻撃させるようにする為か」

「さすがだなジェイル、そして、二人には言っていくね闇の一族は、僕の意思を無視してでも、僕を仲間にしたら、僕を殺してくれ」

光は、はやてたちに伝えた。

「何いってんのや光君そんなことうちらがさせへんよ」

「ありがとうはやて」

「とりあえず式の日取りが決まったら教えてくれ」

「わかったでジェイル」

そしてスカリエッティとの通信は切れたのだった。

そして、アリシアと光は気絶したなのはとフェイトを抱え、部隊長室を後にしたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

はやての結婚

今はやては、地球の海鳴市に、なのはと帰ってきていた。
その訳ははやてのウェディングドレスを、新調するためブライダル店に来ていた。

三人称ｓｉｄｅ

「なあなのはちゃん、うちやっぱり作らないとあかんやろか?ウェディングドレスを」

「はやてちゃん今更何言ってるのよ、はやてちゃんが決めたことでしょう。結婚のことは」

「それはそうやけど、うちやっぱり恥ずかしいわ」

「何言ってるの、ほら行くよはやてちゃん」

「やっぱりやめようやなのはちゃんいやーーーー「

なのはは、はやての首を、掴みブライダル店に強制連行していた。
「いらっしゃいませお客様今日はどうしましょう」

店員は、はやてに、質問していた。

「うちは・・・」

はやては答えられずにいたので、なのはが代わりに答えたのだった。

「えっと、ウェディングドレスを作って欲しくてきたんですが、できますか？」

「はい、できますよ、それじゃあお客様のサイズを図りますので、こちらへどうぞ」

はやては、店員に奥の部屋に、案内されたのだった。

一方そのころ光と、ヴィヴィオは、リオとコロナを連れて、高町家に戻っていた。

「お爺ちゃんお婆ちゃんただいま」

ヴィヴィオが家に入ると、士郎と桃子が玄関に、やって来た。

「ヴィヴィオちゃんおかえり」

桃子が言う。

「あれ父さん今日、翠やはそうしたの？」

「ああ、今日は休みなんだ」

「そうなんだ」

そして桃子が、リオとコロナに気がついた。

「ヴィヴィオちゃんこの子達は？」

「あ、この子達は私の友達で、リオとコロナて言うの」

「よろしくお願いします」

二人が挨拶すると、桃子は笑顔でこう言ったのだった。

「リオちゃんコロナちゃんよろしくね」

桃子の笑顔を見た、二人は緊張が解れた感じがしていた。

そして、リビングで談笑していると夕方に、なっていた。

光とヴィヴィオは、なのはたちを迎えに、近くの公園に行くと、なのはたちを見つけていたのだが、そこで二人は喧嘩をしていた魔法を使って。

二人の喧嘩の理由は？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

なのはとはやての喧嘩そして

ここは光たちの世界とは、別の世界にある小国リベールである。

小国リベールではオーブメントと言う物を使い人々は、生活していた。

そんなある日地方都市ロレントに住む少女エステルとヨシュアはブレイザーになって各地を、回っていると、街道に倒れている親子連れを見つけたのだった。

三人称ｓｉｄｅ

「大丈夫ですかもしもし」

「駄目じゃないかエステルそんなに乱暴に、したら」

「ごめんヨシュア」

エステルが、ヨシュアに謝っている時、男が目を覚ましたのだった。

「うーんここは、どこだ」

「確か僕と、ヴィヴィオは、なのはとはやての喧嘩をとめようとしたんだっけ」

回　想

「もうはやてちゃんのわからずやー」

「わからずやはなのはちゃんのほうやろ。うちは、あんな派手なドレスは、いややといったのに、なのはちゃんがあれに決めたんがわるいで」

「もういいよはやてちゃん行くよスターライトブレイカーーー」

「なんのラグナロクブレイカーーやーー」

二人の砲撃魔法のぶつかり合いで、次元の穴が作られてしまい光とヴィヴィオは、飲み込まれようとした時、はやてとなのはが気がついたが、間に合わなかった。

「パパ助けてーー」

ヴィヴィオは光と共に次元の穴に落ちたが何とか、光に掴まり、二人は同じ世界に落ちたのだった。

回　想　終　了

「君たちが助けてくれたのか？ありがとう」

「僕の名前は、高町光ですそして僕の隣にいるのは、僕の娘高町ヴィヴィオだよよろしく。それで君たちの名前と、ここは一体どこなんだい？」

光の質問に、エステルが答えた。

「ここは、リベールと言う国で、私の名前は、エステル・ブライトです」

「僕は、ヨシュア・無頼とですよろしくお願いします」

こうして、光とヴィヴィオは、小国リベールの地に、やってきたのだった。

果たして二人は、元の世界に戻れるのか？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

リベール王国

光とヴィヴィオは、なのはとはやてのぶつかり合いで出来た．次元の穴に落ちてしまい、ここリベール王国に来ていた。

三人称ｓｉｄｅ

「ところで光さんと、ヴィヴィオちゃんてどうやってこのリベールに来たの？」

エステルが、素朴な疑問を光にぶつけたのだった。

「正直僕たちもどうやってここまで来たのか、わからないんだ」

光は、エステルの質問に答えた。

「ええ、それって大変じゃないですか」

エステルは、光の答えに対し、一人で驚いていた。

「エステルそろそろ落ち着いたら」

ヨシュアが、エステルを落ち着かせようとするが、エステルは、止まらなかった。

「そうだ光さんよかったら家に、来ませんか？」

エステルが提案した。

「え、気味たちの家にかい？」

光は、驚いていた自分が、エステルたちに教えたことが、エステルたちにとって、信じられないことなのに、彼女は、光の言葉を、すべて受け入れて、光達を家にまで、連れて行ってくれるということに光は、驚いていた。

そして、光は気絶しているヴィヴィオを、抱きかかえエステルたちの後について、エステルたちの家に向かって言ったのだった。

一方光とヴィヴィオを、次元漂流する原因を、作った二人は互いに喧嘩をやめて謝っていた。

「はやてちゃんごめんね」

「いやうちこそ堪忍してやなのはちゃん」

二人は、深々と、頭を下げ互いに、謝っていた。

「今は、うちらが原因で、次元漂流させてしまった、光君とヴィヴィオを探さんとな」

はやてはそう言って、ＦＷ陣に、出動命令を出し、スカリエッティにも、協力要請を出したのだった。

次元漂流で気絶していた、ヴィヴィオが目を覚ましていた

「うーんここはどこ？」

ヴィヴィオは知らない世界の知らない家に、いることに驚いていた。

そこに、エステルが入ってきた。

「あ、ヴィヴィオちゃんよかった目が、覚めたんだねよかった」

エステルがヴィヴィオの近づき、抱きついて喜んでいた。

「ちょ、お姉ちゃん誰なの?く、苦しいよ」

エステルは、思いっきりヴィヴィオに抱きついていた。

「あ、ごめんねヴィヴィオちゃん。私の名前はエステルだよ、よろしくね」

エステルは自己紹介をした後下に行き、光にヴィヴィオが、目覚めたことを伝える為、下に降りて行ったのだった。

そして、光達が、エステルたちと行動を共にしてた時、リベール王国の王都グランゼルでは、一人の老婆が、ある予言をしていて大騒ぎになっていた。

その予言の内容とは、別世界の生物が来た時この世界の破滅へのカウントダウンがはじまると言うものだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

ヴィヴィオとエステル

ヴィヴィオと光が、リベールに来てから、数日がたち、今日は、ヴィヴィオはエステルたちと一緒に、地方都市ロレントに出かけていた。

三人称ｓｉｄｅ

「ねえヨシュア今日さ、ヴィヴィオちゃんをロレントの町まで、遊びにに連れて行っちゃ駄目かな？」

「ねえエステル何で、そういうことを僕にきくの？そういうことは、光さん、に聞けばいいじゃないか」

「それはそうなんだけどヨシュアに、遊撃士協会に行って、私の休みを伝えて欲しいの」

「わかったよエステル」

そして、朝食を食べたヨシュアは、遊撃士協会に向かった。

エステルは、２階で、寝ている光とヴィヴィオを起こす為に、２階へ階段を登っていった。

「光さんヴィヴィオちゃん朝だよ起きて」

エステルが二人の部屋に行くと、まだ二人は、熟睡していた。

エステルに、起こされた二人は、１階のリビングに、移動をし朝食

を取っていた。
そして、エステルが、食事中のヴィヴィオに聞いていた。

「ねえヴィヴィオちゃん」

「ほえ、何？チュルエステルお姉ちゃん」

「今日さ、私と、町に行かない？」

「え、町に？

「うん、だってヴィヴィオちゃんさこの国に来たばっかりだからさ、いろんなとこを、見せたいんだヴィヴィオちゃんに」

エステルは、ヴィヴィオを時間をかけて説得していた。

「パパ言って来ていい？」

ヴィヴィオは光に町に、行って来ていいかを、相談していた。

「いいよヴィヴィオ町に行っても、ただしエステルさんに迷惑をかけない様にね」

「はーいパパ」

ヴィヴィオは元気よく、返事をしたのだった。

「エステルお姉ちゃんそういうことだから今日一日よろしくお願いします」

「うん・任せてよヴィヴィオちゃん」

こうしてヴィヴィオは、食事を済ませて、エステルと共に、ロレントの町へと出かけたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

この観光がリベール王国での光とヴィヴィオの運命を左右する出来事が起きるのだった。

それを今知る者はいない

そして、一人遊撃士協会ロレント支部に、行ったヨシュアは、そこである物を見てしまった。

ヨシュアｓｉｄｅ

その物とは、光とヴィヴィオの手配書だった。

「馬鹿な何故あの二人の手配書がここにもうあるんだー」

ヨシュアは、混乱していた。

ヨシュアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

身喰らう蛇（ウロボロス）

地球で、突如出来た次元の穴に、落ちてしまった光と、ヴィヴィオを探す為ＺＥＵＴＨは、ＦＷ陣と、スカリエッティに、二人の捜索協力を依頼していた。

なのはたちＺＥＵＴＨ隊長陣は、光たちと連絡を、取る為地球に滞在しているマテリアルズに連絡を取っていた。

三人称ｓｉｄｅ

「久しぶりですねなのは」

星光が、なのはに話しかけた。

「うん、久しぶりだね星光ちゃんそれで今日は連絡したのは」

「わかってますマスターと、ヴィヴィオがどこに飛ばされたのかですね」

「もちろんわかってます。私たちは、どんなに離れてても、マスターが死んでなければ、居場所はわかりますし」

星光がそう言うとなのは、フェイト、はやての３人は笑顔の表情をしていたが、星光の次の言葉によって、その笑顔は消えていくのだった。

「今回マスターたちが、行っている世界は、かつて、時空管理局と、敵対関係だった一団の秘密結社ウロボロスが支配している世界なのです。もしウロボロスが、マスターたちの存在に気づいていたら、すでにマスターたちは、指名手配されているでしょうね」

「そ、そんな」

「なら早く助けに行なきゃ」

とフェイトが言うが、救出方法について、星光がなのはたちに伝えたのだった。

「今回は管理局側の転送装置は使用できませんよ皆さん」

星光が伝えると、はやてが聞いた。

「何で、転送装置が使えないん？」

「管理局のの転送装置には、ウロボロスの世界の座標が登録されていないのです」

「それじゃあどうやったらその世界にいけるの？星光ちゃん」

なのはが心配そうに、星光に聞く。

「あなたたちに協力体制を、取っている犯罪者に、今回は頼むしか

方法はありませんね」

星光がそう言うと、３人は、星光が誰のことを言っているのかがわかったのだった。

その時スカリエッティから通信が来た。

「なるほどはやてが私に、連絡をよこすとか珍しいから、驚いたよはやて」

「うるさいわいジェイル」

「ははごめんはやて、そういえばＫＹ君も、ウロボロスの世界に行ったらしいよ。はやて」

「なんやてそれは、ほんまか？ジェイル」

はやてが、スカリエッティに聞く。

「ああ、それは本当だよ、はやてそれで私の転送装置を使って、ウロボロスの世界に、行くんだい最高で３人までしか、遅れないけど」

スカリエッティが言った。

「それじゃあ私が」

「言え、なのはの代わりに、私が行きます。

なのはが言いかけた時、星光がなのはに、言った。

「なのは無理をしては、いけませんよ今のあなたの体は、あなたの物だけじゃななないんですからね」

「！！星光ちゃんどうしてそれを知ってるの」

なのはは、驚きながら星光に聞いていた。

「ねえなのは、今星光ちゃんが、いったことて、まさかあれなの？なのは」

「うん、フェイトちゃん、はやてちゃん実は、私ねできちゃったんだ」

「えええええーーー男の子なの？女の子かいなどっちなんなのはちゃん」

なのはたちの話題に付いていけないスカリエッティがなのはたちを現実世界に引き戻したのだった。

、

「それで、誰が、ウロボロスの世界に行くのか決まったのかい？

スカリエッティが聞く。

「あ、忘れてた」

ガールズトークに、夢中になる三人だった。

結局星光と、スバルとティアナが，光とヴィヴィオを、助けにウロ

ボロスが支配する世界、リベール王国を目指し、出発したのだった。

果たして、星光たちは、無事に、光たちをつれてかえれるのか？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

ロレント観光

ヴィヴィオと、エステルと光は、一緒に、朝食を食べて街に、出かけたのだった。

ヴィヴィオｓｉｄｅ

「へえーここがお姉ちゃんたちの住んでいる街なんだね」

ヴィヴィオの質問に対し、私は、答えた。

「正確には、私たちの家は、この街の近くにあるんだ。だからこの街に住んでるわけじゃないんだよ」

「そうなんだ」

ヴィヴィオは、エステルの顔を見ながら、笑顔で答えたのだった。

そして、私たちは街の観光を続けました。

私は、エステルおねえちゃんに連れて行ってもらったところは、雑貨屋さんや、居酒屋さんや、教会に連れて行って貰いました。

私が、この街で感じたことは、この街の人々は、決して裕福な生活をしているわけではないけど、一日を楽しんで生活をしているのはわかりました。

ねえヴィヴィオちゃん少し休憩しない？」

「あ、そうですねじゃあ私あそこの上で、休憩したいです。

私が休憩場所に、選んだ場所は、ロレントにある時計台の上を選びました。

ヴィヴィオｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

ヴィヴィオが選んだ休憩場所は時計台の上だった。

その時エステルは、ヴィヴィオの選んだ時計台の上を見る、エステルの表情が、一瞬暗くなったのを、ヴィヴィオは、気づいてなかった。

ヴィヴィオたちは、時計台に上ったヴィヴィオは町の景色が、一望できたので、体を動かしながら喜んでいた。

「うわーいい眺めだな。

そして、景色を見終わったヴィヴィオが、エステルの顔を見ると、表情が暗く見えたので、ヴィヴィオが、エステルを心配して、声をかけたのだった。

「エステルお姉ちゃん大丈夫？なんだか顔色が悪いよ」

「ごめんねヴィヴィオちゃん。私は元気だよただね、私はここに上ると昔のことを思い出すんだ」

「昔のこと？それはどんな思い出なの？」

ヴィヴィオが、エステルに質問をした。

エステルは、ヴィヴィオの質問に対し、一瞬だが表情が暗くなった。

それを見たヴィヴィオは、慌ててエステルにこう言った。

エステルお姉ちゃん話すのが、辛いなら無理に話さなくていいよ」

「ありがとうヴィヴィオちゃん。でもヴィヴィオちゃんには話してあげるね少し長くなるけどね」

そして、エステルは話し出す。その昔ロレントで、起こった悲惨な戦争の話を。

「１０年くらい前ねリベール王国と北のエレポニア帝国と戦争をしてたの」

「ねえエステルお姉ちゃん戦争て何？」

ヴィヴィオはエステルに、戦争のことについて、聞いた。

「そっかヴィヴィオちゃんは、別の世界から来たから知らないんだよね」

「うん」

ヴィヴィオは、返事をしながら首を縦に振る。

「戦争は、いろんな機械や道具を使って、人を殺しちゃったり出来るんだよ」

「そう10年前時計台にいた私を、敵の攻撃から庇って、私のお母さんこの場所で、死んじゃったんだ」

「え、ごめんなさいエステルお姉ちゃん、お姉ちゃんにそんな思い出のある場所に、連れて来て」

ヴィヴィオはエステルに謝っていた。
ヴィヴィオちゃんは、悪くないよヴィヴィオちゃんは知らなかっただけだし、それに私は、お母さんとの記憶のある場所でも、私は、ここから見る景色も好きだから」

エステルはそう言って、ヴィヴィオに、笑顔を見せていた。

そして、二人が時計台から下りると、エステルを探していたヨシュアに出会ったのだった。

「エステル見つけた、ここにいてたんだね」

ヨシュアは、エステルを見つけると、エステルたちのほうに駆け寄ってきた。

「あら、ヨシュア遊撃士協会に、行ったんじゃないの?」

「エステル大変だよ緊急クエストだよ、子供たちが、魔物の住処になっている

翡翠の塔に行ったそうだよ。僕たちの目的は子供たちの保護だよ」

ヨシュアは、エステルにクエストの目的を伝えると、二人は、翡翠の塔に向かおうとした時、ヴィヴィオがエステルに向かって、言った。

「エステルお姉ちゃん私も、翡翠の塔に連れて行ってください」

ヴィヴィオがそう言うと、ヨシュアが反対していた。

「ヴィヴィオちゃん翡翠の塔は、本当に危ないんだ。だから僕たちが戻ってくるまで待っててくれないか」

「そんな私だって、戦えますそれにパパが言ってた、力を持つものは、必ず戦いに、巻き込まれることがあるけどその時に自分で、考え自分が正しい思ったら悔いだけは、残したらいけないて」

ヴィヴィオの真剣な眼差しでエステルの顔を見ながら話をする。

それを聞いた、エステルはヴィヴィオに改めて聞いた。

「ヴィヴィオちゃんこの世界の魔物は、凶暴だよそれでも着いてくる？」

「はいエステルお姉ちゃん」

ヴィヴィオの答えを聞いたエステルは、しばし沈黙しヴィヴィオの目に、ゆるぎない決意を感じて、エステルはヴィヴィオに、翡翠の塔に同行することを、許したのだった。

「！！ちょっとエステル本気なの？」

驚いてるヨシュアとは、反対に、ヴィヴィオは喜んでいた。

「ありがとうエステルお姉ちゃん。

「ヴィヴィオちゃん同行は許したからて、無茶はしないでね」

こうしてヴィヴィオたちは、子供たちを救出する為
翡翠の塔に向かったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

子供たち救出作戦

ヴィヴィオたちは、子供たちを救出する為行動開始したのだった。

エステルたちはマルガ山道を抜け、翡翠の塔に向かう途中、ヴィヴィオは、考えていた。

三人称ｓｉｄｅ

「やっぱりこの世界は、私たちの世界とは、違うんだ。私たちの世界では、魔獣みたいな生き物は、存在は私は、見たことないから。私が今まで戦ってきて、相手の命を奪う為の戦いをしたことがないから」

「私は、最初エステルお姉ちゃんとヨシュアお兄ちゃんから、この世界での魔獣との対処法を教えてもらった時、私はお姉ちゃんたちがら魔獣と出会ったら確実に倒さないといけないよと聞いたとき、私はエステル御姉ちゃんに聞いてみた。」

「お姉ちゃん倒す命を取るてこと?」

ヴィヴィオがそう聞くと、エステルは首を縦に振ったのだった。

ヴィヴィオは、翡翠の塔に向かう途中マルガ山道に、生息している魔獣と戦って改めて自分の世界と、この世界の違いを、感じていたのだった。

そして、マルガ山道を抜け、翡翠の塔に着いたヴィヴィオたちは、塔の中から子供たちの悲鳴を聞いたのだった。

「「！！急ぐよヴィヴィオちゃんヨシュア」

「ああ、わかったよエステル」

「了解エステルお姉ちゃん」

そして、ヴィヴィオたちは、翡翠の塔に突入したのだった。

「こっちに来るなよ来るなってば」

「誰かーー助けてーー」

子供たちは、魔獣の姿を見て泣き叫んでいたのだった。魔獣たちは子供たちの言葉を無視し、じりじりと、魔獣たちは子供たちとの距離を、縮めるのだった。

そして、魔獣が、子供たちに牙を剥いたその時、子供たちは、怖さで目を閉じてしまっていた。

ガキーンと音がなり、子供たちは、その音の正体を知る為に、おそるおそる目を開けると、子供たちの前には、エステルたちが子供たちと魔獣の間に割り込んでエステルたちは、魔獣の攻撃を防いでいた。

「君たち大丈夫？お姉さんたちが来たからもう安心すしていいよ」

エステルは、笑顔でそう言って、子供たちに、落ち着かせていた。

そして、エステルとヨシュアは、魔獣の中心に入り込み魔獣を倒していた。

ヴィヴィオは、子供たちを守りながらエステルたちの援護をしていたのだった。

そして、翡翠の塔の中にいた魔獣たちを倒したエステルたちは、子供たちを連れて、翡翠の塔から脱出しようとした時、生き残った魔獣が、エステルの背後から攻撃をしようとしていた」

それを見ていたヨシュアと、ヴィヴィオは、叫んでいた。

「エステル危ない」

「エステルお姉ちゃん避けてーー」

だが、エステルは完全に不意を突かれ、回避行動を取れずにいたのだった。

その時、エステルを狙っていた魔獣を倒し、エステルを救った男が、エステルたちの前に現れたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

ヴィヴィオとカシウス

エステルのピンチを救ったのは、エステルたちの父親の、カシウス・ブライトだった。

三人称ｓｉｄｅ

「と、父さんどうしてここに、いるの？」

「いや遊撃士協会に、顔を出したら、お前たちが子供たちを救出する為に、翡翠の塔に向かったと聞いてなお前たちの後を追いかけてきたんだ」

「まあ自分が手を出さなくても、あの魔獣は、あの子の攻撃で、倒していたいただろうが」

「え」

エステルとヨシュアは、カシウスの言葉を聞いて驚きまわりを見ていると、ヴィヴィオが砲撃魔法の発射準備を終えていたのだった。

「ふうこれでおわりかな？」

ヴィヴィオは、魔獣が全滅したのを確認すると、ＢＪを解除し、エステルたちの元に、走ってきたのだった。

「エステルお姉ちゃん大丈夫？」

ヴィヴィオがそう言うと、エステルが、ヴィヴィオに、質問攻めを

していた。

「ヴィヴィオちゃんさっきのは何？服装がいきなり変わったりしたけど？」

「あれはねエステルお姉ちゃん」（どうしょう魔法のこと言っても、わからいだろうしな）

ヴィヴィオが、エステルへの説明に困っているとカシウスが、エステルに言った。

「エステルとりあえず今は、子供たちを街に送るぞ」

「はーい」

こうしてエステルたちは翡翠の塔を出て、ロレントの街へ向かっていたのだった。

そしてその帰り道でヴィヴィオは、カシウスにお願いをされたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

後編に続く

ヴィヴィオとカシウス後編

カシウスが、ヴィヴィオにしたお願いとは？

「君の名前は確か、ヴィヴィオで、いいのかな？」

「あ、はい私の名前は、高町ヴィヴィオと言います。

私は、カシウス・ブライトと言うよろしくお嬢さん」

ロレントの街に戻る途中二人は、互いに自己紹介をしながらカシウスは、ヴィヴィオに頼みごとをしていた。

三人称ｓｉｄｅ

「ヴィヴィオちゃんこれからエステルとヨシュアと共に、旅に一緒に行ってくれないだろうか？」

カシウスが、ヴィヴィオに言った。

「え、でもパパがなんて言うかな？」

「確かに君の家族にも許可をを貰わないといけないな。それでヴィヴィオちゃんたちは、どこに住んでるんだい？」

カシウスは、ヴィヴィオに聞いた。

「えっと今は、エステルお姉ちゃんたちの家に、パパと一緒に、住まして貰っています」

「そうなんだヴィヴィちゃん私と一緒に、先に帰らないかいヴィヴィオちゃんのお父さんにも利いてもらいたいしね」

「え、でもエステルお姉ちゃんたちを置いていくなんていいんですか？」

「あの二人なら大丈夫だよさあいこう」

カシウスは、ヴィヴィオの手を引きエステルとヨシュアに気づかれずに、移動していた。カシウスたちは、自分たちの家に向かっていた。

そのころ光は、マテリアルズの星光と連絡を取っていた。

「なるほどこちらに向かってるのは、星光とスバルとティアナの３人が来るんだな」

「はいそちらの様子はどうですか？マスター」

「こちらの世界では転移などが出来ないようになっている。どうやらゲームの様に、決められた順序で、行かないと駄目みたいだそして、僕とヴィヴィオはその中に、取り込まれたようだ。この世界に渦巻く不思議な力によって」

そして、光と星光の通信は終ったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人の旅立ち

光とカシウスの話し合いの結果、ヴィヴィオもエステルと、ヨシュアの旅に同行することになったのだった。
エステルとヨシュアは、助けた子供たちを街まで送り、エステルたちはギルドへクエストの報告をして、家に帰ってきたのだった。

三人称ｓｉｄｅ

「ただいま」

「あ、お帰りなさいエステルお姉ちゃんヨシュアお兄ちゃん」

「ただいまヴィヴィオちゃん」

ヨシュアは、出迎えたヴィヴィオに向け言った。

「ヴィヴィオちゃん大丈夫だった?あの中年親父になんかされなかった?」

エステルはヴィヴィオの両肩を掴みヴィヴィオの前に、顔を近づけ、ヴィヴィオに聞いていた。

「大丈夫だったよエステルお姉ちゃん」

ヴィヴィオは、少しエステルを怖がりながら答えた。

「そうなんだそれならいいけど」

エステルは、そう言いながら、ヴィヴィオをから離れたのだった。

そして3人は、リビングに行くと、台所には光の姿があった。

「あ、お帰りエステルちゃんヨシュア君」

光は3人に気がつき、挨拶をした。

「あ、夕飯の支度なら自分がしますよ、光さん」

ヨシュアが光に言ったが光はこう言った。

「いいよ気にしなくて僕たちお世話になってるしね」

「それに、パパ料理得意だしね」

ヴィヴィオがそう言った直後リビングにカシウスが入ってきた。

「それは楽しみだな」

「父さんいたんだ」

エステルはカシウスに向けそう言った。

「何？エステルに怒られる事なんかしたっけ、ねえヨシュア？」

「父さんそんな事僕に聞かないでよ」

ヴィヴィオは、カシウス親子のふれあいを見ながらこう思っていた。

（いいなあ私も早く元の世界に戻って、ママに会いたいな）

そして、光の作った料理が完成し、夕飯をみんなで、食べ始めたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

三人の旅立ち後編

ヴィヴィオたちは、楽しく光の作った夕飯を食べていた。
三人称ｓｉｄｅ

「うわあこの料理美味しい」

本当だね美味しいよ僕のより」

「うむこれは、旨いな仕事前に、食べれてよかったよ」

「え、父さん仕事行くの？何時から」

「ああ、明日からな王都グランセルにな、光さんと一緒にな、場合よっては国外に行くかもしれんがな」

「エステルとヨシュアお前たちは、ヴィヴィオちゃんを連れて、これから国内で、起こる事件に対応して欲しいんだ」

「父さんそれってまさかウロボロスが、行動を再開したの？

ヨシュアの言葉に、驚きの声をあげるエステルだった。

「ええーそんな私たちが、ワイスマンを倒した後から、まったくリーベルで活動してなかったのにどうして今頃活動再開すんのよ？」

「！！父さんまさかウロボロスが、活動再開したのは、光さんと、

ヴィヴィオちゃんがこの世界に来たからなの？」

ヨシュアが、カシウスに聞く。

「ああ、その可能性は、高いな現にグランセルでは、ヴィヴィオちゃんたちを、侵略者として予言されているからな」

「その予言とは、異界の者が現れるとき、この地に眠る邪神の眠りを覚まし、この世界は消滅するだろう」

「何よその予言は、まるでヴィヴィオちゃんたちが悪者みたいじゃない」

エステルは、予言を聞いた時、怒りを表していた。

「だがウロボロスの連中は、その予言を、現実に起こそうとしているんだ」

「だからお前たちはヴィヴィオちゃんを連れて、ルーアン地方に行ってくれ。頼むぞヴィヴィオちゃんも光さんもそれでいいですかな？」

「はいそれで構いません。
ご迷惑をおかけします」

そして、食事が終わり、ヴィヴィオと光は、話していた。

「ねえパパ私たち元の世界に戻れるのかな？」

ヴィヴィオは、不安そうな表情をしていた。

「大丈夫さヴィヴィオ今は僕たちにできることをしよう」

「それに、実はね向こうの世界でも動いていて、今スバルとティアナが、こちらの世界に向かってるから」

「え、パパそれ本当？」

「ああ、本当さ」

「だから安心して、明日に備えよう」

「はーい」

二人は眠りについた。

そして、次の日光と、ヴィヴィオは互いの目的地に向かい旅に出たのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

三人の旅立ち後編（後書き）

今回出した予言はＳＴＳ本編で出た予言をイメージしてください

ルーアン向かって1

ヴィヴィオとエステルたちは、ルーアン地方に、徒歩で向かっていった。

三人称ｓｉｄｅ

「エステルお姉ちゃんルーアン市て、どういう所なの？」

ヴィヴィオはエステルに聞いた。

「ヴィヴィオルーアンには、大きい橋があって、その橋が、動くんだよ。そして、綺麗な海が見えるんだよ。

「そうなんだ早く見てみたいなあ」

ヴィヴィオとエステルは、話をしながらルーアンに向かっていると、山道のほうから助けを呼ぶ声が聞こえてきたのだった。

「きゃあああ」

「誰か助けてくれー」

悲鳴を聞いたエステルは、急いで現場に向かっていた。

「エステルお姉ちゃん行動が、早すぎるよ」

「ごめんねヴィヴィオ、エステルは、一つのことに集中するといつ

もこうなんだ」

ヨシュアは、ヴィヴィオにそう言いながら現場に、急いでいた。

そして、ヴィヴィオと、ヨシュアが、エステルと合流した時、ヴィヴィオは大量の魔獣に、襲われている男女を見つけたのだった。

「遅いわよヨシュア」

「ごめんエステル今から協力するよ」

「それじゃ行くわよすぐに決着つけるわよヨシュア」

「了解エステル」

「え、嘘でしょこんなに、大量の魔獣をエステルお姉ちゃんたちは、魔法もなしで、すぐに倒せるの？」

ヴィヴィオは、二人の言ったことが、信用できていなかったが、それはすぐに、真実となったのだった。

そして戦いが終わり。

「ありがとうございます」

「おかげで、助かりました」

魔獣に襲われていた男女はエステルたちに、感謝の気持ちを伝えていた。

「すごいなあエステルお姉ちゃんと、ヨシュアお兄ちゃんは、ルーアンに着いたら私エステルお姉ちゃんたちと戦ってみたいなあ」

ヴィヴィオは、エステルたちの戦いを見て、目を輝かせながら、エステルたちと戦ってみたいという気持ちが芽生えていたのだった。

そのころカシウスと共に、行動している光は、飛行船で、ロレントから、王都グランセルに向かっていた。

そこで、光は意外な人物と再会を果たすのだった。

一方ヴィヴィオたちは、助けた二人を一番近い関所にまで行動することになったのだ。

そして、エステルたちは関所で、ある騒動に巻き込まれるのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

ルーアン向かって2

光はカシウスと共に、王都グランセルに向かっていた。
カシウスと共に、王都グランセルに到着した時、光は意外な、人物と再会を果たしたのだった。

「！！どうしてこの世界に、あなたたちがいるんですか？ララとプレシアさんが」

出迎えた人物たちは、ララ・テスタロッサと、プレシア・テスタロッサだった。
一方ルーアン市に行く途中の山道で、魔獣に、襲われていた男女を助けたヴィヴィオたちは、近くの関所で、休憩を取っていた。

三人称ｓｉｄｅ

「エステルお姉ちゃん後ルーアン市まであとどれくらいなの？」

「そうだね早く歩けば明日のお昼ごろには、着けると思うよね、ヨシュア」

「そうだよエステル」

3人は与えられた部屋で、くつろいでいると、関所の兵士が、一人の男性を、ヴィヴィオたちのいる部屋に、案内してきたのだった。

「くつろいでいるところすまないけど、あんたたちの部屋に、こち

らの男性も一緒に泊まらせてくれないか？」

兵士はエステルたちに、お願いをしていた。

「別に構いませんよ」

エステルがそう言うと、兵士は、ありがとうと言い男性を呼びに行ったのだった。

そして暫くして、一人の男性が入ってきた。

「え」

「何で、あんたがここにいるの？」

エステルとヨシュアは、入って来た男性を見て驚いていた。

「初めまして私は、レオンハルトといいます」

私は、高町ヴィヴィオと言いますよろしくお願いします」

ヴィヴィオとレオンハルトが挨拶していると、エステルが、レオンハルトに質問してきたのだった。

「どうしてあんたがここにいるわけ？

「それはな私も、ヴィヴィオさんの護衛をお前たちの父親から頼まれたからだ。それにお前たちに伝えることがあって来たのもあるが、以前お前たちが倒したアイツがウロボロスと謎の集団によって、生き返って来た。

白面のワイスマンが」

「何ですって」

「それは本当なのか？」

エステルとヨシュアは、レオンハルトの言葉を聞いて心底驚いていた。

「そしてワイスマンの目的は、異世界からの来訪者だということだ。

「だから私はここまで来た」

そして翌日、エステルたちは、レオンハルトを加えた４人で、ルーアンに向け出発したのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

グランセルでの再会

光が、王都グランセルで再会した相手は、地球にいるはずのララとプレシアだった。

三人称ｓｉｄｅ

「どうしてあなたたちがここに・・・この世界に、きてるんですか？」

「あのねお兄ちゃん・・・実は、そう言って、ララはこの世界に来た経緯を、光に話し出したのだった。

「実はね私たち、なの破産とはやてさんが、喧嘩で次元破壊した時、私たちもあの公園にいたんだよ」

「そうだったんだ」

「それで光さん私たちこちらの世界に、来る前にララさんが、女神と話をしていたの、ララさんは相手の女神の名前を言ってたわ確かルーシィと」

「！！ルーシィだと！」

光は、プレシアの言葉から自分を利用下相手のまま絵を聞いて驚いていた。

「俺を利用しようとした奴が、今度は妹を利用してをれを殺そうとしてるのか？

光は、ララを使うルーシィの目的を考えていた時、カシウスが、光に近づき、こう言った。

「光君私は、君たちの相手をよく知らないが、もしこの世界に来てるのなら私たちは君たちに協力をするだから今は、自分たちの目的を果たそう」

光は、カシウスの言葉を聞き、今は、ルーシィたちのことは、考えないでいようとしていた。

果たして、ララを手に入れたを闇の一族の首領ルーシィの目的とは、今ここリベールの地で、悲しき兄妹の戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方ララは光たちと離れルーシィと連絡を取っていた。

続く

ララｓｉｄｅ

「ルーシィ様無事ターゲットと接触しました。これからの行動は、どうしたらいいですか？」

「よくやりましたねララこれからのあなたへの指示は、そちらの世界でのｋ等力者が、ララに接触するはずなので、その者と行動を共にしなさい」

「わかりましたルーシィ様」

そして私は、ルーシィ様との通信を切ると急いで、お兄ちゃんたちのいる場所に向かった。

ララｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そのころヴィヴィオとエステルたちは、無事にルーアン市に、着いていたのだった。

三人称ｓｉｄｅ

うわあこれがエステルお姉ちゃんが言ってた動く橋か大きいなあ」

「どうすごいでしょヴィヴィオ？」

エステルはヴィヴィオに感想を聞いていた。

「うんすごいね」

ヴィヴィオたちが、ルーアン市で、観光しているころ、
ヴィヴィオと光を助ける為にリーベル王国を目指していたスバルティアナと星光は、無事にリーベル王国に着いたのだった。

「ここにヴィヴィオと光さんがいる世界なんだねティア」

スバルがティアナに確認を取っていた。

「ええ、そうよスバルこの世界に、ヴィヴィオと光さんがいるわ」

「そういえばティア星光さんは、どこに行ったの？」

「ああ、あの人ならほら、あそこで、光さんと連絡取っているわ」

ティアナが、指を指した先に、星光がいた。

「マスター今私たちマスターとヴィヴィオがいる世界に、着きました。これから私たちはどちらと先に、合流したらいいですか？」

星光はマスターの答えを待っていたが、通信は途切れてしまったのだった。

星光は、急いでスバルたちと合流し、まずヴィヴィオと合流する為光が、通信が切れる直前に、言っていた、ルーアン市に向かったの

だった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

果たして光たちの身に起こった出来事とは？

続く

妹

僕は、プレシアさんと、会話している時に、気づくべきだった。

ララとプレシアさんの様子がおかしい事に。

光ｓｉｄｅ

「それで、プレシアさんこれからどうするつもりですか？」

「そうね、正直に言うとこれからのことは、まだ考えてないわね」

「そういうことならプレシアさん。僕たちと一緒に、行動しませんか？」

「ええ、私たちは、構わないけど光さんたちは、少人数で、行動してたんじゃないの？」

「あ、そういえばカシウスさんプレシアさんたちも一緒に行動しても構いませんよね？」

光が、カシウスに確認すると、カシウスから帰ってきた答えを聞いた光は、驚きを隠せないでいた。

「いや駄目だ彼女等とは、一緒にはいけない」

「何故ですか？カシウスさん彼女らは、僕たちの仲間ですよ」

僕は、カシウスさんに、理由を聞こうとした時、星光から連絡があり、この世界に着いたと言う連絡と、先にどちらに合流すべきか聞かれたので、僕はヴィヴィオと合流させるべく星光に、指示ををだしたそして、改めてカシウスさんに、聞こうとした時、プレシアさんが笑い出したのだった。

「ふふふ、さすがはカシウス・ブライトですね何時から気づいていたんですか？」

「ああ、始めてあった時からな」

フフ、そうデスカなら私の演技もまだまだ見たいですね」

「そうだな」

カシウスとプレシアは、互いにそう言いながらもお互いを警戒して、仕掛けることが出来ずにいたが、痺れを切らして先に、動いたのは、プレシアだった。

プレシアは、転移魔法を使い僕とカシウスさんを異空間に飛ばしたのだった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして異空間へ飛ばされた光たちを待っていたのは、ララだった。

そして、ララがとり出した物を見て、光は唖然としていた。ララが持っていたものは、本物の闇の書だった。

続く

対決

異空間に飛ばされた光たちを待っていたのは、闇の書を持ったララだった。
三人称ｓｉｄｅ

「どうしてお前がここにいるんだ?ララ」

だってこの空間作ったのは、私だもんお兄ちゃん」

ララは、にこやかな笑顔で光の問いに答えるのだった。

「さあ、お兄ちゃん私と戦おうよ」

ララはそう言いながら戦闘準備を整え、光に向け先制の、攻撃魔法を放つと、光はララの放った攻撃魔法名聞いた時、光は避けるのを忘れるくらい驚愕していた。

「喰らえ!!ブラックホールテンペスト」

「!!その魔法は、まさか」

光が、ララと戦いを始めたころ、ルーアン市にも不穏な影が蠢いていた。だがその影も、これからリーベル全土を巻き込む事件へと発展していくのだった。

ルーアン市に着いて、ヴィヴィオは、ルーアン市の宿泊施設でくつろいでいると、ヴィヴィオは、この世界には存在しないはずの魔力反応を複数感知したのだった。

「この魔力反応はまさか、スバルさんとティアナさんと、ママなの？とにかく、エステルお姉ちゃんたちにばれないように、スバルさんたちと合流しなくちゃ」

ヴィヴィオは、ルーアン市の宿泊施設を抜け出してスバルたちの元へ向かったのだが、ヴィヴィオは、気づいていなかったヴィヴィオの後ついてくる二人の存在に。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

合流

ヴィヴィオは、スバルたちと、合流する為スバルたちの元に、向かっていた。

三人称ｓｉｄｅ

スバルたちは、リベール王国のルーアン市付近の山の中に、到着していた。

その時スバルは強い魔力を感じたのだった。

「ねえ、ティアこの世界には、魔力て存在しないんでしょ」

「スバル何聞いてたの？星光さんが、教えてくれたでしょこの世界には、魔力自体無いんだから」

「ならティアこの魔力反応は何かな？」

スバルは計器に写る魔力反応を、ティアナに見せた。それを見たティアナはスバルにこう言った。

「スバルあんたよく考えなさいよ。私たちは誰を探す為に、この世界にきたの？」

ティアナは、スバルに質問をしていた。そしてティアナの質問の答えをスバルが言おうとした時、スバルたちの背後から声が聞こえた

のだった。

「スバルさんティアナさん」

スバルは、その声のしたほうに顔を向けるとそこには、ヴィヴィオがいた。

「ヴィヴィオよかった」

スバルは、満面の笑みでヴィヴィオに抱きついていた。

「ちょ、苦しいよスバルさん」

ヴィヴィオは、スバルに伝えるとスバルはごめんごめんと言いながらヴヴィオから少し距離を離れたのだった。

一方エステルたちも、宿泊施設からいなくなったヴィヴィオを探していた。

そして、町の人に話していると、先ほど強い光を放つ光の玉が、近くの森の中に、落ちていったと言う話を聞いて、そこにヴィヴィオが向かったのと確信して、その現場に向かったのだが、二人が、現場に着いた時、すでにヴィヴィオが、この世界でエステルたち以外と楽しく会話しているところを隠れて見ていると、エステルは少しヴィヴィオの笑顔が、エステルの心に、刻まれていた。

その時エステルたちが隠れているところに、一発の魔力銃弾が放たれたのだった。

その魔力銃弾を放ったのは、ティアナだった。

「ねえ、そろそろ姿を現したらどうじゃないと次はほんとに当てるわよ」

ティアナは、戦闘態勢を維持しながら、強い口調で、威嚇射撃をしたのだった。

そして、エステルも感情を表に出しティアナに文句を言いながらティアナの元に詰め寄っていた。

「ちょっと危ないじゃない当たったらどうするのよ」

突然のエステルの登場で、一番驚いていたのは、ヴィヴィオだった。

「どうしてここに、エステルお姉ちゃんがいるの？」

「ヴィヴィオここに来てるのは私だけじゃないよ」

エステルはヴィヴィオの顔を見ながら小さく笑いながら言ったのだった。

「え」

エステルがそう言うと、ヨシュアが、ヴィヴィオたちの背後から姿を現したのだった。

「ヨシュアおにいちゃんまでどうしてここに来てるの？」

ティアナは、エステルと対峙してスバルはヨシュアと対峙していた。

エステルと、ティアナは一触即発の状態になっていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

悲しみの最終決戦

エステルとティアナの状態は最悪だった。

三人称ｓｉｄｅ

「ちょっと危ないでしょ当たったらどうするのよ？」

エステルが、ティアナに向けて言ったが、ティアナも反論を返したのだった。

「さっきのは、威嚇射撃ですそんなのこともわからないんですか？この世界の人たちは？」

エステルたちの周りにいるヴィヴィオたちは、二人の言い争いを聞いていたが、３人は内心ではどうでもいいでしょそんな事と思っていたのだった。

その時、リベール上空に突如一人の男が現れたのだった。

ヨシュアとエステルはその男の姿を見て驚きを隠せないでいた。

「リベール王国の皆さん私はワイスマンと言います。今この国に災厄が降りかかる予言がありますよねもうすぐそれが実現しますよ子の二人によってね」

そう言ってワイスマンから代わった映像には、高町光と、ララ・テ

スタロッサの姿が映し出されていた。
その映像を見たヴィヴィオたち全員驚愕していた。
ただ一人星光は、ララの持つ本が、気になっていた。
（あれはまさか、闇の書？ばかな、あの本は夜天の書として復活したはずなのに何故闇の書が、存在してるんだ？）
星光は、自分は闇の書の一部だったころを思い出していた。
「お兄ちゃん驚いた？この魔法？」
「ああ、まさかララお前が、その魔法を使うとはな。その魔法は俺が、勝てなかった人の最強魔法だっはず」
「ふーんそうだっただねブラックホールテンペストと言う名前だったから使ってみたけどたいしたこと無いね。この魔法」
「何だと！！」
光は、ララの発言を聞いてショックを受けていた。
「じゃあお兄ちゃん少し待っててね私の魔法を見せてあげるからね」
ララは、詠唱準備に入ったが、その次の瞬間、光の横を、光の剣が通り過ぎ、剣は次元を超えヴィヴィオに向かっていたのだった。

果たしてヴィヴィオの運命は？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

悲しみの最終決戦２

ララの放った光の剣は、次元を超え、ヴィヴィオに迫るのだった。

「ララお前がは使った魔法はどこへ消えたんだ？」

光は、ララに問い詰めるが、ララは、さあ？としか言わずにいた。

「いい加減答えろよララ」

「！！ッ」

突如大声を出して、ララを怒鳴る光。光の怒鳴り声を聞いて体をビクッとさせたララ。その様子を見ていた、カシウスは光をなだめていた。

「どうしたんだ？光君何時もの君らしくないじゃないか？」

一方光の剣に、襲撃されてしまったヴィヴィオは？

ヴィヴィオｓｉｄｅ

時間は少し、遡り

私は、エステルお姉ちゃんと、ヨシュアお兄ちゃんが、上空に突如スクリーンが現れそこに映し出された男ワイスマンに対し、こう言っていたのでした。

「何で、あんた生きてるの？ワイスマン」

エステルは、ワイスマンに対し問いかけていた。

「確かに私は、あの時に君たちによって倒されたが私は、地球と言う星に、気がついたらいた。そこで私は、私の命の恩人のララ様に出会い私は、ララ様の目的達成の為に、私の力を貸そうと決めたのだ！！」

ワイスマンが、そう言った直後、無数の光の剣が、現れ私を狙っていた。

そして、スバルさんとヨシュアお兄ちゃんが私を庇いながら、光の剣を砕いてくれてましたが、私立ちは、油断をしてしまい、私は後ろから来る光の剣に気づかず、私の体に、光の剣は突き刺さってしまったのでした。

ヴィヴィオｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

悲しみの最終決戦３

光ｓｉｄｅ

僕は、ララの放った光の剣が、ヴィヴィオを貫いたのを見た時、僕の中に眠るある感情が、目覚めてしまったのだった。

「ララーーー貴様あああ」

「ふふふお兄ちゃんその調子だよ私にもっと憎んでね」

ララは僕に憎しみをもっと向けてという言葉を聞いたカシウスさんが僕に、憎しみを持って戦うな！！と言ってたが、僕はヴィヴィオが傷ついたの見て、僕は、自分の感情をコントロールを出来ずにいた。

（そろそろ手に入れようではないか最強魔道師の体を）

「いやまだだよルーシィ様まだお兄ちゃんの心を砕かないと」

ララとルーシィは一つの体に融合していた。

「お兄ちゃんこれを見て私と一つになろうね」

ララは収束魔法を使う為魔力をチャージを始めたのだった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

地上では、ヴィヴィオの治療が行われていたが、ヴィヴィオは、まだ目覚めずにいた。

それもそのはず、ヴィヴィオの精神は、光の剣に貫かれたことで光とララのいる世界に飛ばされていたのだった。

そこでヴィヴィオが見た光景は、ララが闇の書の力で光の心を砕く為なのはのＳＬＢを放った。

「これはなのはの魔法！そうか、なのはたちもララに、やられたのか？」

光にララの放ったＳＬＢが迫るが、すでに光の心は、戦う意思は喪失していた。

そのころミッドチルダの病院ではなのははが、無事出産を終えていた。

出産を終えたなのはが、病室に戻るとフェイトとはやてが来ていた。

「どうしたのフェイトちゃんはやてちゃん？」

なのはが、二人に聞くが、フェイトとはやては、黙っていたが、はやてが喋りだした。

「なのはちゃんこれから言う事をしっかり聞いてな」

そう言うとなのはに映像を見せたのだった。

その映像は、光とララが、戦いをしている映像だった。

「何で光君とララちゃんが戦ってるの？」

なのははやてに聞くと、はやてが、真剣な表情で、なのはに残酷な結果をはやては、なのはに伝えた。

「実はな光君は、この戦いの最中にララちゃんに、殺されたんや」

「え、うそ」

なのはは、はやての言葉を信じられずにいた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

本当に光は、死んだのか？

果たして、この戦いの行方はどうなるのか？

続く

なのはｓｉｄｅ

「私は、フェイトちゃんとはやてちゃんから聞かされた時光君の死亡したと言う事実に、私は信じられずにいた。そして、はやてちゃんがとても悲しそうな表情で私に行った」

「なのはちゃん落ち着いてこの映像を見てな」

そう言うと、はやては、私の前に、モニターを出して、私に問題の映像を、見せてくれましたが、私には、今だ信じられなかった。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方、ララの思惑通りに、動いてしまった光は、なんと、ララによって、光の魂は、肉体から強制的に剥がされ闇の書内部に取り込まれていたのだった。

ララｓｉｄｅ

「フフようやくこれで、私もルーシィ様の一部になれるわ」

ララはそう言うと、自分の中にいるルーシィに自分の体の主導権を渡したのだった。

「ララよくやりましたね」

ルーシィは、自分のために、体を提供したララに、感謝の言葉を言った。

「さて、始めましょうか、私と闇の書との融合を！」

ルーシィがそう言うと、ルーシィの体と闇の書が、眩い光に包まれていくのだった。

ララｓｉｄｅ　ｅｎｄ

もはやこの世界には、ルーシィを止めることの出来る人物はいないのか？

続く

誕生悪の女王

ルーシィｓｉｄｅ

「フフ、素晴らしいようやく私の元に、帰ってきてくれましたね、我が息子たちよ」

そう言いながらルーシィは、光とララを取り込んで、完全体へと進化して行くのだった。

そして完全体となったルーシィは、ララの作った空間から抜け出し、自分の敵であるＺＥＵＴＨのＦＷ陣のスバルたちを見つけ、ルーシィはそこを目指して異動を開始したのだった。

ルーシィｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方ウロポロスが用意したモニターで．光対ララ戦を見ていた見ていたスバルたち４人は、まさかの展開に、驚きと落胆を感じていた。

三人称ｓｉｄｅ

「ねえティア光さんとララさん大丈夫だよね？」

「・・・」

スバルはティアナに、光とララの安否を、確認するためティアナに聞くが、ティアナは無言のままだった。

（！まさかあの光さんが負けるなんて、そして光さんを取り込んだあの本は一体？）

「ねえティア聞いてるの？」

「・・・　だあーースバル今考えてるんだから少し黙ってなさいよ」

ティアナは、スバルに伝えると、スバルはティアナにごめんと伝え、謝っていた」

それを見たティアナも、私も言いすぎたわと言い、スバルに謝ったその直後、リベール王国全体で、津波や自身が起こり始めたのだった。

なのはは、はやての話を聞いて、動揺をしていたが、なのはの病室に雷刃と統べる王が来て、こう言った。

「なのはー今からマスターを助けに行くよーー」

なのはは、自分の耳を疑った。

「ェ、雷刃ちゃんそれは、どういうこと？光君は、死んだんでしょ？」

なのはが、雷刃に聞くが、なのはの問いに、答えたのは、統べるが答えた。

「実はななのはまだマスターは敵に完全にはマスターたちを取り込めてないということらしいのじゃ」

「そこで僕たちはなのはをマスターの要る世界へつれてくるようにと、マスターから命令されているんだ」

雷刃はそう言うと、なのはをベッドから出したのだった。

それを見たはやてとフェイトが、慌てて雷刃に言った。

「まだなのはちゃんを動かしたらあかんて」

「そうだよなのはは、まだ出産したばかりなんだから」

はやてとフェイトは、そう言って、なのはを連れて行くのを反対していたその時ミッドチルダでも、リーベル王国と同じ現象が起こり始めたのだった。

「!!何なんや?この地震は?」

はやてたちは、急に起こった地震に驚いていた。

「まずいですね急がなければ」

「どういうことや?統べる王」

はやてが統べる王に理由を聞いていた。

「今の地震は、マスターたちを取り込んだ敵が、次元異動をしたせいで、起こった次元震なのです」

「!!なんやて」

はやてたちは、驚愕していた。ただ次元移動しただけで、全次元にこれほどの災害を起こす相手にフェイトと、はやては、恐怖を感じていたが、なのはは普通にしていたそれを見た二人は、なのはに聞いた。

「何で、なのはは怖くないの？」

「だってフェイトちゃんはやてちゃん私今まで光君と一緒にいたせいか、これぐらいじゃ驚かなくなっちゃたんだ。だって光君はその気になれば、この宇宙を一日あれば征服できる力があるんだよ」

「えええええええ」

なのはの発言を聞いて、フェイトとはやては驚きの声をあげていた。

フェイトとはやては、驚きすぎで気を失っていた。

なのはと、マテリアルズは、フェイトたちが気絶している間にスバルたちがいるリーベル王国に、向かったのだった。

そしてついに、闇の女王に覚醒したルーシィが、リベール王国の大地に降り立ったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

滅竜魔道師登場

ここは、少年と天空の巫女の世界のとある町に向かう途中ナツと、ガジルとウェンディとレン・ハラウオンの４人の滅竜魔道師が一夜の内に、消えたのだった。

「うーん　は、みんな大丈夫か？」

ナツは、三人に声をかける。三人は、それぞれナツに、返事をする。

「しかしここはどこなんだ？」

「あ、みんなあれを見てください」

そう言って、ウェンディが指の先には、リベール王国が写っていた。

そのころリベール王国では、光とララを取り込んだルーシィが、全次元破壊への第一段階として、自分に敵対する者を体内へ取り込み、己の力を高めていた。

「何よ、あの化け物は？」

ティアナが突如現れたルーシィに向け言っていた。

スバルは意識の無いヴィヴィオを抱え後方に下がっていた。

三人称ｓｉｄｅ

「さてまずはこの街を破壊しましょうかこの魔法で」

と言いながらルーシィは、ある魔法を、ルーアン市に放つのだった。

その魔法を見たスバルたちは、衝撃を受けていた。

その魔法とは、なのはの砲撃魔法のＳＬＢだった。

街に向かうＳＬＢは、途中で、進路が何者かにより変えられ海にほうへと進路変更死ＳＬＢは、海へ直撃して、大量の水しぶきがスバルたちやルーシィにかかるのだった。

「誰ですか？私の邪魔をする方は？」

ルーシィがそう言うと、月の光を浴び姿を現したのは、星光の殲滅者のだった。

「貴方は、ああ闇の書の３つの失敗作さんですか。どうしました？そんなに感情を出して」

ルーシィは、星光の殲滅者に問いかける。

「貴女が、マスターの倒すべき者ですか？」

星光は、ルーシィに聞くが、それ以降二人は無言でお互い動くことは無かった。

そのころナツたちは、ルーシィの強さを見て、興奮していた。

「うーあいつ強いな俺もアイツと戦ってみてーな」

「ああ、俺もだ」

ナツとガジルの二人は、ルーシィと戦ってみたいと言い出していた。

「駄目ですよナツさんガジルさんあちらは私たちの世界じゃないんですよ」

「お兄ちゃんからもナツさんたちに、言ってよ」

ウェンディが、レンに言うが、レンは諦めた表情でこう言った。

「しょうがないよウェンディ僕たちも行ってナツさんたちが暴れすぎないように見張ろう。それに僕は、ＢＪを展開していくからウェンディは、ナツさんたちと来てね」

「わかったよお兄ちゃん」

こうして、レンたち４人の滅竜魔道師たちは、異世界での戦いに乱入したのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

光対闇の戦い1（戦い開幕）

星光と、ルーシィの睨み合いはまだ続いていた。

三人称ｓｉｄｅ

「貴方は元々闇の書の闇が作り出した存在なのでしょ」

ルーシィは、星光に、向け喋りだしたのだった。

「その貴方が、今更光を求めて、どうするの？闇から生まれた貴方には、闇の中で暮らすべきなのに」

ルーシィは、星光に語りかけていた。

「確かに私たち三人は、闇の書の闇から生まれたが、私たちは自分の意思でマスターに付いて行く事にしたのです。その私たちの選んだ道をお前なんかに潰させはしない。必ず私たちがマスターたちを救ってみせる」

星光はそう言うと、スバルたちのほうを向き、笑顔で笑っていた。

「3対1は、さすがに私でも、きついので、仲間を呼ばせてもらうわ」

そう言って、ルーシィは召喚魔法ほ、唱え始めたのだった。

そして、スバルたちはルーシィが召喚した者を見て驚いていた。

「何ですって」

「ティアあれを見て」

スバルはティアナに、ルーシィが召喚した者を教えると、ティアナもそのものたちの姿を見て、言葉をなくしていた。

「さあ貴方たち自己紹介をしなさい」

ルーシィに言われ召喚された者たちが、自己紹介を始めたのだった。

「初めまして私は高町なのは9才です。よろしくお願いします」

「私はフェイト・テスタロッサ9才です。よろしく」

「うちは八神はやてや。よろしゅうな」

ルーシィが、召喚したのは、子供時代のなのはたちだった。

そのころ光とヴィヴィオの元に、急ぐなのはは突然嫌な予感がしていた。

（光くんヴィヴィオ無事でいて）

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

光対闇の戦い2（もう一人の隊長達）

三人称ｓｉｄｅ

「うーん、波、私は一体何してたんだっけ？」

フェイトは今までのことを思い出していた。

「は、そういえばなのはは、どこに行ったの？まさか」

フェイトはなのはが、いないことに気づき、まだ気絶しているはやてをたたき起こして、フェイトとはやてはなのはの後を追いかけて行ったのだった。

そのころルーシィと対峙している星光の殲滅者とスバルたちの前に、ルーシィの召喚魔法により新たな敵が呼び出されたのだった。

その敵の姿を見て、スバルとティアナは驚いていた。

それもそのはずルーシィが、呼び出したのは、子供時代のなのは、フェイト、はやての最凶三人娘だった。

星光は三人娘を見て、恐怖を感じていた。その訳は、星光は、今リミッターを付けていて、最大でSランクまでしか、魔力を高めることが出来ない。それに加え、星光たちのリミッターを解除の権限を持つのは、ルーシィに取り込まれた、光のみなのだ。

だが、ルーシィが呼び出した三人の魔力は、三人ともＳＳＳランク並みの強さを持っていたのだった。
「さあなのはちゃんフェイトちゃんはやてさん出番ですよ」
「ルーシィお姉ちゃん今日は私たちにどんな用事なの？」
子供なのはが、ルーシィに聞く。
「今日はあの三人が、アナたちの相手よ」
ルーシィはそう言いながら星光たちを指差していた。
それを見ていた子供なのはたちは、笑顔で答えそして子供フェイトはスバルの元に行き、子供はやては、ティアナの元に行き、子供なのはは、星光の元に行きそれぞれの対戦相手が、決まり戦いの火蓋は切って落とされようとしていた。
果たしてなのはたちの、救援は、間に合うのか？
三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ
続く

光対闇の戦い3スバル対子供フェイト）

今それぞれの戦いが始まろうとしていた。

三人称ｓｉｄｅ

「お兄ちゃん私たちはどうすればいい？」

「確かにあの敵が召喚した子供はあの子達の手におえる敵じゃないな」

「ナツとガジルは、あの召喚主を攻撃してくれ。僕とウェンディであの子達を援護するから」

「ナツ、ガジルわかってると思うけど、子の世界は僕たちの世界ではないから僕たちのことは、秘密にしておいてね」

レンはそう言うと滅竜魔道師チームは、それぞれの場所に、向かっていた。

一方スバルは、子供フェイトと戦っていた。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

スバルｓｉｄｅ

私は敵のボスのルーシィが、が召喚したフェイトさんと戦っていますが、防戦が主体となっています。

「フォトンランサー、サンダーレイジ、プラズマザンバー」

子供フェイトさんは私に向けて、フェイトさんの三大魔法が、私を襲う。

私は、プラズマザンバーを受け、私は岩山に、体を、強打し血を吐いてしまい、体は岩山にめり込んで身動きの出来ない状態だった。

私は、周りを見てみると、星光さんもティアもなのはさんとはやてさんに一方的にやられていたのだった。

スバルｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

「おいおい嘘だろあの子達もうあの三人に、トドメの一撃を入れようとしてやがる。急ぐぞバルブレイク。ウェンディ」

「了解マスター」

「わかったお兄ちゃん」

レンとウェンディは、スピードを上げてスバルたちの元へと向かっていた。

「行くよフェイトちゃん、はやてちゃん」

なのはが言うと、三人娘は、準備を始めていた。

「この世界に、住むみんな私に、元気をわけてね」

なのははそう言うと、なのはは、両手を空へあげたのだった。
フェイトは隠れた能力を使っていた。
「トランザム・・発　動」
ルーシィに取り込まれた光は、思っていた。
「まさかこの三人娘の世界は、まさか・・・」
「お前の思ってる通りあの三人は別次元の三人娘なのだよ。以前この世界に来た、来訪者の細胞を採取して、私は、こちらの世界と向こうの世界を繋げるゲートを完成させたのだ」
そして、ルーシィの話が終った時、三人娘のチャージが終わりスバルたちに放たれたのだった。
「響け終焉の笛ラグナロクブレイカー」
「行けーートランザムライザーー」
「じゃあねまた戦おうね。元気玉発射」
果たしてスバルたちの運命は、そしてレンたちと、なのはたちの救援は間に合うのか？
三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

光対闇の戦い４（ヴィヴィオ覚醒）

ヴィヴィオｓｉｄｅ

私は、パパとララさんの戦いを似ていると、突如ララさんが、魔法で作った光の剣が、私の体を貫いたのでした。
そして私は、気絶して、夢と言う形で、ララさんとパパが、闇に取り込まれるのを見ていました。

その時、私の耳に私の時代のパパとママの声が、聞こえて来た。

「ヴィヴィオ起きるんだ今からセイグリットハートの封印を解くぞ」

「え、封印？どういうことなの？パパ」

「ヴィヴィオ実はな、パパとママとヴィヴィオのデバイスには、隠された機能があるんだ。ヴィヴィオがいる時代に、アカシックハートと、レイジングハートと、セイグリットハートが、あれば出来る融合合体なんだ」

「その融合形態はなのはと、ヴィヴィオの二人しか使えないんだ。その形態の名は、ゼロハートだ。頑張れよヴィヴィオ僕たちはいつまでも君を愛しているよ」

そして、私は次第に意識をとりもして、周りを見ていると、スバルさんたちがやられていたので私は、急いでセイグリットハートを起動し、急いでスバルさんたちの元にむかってる時、私は知らない男の子と女の子が、スバルさんたちを守っているのを見つけたのです。

「あの子達一体何者？」

ヴィヴィオｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

光対闇の戦い5（共同戦線）

星光たちとなのはたちの戦いが、続いてるころヴィヴィオは、レンとウェンディの二人と出会っていた。

この出会いがまさか後の、物語の運命の分岐点に、なるとはこの時は誰も知らずにいたのだった。

三人称ｓｉｄｅ

「あなた達は誰なんですか？」

「僕たちは違う世界からこちらの世界に飛ばされた者です。僕の名前は、レン・ハラウオンです。そして僕の隣の彼女の名前は、ウェンディと言うよろしくね」

「僕たちの世界では僕たちの使う魔法からぼくたちのことを滅竜魔道師と呼ばれているんだ」

「滅竜魔道師？」

ヴィヴィオはレンの説明を聞いていると、少し頭が混乱してきていた。

「あ、私の名前は、高町ヴィヴィオです。よろしくお願いします。ところでレンさん貴方が使ってる杖て、もしかしてデバイスですか？」

ヴィヴィオは、レンに質問していた。

「ヴィヴィオちゃんよくわかったねそうだよこれは僕のデバイスで、名前はバルブレイクて言うんだ」

レンが、ヴィヴィオに説明していると、ナツとガジルが向かったほうで、大きな爆発が起きたのだった。

「どうやら僕たちも急ごうヴィヴィオちゃんも協力してくれ」

「はいわかりました」

三人は急いで三人娘と、激突している仲間たちの元へ急いで向かったのだった。

一方レンとウェンディと別れ悪の女王ルーシィの元に着いたナツとガジルは、ルーシィの顔を見て驚いていた。

ナツたち4人のドラゴンスレイヤーは、消えた仲間を探していた消えた仲間の名前は、ルーシィと言うなの少女だった。

「おいルーシィどうしたんだよこんなところで、俺たち探してたんだぞさあ帰ろう」

ナツがルーシィに、手を伸ばした時、ルーシィは、召喚魔法を使い三幻神を召喚し、ナツに向け攻撃命令を出し、攻撃させたのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

光対闇の戦い６（悪夢の再会）

ルーシィは、手を差し伸べたナツに、三幻神を所管し、攻撃をしたのだった。
公開の話は、前回の話より少し前から話が、始まる。

光ｓｉｄｅ

「う、ここはどこだ？」

光は、今までのことを思い出しながら考えていた。

「あ、そうか僕は、ララと一緒に、奴に吸収されたんだっけ、奴は自分のことをルーシィと名乗っていたが、奴の正体は僕には、わかった」

「奴の真の名は、ダークプリンスお前だったんだなやはり」「お前は確か俺となのはでたしかにあの時、消滅させたはずだどうしてお前がここにいるんだ？」

「俺はお前たちに肉体を、消滅させられた時、何者かの声を聞いて、俺はすべてを受け入れ俺は気がつけば新たな肉体を手にいれ、そして俺は光お前の力を得た。これ以上の喜びはないぞ光。俺はお前の力で、もうすぐこの世界にやって来るお前の愛する人々を殺してやるぞ」

そう言って光の前からダークプリンスの姿が闇の中へと、消えて行

ったのだった。

光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方ヴィヴィオと光を救う為、二人のマテリアルと行動しているなのはは、次元移動している時に、所属不明部隊の攻撃を受けていた。

「いたぞ高町なのはと闇の書の残留思念たちだ奴らを殺せこの世界をあるべき姿に戻すのはＺＥＵＴＨなのではない」

一人の少年がそう言うと、チームを組んでいる残りののメンバーは、その男の独断先行に驚いていた。

「この世界の歪みも俺たちが断ち切る」

一人の男が言うと、リーダー格の男が、先行してなのはたちと攻撃していた男にこう言ったのだった。

「おいお前まだ高町なのはたちに、手を出すな」

「何故だ?俺たちは高町なのはと、高町ヴィヴィオを殺す為に来たのだが?」

「ああそれはわかってるが、どうやら俺たちは予定していた時代より前の時代に来たようなのだ」

リーダー格の男がそう言うと、残りの仲間が、大声を出し驚いていた。

その話を聞いた男は、なのはたちの前から忽然と姿を消したのだった。

「一体あの日とは何者なんだろう?」

なのはたちは襲って来た男のことを、少し考えていたが、光たちとの合流を急ぐ為移動を再開したのだった。

時は戻り、ナツ&ガジルＶＳ三幻神の戦いは、三幻神の攻撃でナツとガジルは吹き飛ばされレンとウェンディとヴィヴィオがいるところにまで飛ばされていた。

果たしてヴィヴィオたちは三幻神に勝てるのか?

続く

光対闇の戦い7（ヴィヴィオ&滅竜魔道師VS三幻神

三人称ｓｉｄｅ

「パパは私が助けてみせる」

ヴィヴィオは星光たちを助ける為に、子供なのはの元に向かっていった。そしてその途中でレンとウェンディと協力し子供三人娘と先頭に入ろうとした時、この世界全体に大きな地震が起きたのだった。

「きゃあああ」

「何が起きたんだ?」

「お兄ちゃん怖いよーー」

「う・・・は、私はそうでした私は子供なのはと戦い気絶させられたのでした」

「今の状況はどうなってるのでしょう」

星光が、戦場確認していると、星光に声をかける人物がいた。

「星光さん大丈夫?」

「その声はまさか・・・ヴィヴィオさんあの怪我からもう復帰したのですね」

「あなたたち一体誰なの？

三人娘を代表でなのはがヴィヴィオたちに質問していた。

「まさか私たちの技をすべて無効化するなんて思わなかったわ」

子供なのはが、ヴィヴィオたちの行動に対して、褒めていたその時子供なのはの表情が一瞬冷たい表情で殺気を出したのだった。

そのなのはを見たヴィヴィオは、本能的にこのままでは殺されると感じていた。

「いくらママと同じ姿の敵が相手でも、今の私は、負けるわけにはいかない。私たちはあなたたちを倒して絶対にパパとララさんを助けて見せる」

ヴィヴィオは自分を奮い立てて目の前の強敵に立ち向かおうとしていたが、新たな絶望が生まれようとしていた。

そのヴィヴィオたちに恐怖と絶望を与える為にルーシィによって召喚された三幻神である3体の神を召喚し、滅竜魔道師であるナツとガジルを一撃でヴィヴィオやレンのいる場所まで、吹き飛ばしたのだった。

そのころエステルとヨシュアは

「一体これからこの世界はどうなるの？」

「エステルこれが予言のことじゃないかなと僕は思うんだ」

「ええー」

エステルはヨシュアの発言に驚いていた。

そして、ヴィヴィオも三幻神の隠された力を感じていたが、スバルや、ティアナや滅竜魔道師は、力を感じることは無かった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

そのころなのはとマテリアルの二人を追いかけるフェイトとはやては、なのはたちが向かった世界の次元破壊率を見て、驚いていた。

「何やねんこの数値の異常な上がり方は」

はやては次元破壊率測定器を見ながら呟いていた。

「一体何が、起きてるんや光くんとヴィヴィオが行った世界では、早く収拾せんと、この宇宙すべてが、消滅するかも知れないからな」

「まさか私がなのはちゃんと喧嘩が切欠でこんなことなるなんてな」

はやては少し後悔をしながらもフェイトと共に、なのはを追っていたのだった。

一方ＺＥＵＴＨ隊舎では、スカリエッティが不穏な動きを見せていた。

「ウーノ他の戦闘機人のロールアウトは出来ているのか？」

「は、着々とロールアウトが出来上がりつつあります。ここで手に入れた未知のテクノロジーを解析し妹たちにも、その能力を使えるようにしてありますドクター」

「ふふ、そうかなら出発しようではないか時空管理局崩壊作戦の第一段階としてアルハザードへ」

スカリエッティがそう言うと、スカリエッティと、ウーノの姿がＺＥＵＴＨ隊舎から消えたのだった。

なのはｓｉｄｅ

私は光くんとヴィヴィオが行った世界に向かっているとふいに、とても嫌な予感がしたのです。

〜これはまさか光くんとヴィヴィオの身に何かあったんじゃ〜

私は、心の中で二人の無事を祈りました。そしてついに私たちは、リーベル王国に着きましたそして、そこで私が見た光景はまるで地獄絵図のような光景が、広がっていました。

「ヴィヴィオ光くんみんなどこなの?返事してよーー」

私は、一刻も早くヴィヴィオたちを見つけないと大変なことになると思い、ヴィヴィオたちの捜索を開始し、暫くすると戦闘らしき音がするので、行ってみると、三幻神と、私たちと戦うヴィヴィオたちを発見し、私は自分自身にＳＬＢを放ち、そしてヴィヴィオたちと合流したのです。

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ヴィヴィオｓｉｄｅ

私は今子供時代のママと戦っています。さすがママといったところです。かなり私が、追い込まれてしまっています。

「はあ、はあ、」

「どうしたの?あなたの力はその程度なの?」もしそうならあなたは死ぬことになるわ」

子供ママはは、私に、向かって言うと、ママの最強砲撃魔法スターライトブレイカーの発射体制に入ったのだった。

「はあ、はあ、やはり私ではまだママには、勝てないの?私の力ではパパを、助けることができないの?」

私は、子供ママとの戦いで、心が折れよとした時私は、ママの声を聞いたのでした。

「ヴィヴィオまだ諦めちゃ駄目だよ」

その言葉を聞いた直後私の後ろから桃色の砲撃が、子供ノママに直撃したのです。

そして私は声のしたほうに、振り向くとそこには、私たちのママがいたのでした。

「ママーーー」

私は嬉しさの余りにママのところへ泣きながら駆け寄りました。

ヴィヴィオside　end

続く

光対闇の戦い7（ヴィヴィオ&滅竜魔道師VS三幻神後編

なんとかなのはの救援のおかげで、ピンチを乗り切ったヴィヴィオたち。果たしてヴィヴィオたちは、三幻神を倒せるのか？
ルーシィは、なのはが、子供なのはを倒したのを見て、不敵に笑ったのだった。

そして、ルーシィは、三幻神に命令を下した。

「三幻神よ、この世界を破壊しつくせ」

そして、三幻神と、なのはたちとの戦いが、始まった。

なのはたちは、４人ずつチームに分かれて三幻神と戦いを繰り広げていた。

対オベリスクチームは、スバル、ナツ、マテリアルの雷刃、ヨシュアの４人がオベリスクと、激闘を繰り広げていた。

ラーと戦っている４人は、ヴィヴィオ、星光、統べる、エステルの４人がラーと戦いを繰り広げていた。

そして、最後のオシリスと戦いをしている４人は、なのは、ティアナ、ウェンディ、ガジルの４人だった。

レンｓｉｄｅ

僕は三幻神との戦いが始まる前に、バルブレイクの特殊機能を使い、自分を認識させない能力と、どんな世界でも、侵入できる能力を使い僕は、ルーシィの体内に入り、光さんとルーシィを救うべく行動を始めたのだった。

「バル本当にここなのか？二人が監禁されている場所は？」

「はいそのはずです」

レンの相棒のバルブレイクはルーシィの体内に、入って、ある異変に気がついた光とララの二人の生体反応があるのに二人の姿を見つけることが出来なかった。

「バルこれは一体どういうことだ？」

俺の質問に少し間を開け答えるバル。

「・・・ヴィヴィオさんたちには、残酷な結果を伝えなければなりませんマスター」

そう答えるバルブレイク。俺も、薄々感じていたが、最悪の結果になってしまったようだ。

「バル待てよ俺たちがルーシィを倒した場合光とララさんはどうなるんだ？」

「当然ですが光さんもララさんも当然ですが死にますね普通ならですが、光さんもララさんも私がこの世界に来た時に、調べたのですがララさんと光さんは普通の人間ではないので、大丈夫でしょう」

俺は相棒の言葉を信じてなのはさんたちに、結果を伝えるべく、三幻神と戦っているなのはさんたちの元に、向かっていた。

レンｓｉｄｅ　ｅｎｄ

レンが、ルーシィの体内から脱出した時に、見た光景は、リーベル王国中が三幻神の攻撃で、火の海になっていた。

「・・う、嘘だろ」

レンは余りの出来事に我を失っていた。」

「・・・お、お兄ちゃん」

レンは我を失っていたが、か細い声を聞いて、正気に戻り声のするほうに、行くとそこには、傷だらけのウェンディたちがいた。

「お兄ちゃんヴィヴィオちゃんとなのはさんを助けてあげて」

レンはウェンディに事情を聞くと、三幻神に連れ去られたということだった。

続く

光対闇の戦い8（三幻神に選ばれし者たち）

なのはｓｉｄｅ

私たちは3チームに別れてそれぞれ三幻神と戦っています。私とティアナは、三幻神の1体オシリスと戦いながら、ある時の事を思い出していました。

その思い出とは8年前のある日私は、ヴィヴィオを狙う女と戦っていました。その戦いの後、私は魔法が使えなくなりその治療中に、武藤遊技さんとオシリスの力で私は再び魔法の力をてにすることが出来たのでした。

（だから今度は私たちの力で、あなたに取り付いている悪の意思から助け出して見せるわ待っててねオシリス）

なのはｓｉｄｅ　ｅｎｄ

三人称ｓｉｄｅ

「フェイトちゃんもうすぐ着くで、準備はいいかな？」

「うんいいよ私は準備は出来てるよ」

なのはたちを追いかけて来た、はやてとフェイトは、リーベル王国に着いた時二人は自分の心へ問いかける光の声を聞いたのだった。

（フェイト、はやて）

「はやてこの声は光なの？」

「フェイトちゃんどうやら声の主は光君みたいや」

「いつもと声がちがみたいやけどどないしたんや光君？」

（ああ、そのことね僕死んじゃったんだよフェイト、はやて）

「は・・・何だってーーー！！」

二人は光の発言に対し驚きを隠せないでいた。

（そこでこれはフェイトたちにしか頼めないんだ。二人とも僕の頼みごと聞いてくれる？）

光は、二人をこちらの世界に連れ戻す為に、光は二人の体に触れ様とするが、光の手は、二人にふれることなく突き抜けるのだった。

「やはり僕は・・・死んだんだな」

光が、二人の復活を待っていると、「光お前生き返りたいか？」と言う声が聞こえて来たのだった。

その声の正体は、女神のウェンディだった。

「ウェンディ今の言葉の意味は？」

光が、ウェンディに聞くと、ウェンディが言った。

「言葉どうりの意味なんじゃが」

果たして光は生き返ることが出来るのか？そして三幻神によって仲間と分断されたなのはとヴィヴィオの運命は？

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

光対闇の戦い8（三幻神に選ばれし者たち）2

三人称ｓｉｄｅ

「きゃあああ！！」

なのは、ヴィヴィオ、星光の三人が三幻神の攻撃を耐えていた。だが三幻神のパワーに押されていたなのはは、事前に光から受け取っていたアカシックハートと、エクシードリングを出してなのはは、デバイス融合をしガッテスハートを起動させ三幻神に向け、魔力をチャージしていた。

「行くよこれが私たちの全力全開の魔法だよ！！いけーコスモライトブレイカーー」

なのはの放ったコスモライトブレイカーはすごい勢いで迫るのだが、三幻神には届かなかったのだった。

まるで三幻神の前に見えない穴が存在するかのようになのはの放ったコスモライトブレイカーは吸い込まれていったのだった。

！！

なのはは自分の攻撃が、無力化されたことに驚愕していた。

そしてそのなのはを遠くで見ていたルーシィがなのはたちの前に移動してきてなのはにこう言った。

「フフそれがあなたの最強魔法なの？」

ルーシィはなのはに聞くがなのはの答えは返ってこなかった何故なら。

「どうしてあの攻撃が当たらなかった？」

なのはは、まだ思考の海の中にいたからだ。

一方レンとバルブレイクはなのはたちと合流する為移動していると次元の歪みから一匹の竜が、姿を現したのだった。

「久しぶりだなレン」

「！！貴方は火竜のイグニールどうして貴方がこちらの世界へきてるのですか？」

「わしはお主とお主の仲間に伝えることがあったので、きたのじゃ。いいか今のお主たちにはどうやってもあの三幻神には勝てないじゃろう」

「じゃあ一体どうすればいいのですか？

「お主と高町なのはとヴィヴィオをわしとこの少年の力でお主たち三人を古代エジプトへ送るそこでお主たちは三幻神の力を得よさすればお主たちが倒さなければいけない相手が見えてくるはずだ」

「では行くぞ」

イグニールと少年はなのはたち三人を古代エジプトへ送り込んだのだった。

「しかしこれで本当によかったのか高町光よ」

イグニールは光に質問をしていた。

「ええ、僕がいなくてもあの二人は三幻神を救うことが出来るはずです。それに三幻神を救えなかったらルーシィというレン君やナツ君の仲間である彼女は殺せても諸悪の根源は、健在ですし

イグニールさん僕は彼女の中で囚われている時に、見たんですが僕たちが諸悪の根源と思っていた彼女はどうやら先行部隊みたいですね」

「何だと!!」

「その宇宙からの侵略者の名は、彼らは自分たちのことを調律者と呼んでいるみたいです」

それではイグニールさん僕は、残された仲間のところへ行きます」

「ああ、気をつけてなわしもナツたちのところへ行くとするかの」

そう行って光とイグニールは、それぞれの仲間のところへ向かったのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

キャラ設定5

ここでは最終決戦編の中での新シリーズの古代エジプト編の登場キャラを紹介します。

マナ　年齢　１４才

彼女が、なのはたちを見つけた第一発見者でもある。

そして、年齢の近いヴィヴィオと友達になろうとしている。

ハール　年齢　１９才

彼は、マナの魔術の師匠である。

王子　彼についての詳細データーはありません

義賊アイン　年齢　１９才

彼女はこの時代では、名の知れた義賊である

と、今回のキャラ紹介はここまでです

これからも転生少年と魔法少女よろしくお願いします

古代エジプトへそして・・・

星光ｓｉｄｅ

私は、なのはが三幻神に向け、攻撃した後なのはトヴィヴィオの姿が見当たらないのに気づくと突然マスターから念話が来たのだった。

（星光突然なのはたちが消えて驚いているかい？）

「マ、マスター生きていたんですね？」

（正確に言えば僕は死んでるんだけどね）

光は星光に自分の状態を具体的に話したのだった。

「なるほど分りましたマスター時が来るまでマスターのことは私たちマテリアルズを除く全員に、この戦いが終れば記憶操作を開始します。」

（ありがとう星光でもなのはとヴィヴィオには伝えておくからごめんねこんな役目押し付けてしまって、こうでもしないとやつらが動かないからね僕たちの本当の敵が）

「いえきにしないでくださいマスター私たちはマスターの補佐するのがすきなのです。雷刃も、統べるも、そして私もだから・・・」

星光ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして、星光は自分の思いを始めて光に、初めて打ち明けたのだっ

た。

「それにマスターがあの二人を意味も無く時間移動させるなんてありえませんからね」

星光に本音を言い当てられた光はさすがだと感心していた。

そして光は、新たな力で三幻神とルーシィの時を止めたのだった。

（この技を使えるのは持って一週間だな。なのは、ヴィヴィオそれまでに古代エジプトで三幻神に認められて、三幻神の力を得てきてくれ頼むぞ二人とも）

ここはミッドチルダが存在する次元宇宙とは違う次元宇宙を航行している宇宙戦艦の中の一室。ここではある組織の幹部が集まり話をしていた。

??ｓｉｄｅ

「なんじゃとガノンお主はブシドー様の命にそむくのか?」

白髪の老人が鎧を着た大男に声をあげていた。

「うるせーぞローウェン俺はお前に仕えてんじゃねえからな別にいいだろ」

その時言い争いをしているところに、仮面の付けた少年が現れ二人にこう告げたのだった。

「七賢人に告ぐこれから我々はミッドチルダに向け移動を開始する」

仮面の少年が言い終わると館内から大きな歓声が響いたのだった。

「でもよローウェンよ大将が言ったミッドチルダは特殊なバリアーがあって行けなかったじゃいのか？」

「・・・」

「おいローウェン俺の質問に答えろよ」

ローウェンは、ガノンの質問に答えずガノンの元を去ったのだった。

？？ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

果たして彼らの正体と目的とは？

そして光とイグニールの力によって時間移動をしてしまったなのはとヴィヴィオは無事時間移動は成功していた。

三人称ｓｉｄｅ

「ねえ、ママここは一体どこなのかな？」

ヴィヴィオはなのはに聞いたがなのはは答えられなかった。

「はあ、はあ、」

なのはは、意識を失う直前だったそしてなのははヴィヴィオの目の前で倒れてしまったのだった。

「ママしっかりしてーママーー」

ヴィヴィオの声がなのはたちの知らない世界にこだまするのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

師と弟子との出会い

三人称ｓｉｄｅ

「ねえ師匠二人で出かけるの久しぶりですね」

「こらマナ私たちは遊びに行くわけではありませんよ。私たちは、王子が感じた予感の調査に行くんですから」

「はーい師匠」

マナと呼ばれた少女は、師匠と共にとある神殿の周辺に急いでいた。

この国の王子には、類いまれな超能力がありその力が王子に、予知夢を見せていた。

その予知夢のことを王子は友人であるハールに依頼をしたのだった。

「でも本当に三幻神の石版を奉る神殿の周辺に異界人なんているのかな？」

マナは王子の言葉でも、まだ半信半疑だった。

「マナそれを調べるのが王子の頼みなのだから」

ハールはマナに注意をした。

そして二人は、目的地周辺に着くと、マナが大きな声を出し驚いて

いた。ハールは急いでマナに合流するとそこにはなのはとヴィヴィオが倒れていたのだった。

一方はやてとフェイトもスバルたちと合流したのだが皆三幻神たちとの戦いで、気絶してしまったので、はやては戸惑いを隠せないでいた。

「一体ここで何があったんやそれとなのはちゃんとヴィヴィオの姿も見当たらないし、敵の時間が魔法で止められてるし」

その時はやての耳に光の声が聞こえて来たのだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

はやてｓｉｄｅ

「一体これはどういう状況何や？光くんそれに、なのはちゃんとヴィヴィオの姿が見当たらないけど、どないしたん？」

私は、光君に事情を聞いてみることにした。

（ああここの時間を僕の能力で止めたんだ。それとなのはとヴィヴィオだけど、二人には僕の能力で、過去の世界に行ってもらったんだ。この状況を打開する為にね）

｛そこではやてにお願いがあるんだけど聞いてくれるかい？はやて｝

私は、光君のお願いの内容を聞いて、驚きましたその内容とは。

「ええーーーー光君を私の中に住まわせるてどういことーー光くん？」

（うんはやてには話しおくけど、実は今回の騒乱は、奴らが人為的に引き起こしてたんだ。僕はルーシィにララと取り込まれた後体内で奴らが動いていることを初めて知ったんだ。）

（僕たちが諸悪の根源と思っていた存在が、単なる部隊長クラスの相手だったんだ。そして僕たちの世界を中心に起きたジュエルシー

ド事件やシャアの反乱などで次元が不安定になりナツ君たちの仲間である彼女が突然奴らの前に現れたその聖で、やつらは彼女を自分たちの手足にするため彼女の中に、大邪神ゾークの魂を注入して、彼女は悪の女王として、覚醒してしまったのだ）

「じゃあ光くん彼女を助ける為には、どうしたら言いの？」

（彼女を助けるには、彼女の中に潜む大邪神ゾークを消滅させるしかない。三幻神の力で）

！！

私は光君の言葉を聞いて、衝撃を受けたのです。

「チョ！！ちょっと待ってな光君三幻神て今スバルたちが戦いをしてるやつらやろそんな奴をどうやって仲間にする気なんや光君？」

（はやては知ってるかな？古代エジプトでは、現代で言うカードが占いとかで使われていたんだ。現在はカードゲームとして、存在してるんだけど、そのゲームの中に、３枚だけ強大な力を備えているその名は、ラーの翼神竜　オベリスクの巨神兵　そしてオシリスの天空竜　その三体が三幻神と呼ばれているんだ）

「ゾークを倒すには三幻神の力が、必要だからなのはちゃんたちを過去に連れて行ったのは、理解したんやけど、どうして光君が私の体に入らないといけんの？」

（それはねはやてこの僕の能力のデメリットのせいなんだ僕のこの

能力は使うと、僕の体が崩壊してしまうのだよ）

「ええーーそれはほんまか？」

（嘘だけどね）

パカーーン

私は思い切っていつも持ち歩いてるハリセンで光君を叩こうとした時、一瞬光君の姿消えたのでした。

（やはりこの状態ではもうこれ以上魔法を維持するのは無理みたいだな。攻めてなのはたちが、戻るまで維持できればいいのだけど）

「しゃあないな光君子の魔法を維持できればいいんか？維持してる間私も手伝うから私の中に入ってきてええよ」

（ありがとうはやて）

こうして私と光君は、時を止める魔法を維持するための魔法を発動させたのでした。

はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

なのはとヴィヴィオが古代エジプトに来てから数日が経っていた。
なのはとヴィヴィオは、ハールとマナに事の経緯を説明をしていた。

三人称ｓｉｄｅ

「なるほどそういうことでしたか高町なのはさん」

「はい」

「デもまさか未来の世界で、我々の守り神である三幻神がそのようなことに利用されているとは」

ハールはなのはの話を聞いてまだすべてを信じられずにいた。

「とりあえずあなた方は私たちと一緒に来てください」

「王子に直接伝えないといけないので」
そしてナノハとヴィヴィオはハールとマナと共に、王宮に向け移動を開始したのだった。

そのころ王宮では、一人の義賊が、見つかり王子の謁見の間でカー

の調査をしていた。

その王宮の中に異質な男性が入っていることに誰も気がついていなかった。

そして事件が起きたのだった。義賊のアインが、自分のカーを実体化させ暴れさせ始めたのだった。

それを見ていた異質な男性は王宮を後にしたのだった。

「フ、やはりあの王子が元凶か」

そして男性は、街中で自分と似た存在を見つけるのだった。

その存在とは、ハールたちと共に王宮に向かうなのはとヴィヴィオだった。

三人称ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7383s/

魔法少女リリカルなのは転生少年と魔法少女

2011年10月21日09時05分発行